
裏現実紅殺戮

B-零 a s u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏現実紅殺戮

【Nコード】

N3859L

【作者名】

B・零 asu

【あらすじ】

あたし、山本椿18歳。あたしは電車に乗っていた。一瞬でそこは紅へと変わった。狂ったように笑う頭蓋破壊屋は言う「裏現実にようこそ」

裏現実紅殺戮

第壹章・紅色の黒猫

あたしが殺戮者（前書き）

初めまして。

覗いてくださりありがとうございます。

少々文才が足りないのですが、楽しんでくれたら幸いです。

殺人をやったりするので楽しいかわかりませんが…。

暗くじみじみするのが多いかと…まあ、読んで、感想ください。

主人公は、女です。

ではどうぞ。

うか。逃げ惑う人間を一人一人切り裂いて殺して、死体だらけのここにいるのに吐き気すら覚えない。同情も罪悪感もない。他人だものね。なんて冷たい人間に堕ちてしまったんだ。運転手も殺してしまった、終点まで止まらない電車の中で自殺でもしようかな。

「うひゃあ〜ひゃひゃつ。こりゃすごいねえ〜」

不意に沈黙を引き裂いた声に震え上がった。聴こえるはずない。だって生存者はあたしだけだと思ったのに。

いた。生きてる人間が。殺している間の記憶は臍で確証はないけど、こんな目立った彼を見かけてない。

周りを見回す青年は血を浴びてない。淡い茶髪。綺麗な顔立ち。白いYシャツの袖は捲られ、腕にはジャラジャラとアクセがついていた。

白いズボンに黒いブーツ。

隠れてたにしる見逃したにしる、殺すしか選択が浮かばない。

だけどふと気付く。

狂ったような笑い声。

何故笑っているんだ。怯えるわけでもなく、猫みたいに細めた目で笑っている。

異常者だ。

「これ、貴方が殺ったの？」

とぼけて訊いたが、確実に殺ったのは自分だと自覚している。

「まっさかあ！俺なら脳ミソぶちまけてるよー」

死体の上で彼の笑い声が上がった。完璧異常者だ。

冗談ではなく、殺人は殺れると聞いたご様子だ。

大量殺人をしたあとに殺される？

彼を見た。彼には勝てない。

そう悟った。直感か。本能か。理性か。恐怖か。彼には勝てない。

彼は平然とスーツの男を踏んで近寄ってくる。

「で、何か？」

何の用かを訊いてみた。話し掛けてきたのは用があるからだと思っ
多分。

殺す気なのだろうか。

「んひゃひゃっ君がどんな人間かを知りたかつたんだあ」

ぺちゅと血を踏み鳴らして彼は笑いかけた。

「中々いい感じじゃない？」

席に頂垂れた女子高生の顎を掴んで上げて切り傷を見る。ぱっくり
開いてるね。

いい感じかどうかはわからないけれど。

その子さえも血溜まりに落とした。

「んふふ…」

にんまりと口元を吊り上げて彼は前に笑いながら立つ。あたしは
座ってる。

カッターを握ったまま彼をじっと見てみた。丸腰に見えるけどカッ
ターを振り上げたら瞬殺されそうだ。

「あたし、見た通りイカれた殺人鬼です」

「イカれてるなら俺も殺すだろー？冷静ないい判断だよ。殺しは初めて？」

彼はその場に屈んだ。

いい判断だって。やっぱり彼には勝てそうにないらしい。

「初めてなはずです。記憶によれば」

正直自信がなくなった。もしかしたら頭だけじゃなくて忘れてるだけで殺ってたかもしれない。

「ふふふ。急に殺したくなっちゃったあんだ？」

「……貴方も相当狂ってるようですね」

「わかるう？」

狂ってる。あたしも彼も。何故平然にいられるんだ。何故普通に話せるんだ。何故？何故？何故？何故？いつからこんな人間になってしまったんだ。

あたしが目を逸らして考えていたら彼が立ち上がり、あたしの後ろの窓に手をついた。彼の顔が間近になって驚く。

「んゝまあーまあーだよねえゝ」

顔がか？

品定めするかのようになっている。やめてほしい。

不細工と言われるほど酷い顔ではないが自信はない。彼の綺麗な顔とは比べられないだろう。ていうか失礼だ。

「ねっねっ」

あたしの気持ちを目から読み取ってそうなのにあえて無視したように彼はあたしの耳元で囁いた。
誰も聞いてないのだから耳打ちしなくていいのでは？

「生き方教えてあげようか？」

予想もしなかった言葉に目を見開く。生き方？生かしてくれるのか？

「君は死刑…上手くすれば精神病棟に閉じ込められる…どちらにする自由はない。そんなの、嫌だろう？」

確かに嫌だ。牢獄も病棟も。そんなの誰だって嫌だろう。

しかし、この罪から逃れる方法なんてあると言っのだろうか？否、逃れられない。これはあたしの罪だ。

罪を背負いつつも自由に生きる方法を彼は知っているようだ。

「嫌だけど…何かあるの？」

「んふふっあるよお」

その笑みにゾクリと恐怖を感じた。

早かった。あたしの握っていたカッターが彼に奪われ、躊躇なくあたしの首をそれで裂いた。抵抗は全く間に合わなかった。

痛みは感じなかった、熱い。手で抑えれば生暖かい血が溢れているのがわかった。

「はぁ……ぐっ……」

嗚呼、結局殺された。解つてたのに彼を信じてしまった。
なんて狂った奴なんだ。生きたいと思つた瞬間に殺すなんて。
文句も言えずあたしは前へと倒れた。誰のものかもわからない血が
弾く。

視界の隅で彼がカッターをハンカチで拭くのが見えた。

「んーひゃ。生きてたら迎えに来てあげるよ、ひゃひゃ」

ニツコリ、青年は顔を近付けて笑みを向けてからピシャピシャと何
処かへと歩き去ってしまった。

残されたあたしは時期に死体の仲間入りになるだろう。死体の皆
はこんな気持ちで死んだのか、漸く同じ立場になって哀れんだ。

朦朧とする意識の中、電車が停まったのを感じた。

彼が停めたのだろうか。

確認することもできず、あたしは闇の中に落ちた。

目を開けば、白い天井。

あたしは大嫌いな病院にいた。病院のこの独特の雰囲気、匂い、空

気が嫌いだ。暗く感じるし病みそうな所だと思う。でも横たわってる所が死体安置室でないだけでした。あたしは生きている。

首に嫌な痛みを感じながらも起き上がって見た。なんだかい感じの病室だ。テレビで見たような個室。相当大きな病院に運ばれたらしい。

「気分は？」

家族がいないか探したら、右側にパイプ椅子に座っていた見知らぬ男がいた。

「大丈夫です……」

医者には見えない。少し長い癖のついた長髪を束ねたダンディな感じの男の人は茶色のコートを着ている。

久しぶりに出したであろう声で答えれば彼は立ち上がり懐に手をいれた。

拳銃？なんて構えたあたしは相当病んでいるんだ。

「埼玉県警の刑事、篠塚だ。質問をしてもいいか……？」

見せられたのは警察バッチだった。嗚呼、死刑だ。

なんて思ったけど彼の目は被害者に気を使うような眼差しだった。あたしは首に手を置いてとぼけてみた。

「なにが……あつたんですか……？」

「……やはり覚えていないか」

篠塚さんは肩を落としてまたパイプ椅子に腰を降ろす。「あれだけ

の酷い光景…見てても思い出したくはないな…」そう呟くように言った。

「君は襲われ、首を切られたんだ。幸い浅く、死にかけたが医者が君を救った」

不意に浮かぶ彼の笑った顔。殺す気はなかった？否、恐らく死なない程度に切ったのか？それとも適当…？

「あたし、電車にいましたよね…？」

「…ああ。息をしていた君をすぐに救急車で運ばせた。犯人は逃走中だ」

嗚呼、あたしは容疑者だと疑われていない。でも安心はできない。何かあたしが殺ったと言う証拠がでるかもしれない。

「犯人は、連続殺人犯だと思われる。我々は、頭蓋破壊屋と呼んでる」

「頭蓋…？」

「奴の手口はいつも頭を爆発させたように殺すんだが今回は首や心臓だった。だが奴の指紋が見つかり、今回も奴だと踏んでいるんだ」

頭が爆発したような死体が見つかったなんてニュース見覚えない。だけど、あの狂った彼が頭蓋破壊屋のはずだ。だって「脳ミソぶちまけてるよ」って言ったもん。

「その指紋が君の座っていた後ろの窓にあったから、君が犯人の顔を見たと思ったのだが…」

見ました。物凄い間近で。

「何か思い出したら電話してくれ」

そう言つて刑事は名刺を差し出してくれた。何だか悪い……。犯人はあたしだし、頭蓋破壊屋の顔を見たし、何より…篠塚さんは人が良すぎる。

普通なら被害者も疑うと思つたのに、なんて優しい刑事さんなんだ。

「他に知りたいことは？」

「……生存者は…？」

恐る恐ると言つた感じに訊いてみた。刑事さんは一度も死人のことを話してない。全滅とか死体の山の中君がいたとか大量死体とか、その言葉を言っていない。

電車にいたことを訊いたのも生存者を訊くためだった。彼は綺麗にあたしだけのことを答えたんだ。

怖がらせないように気を使つてるのだろうか。

「君だけだ」

そう短く答えた刑事さんは辛そうだった。嗚呼本当に優しい人だ。他の乗車した人間が死んだなんて、口にしない。

罪悪感がじわりと胸に広がって顔を伏せた。生きた人間にならどうやら罪悪感がわくらしい。

「……俺はこれで失礼する。また来る」

ふと頭の上に大きな掌が置かれた。篠塚さんのだ。また来る、なんて優しい言葉なんだ。

シワアときて涙がポロツと落ちてしまった。彼は見ないフリしてポ

ンポンと頭を撫でてくれる。「……はい……」とあたしは小さく頷いた。

篠塚さんと入れ違いで家族が入ってきた。あたしが明るくチャオと言ってみたら、怒られた。ごめんなさい。

それから担当医が来て今までの経緯を詳しく訊いた。血を大量に流していて危険だったが止血してなんとか命を留めたそうだ。

深々と頭を下げ礼を言う。

暫くは安静に、とのこと。3日眠っていて、篠塚刑事は3日待っていたらしい。もしも嫌なら無理して会わなくてもいいと言われたが、あんな優しい人拒めない。

出されたお粥を食べながらどうしようか考えた。

自首しようか。篠塚刑事に逮捕されるなら本望だ。でも牢獄は嫌だな。証拠がなければ不起訴になるかな。

あの血溜まりとぱっくり開いた傷口を見たにも関わらず、お肉が食べたいと思った。お腹すいた……。

味つけのないお粥を噛み締めて痛みと一緒に飲み込んだ。

目覚めた事を知って、友人が会いに来た。大丈夫だと笑ってみせてから病院怖いと洩らせれば怪談話になって夜眠れなくなってしまった。夜の病院は怖すぎる……。

「お前ほんと、生きててよかったよ」

翌日もまた来て、そう涙目で言われても、悲しくならないのは何故だろう。あ、そっか唯一の生存者だけど犯人でもあるからか。泣くなど笑い退けてやった。ていうか暇なのか君達？

そこにノック音が聴こえて皆で扉を見た。その扉を開いたのは、

篠塚刑事だ。

彼はあたしの友人を見ると

「邪魔だな、出直す」

「あつ、用があるなら入ってください。仕事でしょ？」

遠慮しようとしたからあたしは慌てて止めた。何なら友人なんて追い出しますけど。

「いや…今日はプライベートで来ただけだ。体調を知りに」

首を振って入ってきた彼の手には果物のバスケットがあった。流石に怪訝に思う。もしかしたら優しさは、演技であたしを疑っているのかもしれない。

「そんな気をつかわなくても……喜んで食べます」

「食べるんかい、喜んで」

ナイスツッコミ。

「これぐらい当然だ。元気そうでよかった、じゃあな」

あたしに渡すなり笑って彼は部屋をあとにした。それが演技なら曲者だ。

あたしの演技（したつもりはない）を見抜いていても可笑しくない。盗聴機あったりして。ちよつと確認でフルーツバスケットを見た。あの頭蓋破壊屋を知ってから警戒しまくりだ。

不意に皆があたしを見てることに気付く。じつと今のは誰かを問う目。

「刑事さん。しぶくてイケメンだよな」

あたしは疑問に答えてやって笑う。なんだか安心したように皆に笑顔が戻った。まさか彼氏とか思っていないよね？いくらなんでもあんな歳離れた人とあたしが付き合うわけないだろう。

「刑事ってあんな感じなんだ？かっこいいー」

「見舞いなんて、親切だね」

「っーちゃん食べていい？」

マイペースだな、と思いつつショートのアちゃんに林檎をあげる。

「すごい優しい人なんだ、気を使って事件のこと慎重に話してくれるの」

そう言うと南と真実が反応を示した。皆も気を使って事件のことは訊いてこなかったけど、タイミングを掴んだらしい。今だ。

「椿は事件のこと覚えてないんだよね？」

「うん」

「何かきいてない？」

「何かって…？」

妙な質問だ。あたしは首を傾げて何う。

「ニュースみてないの？」

「怖がるから見せるなって医者と言っから禁止なの」

置いてあるテレビに目を向ける。医者が母に精神的に参ってしまう為、見せない方がいいと言ったから見せてもらえない。

「犯人が全く捕まっていなかった。テロとか色々ニュースでいってるけどほんとのことは警察も発表してなくてわからないんだ」

テロとは心外だ。こんなことを思うあたしが犯人です、南ちゃん。あまり情報が出てないようだ。警察も頭蓋破壊屋だと思っているのは明かしてないよう。

篠塚さんはあたしに言ってよかったのだろうか。それとも引っかけ？

「何か聞いてない…？」

「特には…あたし以外皆死んだってことぐらい…」

頭蓋破壊屋の事は言わない方がいいだろう。彼女達の為だ。あんな狂った彼の事を知ったら殺されてしまうかもしれない。流石に友人が死ぬのは嫌だ。

「ほんと…椿が生きててよかった」

その話はずいぶんいいよ。被害者を殺したことを思い出して自己嫌悪に陥っちゃった。

「あたしの名前は出てた？」

山本椿と言う名前が連呼されるニュースなんて見たくない。

「うっん出てなかった」

「女子高生（18）って出てたよ」

からかうように真実が言った。そうか名前は出てないか。

「まさか殺人犯が椿を狙うとか言わないよね…」

南のその言葉に苦い顔をする。迎えに来るとか言っていたんだ、来そうだ。

もしかして人間を弄んで殺して楽しんでるかもしれない。あたしの最期は脳ミソ粉碎か。

「それで刑事さんが来てるかも」

安ちゃんがあたしの肩を撫でて心配してくれる。

それも有り得るかもしれない。優しさが演技ではなければ。

「次来たら訊いてみる」

「…なんか心配になってきた、泊まってい？」

「大丈夫だよ！」

思わず声を上げた。泊まるな、殺されるぞ。頭粉碎されて。

なんとか説得して泊まることを阻止した。

彼女らが帰ったあと、メロンを一人で平らげる。お腹が満たされた気分だった。

翌日、篠塚さんが来るのを待ったがきつと仕事だろう。今日は来ないようだ。見舞いも来ないようだからあたしはベッドから降りた。久しぶりに病室を出て廊下を歩く。やっぱり大きな病院だ。

外に行ってみたいな、と渡り廊下の窓を見たらなんだか下に人盛

りができていた。なんか嫌な予感。

「取材陣だつてさ」

後ろから声が聴こえてビクリ震えて、振り返った。

「大量殺人事件の唯一の生存者がいるって嗅ぎ付けたらしいよ」

窓に腕をつけてそれを見下ろす同じくらしい歳の松葉杖をついた男。情報をありがとう、と小さく礼を返す。

「アンタ、初めて見た。来たばつか？」

「一週間前かな、ずっと病室にはいつてた」

「一週間？事件の時と…？ああ…」

あ、口を滑らせてしまった。事件発生日と同じと知り悟ってしまった彼は頷く。

「へえそつか、君かあ」

「…わかっていると思うけど誰にも言わないでね？」

「わかつてる。俺は秋川秀介、あきかわしゅうすけ見ての通り骨折で入院。その首は名誉の負傷？」

「山本椿、首裂かれて救われて閉じ込められてる」

何が名誉の負傷だ。笑わせようと冗談言う彼に肩を竦めて返す。

「で、どんな奴だった？殺人鬼」

「……見てないよ」

ニヤニヤと訊いてくる秋川秀介に嘘をつく。

「なあんだ、そっか。そうだよなあ見てたら警察が彷徨ってるもんかな？」

「…どっちでも心配だから殺しにくる、かな？」

恐る恐る訊いたらすぐに頷かれた。

「多分な、テロの目的が電車にいた人間を皆殺しなら殺す気だろう。殺人犯だって捕まる気がないなら殺しに来るんじゃないかねえの？」

躊躇いなく秋川秀介の予想を言われて青ざめる。

出来れば会いたくない、頭蓋破壊屋。やっぱり殺しにくるのかなあ。

ポン、といきなり肩に手が置かれて「きゃああ！」と病院にも関わらず悲鳴を上げてしまった。振り返れば目を丸めた篠塚さんがいた。

「すまない…驚かせて」

「あ、あたしこそ……」

大声を出したことを謝る。ああ恥ずかしい。

「ん、じゃあね椿ちゃん。また」

秋川秀介は杖をつきながらあたしから離れていった。また会ってもりなのかな、戸惑いながらもまたねと言ってみる。

「マスコミが嗅ぎ付けた、あまり病室を出ない方がいい」

「あ、はい」

手を差し出された。思わず手を置いたら手を握られ引かれる。おお

…手を繋いでしまった。病室に戻ってベッドに腰掛ける。

「あの…今日はお仕事で？」

「ああ。マスコミが騒ぎだしたからな、犯人がここに来た時の為に人を置くことになったから知らせに」

ゾクツと寒気がして腕をさする。警備がつくことになっちゃった。少し沈黙。

言葉を探して、慎重に情報を取り出してみよう。嘘かどうかはわからないが、ないよりはいい。

「頭蓋破壊屋のことは…公表していないみたいですが…彼は、生存者を殺しに来ると思いますか？」

とりあえず、彼は頭蓋破壊屋のことを知っているのだからどうかを訊いてみた。

「わからないが可能性があるのなら君を全力で守る」

警察でも彼には勝てないと思う。そして彼は来る。気分が変われば別だと思うけど、来るはずだ。

「その犯人は…一体何人殺したんですか…？」

「…奴のことは口外しないでくれ。人数は…わかっているだけでも200人だ」

うわっ、本物の異常者だ。あたしは少なくとも20数人。彼は十倍以上殺している。勝てないと思うわけだ。

「大丈夫だ、守る」

「……はい……」

頭にまた篠塚さんの手が置かれた。うん、優しい人だ。演技じゃない。良い人間だ。こんな人を殺さないで欲しい。頼んだらやめてくれるだろうか。逆に殺しそう。今すぐにでも扉を開いて…。

そう思ったら扉が開かれて思わず震え上がった。

「山本椿さんですね」

「は、はい……」

スーツの男の人が入ってきた。後ろにも二人いる。

「東京都の刑事だ。君に質問があるそうだ」

「佐藤拓人です。事件について聞いて聞いても構わないかね？ 医者と親御さんからは許可をもらっている、君さえよければ」

キリッとした刑事らしい人が警察バッチを見せた。本格的な質問が来そうだ。「はいどうぞ」とあたしは心の準備をして頷いた。

刑事さん達は病室にはいり早速質問をしてきた。篠塚さんがパイプ椅子を譲ったが断って佐藤刑事は仁王立ちする。なんか嫌だ、この人。

「君は何処に何しに、電車に乗ったんだい？」

「気分転換に、買い物しに向かっていたんです」

正直に答える。自白するつもりは今はないからそのうち嘘をつくだろう。

「乗車した時、誰かと口を交わしたか？」

「…誰も」

「最後の記憶は？」

「……〇〇駅を通りすぎた、時……でしょうか」

そのあと、ぼおとして気付いたら殺戮を始めていた気がする。この時、自分を分析してみた。演技ではないけどきつと記憶が欠けてるように見えるはず。

殺戮のことを言わないでおけば、記憶がないせいにはできる。矛盾を拾われなければ。

「その時の記憶は全く、ないんですね？」

無言で頷く。思い出して首をさする。

紅い紅い紅い紅い血。

危うく脳内にはいつてしまうところだった。

「誰か、怪しい気な人や集団を見ていないかい？」

見ました。「見てません」と首を横に振る。怪しい人は頭蓋破壊屋だけ。あと犯人のあたしか。

「君は恐らく犯人と話したはずだ。全く思い出していないのかい？」

思い出せ、と言いたげな目付きで睨まれる。あたしは首を横に振った。

「無理に思い出させてはいけないと医者に注意されているぞ」

篠塚刑事が助け船を出してくれた。佐藤刑事は腕を組んで今度は篠塚刑事を睨み付ける。

「君はアイツを捕まえたくないのか？」

「捕まえたいに決まってるだろ」

「わざわざ外国から追い掛けてきたのに、身元さえわかっていない。手掛かりは彼女だけだろう」

なんだか険悪ムード。ギツと二人は睨みあった。人気者だね、頭蓋破壊屋。

「篠塚刑事は外国から来たんですか？何故東京と埼玉の刑事が一緒に？」

険悪ムードを割ってあたしは純粹の疑問を口にする。知る権利はあると思います、後者は。

「ここ数年、奴が日本で事件を起こしているからアメリカから来たんだ。奴は色んな所で事件を起こしているから、東京都の警察も来たんだ」

篠塚刑事は素直に答えてくれた。なるほど。満足して頷く。

「すみません、思い出せなくて」

深々と頭を下げたら篠塚刑事は慌てて顔を上げるように言った。

「いいんだ、ゆっくりで。辛いのなら思い出さなくてもいい」

嗚呼、本当に優しい人。

慈悲深い目であたしを見つめてくれる彼に罪悪感が膨らむ。

「最後に、恨みを買っような心当たりは？」

ちよつと苛ついた口調で佐藤刑事が訊いた。ないと答えれば溜め息をついた。

「では、今日から君の安全を守る為我々警察は待機する。君の病室に一人、出口に二人裏口に一人、表に車の中で二人、刑事が待機するから安心したまえ」

「病室に、もですか？」

思わず苦い顔をする。篠塚刑事は兎も角、他の刑事とこの密室にいてはならないのか。そして悪ければその刑事と一緒に死ぬのか。嫌だ。「君の安全の為だ」と言われれば何も言い返せなくなる。

あたしの病室には刑事さんが順番に待機することになった。気だるい。見知らぬ人と沈黙の中にいるってなんか電車の中みたいだ。

ああ、殺したい。

心の呟きにハツとなる。おいおい、まじかよ。刑事の前で、ていうか刑事相手に殺戮衝動を起こしちゃだめだ。慌てて手を擦る。

気を抜くと病院にある武器になるものが何処にあるかを考えてしまふ。

殺戮衝動を紛らわす為に、頭蓋破壊屋の事を考えた。

今日来たらどうしよう。刑事さんは殺さずにあたしだけを殺してください。言える自信がない。

消灯の時間。来るか来るかと待っていたが、その夜訪問者は来なかった。

お肉が食べたい、とか思いながらお粥を食べる時には篠塚刑事が待機してくれてちよつと嬉しかった。

彼とはもつと話したい。

他愛ない話をした。好きな物を次の見舞品として持ってきてくれるって。あとは友人の話。家族の話。色々訊かれたから、話した。話し出したらリミッターが外れてペラペラと話してしまう。

実は警察が嫌い。顔も知らない父親が警察関係の人間だったから。種違いの弟と妹がいるが今は母子家庭。

思えばそれも病む種だったんだろうか。話したらちよつと楽になった。篠塚さんは真剣に聞いてくれた。

「正直、こんなことになって母に迷惑かけてしまつて…気が重いです」

「君が生きているだけで、お母さんはいいと思う」

本当に本当に優しい。自分の家族のことも話してくれた。あたしはまじまじと篠塚さんの顔を見つめる。

綺麗な顔立ち。笑うと穏やかな表情が気持ちいい。

「あ、あの頭蓋破壊屋をずっと追ってきたんですか？」

会話が一時中断した昼飯に、あたしは訊いてみた。

「六年前から追っている」

六年前からあの人は殺しをやっているのか。若そうなのに。

「外国にいたのにわざわざ追い掛けて日本に？」

「ああ、転属してまで奴を捕まえたいと思ったんだ。子供から女年寄りも容赦なく殺している殺人鬼…野放しにできないからな」

眉間にシワを寄せた篠塚さんは執念深いんだ。その言葉にギクリと

する。あたしも野放しにできない殺人鬼。いつかは知られてしまうと思うが、嫌われたくない。

落ち込んだ矢先に、交替を知らせに佐藤刑事が来た。次は佐藤刑事だと言う。最悪だ。篠塚刑事は表に行つてしまい、さよなら。

佐藤刑事は黙々と新聞を読んでいる。ランチを食べ終えたあたしはやることもなく黙り込む。一番居たくない。佐藤刑事は被害者も疑えるタイプ、下手を踏むと容疑者になる。だから黙るしかないのだが、篠塚刑事との楽しい時間の後だと沈黙が重苦しい。あと何時間こうしなきゃいけないんだろう。

なんとかこの場を出る口実を考えてベッドから降りた。

「何処に行くんですか？」

「友人に來ないようにと電話をしに行つてきます」

「私も行く」

「いえ、大丈夫です。人も多いだろうし」

やんわりと断れば引いてくれた。よかった、目的は離れることだもの。あたしは携帯電話を持って病室を後にした。

時間稼ぎにふらふらとゆっくり廊下を歩く。のんびりと通り過ぎる病室の表札を見ていれば、秋川秀介の名前を見付けた。彼も個室。ちよつと挨拶してみようか、と時間稼ぎのつもりでノブに手を伸ばした瞬間、開いた。

ビクツと後退りすると、中から金髪の美女が出てきた。黄緑色の瞳であたしを一瞬見た彼女は背を向けて歩き去る。

なんだ、とあたしは病室に目を向けた。病室にはベッドの前で立ち尽くす秋川秀介が見えたが、その顔はただならぬ表情。不味いことに目があったが、幸いスライドドアはしまつてくれた。明らかに話し掛けられるような空気ではない。

金髪美女は怒った御様子で秋川秀介は落ち込んだ様子。何があつたかなんてあたしには関係ない。

逃げよう。

あたしは直ぐ様病室に戻った。

「早かったですね」

「ちよつと…マスコミみたいなのがいたので逃げてきました」

「マスコミに見つかつてもとぼけたほうがいいですよ」

なんだか他人事のように佐藤刑事は言つた。わかつてるし、思いながらもベッドに潜る。結局少ししか解放されなかつた。

次はなにしようか、と考えていたら扉が乱暴に開かれた。思わずあたしも刑事さんも震え上がる。

扉を開いたのは秋川秀介。

「椿ちゃーんっ！」

泣きそうな声を出したかと思いきや、迷わずベッドに飛び込んであたしの胸に抱き付いた。ぎよつとあたしは固まる。

「君！いきなりなんだ人前で！」

佐藤刑事が立ち上がつて真つ赤になりながら怒るが秋川秀介は離れるどころかギョツと胸に顔を埋めてきた。

「フーラれーたあー！慰めてえー」

「慰める！慰めるからはなれっ……ぐほっ……」

耐えきれず大声を上げようとしたら、痛みに襲われた。

首の傷口が開いてしまつて噎せる。噎せる度に痛みがして涙が出てきた。

「椿ちゃん大丈夫？」

お前のせいだ。

なのにあたしは担当医に怒られた。包帯を巻き直され、鎮痛剤も飲んだ。もう大声を張り上げないで安静にしろとのこと。

「で……あの金髪美女、彼女だったの？」

「うん、そうなんだよ……別れよっていきなり来てさあ酷くない？俺もう生きてけないよぉー」

身体を起こして話題を戻せば、秋川秀介は眉毛を垂らしてベッドの上で頂垂れた。

「はい？あの人いなきゃ生きてけない？」

「ミサがいなきゃ生きてけないー！」

じゃあ死ぬ。死んでみる。なんならその金髪美女のミサさんの前で自殺してみる。

後悔させてやれる。

何て酷い言葉が浮かんだから振り払う。

「今現に生きてるから大丈夫でしょ。別れの理由は？」

「仕事で怪我したから……カッコ悪いって。こんなヤワ男とは嫌だつて」

ズバリと言ったな金髪美女。性格きつそうだ。

「俺ダメ男おっ！？」

「止める、止める止める止める止める止める、頼むから止めてくれ」

嘆きながらベッドに上がり込んでまたあたしに抱き着こうとしたからあたしは精一杯出せるだけの声で止める。あたしを叫ばせて殺す気か。

「昨日会ったばかりなんで君のことは知りませんが、骨折くらいでダメ男だとは思いません」

本当に昨日会ったばかりなのになんで慰めてるんだろう。肩を叩きながらあたしの意見を言った。怪我をするような仕事じゃないなら話は別だが。

「本当…?」

「フラれたくらいで泣く方がカッコ悪いよ」

涙目でうるうる見上げられる。可愛い顔。小顔で整ってるイケメン。本当は泣いてると可愛いと思う。

「よりを戻したいなら連絡をしたら?忘れようと思うならあたしは応援する」

あたしが出来ることは特にないけど。上手くすれば彼がいることにより、刑事との二人きりから解放されるかもしれない。うん我ながら酷い人間だ。

「椿ちゃん……優しい……」

「え?普通の人ならこう言うでしょ、ねえ刑事さん」

「そんなことでメソメソするなら甘やかさない方がいい」

刑事に話を振ったあたしが悪かった。

「もつと冷たいこと言うと思った…」

「ああ冷たいこと言われたいマゾですか？生きてけないなら彼女さんの目の前で自殺したらどうですか」

「流石にそれは無理ですすみません」

はっはっはっ、とあたしが感情なく笑ってやったら頭を下げた。

「じゃあさ、苦しくなったら…ここ来てもいい？」

首を傾けて見上げてくる秋川秀介。

ずるい。

そんな可愛い顔で黒い瞳で見上げられたら断れないではないか。

「うん、いいよ」

そう頷けば、嬉しそうににへらと笑みを溢した。どうやら新しい友達ができたみたいだ。

そのまま話をすれば、彼は一個歳上だと言うことがわかった。元恋人とのどうでもいいのろけ話を聞かされたが佐藤刑事と二人きりよりはまし。

翌日も秋川秀介は病室に来てくれた。フラれたばかりだと思わせないくらい明るく笑いかけてくれる。左足を骨折してるなんて嘘みたくらいに元気。

「秋川君はいつまで病院に？」

「俺はまだ一週間いなきゃだめって言われてる」

「それにしても元気だね」

「……秋川君って呼ぶのやめね？」

「じゃあ秀介君」

「君付けじゃなくてさ、もっと可愛げに」

なんだ可愛げにって。

「ちゃん付け？」

「ニックネームで呼びあおうよ！」

「ニックネーム…友達にはっちゃんって呼ばれたりするよ」

「っちゃん？可愛い〜」

「怒るよ」

刑事さんの存在がないかのように二人で話した。あたしはベッド。

秋川秀介はベッドに腰掛けている。

「俺はっちゃんかつばきちゃんって呼ぶね」

「つばきちゃん却下」

「俺にもあだ名つけて、つばきちゃん」

だから却下って言ってんじゃん。秋川秀介は決定してしまっただけ。肩を落として、彼のニックネームを考えることにした。

「シユウシユウは？」

「シユウシユウ？」

「秋川の秋はシユウとも読むでしょ」

苗字の頭と名前の頭をとってあだ名にするのも定番だろう。気に入らなくパツと彼は顔を輝かせた。

「うん、決定！つばきちゃんとシユウシユウ！」

「やだつてば…つばきちゃんは。なんかバカツプルみたい」

あたしがそう言った途端、笑顔は砕けたように消えた。しよぼーんと目を伏せるシュウシュウ。

「……ミサとも、こんな風に呼びあえてたらな…」

一気にじめじめしだした。ああ正直にウザいと思った。

「それはやめた方がいいと思うよ」

「そうかなあうまくいったかもしれない…」

「じゃあ電話してきたら？」

「うん！してみる！ついてきてつばきちゃん！」

急にまた表情を変えた彼が立ち上がった。そして手を引かれる。

「待てどこいく？」

「電話するだけです、すぐ戻りますから」

慌てた刑事さんを昨日の佐藤刑事ように丸め込んで秀介と部屋を出た。

「刑事。四六時中いるの？」

部屋を出た途端、そう訊いてきた。

「うん。マスコミにバレたなら犯人にも知られて殺しにくるかもしれないって」

「………椿ちゃん、こんな状況なのにビビってないね」

「あーうん………まだ来てないから？」

ふーん、と秀介は前を向いた。これを訊くために部屋から連れ出したように感じるのは気のせいだろうか。

刑事の前でこの話はできないから今訊いても不思議ではないが、急に真面目な雰囲気になったのが気になる。

秀介の横顔は何処かを見据えるような目付きだった。その黒い瞳があたしに向けられる。

「俺が守ってやるよ」

そう不意打ちで微笑みられて、胸がキュンとした。だからずるい。いきなりかっこいい顔をするなんて。

こんな人に愛される人はきつと幸せ者だ。と思ったがフラれてるんだこの人と思ひ出す。

「あたしよりも元カノを考えたら？」

冷たく言ったら落ち込んだように頭を下げた。

公衆電話でかけた秀介だったが一度も電話に出てくれなかったらしく、落ち込んだ。

あたしは「明日があるさ」と勇気づけた。うん気休めばかりでごめんよ。

夜になって今日のことを振り返ったら、何してんだろうと思った。仮にもあたしは殺人鬼だ。殺人鬼なのに秀介と仲良く喋ってる。いつかバレた時、秀介が傷付いてしまうのでは？自己嫌悪に陥る。

苛々する。ムカつく。情けない。なんて馬鹿なんだ。嗚呼殺したい。

またきた殺人衝動に、堪えきれずベッドから起き上がる。待機している刑事は眠っていた。音を立てずにベッドから降りて、あたしは

病室を抜け出し暗い廊下を歩いた。

今度は病院にいる全ての人間を殺してしまおう。手の感覚がおかしい。勝手にピクピクする。

あたしが足を止めたのは、倉庫室。その中に入って凶器になるものを探した。

メスに注射器。それぐらいしかないがメスだけでも十分だ。

「そこで何してるの？」

女の人の声にビクリと震える。暗かった視界が懐中電灯により照された。あたしは袖の中にメスを三本隠して、振り返る。

「すみません…鎮痛剤を探してて…」

「貴女は山本さん…。そうゆう時はコールしてください」

看護婦さんは肩を落とし棚から鎮痛剤を取ってからあたしの背中を押した。あたしはもう一度謝ってからその部屋を出る。

付き添われ病室に送られた。あたしの病室は何故か明かりがついていた、どうやら刑事が起きたらしい。

部屋の中を見れば、篠塚刑事もいた。

「何処にいったんだ！」

「す、すみません…鎮痛剤を探してて……………」

「痛むのか？」

「ちよつとだけ」

怒られたが怪我の事を心配してくれた。鎮痛剤を飲んだ後、看護婦さんに寝なさいと促されて、ベッドに潜り込む。

「もう勝手に抜け出したりするな。狙われているんだから」

「はい…ごめんなさい」

強く言つて篠塚さんはあたしの頭を撫でた。撫でられながら枕の下にメスを移動させる。鎮痛剤のおかげが落ち着いて眠くなった。瞼を閉じて眠りに落ちた。

紅い。紅い。紅い。紅い。

紅が見たい。

気だるい中、目を開くと

「おはよう!」

秀介の笑顔があつた。一気に眠気が吹っ飛んだ。

「近い。おはよう」

「うへへっ」

「…いつからいた？」

「五分前から寝顔見てた」

「頭ぶつけて忘れて」

起き上がると、篠塚さんもいることに気付いた。

「おはよう。声をかけたんだが起きなくて朝食は片付けられたぞ」

「おはようございます…すみません」

篠塚さんにもどうやら寝顔を見られたらしい。恥ずかしいが、悔いなく死ねそう。こんな優しくて顔のいい異性と知り合ったのだから。

篠塚さんと秀介を眺めながら、もう人を殺さない努力をしようと思つた。

ただど夜になったらまた自己嫌悪に陥って衝動に負けそう。そう思うと溜め息が落ちた。

「どうした？悩み事？」

「ううん、ちよつとたるいだけ」

「何か買ってこよう、何がいい？」

「んー…何かありますか？」

「購買行ったことないの？」

「うん、ない。マツクのチーズバーガーが食べたいな…」

「はは、わかった。買いに行かせてくる」

「あ、ありがとうございます！」

我が儘を篠塚さんは笑って引き受けてくれる。仲間に頼むのか、部屋を出ていった。

「まさかずっと病院から出されるもん食べてんの？腹すかね？」

「ぎゃー！ちよつと触んな！」

いきなり腹を掴まんできたから叩く。あたしだって肉が食べたいと思うし足りないよ。おかげで痩せた気がするよ。

でも喉の傷が痛むからお粥を食べているんだと威張って言ったら笑われた。

「それにしても…さっきの刑事さんとは妙に親しそうだな」

「え？篠塚さん？そう見える？他の刑事よりは仲良いと思う」

篠塚刑事以外、優しく笑いかけてくれる刑事はいない。何故そんなことを訊くのかと首を傾げていれば、じいーと彼はあたしを見てきた。

「なんか、妬いちゃう」

「へ？あっ」

顔が近い。

そう思っていたら彼が肩に頭を乗せてきた。腹に腕を回してキュッと締め付けるのは百歩譲れたが…。

「やめろ！首はっちょよ！」

「んー？」

んー？じゃない。叫ばないようもがくが、秀介の唇が包帯の部分についたのを感じてピンツと固まる。

トドメにふーっと耳に息が吹き掛けてきた。限界だ。

「んきやああっ！」

「わあ！？びっくりしたあ」

「びっくりしたって…おまつ…バカッ！！」

悲鳴をあげたことにより秀介は離れた。怒りながらあたしは涙目で耳を急いで擦った。

「あーもうっ！かゆいっ！ムズムズする！馬鹿シュウー！」

もう赤くなるほど耳をさすっていたがムズムズしてきた。秀介のせいで怒ったのに秀介はじっと見ていたかと思えば、

「耳、感じるんだ？」

「お前、本当にぶっこ…ぶっ飛ばすよ？」

にやっと面白そうに笑うから危うくぶっ殺すと言いかけてしまう。

あたしの場合、冗談じゃなくなる。言ったら枕の下のメスを取り出しちゃう。

「え〜なにに？あと何処が性感帯なんー？」

こいつは違う意味で危険だ。よくよく考えれば、男女がベッドの上ってヤバくないか。

「彼氏にどこチュツチュツされたら感じちゃうの？」

「下ネタは余所で話してくれる？彼氏いないし」

「え？いないの？まじで？」

睨み付けて答えれば秀介は目を丸めた。いると思っていたことが驚きなんですけど。

「椿ちゃん可愛いのに…こんな美人同級生がほっておかないでしょ」

そつとあたしの髪を耳にかけて言った秀介。似たようなことを言われたことはある。美人だとか彼氏がいないのはおかしいとは言われたことあるがその度お世辞はやめると一蹴する。

勿論、会ったばかりの人間にだってそうする。“はず”なのだが、できなかつた。真っ直ぐ黒い瞳で見つめて、本心を言った彼に思わずときめいてしまったのだ。

髪を耳にかけた仕草も綺麗な顔にも、心臓がドクドクと高鳴った。頬に熱が帯びるのがわかったが、沈黙したら気まずくなる。

「あ、あたしは…普段…愛想悪いから…あんまり人と接しないから…その…だから可愛くないし……………」

あたしがモテない訳を話した。もう熱が頭まできたらしい。結局口

を閉じた。

気付くと秀介はポカーンと目を丸めてあたしを見ていた。次第と頬が赤くなつて、表現できない表情になる。

「っ、椿ちゃん可愛い〜もうっ俺きゅんってきた!!! ああ惚れてもいい!!!?」

「きゃっ! 抱きつくなつて! あたし死ぬわ!? ちよっやめろつて!」

あたしの顔を両手で押さえ込んだかと思えば、抱き締められた。頬むからスキンシップは止めてくれ。叫んでまた傷口開いて怒られるのはごめんだ。

死ぬと言えば、秀介は離れた。「もう可愛い〜」とデレデレした笑みで言ってくるから睨み付ける。

篠塚さんが戻ってきて、やっと朝食が食べれた。

お肉。噛み締めて味わう。美味しすぎて笑みを溢してたら見ていた篠塚さんと秀介に笑われた。

「椿ちゃん、すごい美味しそうに食べるね」

秀介がポテトを然り気無くとって食べてそう言う。

「看護婦にバレないようにな」

篠塚さんはポテトを貰うと言って食べて笑いかけた。至福の時。死ぬなら今がいい。だけど殺人鬼は来ない。

代わりに来たのは、あたしの友人だった。ああ来るなって電話をし忘れてた。

「椿!」

「こんにちは...」

最初にあたしに挨拶した三人は次にベッドに腰掛ける秀介を見た。大人の篠塚さんには先ず挨拶。

秀介はパツと笑顔を浮かべたあと、立ち上がった。

「初めまして！椿の彼氏です！」

「コラッ！何言つて…嘘だよ！？違うからね！？違いますからね！？」

明るすぎる笑顔で嘘をつくから皆信じて一斉にあたしをみた。あたしは慌てて否定。特に篠塚さんに。

仲良くなったと紹介したら南と真実にニヤニヤした笑みを向けられたが無視。

篠塚刑事のことも紹介して、もう来なくていいと伝える。

そうしたら今日だけお喋りしようということになったので、秀介も混ざって夕方まで話をした。秀介はあたしのことをしつこく訊くから正直焦った。

「椿は好きな人の前だとすごい笑顔だから、すぐ真っ赤になるし」

「へー可愛い〜真っ赤なつばきちゃん！」

「煩い！」

「はは、名前通り可愛い顔になるんだな。椿の花が咲いたみたいだ」

躊躇いなく話されて大慌てしてたら篠塚さんが会話に入ってきた。

篠塚さんに可愛いと言われ、あたしは爆発的に真っ赤になってしまふ。それをからかわれたので布団の中に隠れた。篠塚さんが言うのは反則だろう。

そうしたら布団ごと秀介に抱き締められたから蹴り飛ばした。

「あ、そうだ、そこにあるバックとつてくれない？」

「これか？ほい」

南にバツクをとってもらった。母に持ってきてもらった物。あたしが多分捨てられない物。殆どを詰めてもらった。あとは退院の日に着る服が入っている。その中に、アクセがあるから取り出した。

「これあげる。貰って」

ベッドの上に散らばせて見せる。「いいの？」と訊かれたから笑顔で頷く。あとペンとキーホルダーもあげた。

「わーいもらったあ」

「でもいきなりどした？」

「ん？要らないからだよ？」

あたしは笑い退けた。

要らないでしょ。

死んじゃうんだから。

最後に話せて本当によかった。今までありがとう。最期に手紙くらい書いておこうかな。そんなことを笑顔の裏で思いながら昔の笑い話を持ち出した。

もつと笑いあいたかったな、なんて切なさが込み上がったが安ちゃん達は帰っていった。何も知らず笑って手を振って帰っていった。

秀介も夕飯を食べるために自分の病室に戻った。

あたしは閉じられた扉を、ボオと見つめる。

「どっかしたのか？」

篠塚さんがあたしのその様子に気付いたのか、声をかけた。

「え、あ…どうして？」

「何か思い詰めた顔をしているように見えたが…大丈夫か？」

パイプ椅子から立ち上がり、篠塚さんは顔を覗いてきた。そう言われたら嘘つけない。

「…もしもの時…会えなくなるのは残念だなと思ったんです…居心地よかったです」

いくら居心地が良くても、ずっとは一緒にいられない。だから正直、あたしは嫌っている。いつかは無くなると思うと苦しくて腹立たしくなるから。

多分あたしの青春だった。

あちらこちらと遊びにいつてばか騒ぎした仲間。悪友とも言う。

そんな場所があると、弱くなると知った。彼女達と会う前は独りでも平気だった。なのにその後は孤独を感じて、涙が出た。あたしの今までの涙の理由なんて、なんで新しい父親に愛されないんだろうって嘆くことぐらいだったから腹立たしかったんだ。

独りだということに泣くなら、死んでしまおう。そんな馬鹿なこととは数えきれないほど思った。もう、そう思わなくなると思ったら軽くなったように寂しくなったように、わからない。多分相應しい言葉は“複雑”。

「君は死なない」

あたしの両肩を掴んで、強く篠塚さんは言った。

「俺が死なせない。だからそんなことを考えるな。わかったか椿？君は凜々しい花だ、生きていける。殺させない」

「……つばきちゃん、心臓ドクドクして早い」
「煩いなあ……こうゆうの弱いんだよ」

しーんとしたあとに秀介に言われて真っ赤になる。異性とこんなこととするの久しぶりだし、胸キュンするのだ。心臓が早くなるのも当然。

「弱い？」

「君みたいなイケメンにこんな風にじゃられると卒倒しそう」

「好きになっちゃうってこと？」

なんか正直に頷いたら面倒な話に行きそうな気がするが、頷いた。

「ほんと？俺に惚れちゃう？」

コラッ！

いきなり秀介が振り返って身体を此方に向けてきた。それからぐんぐんと顔を近付けてきたから後ろに行くが、壁にいきつき左右を秀介の両腕で塞がれる。

「俺を好きになって、付き合おう？」

「なっ……何言って」

月の光に照らされた秀介の顔を見て、言葉を詰まらせる。その瞳が、本気？

「付き合わないよ……」

「だめえ？」

「だめ、だめだめ」

頑なに首を横に振る。

そんな捨てられた仔犬みたいな顔で見つめられても首を縦に振りません。そうしたら拗ねて口を尖らせた。

「だいたい別れたばっかで他の女とっ」

「スキあり！」

説教してやろうとしたら、唇を押し当てられた。

唇に。

ボンツと真つ赤になってぶん殴ろうとしたらすたころと秀介は逃げていってしまった。あいつめ…！

ぐつと怒声を堪えて枕に頭を戻した。

付き合おう。

一週間前のあたしならオツケーしてたかもしれない。秀介のようないい男と付き合えるなんて幸せだ。

しかしあたしは殺人鬼。そして殺されるかもしれない。恋をするなんて、ましてや付き合うなど、いけないことだ。だめだ、秀介の為にも。

だから早く殺してくれ。

頭蓋破壊屋。

「おはよびいねます」

目を覚ましたら気品ある微笑が一番に飛び込んできた。知らないお医者さん。

胸の名札には、笹野幸樹とあった。

「おはようございます…笹野先生」

なんでこの人はいるんだろうと考えを張り巡らせた。

「驚かせたかい？奇跡の生存者を人目見たかったです。すみませ
んね」

「え…いや別に…」

あんまりいい気分ではないが、気にしないように起き上がる。

「怪我の調子はどうですか？」

「大丈夫です」

メスが紛失した話じゃなくてよかった。胸を撫で下ろしていれば笹野先生があたしに紙切れを差し出した。

紅い紙。

「これ、君に渡してくれと頼まれたんです」

「あ、ありがとうございます…」

まさかと受け取る。開けばそこには、一行だけ文字があった。

今日迎えにくるよ

その言葉にゾクリと肩を震わせた。

「これ……誰から……?」

「明るそうな青年からだよ。茶髪でしたね」

彼だ。

ありがとうございます、と一度礼を愛想よく言っが内心は怯えきつていた。

来る。今日。

落ち着こうと深呼吸。

誰にも迷惑をかけずに、彼に殺されにいかなくちゃ。願っていたならだから怯えるな。

終わらせよう。

終わりにしよう。

鬼は殺人鬼

いつか来るかはわからない。だけれども彼は近くにいる。

あたしは手紙、否、遺言書を書いた。死んだらあたしの物は燃やしてほしい欲しいものは貰ってもいい、と家族に宛てる。あとは皆に向けて、今までありがとう。それで締め括った。その手紙を枕の下に隠す。

昼を過ぎれば交代してくると刑事さんが部屋を出たからベッドの下にバツクを取り出した。着替えることにする。上を脱いだ瞬間に扉が開かれた。秀介だ。

「あれ？誘ってる？」

「この変態っつっ！……！」

バツクにあった漫画本を投げたら受け止められた。

「何着替えてるの？マスコミがいるのに出掛ける気？」

ベッドに腰掛けて、秀介は訊く。なんて答えよう。

「…着替えたかったただだよ」

「……？」

秀介は首を傾げてあたしを見つめた。何うように観察するように見ってくるから顔を隠す。

「着替えるから誰も入らないように見張ってて」

「あ……うん……」

秀介が部屋を出てから急いで着替えた。ジーンズをはいて上着を着る。パーカーのポケットにメスを入れて、残ったアクセをつけた。寝巻きを畳んでバックに詰めてからベッドに潜り込む秀介を呼ぶ。

「病院抜け出す気？」

「まさか！」

「ふうん。抜け出す時は俺も誘ってくれよ」

「誘いません」

冗談のように言うが冗談じゃない。絶対に誘わない。きっと死ぬ。道連れなんかしない。

秀介ともお別れだ。短い間だったけど、楽しかった。

「本当に、彼氏になってもらいたかったよ」

「え？本当に付き合おう。俺マジで告ってるんだけど」

呟けば秀介は笑う。あたしも笑ったけど、力ない。それに気付いて秀介が笑顔を無くす。

「…椿ちゃん？」

眉間にシワを寄せてあたしを凝視した。

「付き合わないよ、他の子にしなさい。それがミサさんとより戻したら？」

「ミサはもういいよ！」

「早いね、昨日泣き付いたくせに」

「俺、椿がいい」

刑事さんが入ってきてパイプに座ったが気に留めず話す。キツパリ言うもんだからあたしは上手く笑ってみせた。

「ぶあーか！あたしは相応しくないよ。他の子にしなさい」

「俺じゃあ不満！？椿に釣り合わない!？」

「あたしが釣り合わない。君は顔が良すぎる。浮気する男は嫌いです」

「しないです。一筋だし！」

「軽いくせに。惚れっばいし」

「絶対に椿だけを愛します。永遠に、君だけを見るよ」

あたしの手を両手で握り締めて目を見て言ってくる秀介。一途なのはわかる。真っ直ぐ見つめる黒い瞳は余所見なんてしないだろう。

最後に、あたしは彼を見つめた。眉の太さに睫毛の長さ、鼻の高さに唇の形、指で撫でたくなるような輪郭。

薄い笑みで見つめるあたしを不思議に思った秀介は怪訝に眉を伏せる。

「バーカ、大袈裟に言わないでよね。あたしそうゆうのにも弱いんだから。ぶっ飛ばすよ？」

あたしは笑って秀介の額を押し退けた。

「惚れちゃってよ！」

「馬鹿シユウ」

笑ってあたしは相手をするのをやめる。笑顔の仮面を外さない。最後ぐらい完璧に笑おう。

「……つーちゃん、何か隠してない？」

あたしの立てた膝の上に顔を乗せて見上げながら秀介に訊かれたから、目を丸めてしまう。

「なにを？」と問うと彼は何も言わなかった。ただ答えるまで待つかのように、伺うように、見ている。

あたしは溜め息をついてから笑って秀介の頭を撫でた。

「今日はもう寝たいから、帰ってきてくれる？」

「……でも」

「ほら、シユウシユウ。じゃあね」

「っ……」

無理矢理ベッドから押し退けた。刑事さんにも背中を押され秀介は部屋を追い出された。

最後の心配そうな顔は、忘れよう。

忘れよう。さよなら、秀介。

君とは、恋愛したかった。病室じゃないところでお喋りしたかった。もっと君を知りたかった。笑いあいたかった。でもあたしに恋愛する資格はない。

さよなら、シユウシユウ。

あたしは寝たフリをした。だけど、彼は来なかった。

夜にくるのだろうか。

夜になるまで色んな事を考えた。これは実は警察の罠。本当はあたしを容疑者として見張っていたとか。なら刑事を殺そう。なんて戯言だ。

夕飯を飲み込んで、じつと扉を見つめた。最悪なことに最後の夜に警護するのは佐藤刑事。篠塚刑事だけじゃないだけましか。あたしと死ぬなんて哀れだ。

その異常者が、あたしに笑いかけた。

「んひゃひゃ、迎えに来たよ」

あの声。

間違いなく彼だ。

電流が走ったかのように震え上がった身体。

恐怖。首が痛む。反撃も考えたが、やはり彼には敵わなそうだ。殺される。

「なんだ！君は！」

だめ、それを言いかけたが届かなかった。立ち上がった佐藤刑事の首を掴み、壁に叩き付けた。あんな細い身体にどうしてそんな力があるんだ。

「んひゃあ？君は…ふうんふんつ。佐藤刑事君ねえ？君一人彼女の護衛？ははんつ」

ニヤニヤ笑いながら彼は刑事のバッチを取った。

「お前が…！頭蓋破壊屋！？」

「んひゃっスカルクラッチャーって呼んでよ。そっちの方が気に入ってるんだあ」

顔色を変えた佐藤刑事に笑いかける。異常者だ。刑事まで殺す気が顔を見られたなら殺すか。

佐藤刑事が懐に手をいれた瞬間、彼は頭突きした。額と壁に後頭部を叩き付けられた佐藤刑事は小さく呻いたがなんとか踏みとどまる。

今しかない。

あたしは真つ直ぐに扉に走っていった。「あ」と彼が声を洩らしたが佐藤刑事が飛び掛かったのか凄いい音が聞こえた。

あたしは振り返らず走った。

暗い廊下を裸足で走る。

ペタペタと走ってしまつては相手に丸わかりかもしれないが逃げる
ことしか出来ない。

遠くで大きな音が聴こえて思わず振り返つたと同時に前に人の気配があると気付いた。

その人に捕まつた。

「っ!!！」

「椿！俺だよ」

震え上がったが、秀介だった。あたしを捕まえているのが秀介だったと知つて混乱する。

「な、なんでっ!?!？」

「なんでって…俺の部屋の前だぜ？」

「なんで出てるの!?!？」

「物音がしたから…何かあつたのか？」

コツン、と足音が耳に届いてあたしは凍り付く。秀介を隠さなきゃ。
頭の中で叫び声が出た。

あたしは部屋に秀介を押し込んだ。

「椿!?!？」

「絶対に出ちゃだめ！お願いだから!！」

あたしはピシヤリと扉を閉める。お願いだから出ないで。強く念じ

てから走り出す。

そうしたら何か光るものが見えた。それが足元に突き刺さり、驚いて倒れる。床にはメスが食い込んでいた。飛んできた先に目を向ける。

「だめですよ……？廊下を走っては」

ガラス張りの窓の月の光の下に現れたのは、白衣の笹野先生だった。その手にはメス。

「逃げる必要はないでしょう？」

「な……んで……貴方が……？」

「スカルクラッチャー頭蓋破壊屋に頼まれてたんです、君が生きているかどうかを確認に」

ニコツと笑って言った。知り合いと言うわけか。

まさか頭蓋破壊屋に仲間がいたなんて思ってもみなかった。

「君の作品は上出来でした。初めてにしては躊躇なく切り裂いていましたね、椿さん」

作品？死体のことだろうか。ああもう、あたしは殺人鬼に縁があるのか。

「免許偽造でしょ、先生」

「本物ですよ」

医師免許は剥奪されるべきだ。メスを投げ付ける医者は全て。死体を作品と呼ぶ殺人鬼には不要だろう。否、持たせてはならない。

「安心してください、警察は誰一人貴女の事を疑っていません。被害者全員の返り血を浴びただなんて知らないようですから」

「……………」
「ああ、君が犯行に使ったカッターなら私が持つてますよ。お返ししましょうか？なんなら……これで警察の方を殺したらどうでしょう？実際に君が返り血を浴びる姿が見てみたい」

こいつも異常者だ。相当狂っている。

しかも医者の方で殺人鬼。

どうする？お望み通り殺人ドクターの返り血を浴びようかと考えたが、医者相手にメスで対抗はフリだ。

あちらはプロであたしは素人。

睨み付けていれば、秀介の病室の扉が開かれた。

まずい。と絶望感が広がる。

秀介に、聞かれた。

あたしが殺人犯だと知られた。

表情のわからない顔で秀介はあたしに歩み寄る。

秀介を、殺さなきゃいけない？

それは嫌だ。でも殺したい。ドクドクと心臓が暴れる。

やめて。

混乱させないで。秀介も、何も言わないで。秀介がしゃがんだ瞬間、身構えた。

「なあーんだ、つばきゃんがアレ殺ったんだ」

上から振ってきたのは怯えた声でもなく批判する声でもない、秀介の明るい声だった。顔を上げれば、いつもの笑みであたしを見ていた。

「首をスパツと？俺も死体を覗いたけどかなりの返り血を浴びただ

る。すげっ」

「……」

「しかもカッターだけ。60人を電車の中とはいえ一人で殺ったなんてすげえな！」

「56人ですよ」

言葉が出なかった。秀介までもが何故かあたしの殺戮を褒めている。立ち上がって笑って言った60人にちよつと傷ついた。20人だと思いたかったのに56人殺したようだ。そんなにいた覚えがない。

「君が彼女にちよつかい出していると聞いていましたが……何の用ですか？秀介君」

「るせーよ、ドクター。お前こそ椿に何の用なんだ、あ？」

あたしの前に立って秀介は笹野と向き合った。知り合いのようだ。まさかと頭が一つの推測を出す。

秀介も、異常者。

殺しを褒めた時点で異常者確定だ。咎めせず笑って、何故笹野と向き合う？

「スカルクラッチャー頭蓋破壊屋が狙ってるようだが……何でだよ？スカルクラッチャー頭蓋破壊屋は何処だ！？」

あたしをチラリと見た秀介の顔に、闘争心が見えた気がする。口元をつり上げてるがなんだか興奮を抑えてるようにも見えた。

「直接彼に訊いたらどうですか？どちらにせよ、そこを退いてください」

「嫌あーだね。俺、椿を守るから」

前にも言われた言葉を耳にして思い出す。

真剣な目で、あたしを殺しに来る者から守ると言ってくれたあの時。振り返って、もう一度秀介はあたしに「守る」と言った。

「ふふ…守る？なら私と向き合わず手を引いて逃げたらどうですか。貴方の敵は、私ではない」

「は？椿狙ってんなら俺の敵だし。てめえ潰して、クラッチャーも…潰してやらあ！」

秀介は何処から出したのか、手に槍のトライデントを握って笹野に飛び掛かった。

笹野が投げるメスを弾き、トライデントを振り下ろす。

異常者がこの病院に三人。自分を入れて四人か。

早く出ないと入院患者が被害にあう。異常者に構ってられない。

あたしは立ち上がり、彼らに背を向けて走り出した。

「待ちなさい！危険です！」

笹野のそんな声が聴こえた気がしたが、秀介の攻撃で掻き消された。階段を駆け降りて気付く。出口には刑事が待機している。もしも篠塚刑事と会ったら彼まで殺されてしまう。

どうしようと答えが出ず立ち尽くす。屋上に逃げ込んでやはり殺してもらおう。そう思い、階段を登ろうとしたが足音が聴こえて咄嗟に逃げ出した。

何処かの部屋に飛び込み、息を潜める。この気配は、スカルクラッチャー頭蓋破壊屋

ではなさそうだ。笹野？秀介を殺したのか？必死に叫び声を押し殺す。もしかしたら看護婦かもしれない。だっているはずなのだから。

確認しようと床に手をつけて移動しようとした時だった。手に人の肌が触れて震え上がった。目を凝らすと、看護婦が倒れていた。

この部屋はナーステーションだ。まさか奴らは看護婦も医者も殺

したのか？そう思ったが手首に指を当てれば脈を打っていた。外傷もなさそう。ただ眠らされただけのようだ。

三階がこうならば他の階も同じだろう。起きている者は眠らされている。刑事と異常者以外。いや待て。こうなると表にいる刑事もやられているかもしれない。篠塚刑事が…。

確認しよう。窓から玄関が見れるはず。

あたしは気配を確認してからナースステーションを出た。気配は消えた。誰もいないようだ。

夜の病院は一時の静寂を取り戻していた。そつとガラスを覗き込む下にはパトカー。報道陣が数人。騒いでない様子からして刑事は生きていようだ。篠塚刑事が生きてる可能性は高い。ほつと息を吐いて、屋上に行く決意して動き出した。

プスツ。その時聴こえてきた音と同時に左腕にピリツと痛みが走った。抑えればぬるつとしたものに触れる。あたしの、血だ。

「……………佐藤刑事…？」

何が飛んできて何があたしの腕をかすったかはすぐにわかった。

佐藤刑事がこちらに向ける銃。

それには銃声を消すサイレンサーがつけられて、そして銃口はあたしに向けられていた。

「動くな」

佐藤刑事はそれだけ言う。

額には頭突きされた痕が残っていたが、死体ではないらしい。頭蓋破壊屋を銃で撃ち殺したのか。

彼は撃たれても死ななそうだが、いないならそう考えるのが妥当だ。

どうやら異常者は五人らしい。サイレンサーをつけてるなんて暗殺者がすることだ。もう諦めて問いただそう。

「何の真似ですか」

「君は餌だ。スカルクラッチャー 頭蓋破壊屋を誘き出すための、な。逃げられては困る」

誘き出す？彼はまだ生きているらしい。何処にいったんだ？

「随分、熱心な刑事さんですね。餌を使うなんて」

頼むからこれ以上警察嫌いにさせないでくれと溜め息をつく。あたしは餌。頭蓋破壊屋を誘き出すために彼はあたしについていただけだ。あくまで彼の単独だと言ってほしい。

なんて災難。頭蓋破壊屋絡みではないか、全部。笹野も秀介もこの暗殺刑事も。苛々してきた。

「スカルクラッチャー 頭蓋破壊屋を殺したいんですか？」

「まーな」

「よければ理由を教えてください。餌にされる意味がわかりません」
「理由は簡単だ」

然り気無くポケットに手をいれて問う。ニヤリと悪党のような下品な笑いを浮かべる佐藤刑事は答えた。

「君が生きているからだ。奴は獲物は殺す、完璧主義者なんだ。必ず君の元に現れると安易に予測できた。おかげでやっと彼に会えたよ、ありがとう。彼に会えるなんて光栄だよ！」

完璧殺人者の間違いだろう。

そしてお前は完璧異常者だ。

どうやらスカルクラッチャー 頭蓋破壊屋に憧れを抱いているようだ。

気持ち悪い。こんな奴に利用されるなんて吐き気がする。完璧に狂

ったイカれ野郎。

「今回の殺しはいつもと違っていたのが驚きだったが、君が生存していたことに感謝する」

「……………あたしが生存してたのは、あたしが」

どうやらあたしが殺ったとは知らないらしい。そんなに好きなら初めの殺しと“奴”の殺しの区別くらいしろ。そう文句を言うついでにあたしは、自白した。

「あたしが56人の首を裂いた犯人だからだ。ど阿呆。警察の目は節穴か？ああん？」

苛々が募って口調を尖らせる。目を丸めた彼は傑作だった。ざまあみる。

「スカルクラッチャー頭蓋破壊屋の殺しと間違えるなんて…ばっかじゃない？」

思いつきり嘲笑ってやったら銃弾が飛んできた。

頬に痛みを感じてまた苛々が募る。

嗚呼殺したい。メスをギョツと握り締める。

「通りで。彼の殺人現場にはいつも脳みそが散らばっていたのに、今回あそこは綺麗な血だけで染められていた訳だ。なのに凶器は見つからなかったのは、何故だ？」

「アンタの彼があたしから奪って切りつけたんだよ」

殺したい。その口、黙らせてやりたい。

「そんな君を殺し損ねたのは、驚きだな。君を追って何処かに行っ

てしまったよ」

「へえ、フラれたんだ。よかったね」

「自首したと言うことは、私を殺す気なのだろう？」

「はあ？。あ、彼だ」

自首した相手を殺すのはお互い様だ。

あたしは佐藤の後ろに目を向けた。「何！？」と安易に信じた彼が振り返り銃口を向ける。

あたしは踏み込んで佐藤と距離を詰めた。

「殺すに決まってるんだろ！」

にんまりと口元をつり上げてメスを振り上げる。空振り。

身を引いて避けられてしまった。あたしは動じず直ぐに次の手を考える。

指でメスを持ち変えて振り降ろした。

しかし腕を掴まれ止められる。額に銃口が突き付けられた。引き金を引く指が見えた。咄嗟にもう片方の手で銃口を退ける。それから足を顔面目掛けて振り上げた。

佐藤はあたしの手を放し身を引いて避ける。

「ハッ。騙されたな。あの人数を密室の中、殺すことが貴様にできるとは思いもしなかった」

現に出来てしまいました。正直自分でも驚きだ。

火事場のばか力というやつか。今のも自分がこんなに動けるなんてびっくりだ。

「さっき逃げ出したのは何の為だ？」

「決まってるじゃん、クラッチャーから逃げるためだよ。アイツに

は勝てないだろうからねっ!!」

メスを投げ付けてあたしは走り出した。

「私にも勝てないと思っっているのか!」

銃弾が飛んでくる気配を感じる。が無視して振り返り二発目のメスを投げ付けた。

「うぐ!」と聞こえた悲鳴に笑みを洩らす。当たったようだ。

「アンタには勝てると思ってるよ、銃がなければね」

銃は厄介だ。あたしは階段を駆け上がった。勝てないと思ってたら飛びかかったりしない。

四階、五階と登る。

この病院は広い。駆け回れば撒ける。鬼ごっこなんて嫌だが、銃をまさる武器を見付けてボコボコにしてやろう。

病院にある凶器。手術室になら楽しそうな物がありそうだ。

五階について、反対側の階段へと向かった。銃を奪って撃ち殺すのも悪くない。隠れて不意打ちを喰らわそうか。もう殺したい衝動の制御はしない。

「み」

背後に気配を感じた。

振り返るより早く引っ張られ、口を押さえられる。

「ふぐ!?!」

「つけたあーっばきちちゃん」

スカルクラッチャー
頭蓋破壊屋の声。

のろまな陽気な声であたしを抱き締めるような形で影の中に座った。ゾツとしたが今のところ何かしてくる様子はない。

直ぐに口から手を放してくれたが、あたしの身体に腕を回したままだ。

「…モテるみたいですね」

「んー？ああ、ミラー君のこと？」

殺さないんですか、の質問は後回しにしてあたしは刑事のことを訊いたのだが、なんだかわからない単語を出した。暗くてよく見えな
いが彼を振り返る。

「佐藤刑事だよ。俺を真似て殺してんだー多分10人殺したかな、
一年前から」

「よっぼど病んでるデカですね」

あいつ今殺すべきだ。

犯人に憧れて殺しをやるなんて。人間とはなんとも馬鹿げた生き物だ。なんて思うあたしが言えることではない。

「それで……貴方のこれからの予定は？」

ポケットの最後のメスを握りながら訊いた。

「俺の予定は君を連れ出すことだよ」

んひゃひゃと笑いながらそう答える。思わず声をあげた。

「あたしを殺すんじゃないんですか!？」

「えー？迎えに来るって言ったじゃん。生き方教えてあげるってあたしの耳にそう息を吹き掛けるように言った。確か言っていたな。まさかそれが本当だったなんて。戯言じゃなかったなんて。本当に生かしてくれるのか、彼は？」

「俺が殺すと思ったの？それとも殺されたいの？」
腹に腕がキュツと巻き付けられる。不敵に耳元で笑い彼は顔をすりよせてきた。更なる密着に息を止める。

「ふふふ…もったいなあいからついてきなよ」
よくわからないが、ここは一応頷こう。それから一つ頼みを訊いてもらう。

「なら被害者を出さずに連れ出してください、お願いします」
「うん、殺しに来たわけじゃないからね」

簡単に彼は了承して頷いてくれた。なんだ、頼めば聞いてくれるではないか。

呆気に取られたがすぐに立たされた。

「さて、何処から出ようか」
「裏口も表も刑事がいますよ」
「なあんだ、じゃあ横の窓から出ようか」
「……………は？」

そんな単純なのか。手を引かれながら瞬きをした。迷いなく頭蓋破スカルクラ壊屋は裏でも表でもない横の窓に向かう。まさか飛び降りるつもりだけはないだろうな、五階だぞ。

その時。

繫いだ手に痛みが走って思わず彼の手を振り払った。

彼は「あっ」と間抜けな声を出してある方を見た。手には血が溢れる。

あたしもそつちに目を向ければ、佐藤刑事が見えた。また撃たれた。ムカつく。

「もー、俺、君には用ないよ？」

「私にはありますよ、頭蓋破壊屋スカルクラツチャ」

「なあに？まねっこ刑事さん」

銃口を向けられても笑顔を絶やさず頭蓋破壊屋は佐藤を見た。

「貴方とこうして話せるなんて……」と興奮した顔の佐藤と言ったら、変態の何者でもない。

「一体何を使って、人間の頭を粉碎しているのか知りたい！」

「んー？」

「ハンマーを使っても同じように脳みそが吹き飛ばない。一体どんな武器で！？」

ああ気色悪い奴。こんな奴に怪我負わされたと思うと、腹が立ってしかたない。

殺しちゃおう。排除しちゃおう。殺っちゃえ。

まるでもう一人の自分と入れ替わったように、身体は何も考えずに動いた。

「！君に用はっ…！？」

向かえば佐藤に銃を向けられたが、銃口が向いてなければ怖くない。押し払い、メスを振り上げた。

佐藤は左手を犠牲にしてあたしを蹴り飛ばす。

「っ……!!」

「ヒュー、やるねえ。てかよく大人しく入院出来たね。殺したくて殺したくてウズウズしてなかったあ？」

腹を蹴られたが紅い血を見て直ぐに痛みは忘れた。紅だ。頭蓋破壊屋スカルクラッチが茶化ヤすように言った。なんでわかったんだ。

「まだ持っていたか！」

佐藤はまた銃口を向けて発砲。あたしは転がって銃口から避ける。

「つーばちゃん」

頭蓋破壊屋スカルクラッチの音が銃弾の雨を止ませた。

「……なんです？」

「被害者は出すなって言ってたけど、コレは被害者には入らないでしょー？」

あたしの前に立ち、にんまりと言った。つまり、自らコレ、彼を殺すようだ。ちよつと自分で殺りたかったが深呼吸して抑え込み、頷く。「うん。待ってて」と頭蓋破壊屋は佐藤と向き合った。

頭蓋破壊屋の背中を見る限り、頭を粉碎するような武器は見られない。あの日同様に丸腰の彼だが、味方だと思つと心強いと感じる。本当にこいつ何者だろうか。

「んにゃー俺の殺し方を知りたいのかぁい？じゃあその身体に教えてあげる」

「私を見くびらないでもらいたい」

どうして佐藤が殺されない自信があるのか、理解できなかった。

「ふうん？」

彼が軽い足取りで踏み出したかと思えば、側転して佐藤と距離を詰めて裏拳を振り上げた。

あまりの早さに驚いたが佐藤は身を引いて避ける。「んひゃ」と笑った頭蓋破壊屋は外したことをさも気にしてないように回し蹴りをした。

顔に向かってきたそれを佐藤は膝をついて避ける。空回りした足を先程まで置いていた場所に戻す頭蓋破壊屋は、遊んでいるように見えた。

銃口を向けて佐藤が反撃に出る。が、容易く彼が長い足で蹴り飛ばした。

それがあたしの元に転がる。

「俺がねえ、殺しをやる時はねえ」

銃を取りに行こうとする佐藤の行く手を塞いで立つスカルクラッチャー頭蓋破壊屋が口を開く。

直ぐに拳を振った。首を曲げて避けた佐藤だが、今度は足を突き上げられ腹に入った。

「ぐっ！」

「色んな武器使うよー？」

佐藤の反撃を避けながら頭蓋破壊屋は笑う。確実に遊んでいる。弄んでいる。佐藤刑事の構えを見る限り何かを心得てるようにも見えるが、頭蓋破壊屋は物ともせず、軽く身体を捻っただけで避けていった。佐藤が拳を振っても、頭蓋破壊屋には掠りもしない。たまに彼の攻撃が決まるが、大ダメージではない。手を抜いている。どうして遊ぶんだ。さっさと殺すなら殺せ。

「打撃系の武器だったり剣だったり銃だったり」

「……銃ではあんな風にはならない」

「まーね」

パリーン。

プスプスと軽い音がしたあと、穴が空けられたガラスは弾き割れた。「あ」と頭蓋破壊屋が見るのはあたし。袖の上から銃を持つあたし。待たせるな、あたしはムツとした顔を向けた。

「んひゃあひゃひゃっ。もう飽きちゃったの？短気ちゃんだなあ」

笑い声をあげる頭蓋破壊屋は動じてない。ガラスを割ったことで恐らく下にいる刑事が気付くだろう。

あたしは無言のまま指紋をつけていない銃を思いつきり割れた窓に投げ付けた。これなら確実に異変に気付くはずだ。

「しよーがないなあーひゃひゃひゃっ！」

そう言った彼の動きが変わった。

ブウンと重い風を切る音がした後に、ドスツと佐藤の脇腹に蹴りが入れられた。

「じほつ！！」

今度は休む暇を与えず、佐藤の肩に踵が落とされる。肩を強打、そして冷たい廊下に叩き付けられた。

「んひゃあつ」

足元に倒れた佐藤を見下しケラケラと笑う頭蓋破壊屋。

彼に“玩具”と認識されたら終りだ。弄ばれ、殺される。圧倒的な力を見せ付けられるなら潔く命を差し出した方がましだ。

あの電車の中で攻撃しなくてよかった。心底安堵する。やっぱり彼には敵わない。

「くっ！！」

「よいしょつと」

頭蓋破壊屋は佐藤の髪を掴んで立たせた。

望み通り、頭を粉碎させる気なのだろうか。

一体どうやって？

まさか素手で？

凝視していたら彼が佐藤の背をガラスの方に向けた。

あたしは二人の間が見える位置に膝をついている。あたしがよく見えるようにその位置に立ったのか、真意はわからないがこれなら何をやるかわかる。

「剣では喉を切ったり手足を切り落としたり、打撃武器で腕と手を潰したりするけど、トドメはねえ」

んひゃあひゃひゃつと笑って頭蓋破壊屋は言った。

「素手」だ」

よ、と口から発せられた瞬間。

頭蓋破壊屋のもう片方の手が佐藤の額に打ち込まれた。

ただ打ち込まれたように見えた。

あたしにはそう視えたのに、佐藤の頭は吹き飛んだ。

粉碎されたように吹き飛んだ。普通の腕力ならばそんなこと有り得ない。“普通ならば”頭蓋骨ごと粉々に何てならない。“普通の腕力ならば”有り得ない。

況してや見た目はただの青年に、“普通以上の腕力”があるとも思えない腕が、人間の頭蓋骨を粉々にして眼球さえも跡形もなく脳みそと共に吹き飛ばすなんて、人間業ではない。

頭を無くした佐藤の身体は崩れるように、無惨な頭を追うかのように、五階の窓から落ちていった。

その殺し方で付けられた頭蓋破壊屋と言う名を持つ彼は、ただ平然に、いつもの笑いのまま、首を無くした身体を冷酷な目で見送る。

白いシャツはおろか、掌さえ、指先さえも汚れてはいなかった。

粉碎させた手に返り血も浴びず、殺した。この男は一体何なんだ。飛んだ脳みそを見て、気持ち悪くなったが巨大な疑問が忘れさせてくれた。

「さあ、行こうか」

何事もなかったかのようにあたしの元に歩み寄った彼が触れてきて驚く。

ビクツとしたが気に留めない彼はあたしを抱き上げた。体重は言えないがどうして軽く持ち上げられるんだ。あたしはお姫様抱っこを気にするより、恐る恐ると彼の二の腕に触ってみた。

「ひゃあーかゆいよーっーばちゃん」

「ど、どうやったんですか？今の」
「えー？見せた通りだよ」

にぱつと笑って見せる彼。

視ていた。視ていたが信じられない。一体何の種があるんだ。腕の肉はそれ相応に引き締まっているようだがそれでは納得できない。あたしの肩を握る手に衝撃波を出す何かがついているかと思ったが何もない。

ふと気付く。真つ直ぐ彼は窓に向かってる。

「えっ？えっ？えっ？ちょ、待って！あの、あの人仲間なんでしょ？笹野先生」

「幸樹くん？幸樹は車で来てるしい一緒に出ない方がいいっしょ、この病院の人間だからねえ」

「あの人！秀介君と戦ってて…！」

「しゅーちゃんまで来てるのぉ？神出鬼没だねえひゃひゃっ」

「お願い！彼を殺さないで！」

「んーん？…心配しなくても幸樹は秀介君を殺さないよーん」

秀介は殺されない。それを聞いて安心する。どうやら笹野先生が彼を中にへと手引きしたらしい。安堵している内に窓の前に来た。

「さてさて、行くよお？」

「行ってくつて地上の下の地獄にですか？」

「んもー心配性だねえ椿ちゃんは」

真剣に言ったのに笑い退けられた。本当に五階から飛び降りるつもりだ、この異常者。

「椿…！」

階段の向こうから篠塚さんが呼ぶ声が聴こえた気がする。

頭蓋破壊屋は窓を飛び越えた。味わったことのない最大級の浮遊感に襲われる。

ゾワゾワと血の気が引く中、落下。

悲鳴さえ出ないくらいのスリル。

ジェットコースターが好きなたたしでもこれは二度と味わいたくないと思った。

真下へと一瞬という速さで落ちたにも関わらず、着地は大した衝撃はなかった。

まるで猫の着地のようにタンツと頭蓋破壊屋は着地したのだ。そして平然と歩き出した。

「頭蓋破壊屋さん、頭蓋破壊屋さん。血液を上に入れてきたみたいですよ」

「ひゃっひゃっひゃっ！椿ちゃん面白いねえ！」

地上は騒がしい音を立て、異常者の笑い声を響かせる。

一面の夜空は静寂を守っていた。これからの始まりを見守るかのように。

頭蓋破壊屋は笑う。笑う。

生き方を教えると。笑う。

笑う。笑う。笑う。

裏社会否裏現実

「……………」

あたしは笑いを堪えていた。

笑ってはいけなさと理性が言うから堪えていた。

そう、ニュースを放送している人達は真面目なのだから笑っては悪い。

例え自分が真っ赤に染め上げた電車殺戮事件が「地獄行きレッドトレイン」と呼ばれてもだ。

なんだソレ。C級映画のタイトルにありそうだ。誰だそんなタイトルつけた馬鹿者は。これ見て笑わないのだろうか、視聴者は。

あたしは初めて自分のニュースを見て必死に笑いを堪えていた。上空から映し出される電車の窓は赤黒い。大真面目に無惨な現場を説明するキャスターがいるがその画面の下には赤い字で「地獄行きレッドトレイン」と表示されている。ふざけている、絶対。

次に最新の情報が放送された。昨夜の出来事。

「唯一の生存者である“山本椿”さん18歳が、〇〇病院に入院していました。昨夜、犯人と思われる何者かによって連れ去られました。“山本”さんの護衛をした刑事が一人死亡しました」

自分の名前が出てピタリととまる。大々的に名前を発表された。誘拐されたと思った今、隠す必要がなくなったから警察が明かしたのだろう。

わー有名人だ。なんて心の中で呟いたが苛々してきて顔の筋肉をひきつらせる。目立つのは嫌いだ。名前を出すなと殴り込みしにいこうか。これは半分冗談にしておく。

チャンネルを回しても「レッドトレイン」のニュースしかやってない。

好きなタレントが「酷すぎますよね…早く見つけ出して無事に保護してほしいです」と言った。

あたしは無事です。そして殺してすみません。

好きなタレントに酷いと言われたがやはり56人を殺したことに罪悪感はわかかった。

本当に何でだろう。昔はニュースで殺人がある度、哀れんだ。そして殺人犯を貶した。その殺人犯になった今、変わってしまったのようだ。殺人犯だって、殺したことを後悔する。だけどあたしは後悔しない殺人犯のようだ。

ソファの上で足を抱え、またチャンネルを変えていれば後頭部に笑い声が落ちてきた。

「あ…おはようございます…」

「んにゃあ、おはよう、椿ちゃん」

振り返れば頭蓋破壊屋がいた。乱れたままの髪を見て、笑顔を見る。倒れるように彼はソファを乗り越えて座った。

座ると言っても背もたれに足を置いて逆さまの状態。

この家はどうかやら頭蓋破壊屋の家らしい。一睡したが落ち着けなくテレビを勝手に見させてもらった、と説明して謝った。そんなこと謝る必要ないと笑って頭蓋破壊屋は逆さまのままテレビを見た。

「ゆーめーになったねえ？椿ちゃん」

「お陰様で。あの、名前訊いてもいいですか？まさか頭蓋破壊屋って名前じゃないでしょう？あたしは椿です」

「んっ！名乗ってなかったね！俺はあんーとねえ…白瑠だよあん」

「はくる…さん？」

んっ！と首を縦にブンツと振って頷く白瑠さん。喋り方からして可愛い。なんだか人懐こい感じにキュンとしたが彼が人間の頭蓋骨を粉碎する異常者だと言うことが頭から離れてないからなかったことにする。

「日本人ですか…？てつきり外国から来たから違うかと」

肌が白いし、顔立ちもちよっと日本人に見えないからそう思った。でも日本人のようだ。

「日本人だよお、日本育ちだったけど日本の社会が合わないと思っ
てえアメリカ行っただけだよ、やっぱり合わなくてそこで殺戮や
つてえ殺つて殺つて殺つて殺つて、それから日本に戻ってきたんだ
あ」

足をブラブラと振りながら無邪気な笑顔で白瑠さんは言った。笑顔
なのに何故こんなにもブラックな発言をするのだろうか。きつとシ
リアスな内容なのだろうが省いて明るく言い退け笑う。うんそうか
と流すように頷く。

「俺が外国から来たこと、訊いたの？あのお……？ええつと……？あ
の刑事…んつと……まねっこ…」

起き上がって唇を人差し指でつつきながら白瑠さんは何かを思い出
そうとした。

刑事とまねっこで充分だが、昨日の今日であれだけ弄んでいた佐藤
をもう忘れたのか。あたしが教えると「あーそれぞれ」と笑った。

「殺した奴は直ぐ忘れちゃうんだよねえーひゃひゃ。幸樹ちゃんに
度々注意されちゃうんだあ」

「そうですね…。あたしは…とある刑事さんが、海外から追ってきたそうですね」

篠塚さんの名前を口にするのはまずいと思ったが、白瑠は知っていた。

「しーのちゃん？あの子熱心でかあわいいよねえうひゃひゃ」

篠塚さんを可愛いと言って笑う。

可愛い？可愛い…？確かに熱心さが純粹で可愛い、のかな。佐藤より可愛いものだ。生きてる人間の名前を覚えられるみたい。

良かったね、篠塚さん。

…良いのかな？

「200人殺したって本当？」

「数えてないからわかんない」

それって多いの？と白瑠は首を傾げた。うん、結論はわからない程殺したようだ。名前も人数も顔すらも忘れるみたい。

「それで…」

と、口ごもる。

「…生き方を教えるってどうゆうこと？」

ここに来た理由。

彼についてきた理由。

生き方を教えると言われたからこそ、ついてきた。最も、連れてこられたの方が正しいのだが。

白瑠はにんまりと口元を両端つり上げて笑った。頬が押し上げられて目が三日月のような形になる。

「君は殺しがやりたいでしょ」

直球に少々身構える。

「もう君は殺しを止められない」

「……止められない？」

「うん。今の社会の仕組みが馬鹿らしいと思ってるだろ？」

「……………」

「世界なんてくだらないと思うだろ？」

「……………」

「なのにその世界に馴染んでる赤の他人がいる。なんかどうでもいけど殺したくなるだろ？」

「……………」

「殺したって、罪悪感はない。快樂だけ感じる。そうだろう？」

「……………」

「ぶつちやけ、ムカつく奴を殺したい。相当思うだろっ？」

「……………」

否定できない言葉の雨に沈黙しか返せなかった。笑うチエシヤ猫は、何もかも解ったような目であたしを見据える。

「一歩境界線を踏み越えた君は、もう二度と境界線の向こう側には引き返せない。境界線は君が電車に乗る前と、電車内で殺戮を始めたあの間だよ。覚えてる？殺戮が始まる前の君は殺しには縁がなかったはずだ。ただただ他人事のように思っていたはず。ニュースにいる殺人犯を貶すこともあっただろう。だけどそれは境界線を踏み込む前の事に過ぎない」

チラリとテレビに向けた白瑠。今流れてるニュースは単なる窃盗事件。プツリとテレビは消された。

「踏み込んだ今は殺人したって、死体を見たって、罪悪感なんてわかない。殺したいだけ殺す。無情に冷酷に残酷に。あっさり死んだ他人はまるで壊れた玩具としか思わなくなるんだ。脆い脆い壊す為の玩具」

身を乗り出して、顔を近付けて、冷たく笑っていつ彼から目を放さなかった。

最後まで、黙って聴いた。

人間は玩具。歪んでいる。

彼も、あたしもだ。

「誰もが境界線に立たされる。誰もが踏みとどまる。だけど大抵の人間はカツとなって包丁で刺したり絞め殺したり！やった後に後悔してパニック！そいつらはただのバアーカ。俺達は違う。解るだろう？」

腹に掌が押し込まれ驚いたがちゃんと聴いているかを確認したただけのようだ。

じつと瞳の奥に問い掛ける白瑠さんは続けた。

「後悔も罪悪感も感じない。これが俺達の“普通”であり“正常”なんだ。ムカつく奴は殺したい。他人だって殺したい。誰でもいいから殺したい。他人に言わせれば“異常者”だとしても俺達はもう、人を殺さずにはいられない。殺さなくちゃ生きていけない。解るだろう？自分が変わったと。解るだろう？もう、“普通の生活”なんて送れない。境界線を踏み出す前の生活をしたらどうなると思う？家族も友達も知人も近所も、殺戮の対象だ。表社会の言う“日常”

とその馬鹿げた仕組みに身体は心は拒絶する。お分かり？俺達は殺人鬼、殺戮衝動はいつだって襲いかかる」

もう、戻れない。

もう、帰れない。

境界線の向こうには、二度と引き返せない。殺人鬼、殺戮者、なのだから。

まだあるのか、また白瑠が口を開いたがあたしの方が早かった。

「解りました」

「……」

「ありがとうございます」

「！」

「解らないことが……わかりました」

悩み事なんて、あたしはあまり相談しない。それが大きいほど自分で抱え込む性格だ。どうして殺戮衝動が起きるのか、なんて訊くつもりはなかった。だってそれは自分の中の問題だから。

他者がどうこうできるわけない。そう思えばもう他言しないのがあつたし。

白瑠さんの言葉で、解つた。元の生活は無理だつてことも改めて解つた。何故罪悪感を抱かないことも解つた。告げられてよく解つた。

わからないことを理解できた。そして、白瑠さんも一緒なんだと解つた。

もう一度、礼を言うと目を丸めた白瑠さんはパチパチと聴こえるくらい瞬きしてから「うん、そっか」と弱々しい声で頷く。

「表社会ってことは……あたしには裏社会を生きる方法を教えてくれるってことですか？」

“裏社会”と口にするだけでも気が重い。あたし裏社会に生きなきゃいけないのか。裏社会と言えばマフィアだとか悪徳政治家とか暗殺者に殺し屋。殺人鬼ならば、生きやすい“社会”だろう。にんまり、白瑠さんは笑顔を取り戻して口元をつり上げた。

「裏社会？フツフツ！そんなものじゃないよっ！裏社会じゃなくて“裏現実”！！」

自信満々に、何か威張ったように言われた言葉は聞いたことのない単語。「うらあ…現実？」と聞き返す。何でもかんでも裏と付けていいのだろうか。

「夢があっても叶わないうざったいめんどくさい社会が“表現実”！我慢せずに殺戮をする俺達の世界が“裏現実”！」

白い歯を剥き出しにして笑う白瑠さんが正直、子供に見えた。白瑠さんワールドかと思っただが、“表現実”に心が過剰反応した。

「夢があるのに叶わない」

一体何人が夢を叶えようと破れたかあたしは知らない。街ですれ違う人々を見て「働いて楽しいのか？」糞れた顔を見て疑問に思う。

別に楽しく働いているわけではないことは知っている。だけど昔夢があつたと言うなら、その夢を諦めて好きでもない仕事をして生きていると言うなら、哀れだ。果たして夢を諦めてまで、好きでもない仕事をして生きる意味があるのか。夢を持たせておいて努力しても叶えさせないこの社会はおかしい。あたしは理解できない。

恥ずかしながらも夢が一つあたしにはあつた。絶対、叶えられるわけでもないのは解ってた。叶えられるのは一握り。一握りに入るわけないと諦める人間になるのが嫌であたしは意地張っていた。だって、カツコ悪い。あっさり諦め、違う仕事で生きる為の金を稼ぐな

んで、惨めで理解しがたい。だから、だから、社会が嫌いでも夢を叶える為に生きようとしていた。もう過去形だ。だってもう叶わない夢だ。サラリーマンやフリーターにならないだけ幸いだと思う。

白瑠さんの笑い声に我に戻された。

「裏社会とどう違うんですか？」

「ひゃひゃっ裏社会とは一味違う！てか裏社会の次のレベルっかな裏レベルってなんだろう。てかあたしは裏社会をスキップして裏現実と言う更に未知でヤバい世界に入らなきゃいけないのか。」

「裏社会は実在するけどもあ…うひゃひゃ、裏社会の人間にも知らない秘密があつてえその秘密を知る者があ裏現実の人間？みたいなあ」

アバウト。なんで曖昧なんだろう。きっとあまり大差がなく区別するものがないのだろう。

「俺達みたいな人間が裏現実者」

にいつと笑う白瑠さん。それなら、なんとかわかる気がする。あたし達みたいな人間が裏現実者。

「ぶつちやけ、最終的には殺し屋？」

「最終的には殺し屋、でえす。だって殺しやんなきゃやってられないっしょ！殺しも出来て金が入る！こんなピツタリな天職他にないでしょ」

うひゃひゃひゃひゃあつと愉快そうに笑う白瑠さん。

全くその通り。訊いたあたしが悪かったです。

「殺し屋ですか…そうですか…意外でも何でもないですが、その辺もプロの貴方が教えてくれるんですね？」

「そーゆーことおー」

「それで、裏現実者の知っている秘密とは？」

笑顔のまま頬をつつく白瑠さんの手を払い、あたしは気になった秘密を訊いた。

首を傾けて白瑠さんはあたしを見上げるようにいわくありげな笑みを向ける。

その瞳が妖しげに光った。

「んひゃあ、ひゃあ…欲張るねえ、椿ちゃん。知りたい？ひひっそれはねえ」

あたしの興味を惹かせもったいぶり、白瑠さんは答えようとしたが遮る音が聞こえてきた。

「あーっ。幸樹おつかえりい」

「ただいま、白瑠」

美味しそうな香りとともに現れた笹野幸樹により、秘密を聞きそびれてしまった。

幸樹は「やっと取り調べから解放されました」と溜め息を洩らし、抱えた袋をソファの後ろにあるテーブルの上に置いた。

「あ、の…お邪魔しています、笹野先生。昨夜はすみませんでした」

「昨夜？ああ、免許捏造の話ですか」

「なになぁに？幸ちゃん免許捏造してたの？」

「冗談やめてください、白瑠」

とりあえず昨日のことを謝罪しようとソファから降りて頭を下げる
と笹野先生は軽く笑った。白瑠さんも会話に加わる。

「それもですが…睨んだと言うか…完全に敵だと思ったので」

「椿ちゃんは殺しに来たって勘違いしてたんだよーん」

「通りで白瑠の手紙を見た時、怯えていたわけだ。別に気にしてま
せんよ」

「よ、良かった……。あの、それで……。しゅ…秀介、くんは…
？」

聞きたくない答えが返ってくると思ってビクビクしながら訊いた。

「彼なら警察が駆け付けたので病室にこもりましたよ？」

「無事ですか!？」

「ええ」

「良かった…！」

「だから言っただじやーん」

無事と聴いて胸を撫で下ろせば、白瑠さんが笑いかけた。確かに昨
日、殺さないとは聞いたが確認しなきゃ何が起こるかわかったもの
ではない。

「秀介君の相手は骨が折れますよ…。首なしの死体が落ちるまで苦
劳しました」

「突っ掛かるねえ? しゅーちゃんは。飽きないのかな」

「今回は椿さんを守ろうとしてみたみたいですよ、私が接触する前から
接触してたようです」

二人で秀介を話題に話していたかと思えば二人してあたしを見た。「なんで？」と白瑠さんが丸めた目で訊いてくる。

「入院仲間と言うことで…仲良くなっただけです。お互い知りませんでした…秀介君もこちらの人間なんですか？」

「ふうん？そつか。しゅーちゃんもこつちの人間だよ！」

そつか、そつか。

白瑠さんに出会ってからあたしは“裏現実”の人間としか知り合えないのか。

別に人の輪を広げたいわけではない。寧ろ知り合うのは苦手だ。

あ、篠塚さんは例外だ。

「フフフ…。秀介君は相当貴女のことと熱くなってましたよ？白瑠が一体椿さんに何の用だつて。椿さんは俺の物だとも言ってました」

口元に手を添え潜めて笑う笹野さんに「なっ」と震えるあたし。秀介め…知らないところで何言っちゃってんだ。

「え？何？しゅーちゃんの所持品なの？つーちゃん」

「あたし物？違います違いますきつと彼の戯言です」

顔の前でブンブンつと左手を振って否定。いくらなんでも所持品はないだろ。

この人実は天然？と白瑠さんを見下ろしていれば、視界にオレンジ色の物体が入った。

あたしが好きなチーズバーガーだ。

「あ、ありがとうございます！」

「好きだと聞いたので買ってきました。お腹空いたでしょう、た

くさん買いましたので食べてください」

笹野さんから差し出されたとわかりチーズバーガーを受け取れば次はポテトやバーガーが幾つか入った袋を渡された。

いつもなら「わーいありがとうございます!」とはしゃぐところだが不可解な言葉が聞こえたから顔をしかめる。

「え? 誰から聞いたんですか?」

「貴女のお母様です」

「…母にいつ会ったんですか?」

「貴女の事を調べに家に伺った時ですよ」

微笑みながら笹野さんはさらりと答えた。その間にもあたしが抱える袋に手をいれてバーガーを取る白瑠さん。

「な、んで…」

「見舞えに来れなかったようなので貴女の容態をお伝えしたついでに調べさせてもらいました」

どっちかと言うと容態を伝えるのがついでではないのか。あたしはバーガーを加えた白瑠さんを見た。

「昨日は焦ったよ、ついちゃん逃げ出しちゃうんだもん」

「そうですね、刑事はサイレンサーで発砲するわ、秀介君が邪魔をするわ、ちよっと手のかかりそうな子ですね」

勝手に話題を変えられた。

ちよっと、なんで調べたのさ? 白瑠さんの指示? じいと思っていたが、空腹感に負けて座ってチーズバーガーにかぶりついた。

数日ぶり。そして美味しい。

「つばちゃんが病室飛び出したあとのお…まねっこ刑事がサインサーで撃ってきたからびっくりした！病室でたら幸樹に会ったから鍵閉めてもらって手分けしてつばちゃんを探したんだあ」

なるほど。物凄い音の正体は佐藤がドアを破る音だったのか。もう白瑠さんは佐藤の名前を忘れたもよう。

「俺、二階一階って降りたんだけど見当たらないから上にいるのかなあーて五階いったら見付けたの」

それで接触。なるほど。なるほど。

うんうん頷きながら食べていたらピクルスまでかじってしまったて「うえっ」となる。歯でピクルスを噛みあとは飲み込んでから「ぺっ」と包み紙にピクルスを飛ばした。

「ピクルス嫌いなのか？」と白瑠さんがそのピクルスをパクリと食べた。一度口に入ったものだが本人は気にしてないようだからつつこまなくてもいいか。

「食べられなくもないですが…チーズバーガーを味わってる時に邪魔するソイツは嫌いです」

あたしはチーズと肉を口の中で堪能している時に邪魔をするピクルスが嫌いだ。

急に味を変えないでほしい。

あたしはチーズと肉を味わいたいものだから。だから、毎回ピクルスは除外させる。

「そう？人間の中に熊がいるようなもんじゃん。楽しくならない？」

殺しがか？

数人の人間の中に熊一匹。

白瑠さんは楽しく殺していそうだが、例えが当てはまっているようには思えないのはあたしだけか。

人間だけではなく一味違うものを殺すのもいい、と言っわけなのだろうか。

そう解釈しよう。

「あたしは…きつとなりません」

一個目を食べ終わり、二個目に手を伸ばそうとした時に気付く。テーブルに置かれた包み紙が3つ。もう白瑠さんはバーガーを3つ食べたらしい。いつの間に。今はポテトを食べている。

「あ、取り調べ…どうでしたか？」

「どうって？」

「疑われたりしませんでしたか？」

笹野さんは先程まで取り調べを受けていたらしい。ちょっと気になったので訊いてみた。

「病院関係者は薬で眠らされていたことになっているので疑われてませんよ。犯人は一人で貴女を連れ去ったと思っ込んでますから」

まだまだあたしは容疑者に浮上してないらしい。そうなると優しい篠塚さんが心配しているだろうか。胸が痛む。

「そんなことより、ミッションやろうよ。新参者のつーちゃんが慣れるように」

ふりふりと手を振って白瑠さんがあたしの注意を引いた。その手であたしのバーガーから出ているピクルスを摘まんで口の中に放る。

「ミッシヨン？」

「うんうん。殺しも2週間やってないっしょ？」

「ミッシヨン＝殺し。と悟る。

殺せと言われて殺せるだろうか心配になるがあたしはそのミッシヨンの内容を訊いた。パクリと完食。満足満足。

「知り合い殺し」

目を見て笑顔でそう言われる。あたしは一時停止。

下手をするとあたしは他人の質問に答え忘れることがある。流石に目の前で目を合わせた白瑠さんの今の言葉をなかつたことにできない。

「知り合い…ですか？」

「うん、家族でも親友でも友人でも知人でも隣人でもクラスメートでも後輩でも先輩でも先生でも一人でも十人でも百人でもムカつく奴でもそっじゃない奴でもいいから、殺せばいいよ」

つまりは、知り合いならば誰であろうと何人であろうといい。ただ単に殺しをやれなら知らない人間でもいいのでは？と思ったがきつと白瑠さんには考えがあるんだとその疑問は奥にしまった。

「知り合いか………んーと……」

と目を逸らして考える。

友人や家族やクラスメイトやムカつく奴を思い浮かべるが、気が進まない。

簡単に切り裂く光景を想像できるが、なんだか気分が悪くなる。

「知人は無理そうです」

「ムカつく奴、いるだろっ？殺したい程うざあい奴！」

「だったらもう殺してると思います」

無理と言っても笑って標的を決めるよう促す白瑠さんにそう返す。殺したい程、と言われても大して出てこないのは興味がないからだと思う。確かにムカつく奴はいる。うざいと思う奴もいるが、わざわざ殺しに行くほどでもない。と言うか面倒くさい。そして殺したあとに知り合いの死体を見たら、今度こそ吐きそう。

「やっぱり無理です」

「ええーっ!!」

子供が駄々こねたような声を上げるからびっくりする。

「知人か他人を殺すの、何が違うんですか」

「殺しを見られた時、殺せるようにならなくてはいけませんからね」

答えてくれたのは笹野さん。なるほど。んー、それじゃああたしにはできっこないようだ。杏ちゃんや南をそのシチュエーションに出してみたが、殺せる気は全くない。

「無理ですね。もう二度と会いたくないし」

「うえー」

さよならの手紙も置いたし、顔見知りなんかともう会いたくはない。

会う必要もないだろう。白瑠さんは納得できないと顔を歪める。拗ねたような感じ。

「仕方ありませんよ、白瑠。彼女はまだ未熟者です。あまり急かすのはよくないですよ、知り合い以外にしてあげなさい」

笹野さんが優しくそう言い、あたしに林檎を差し出した。熟した林檎。

赤だ。

紅。

まるで血で塗れたような紅を親指で拭おうとしたがその紅は林檎の皮。見惚れる程の紅にあたしは両手で持ちまじまじと見つめた。

こんな林檎、初めて見た。綺麗な紅だ。光を放つ紅が好きだ。血の雫とか、口紅だとか、紅い車だとか。

ふと、見いったあたしを、林檎の向こうにいる白瑠さんがいわくありげに笑みを浮かべていたことに気付く。

「ふひゃあひゃあつ、じゃあそおしようかーあ。よしっ着替えて着替えて、武器もあげるからあ」

「私も手伝うべきですか？寝たいのですが」

「幸樹は寝てていいよ、俺がついてるからあ」

ちよつと待て。

何かあるだろう。

ただならぬ嫌な予感は先程の白瑠さんの笑みが頭から離れないからだ。何かを企んでいる白瑠さんと二人きりにしないでほしい。なのに笹野さんは疲れたような欠伸を洩らして寝室に向かう。そして中に入った。ああ、笹野さん！

「ほれっ、これ俺の」

白瑠さんはあたしに服を渡してきた。これに着替えるのか。あたしは肩を落として、自分が寝た寝室に向かった。ベッドと棚しかない素っ気ない部屋。起きてから興味本意で探ったが何もなかった。棚の中もない。どうやらあたしに用意された部屋らしい。そこで着替えた。まずパーカーの中にある物を出す。昨夜つけていたアクセ。パーカーをベッドに脱ぎ捨てる。それからジーンズを脱ぐと、紙切れが落ちた。

「あつ……………」

拾うと、それは篠塚さんの名刺だった。ジーンズを脱ぎかけた状態でベッドに座り込む。篠塚さんの名刺を見つめながらのそのそ脱ぐ。篠塚さん……。

あたしは白瑠さんのズボンをはいてアクセサリーを鷲掴みにした。男物で身長差のせいで足が裾からでないが気にせず歩き、棚の引き出しに名刺とアクセサリーを入れる。ベッドに戻って裾を折ってから、上も着替えた。やはり男物だから大きい。でも嫌いじゃない。アッシュンだから気にしない。アイドンケア。あたしのパーカーより一回りサイズの大きいパーカーを腕に掛けて、戻ると先程と光景が変わっていた。

ソファとテレビの間にあるテーブルには、色んな形のナイフが置いてあったのだ。どうやら満足げに笑う白瑠さんが用意したらしい。「おいでおいで」と手招きした白瑠さんにソファに座らされ、ズボンの裾を綺麗に折られた。なんか恥ずかしい。

「じゃ！好きなもの選んで」

これとか？何を選べと？愚問だ。勿論、殺しに使う凶器だろう。

「椿ちゃんは裂くのが好みだろう？」

「なんでそう思うんですか？今までは手元にあったから……」

「でも銃で殺さなかったじゃん」

「…あれは、白瑠さんの殺しが見たかったからですよ」

「注射器だつてあつただろ？メス持ってた」

「……」

むう、と黙り込む。だつてナイフ系が妥当ではないか。そうゆう考えが、だからこそ裂くのが好みになるのだろうか。だからここは引き下がる。あたしだつて頭に銃を突き付けたい。楽だろうに。

「色んな形がありますね……」

「好みでもしつくりくるのもいいから、一つ選びなよ」

そう言つて白瑠さんはナイフを一つ手にしてあたしがテーブルに置いた林檎に突き刺した。それをあたしに差し出す。あたしは受け取り、ナイフをとつてそれを眺めながら林檎にかじりついた。

鋭利な刃は光を放っている。カッターよりは殺しやすそうだ。でも銃の方が……。

もう一口林檎をかじる。甘い。

鋭利な刃は15センチの長さのがあれば5センチの短いナイフもあつた。時折、白瑠さんがその名前を覚えてくれる。プッシュダガーとかファイルナイフにサバイバルナイフにランボータイプ。刃の形の名前だとかなんとか。プッシュダガーは刃と柄の間が細く指に挟んで突き刺すのにいい感じだ。振るのも、まあいい感じ。だがどうせなら刃が長い方がいいとあたしはテーブルに戻す。

「いいんだよ、てきとーで。どれも殺しに使えるから」

飽きたのかそう急かす白瑠さん。なら白瑠さんが選んでくれればいいのに。彼はベルトらしきものを弄っていた。まさかあたしに付けるとか言わないよな…そのベルト。

疑問に思ったがあたしは武器選びをした。刃の長さ、形、デザインで好みなのを選ぶ。

「これにします」

「ふうん？カルドか、いい趣味だねえ」

嫌味のようにも聞こえた気がするがどうなのかは白瑠さんの様子じやあわからない。白瑠さんはあたしが持ったナイフ（カルドと言うらしい）を無視してテーブルにあるナイフを幾つか取った。それをベルトについたホルダーに入れていく。

「はい、立って」

「え？…え？」

背中を押されて仕方なく立つと、案の定ベルトを巻かれた。ベルトを巻かなくちゃ正直ズボンが落ちそうなのだが、何も白瑠さんがつけないまでもいいだろう。恥ずかしい。

あたしを子供扱いしてます？

黙ったまま頂垂れてみる。ベルトをきつく締められたあと、背中を向くように体を捻られ、お尻の方で何かをしている。

恐らくホルダーの位置を整えているのだろう。じゃなかったら蹴りをお見舞いしている。

「よし。あとはカルド」

そう言えばカルドを握ったままだった。後ろから伸びた白瑠さんの手に渡せば、くいくいっと多分ホルダーが何かに入られた。

「はい、自分で抜いてみて、カルドとプッシュダガーを」
「こうですか？」

見えない背中にも手を伸ばしてカルドの柄を探して掴む。それを抜いてから、もう片方の手でホルダーにあるプッシュダガーを抜いた。

「違和感はある？」
「ないです」

「じゃあ戻して」と言われたので元の位置に戻す。おお便利なベルトだ。次に座つてと言われたので腰を下ろす。ちよつと気になったが、ホルダーはそれほど邪魔ではなかった。

「まさかこれで行くんですか？」いかにもこれから殺しにいきます的な格好に苦い顔をする。

「パーカー着ればバレないよ」と白瑠さんは笑った。あ、なるほど。だからパーカーも渡したのか。あたしの身長ならば白瑠さんのパーカー1つでスッポリとホルダーは隠れるだろう。

「はい、カツラはないからこれで。じゃあ行こうか」

最後に白瑠さんに帽子を渡された。カツラよりはましだ。あたしは髪をまとめあげて帽子を深く被った。

「女の子って髪を隠すだけで別人に見えるねえ」

白瑠さんはあたしを下から見上げてそう感心したように笑った。

一体何処で何をやるかを教えてもらえないまま歩かされた。何をや

るか、は当然ミッションと言う名の殺しだとわかってはいる。それはとてつもなく不吉な予感を匂わす。

あの笑みは絶対に良からぬことを考えているに違いない。

全く知らない道を歩いていけば、駅通りに出た。交番を何食わぬ顔で横切ったあと、白瑠さんは迷わず駅の中に入る階段を上がった。

言葉を失う。

何かを言おうとして諦めて階段の前で拳動不審になる。嫌だが、ついていかななくてはならない。だけど嫌だ。多分他が見たらあたしはきつと情けない顔をしているだろう。

あたしはやけくそで階段を駆け上がり白瑠さんの隣に立った。

「白瑠さん！嫌です！嫌がらせですか！？」

「んー？なあんのことお」

腕を掴んで言えば、変わらない笑み、と言うかとぼけた笑みで首を傾げた。

この男…。

殺意はわくが行動にはでない。決して。例え彼が丸腰であたしの腰にナイフがあろうとも、彼には絶対に敵わないのはわかりきっている。

「今からっ…何をやるんですか…？」

怒りを抑えながらあたしは訊いた。ギツと睨み付けるのは忘れない。相手はそれを見て楽しんでるであろうが、別にいい。もう既に白瑠さんは楽しんでるはずだ。

「だあれでもいいよ、殺っちゃって？んひゃ、好きな奴を」

白瑠さんはそう言い、周りを注目するように手を振った。

よりによって、駅でか？

否、違う。

白瑠さんはすぐに切符を購入した。

訂正だ。

よりによって、“電車”でだ。

買うなり、あたしの手を引いて改札をくぐる。

冗談ではない。またあたしに電車内で殺戮をしろと言つのか？やっ
てしまいそうだ。

ニユースで「地獄行きレッドトレイン再び！」と流れそう。あ、
ちよつと気が紛れた。

そうだ落ち着け。何も白瑠さんの口から電車ないで殺戮をしろとは
言われていない。

ただ一人を、殺せばいい。適当に選び、殺す。それだけのこと。

深呼吸。

ホームで電車が停まる。扉が開き、乗り込む。

嗚呼、あの日を思い出す。

電車に乗り込めばすぐ近くにあつた席に座るよう促された。

端の席。あたしが端で隣に白瑠さん。

昼間なのに沢山乗車していた。

ギョツとあたしは袖に隠れた手でズボンを握り締める。

落ち着こう。落ち着けば大丈夫だ。

ガタンゴトン、絶妙に揺れて走る電車。その揺れは気持ちよくて眠
くなる。そのせいなのか、肩に白瑠さんの頭が凭れた。

寝る気か。呆れて溜め息を洩らす。勿論、白瑠さんに聴こえるよう
にわざと大きく洩らした。

効果はなし。沈黙。

揺れる音。

人の気配。

息遣い。

話し声。

本を捲る音。

携帯電話をいじる音。

音楽がイヤホンから洩れる音。

帽子の下で眉間にシワを寄せる。全ての人間が出す音が苛立ちを覚えさせる。

電車と言う空間は、誰もが自分があたまかもいないかのようにする“無”の空間。沈黙をして赤の他人の注意をひかないようにする。そんな空間。

あたしは常日頃、そんな感じだ。歩いていようと店にいようと教室にいようと友人達といようと、まるで自分がいないかのように沈黙する。

そうしたいからだ。

だからこそ、沈黙しない奴らに苛立ちが抑えきれない。

「……………」

駅につき、人が入れ替わりして、また発車。今時の女子高生三人組が二つ離れたドアに立った。

帽子の鰐越しからその三人組を睨み付ける。きゃぴきゃぴとはしゃぐ声が耳障りだ。

何が楽しいんだ。貴様らは何のために生きている？

しょうもないことで大笑いする為か？嗚呼ム力つく。殺したい。

殺したい。

殺したい。

音を立てるここの人間を殺したい。

「ん……………」

白瑠さんが動いて身体を強張らせる。落ち着け落ち着け。

大量殺人はまずい。もう止せ。

きつとあたしの理性がそう言うんだ。

唇を噛み締め腕を胸の前で組む。

全ての音を無視しよう。殺戮衝動は堪える。

たった一人でもいい。たった一人だ。

だけれど、その一人を選ぶ基準はなんだ？

この前は電車にいた全てを殺した。選択はしてない。たった一人を選び、そして殺すのだ。どうやればいい？

難しい。その選んだ一人の人生を奪うのだ。慎重に。待て。

この前はそんなこと考えていなかった。だからこそ殺せたのかもしれない。

考えればあたしは殺戮衝動を抑え込めるのでは？

そう思ったが、白瑠さんに話されたことを思い出すと無理があるかもしれない。

一度踏み外した。そして56人も殺めた。

あたしには刑務所か死しかない。

うん。殺るしかない。

あまり考えず、一人を決めればいい。

深呼吸して、こっそり赤の他人達を見た。

殺してみたいと直感したらにしよう。殺す映像を見たらにしよう。

ただただじっとした。

電車が停まり、また動き出す。人が乗ったり降りたりした。

白瑠さんもあたしも動かない。次第に人が減っていった。女子高生もいない。

かなり減った。空席が多い程、人が減ってあたしは安堵の息を洩らして肩を落とす。白瑠さんがつらそうに唸ったが知らない。

あたしが選ぶまで寝てる気なのか、頭蓋破壊屋さん。

隣の扉が開くと聞いたことのあるような声が聞こえた。

耳障りな男達の笑い声。誰だっけ。

顔をあげて盗み見。不良染みた格好の男達は向かいの扉の前でたま

った。座ればいいものの…。
ちよつと数人、見覚えがあった。でも違つかもしれないと顔を下げ
る。

と言つか、違つてほしいと願つた。

「あ、ていうかさ。最近ニュースにやつてるやつ知ってる？電車で
惨殺事件」

「あー知ってる知ってる。60人殺されたってやつでしょ」

56人だバカ野郎。

つか、いきなり前触れもなく話し出すな。

「あれ一人が生き残つたけど、病院で犯人に連れ拐われたって言っ
てたじゃん。そいつうちの学校の奴だったんだよ！」

「すげーまじで？」

こいつ…。バカか。

ベラベラと被害者の話するな。オレは知つてまあす、てか？
てか、知り合い確定じゃん。白瑠さんにバレる？
心配したが白瑠さんの反応はない。

「え？誰が？」

「ほらっ！目が大きくて丸くつて、黒髪で、まーまーいい顔のくせ
にネクラで陰湿なやつ。クラスにいたじゃん！」

カッチーンと頭にきた。

鏝越しから睨み付ける。知り合い確定だ。

どうせ聞いてるんでしょ、白瑠さん。

学校が同じだけで知り合いとは限らないが、クラスが一緒ならば嫌
でも知り合いだ。

白瑠さんはこれが狙いだっただのか？有り得ない。そうだったら、気を抜けられない。

「ああ、あのボーとしたくつらあい奴？アイツの声聴いたことないんだけど」

「話したことねえじゃん。オレ、ニュースで見てちよーびびったし！学校行ってるやつらの情報だと学校にマスコミ来てるってよ！」

「まじか！？じゃあ映りにいかねえとな！」

「絡もうぜ！」

ゲラゲラと笑う奴らの下品な声に、苛々はピークに昇りつつあった。下等な不良だ。人の迷惑も気にせず暴れる。俺様は偉いんだ、そんな感じで威張って歩く。

クラスで一番関わりたくなく一番嫌いな人間だ。

担任の先生の肋を折ったことのある黒髪の生徒とそのニットを被った悪友。どっちも名前を忘れた。

話したことないのはためえらが嫌いだからだ。ためえらの注意をひかないように沈黙していたんだ。暴力で押し込む貴様らなんかいないように振る舞っていたんだ。

あたしをネタに笑うか。

そうかならあたしも笑ってやろう。

暴力で押し込めないことをあたしが教えてやろう。

「うっせえっ！！！！」

あたしは沈黙を破り、大声を上げた。

その車両にいた誰もがあたしに注目する。

白瑠さんは身体を起こして欠伸を一つ洩らしてから背伸びをした。

「あ？」

低い声を出して一人が舌打ちする。大きな身体に腰パンするズボン
はヤンキー愛用のスエットだ。
カツコ悪い。あたしは理解できない。
忽ち、彼らはあたしを取り囲んだ。

「なんか文句あんのか…あん!？」

ドカツとあたしの足元を蹴っ飛ばす不良。あたしがナイフを持って
いるとも知らないで、なんて単純な奴らなんだ。
隣で白瑠さんが笑いを洩らしている。

「てめえ！何笑ってやがんだ！」

「んーん？べえつにいー」

自意識過剰なのだ。

ただ目をあわせただけで「ガン飛ばした」と絡んだり、ただ笑って
いただけなのに「てめえ今オレを見て笑っただろ」と絡む。
自意識過剰。

自分がそんな存在だと思っっているからこそその過剰反応。
なんて哀れな奴らなんだ。

「ああ!？」

「ぐだぐだと煩い。関係ねえなら口にするな。たかがクラスで話して
たこともねえ奴の話…すんじゃねえよ」

白瑠さんは関係ない。あたしも低い声でそう静かに言い放った。

「ハッ！てめえこそ関係ないだろ！」

「ぶっ」

不良の言葉に白瑠さんは吹き出した。気持ちはわかる。こんな目の前で、しかも睨み付ける為に顔を見せているのに話題の本人だと気付かず“関係ない”と言うのだから笑ってしまうだろう。

「ちっ！てめえら今あやまんねえとぶっ殺すぞ!？」

「こっちの台詞だ、土下座しねえと…ぶっ殺すぞ?」

普通ならば、今までならば本気ではない言葉を放つ。

嗚呼、やっぱりあたしは変わったなと思った。

電車が停まる。

何も言わずあたしも白瑠さんも立ち上がった。先に不良達が降りて、あたし達も降りた。

幸い、誰も止めにはこなかった。

そして幸い、駅は閑散としていて見渡しても誰もいなかった。

「んひゃあひゃひゃっ」

白瑠さんは腹を抱えて笑い出した。

「いちにーさんしーご、かあ?いいんじゃない」

相手は五人。五人か。なんとかなるだろう。

「はあ?てめっ、気持ちわりいんだよ!」

「相手はあたしですよ、クラスメートさん」

白瑠さんに殴りかかろうとしたそいつにあたしはそう言った。単細胞らしく「は?」と全くわかっていない顔をする。本当、笑える。

「この顔を見たんだろ？ニユースでも」

見えるように鐐を上げて見せた。

「あっ！てめえ…！」

やっと気付いてクラスメート二人が目丸める。

「なんで、お前…！」

「わかんない？てめえら単細胞だなあほんと、頭悪すぎ！」

あたしは挑発で吐き捨ててやった。勿論、殴りかかるよう仕向けたのだ。

案の定、二人とは違う不良が一人あたしに向かってきた。

あたしは左に一歩動いたあとに、背中のカルドの柄を掴み、振り上げた。

ただ、振り上げた。

狙ったわけではなく、ただ首筋を切ったんだ。

彼の首筋が切れた傷から。血濺き。

べちゃり、顔についた。

嗚呼、紅だ。

「…だから、57人目の被害者になる…」

ドサリと倒れた死体。

凍り付いた空気にあたしは呟いた。

「うっ、うあああああっ…！」

一人が悲鳴を上げる。

あとの三人は足が鋤くんだのか、今起きた光景が理解できなかったのか、青ざめて立ち尽くしたまま。

悲鳴を上げた一人はこの場所から逃げようとしたが、白瑠さんが首を掴んで捕まえた。

「あれえー？逃げちゃうの？ぶつ殺すんだろ？逃げる奴は…俺が殺してあげる」

笑って言う白瑠さんがまた更に恐怖を植え付ける。

掴まった金髪の不良がガクガクと震えた。わかるぐらい、汗が落ちて
ている。

「て、てめえらっ…人殺し…！！狂ってやがるっ！！」

黒髪の不良が叫んだ。

バカかこいつら。否、バカなんだ。

そんなの、一目瞭然だろ。

「知ってる」

白瑠さんはおどけたように笑って、あたしは冷たく吐き捨てた。

たじろぎしたあと、黒髪の不良がバタフライナイフを取り出して雄叫びを上げながら向かってきた。

やはりそれぐらい持っているのか。

特にあたしは驚きもせず、そいつの顔面を蹴った。

「あたし、嫌いなんだ。てめえらのこと。黙っていりゃあ…死なな
かったのに。哀れだね、アンタ」

まるで人事のようにあたしは言う。

顔を蹴った男が倒れたあと、一人が向かってきた。それを一步下がって避ける。

背中を向けたそいつは「殺される！」そう青ざめた顔をしてあたしを振り返った。

うんそうだよ、殺される。

あたしは容赦なく、カルドを振り下ろした。スパツと切れる首。カッターと違い、もっと力を入れれば首を切り落とせるかもしれない。58人目を殺して、そんなことを思った。

「うあああああつ助けてえっ!!!」

もう一人が白瑠さんと違う方向へと走り出した。助けを求めて。

あたしはプッシュダガーを、その背中に投げつけた。

背中に命中。「うっ！」と彼は倒れた。あたしはゆっくりと歩み寄る。

「ひい！」まだ息のあるそいつは情けない悲鳴を上げて這いつくばったまま逃げようとした。

あたしは、その背中を踏みつけて、首を切り裂く。

無情に。何も考えず。ただそう短剣を首筋に当てて、引き上げただけ。

血は吹き出し、命を奪う。

振り返り、顔を蹴った男に目を向ける。

「な、な、なっ…なんで…なんで殺す、んだよ…なんで…」

「ムカつくから」

ガクガク、先程の威勢が消え去った蒼白の顔の男。その表情は少しの疑問と巨大な恐怖だけだ。

些細な疑問にあたしは答えた。

「ムカつくからぶつ殺す。君達も好きでしょ？よく言うでしょ？」
そうあたしは嘘っぱちの冷えきった笑顔を向けて言った。

「傑作でしょ？こんなあたしに…殺されるなんて！」

カルドを振り上げ、心臓に振り下ろす。心臓に命中。

彼は、動かなくなった。

本当、傑作だ。

学校では、無関係にならずにちゃいけなかった。暴力じゃあ勝てない相手だったのに、一回り小さいあたしに殺されるなんて。

笑える。

あたしは暫く足元に広がる紅を見つめていた。無情に。だけど惚けたように。好きな血の紅を見つめた。

「いやだあ！助けて！頼むっ！死にたくないっ！！」

嗚呼、まだいたのか。と思いつく。白瑠さんが捕まえたままの不良。情けない声を上げる彼を振り向いた瞬間。

ぶあああんっ

頭が木っ端微塵に吹き飛んだ。

べちゃべちゃ、と頭だったそれがあたしの前に落ちる。

うえ。

吐き気を覚えた。

大量の血は平気だ。

だけどこの頭の残骸は無理だ。

あたしは口元を押さえて目を逸らす。逸らした先には首のない死体のズボンに漁る白瑠さんがいた。

何やってんだこの人。

深く考えないようにしてあたしはプッシュダガーを取りにいった。

「財布の中身もとつたら？」

死体から抜き取ったあとに白瑠さんにそんなことを言われてきよとんとする。

見れば、ちゃっかりと白瑠さんは死体どもからお金を拝借していた。

うん、まあ…殺したあとにお金を盗るなどは、言えない。

あたしは仕方なく足元の死体のポケットを探った。

つつても不良の財布なんて薄い。大して入ってなかった。

「はい、これは椿ちゃんに」

すると白瑠さんが手に持っていた札束をあたしに渡してきた。

「え…でも」

「死人には不要だし、椿ちゃんが殺したから椿ちゃんの」

笑ってあたしの顔についた血を拭ってくれる白瑠さん。

「あ…すみません、服汚して」

「構わないよー？」

なら良かった。あたしは着ているシャツで顔を拭く。短剣を戻し、帽子を深く被り直してその場を後にした。

「知り合い殺し完了ー」

んひゃひゃ、と楽しげに白瑠さんは笑う。あたしは黙ったまま白瑠さんの隣を歩いた。まだ気持ち悪い…。

ていうか、あの時何故。

何故笑ってしまったのだろうか。

冷たく、ただ無情な顔で殺せばいいものの。

単なる怨恨殺人に嫌気がさす。

もう、誰でも殺せるかもしれない。そんな異常者だ。

あたしは、冷たい。

冷たい、人間。

否、人間以下かもしれない。

狂った殺戮者。

「あーそうそう」

白瑠さんが不意に振り返った。二歩前で後ろ向きに歩きながらあたしに笑いかけた。

「“裏現実”によっこそ」

両腕を広げ、狂った笑みで白瑠さんは言った。

楽しげに愉しげに面白そうに可笑しそうに愉快そうにやっぱり狂ったように、笑っていた。

表現実者の知らない世界。

黒くて紅くて曖昧で正確で闇で光でわからぬようわからぬ世界。殺しを肯定する裏現実世界。

戻れない、境界線のこちら側。

秘密、言

「椿さん、料理できますか？」
「できません」

家に戻った直後に微笑みで迎えてきた笹野さんにキツパリと即答した。

長い距離を歩いた為、へとへとだ。

「ですよね」

え？ちょっと待て。

何そのやっぱりって顔は。

「何がですよね、なんですか？」

「椿さん、O型だから」

「だから!？」

「材料全てを適量にいれて失敗するタイプ」

「ぐう!」
「凶星をつかれてあたしは押し黙る。畜生。医者が血液の性格言うのは卑怯だ。」

「先生は…… A型みたいですね」

「はい、そうですよ」

「俺、B型あー! つばちゃんと相性はっちり!」

「嬉しくありません」

「がぁーんっ」

ソファに座って会話に入ってきた白瑠さんに半場八つ当たり。相性？うまくやっていけるってことか？

嘘っぱちにシヨックを受ける白瑠さんを見てクスクスと笹野さんは笑う。

「今日はハヤシライスにしましょうか」

「……それもあたしの母からの情報ですか」

あたしの好物は知られているようだ。肩を落としてつつポケットの金を出す。

「何人、殺したんですか？」

「四人と一人い」

「それにしても少ないお金ですね」

「不良が札束いっぱい持つてるわけないじゃないですか……」

さらりと酷い事を言う笹野さん。あたしはテーブルに金を置き、ベルトを外した。

「笹野先生と白瑠さんは相性悪いのによく一緒に暮らしてますね」

「それは幸樹の器のでかさが秘訣だねえ」

「ああなるほど納得」

「納得しちゃうの!?!」

笹野さんの器がでかなくなっっちゃこんな異常者と一緒に住めないでしょう。納得できるとも。

自分で言っておいて傷付いている白瑠さんを笹野さんは笑う。

あたしは無視して帽子を取った。髪を指でとかしていれば、べとり

としたモノに引っ掛かった。

「早く洗わないと傷みますよ」

帽子からはみ出た髪に先程の返り血を浴びたようだ。

「お風呂に入っていていいですよ。着替えは外に置きますから」

「あ…はい、ありがとうございます」

「じゃあ！髪切ろうか！」

「せめてハサミにしてください」

ベルトのホルダーからカルドを手にとった白瑠さんにあたしは素早くつつこんだ。髪を切るのは別にいいがせめてハサミにしてもらおう。

笹野さんに言われた通り浴室に向かった。また白瑠さんの服かな。シャワーから水を流して髪をゴシゴシと洗う。紅が透明の液体とまざり足元を流れていく。

首の傷は塞がっているから痛くはない。傷の部分は膨れていてわかる。ちよつとだけ、それに触れてボオとした。

ザアアアと降り注ぐ雨に打たれながら、何も考えずボオとした。濡れた髪が視界を塞ぐ。

髪を掻き上げて、天井を見上げた。

白に閉じ込められてるみたいだった。

「……女の子物」

外に出れば着替えが置いてあった。予想外に女の子の下着に、女の子のワンピース。

買ったのかな？それにしても洗剤の匂いがする。

疑問に思いつつもあたしはそれに着替えた。

「ありがとうございます、あのっ…この服は？」

リビングに行けば、真っ先に「幸樹ー見てみて似合ってるよお」と白瑠さんが指差す。あたしはすぐに笹野さんに訊いてみた。

「良かった、似合うようですね。それは妹の服です」

「妹…さん？」

首を傾げる。

笹野さんはハサミを取り出して笑った。

「死んだので使ってください」

そう、簡単に言い退けた。

…死んだ妹。

あたしは自分の着たワンピースを見た。

「幸樹くんは妹が死んだのをきっかけに、裏現実に来たんだよー」

いつもの調子で白瑠さんは、笹野さんからハサミを受け取ってあたしをソファに連れていこうとする。

「あ、妹さんの服を、いいんですか？あたしなんかを着て」

「いいんですよ、妹はもう着ませんから」

笹野さんは微笑みで何もなしのように言う。あたしは白瑠さんに手を引かれて、ソファへ。

テーブルの上には磨かれた短剣が置かれていた。白瑠さんが磨いたようだ。

ジヨキジヨキと音がする。

容赦なく髪を切っているようだ。

あたし的には妹さんの死因が知りたいのに。あたしはついていないテレビを通して笹野さんを盗み見した。

大した様子はない。

妹の死因はなんだろう。見たところ若そうな服だ。

事故か病死か。その死をきっかけに裏現実に入ったと言うなら、笹野さん自身が殺した？

もし違ったら笹野さんに失礼なので黙っておこう。

「椿ちゃん、髪が整ってないねえー。美容室いかないヒトー？」

「あ、はい…めんどくさくっていつもは自分で適当に。なんか一人に髪洗われるのが嫌なんです…無防備だし」

「ああーわかるわかるうーあの首を無防備に出した感じ？スパツて切られそうでやだよねえー」

何の話だ。恐らく共感しているらしいがちょっと違う。

あたしの髪はいつも結んでいるから揃ってなくても気にしないんだ。朝起きたら悲惨なほどに爆発しているのはちよつと傷付くが。

「だいたい、相手が凶器持つてんのに手がでないのはいただけないよねえ」

「そうですね、正直あたしは今、美容室以上に怖いですよ」

だって頭蓋破壊屋さんが真後ろでハサミを使ってるんだもん。

ハサミがなくとも恐ろしいと言うのに…。

「あ、そうだ」

「ん？」

「どうやら一緒に仕事して仕事を教えてくれるようなので、予めお

礼を」

「ん。いいよいよ、そおんなの」

「ありがとうございます。住む場所までいただけるといいです」

「いいつてば」

「一つ我が俣な願いを言わせてください」

「なあに？」

ワガママなお願い。

「もしも、あたしが要らなくなったら、貴方が殺してください」

ただ、それだけ。

「不要だと思つたら、気付かない内に、殺してください」

それだけ。二人がこうやって親切にしてくれるのはきつと、利用価値があるから。

手伝いにしろ、何にしろ。

要らないと思つたら白瑠さんの手で殺してほしい。

こんな頭、吹き飛んでほしい。

少しの沈黙のあと、またしゃきしゃきと髪を切る音がした。

「わかった」

ただ一言だけ。白瑠さんは答えた。これで死は、決まった。あとは、いつ、なのかだけ。

ちよつとした嫌な沈黙。

そのあとにキッチンから物音が聴こえた。振り返れば、笹野さんがキッチンに立っていた。そういえば夕食の時間だ。

「あの、お手伝いします。笹野さん！」

「いいですよ、お疲れでしょう」

「野菜切るだけならできますよ！」

「あーもうっ、動くと耳切っちゃうよ？」

思わず悲鳴を上げそうになった。ガキツとあたしは首を固定する。多分軽い冗談のはずだが、ハサミを持っているのが白瑠さんだけに
びびる。

暫くじつとしていれば「はい、終わり」と肩を叩かれた。

髪を確認してから直ぐ様にあたしはソファから逃げ出し、笹野さんの元に向かう。軽くなった髪が揺れる。

おお、白瑠さん才能あるね。

「すつきりしましたね」

「はい。上手いですね、白瑠さん。短い時間ですいちゃうなんて」

「えへへっ」

キッチン越しからあたしは白瑠さんに言った。白瑠さんは気を良くしたのか嬉しそうに、にんやり笑う。

「人参切りますね」

あたしは皮を剥いた人参を手にして包丁を持った。笹野さんの指示を聞きながらやれば、きつといつものように失敗しないだろう。ついでにいつもの失敗とは、適当に、勘で作った料理の事だ。

「今日はおやすみなんですか？笹野先生」

「はい。明日から仕事なのでご飯は自分達で。白瑠もいい加減なので、極力料理しない方がいいですよ」

絶対に散らかさないでください。と言われた。大丈夫、爆発だけは
ありませんって。

「あの、事件の捜査状況とか…きいてます？」

「何が知りたいんですか？細かい質問をしてくださればお答えでき
ますよ」

それはそうだ。

遠回しより直接的に訊かないと怒らせてしまいそう。

あたしは少し考えてから、また口を開いた。

「佐藤刑事…白瑠さんが頭を吹き飛ばした刑事がサイレンサーを持
っていた矛盾ですよ」

「それに関しては刑事は口にしないでしょうね」

「…ですよ。きっと混乱中でしょうね、刑事達は」

「貴女が犯人だと知った方が混乱するでしょう」

軽い嫌気を笹野さんは言った。

あたしは肩を竦める。

「その内、バレルでしょうね」

「どうか、君みたいなお柄の少女が56人も殺せるとは思ってい
ないんですよ。平凡な日本だからこそ、そんな発想はでない」

あたしに笑みを向けて、そう笹野さんは言う。それが少し意地悪に
見えた。

「私も驚いたんですよ、白瑠の話聞いて、貴女を見た時。ただぐ
っすり眠っている君は…穏やかでしたね。とても56人を殺したよ
うには見えませんでした」

「…寝顔は忘れてください。てか、殺したように見えたら刑事さんだつてわかっちゃいますよ」

「白瑠は人殺しに見えるでしょう?」

「見えなくもない、です」

きよとんと、話題の本人がこちらを向いたがあたしも笹野さんも気付かないフリをした。

「そうじゃなくて……無垢な感じ。汚れていない。純白。とにかく可愛らしい寝顔でした」

「やめてくださいよ!そうゆうこと言うの!」

「照れているんですか?ふふっ、人間は見掛けだけではわからないものです。特に表にいる人間は。裏現実の人間は、そこが裏だから裏と言う素顔をさらけ出す。私が医者をやっているのが表で、殺しをやっているのが裏のように。表だけじゃあわからない」

それはつまり、なんだ?

あたしにも裏表があると言うことか。まあ当然か。否定は出来ない。

「あたしもそうですね、見た目はただの少女、中身は…60人を殺した殺戮者」

「ただの少女ではなくて……まあ止めておきましょう。包丁を持っているし」

言いかけた笹野さんは止めた。

また無垢や純白だとか言おうとしたのだろう。あたしが包丁を持っているから止めた。また言ったら振り回すはずだ。

「ただ、裏現実とはそうゆうところだと理解してください。白瑠は言っていないでしょう?」

確か、イマイチ解らないことを言っていた気がする。

「あたし達みたいなの人間が裏現実者。と言っていました」

「ほう…。なるほど。そうですね」

笹野さんは一人納得したように頷いた。手元は肉を食べやすいように切っている。

「なんですか？やっぱりまあ、わかりやすいですね。殺人しなきゃ生きれないのが裏現実者、て」

「白瑠が言ったのはそうじゃないです」

白瑠さんと言えば、構ってもらえないとわかったのかソファから消えていた。

「裏のままであるってことです。つまり、貴女は、白瑠と同じで常に裏だけ」

「裏だけ？」

「ただの少女であり殺人鬼、それが貴女の素。つまり表はない。白瑠もまた表がない。だから、貴女と自分を合わせて達と言ったのでしよう」

あたしも白瑠さんも、表がない。だから裏現実者。表がない。

殺人鬼があたしの素。

なんとも言えない。

「え、ちょ、つまり…表がないってことは、表現実では生きれないってことですか？あたし」

笹野さんのように表現実で医者として働くように、そうゆうことが出来ないと言うのか。

笹野さんは清々しいほどの笑みで頷いた。ひ、ひどい。

あたしはもう完璧な裏現実者と言うわけか。

「……よく、両立できますね」

やれることがなくなり、笹野さん一人がハヤシライスを作っていく。

「医者ですから。殺したい衝動は最初だけでした。今ではちゃんと患者を救ってますよ。でも、たまに殺してますけどね。ああ、患者をってわけではないですよ」

誤解しないように笹野さんはそう答えた。

表では医者、裏では殺し屋。片や命を救い片や命を奪う。

笹野さんはすごい。

「最初の殺しって？」

「……。妹を殺した人間ですね」

あたしは息を止めた。

「貴方ほどではありませんが、何人が殺しました」

「……つまりは……笹野さんは……あたしと違い……復讐で殺した？」

途切れ途切れにあたしは訊いた。

「そうなります」と短く彼は頷いた。

あたしとの大きな違いだ。あたしは自分の為。笹野さんは妹の復讐の為。

否、それも自分の為でもあるのか。
それ以上問うにはあまりにも凶々しいと思い、あたしは話題を変えた。

「よく病院で働けますね。あたし病院のあの空間が嫌いです」

「おや、何故？」

「白い病室が、重々しく感じるんです。牢獄みたい。見舞いに来ただけなのにこっちまで病みそう、みたいな」

「病院が好きで毎日来られてはたまらないのでそんな空間なんですよ」

拗ねた子供を宥めるように笹野さんは軽く笑う。

「白色は嫌いですか？」

「嫌いではないですよ、でも真っ白の部屋はごめんです」

「ニューヨークにある白瑠の部屋は真っ白ですよ」

真っ白の部屋だと？「おえっ」と思わず洩らす。想像すると気持ち悪くなる。

真っ白の壁、真っ白の家具。数秒そんなところにいたら気分が悪くなる。

「そう言えば、秀介君ですが」

「あ、はい？」

「どんな関係ですか？」

あれ、それはもう言ったはずだろう。

手が空いた笹野さんは意地悪い笑みで訊いた。

「ただの友達ですけど…」

「少なくとも友達を“俺の物”だと言うような子ではありませんよ。入院仲間を守るだなんて……興味深い」

笹野さんは腰を曲げてあたしの顔を覗き込んだ。あたしは一步後退りする。

秀介とあたしの関係？友達以上恋人未満。否、恋人以下友達未満。そう答えれば、説明しなくてはならなくなる。

秀介に告られたなどからかわれるネタになるだけだ。

「本当に、入院友達です。会ったのだから入院一週間目ですよ」

「それから毎日、病室に来ている仲の良い友達ですか？」

疑り深く問いかける笹野さんの目は、気に入る答えを待っている。

「そんなに秀介君は可笑しな事を言っていたんですか？」

「彼の執着は凄いです。白瑠の事だって倒したいがために追っているのですよ、しつこい程に」

「……だから？」

「君に、ふふっ、執着していると言ってるんです。彼に何したのですか？」

執着？秀介は何を言ったんだ。

何をしたのか、なんて失礼な。

「彼女にフラれたのを目撃したので、慰めたんですよ。それだけ」

「癒すフリして心を盗んだ？傑作ですね！数多くの裏現実者に恐れられる鬼が？」

すごく可笑しそうに笹野さんは笑い声を上げた。まずは誤解を解こう。

「あたし、心を盗んでいます。慰めるフリをして暇つぶしをしただけです」

「さりげなく酷いことを威張って言いましたね」

「裏現実者も恐れられる鬼ってなんですか？」

「名の高い裏現実者を潰す鬼ですよ。ナマハゲみたいな感じですね、裏現実ではヒーローみたいな感じ」

「さりげなく酷いことを言いましたね、笹野さんも」

ナマハゲからヒーローにイメージを変えるのが難しかった。つまりは、あれだ。

正義のヒーロー。

「え？あ？裏現実って…裏社会的なドロドロの闇の世界ですよ、その中にヒーロー？」

「裏現実者は何も全員が殺し屋ではないです。秀介君は殺し屋狩って生活しているようなものですよ。裏現実の秘密は聞いてないみたいですね」

秘密、で思い出す。

そう言えば裏現実者が知る秘密を訊いていなかった。

「聞く直前に笹野さんが帰ってきたので白瑠さんから聞きそびれたんです」

「そうですね。脱線しましたね、それで頭蓋破壊屋を躍起になって追う秀介君が優先した貴女は一体、彼とどうゆう仲なんですか？」

秘密を教えてもらえない上に話を戻されてしまった。
もう観念した方が早いようだ。

「あたしは友達だと思っていて、彼はあたしと付き合いたいそうです」

あたしは降参と両手を上げて見せた。真面目に言ったが、なんか可笑しくてあたしは吹いてしまう。それを見て笹野さんも首を傾げて笑った。

「何故笑うんですか？」

「いや：なんか妙で：。彼、比較的顔がいいのにあたしなんかと付き合いたいなんてバカな話だと思いませんか？」

「そうですね？笑うと比較的可愛いですよ」

自分のことを嘲笑っていたら、調子を合わせながら笑い頭を撫でられた。突然の不意打ち。

あたしは目を丸めてから背を向けた。どいつもこいつも不意打ちをするな、綺麗な顔で。

「おや、照れてますか？」

「この話は終わりにしましょう！白溜さんは何処に行ったんです？」

あたしはキッチンから逃げ出して白溜さんを探す。笹野さんは自室にいと教えてくれた。

あたしは白溜さんの部屋へと向かい、ノックしようとしたが先程の真っ白の部屋を思い出して躊躇う。真っ白は嫌だ。

そう思っていれば部屋の扉が開いた。

「どーぞ」

ニコッと白溜さんが顔を出して中に招いた。ただ呼びにきただけな

のだが。

どうやら真つ白ではない、あたしは部屋へと足を踏み入れた。

「わお……すげー……」

部屋はベッドと棚しかなく、あとは数多くの武器に埋め尽くされていた。銃やナイフは勿論、剣から槍、ハンマー、ボウガンにんだかすごそうな武器までズラリと並んでる。足の踏み場に困るくらいだ。

白瑠さんは軽い足取りでベッドに行き飛び込む。ベッドに置かれたナイフがその弾みで落ちた。

「暇だから手入れてたんだあ」

「そのようですね。…全部使えるんですか？」

「使えるさ！なんだってね」

あたしは興味津々で武器を眺めた。こんな武器の山などお目にかかるのは初めてだ。

まじまじと見つめてからあたしは後ろにいる白瑠さんに訊いてみた。

「白瑠さんの初めての殺しってどうだったんですか？」

「んー？俺の初めての殺し？」

ギシ、と軋む音に振り返る。

「フーちゃんの“レッドトレイン”には敵わないけどお」

にまにま笑って、軽く嫌味を言いながら白瑠さんは答えてくれた。

「バーで、44人殺したあ」

罪悪感なんて微塵もない、寧ろ無邪気な笑顔でそう答えた。
アメリカのバーの殺戮現場を愉快そうに笑って立っている白瑠さん
が想像できて寒気を感じる。

「因みに…きつかけは？」

「きつかけ？ああーなんとなく！殺っちゃおうか！って感じで！」

首を傾けてからキャハツと笑う白瑠さん。

軽い。かなり軽いぞこの人。気が向いたら殺し、そんな人だ。恐ろしい。

「一体…どんな風に…殺し」

「一人残らず頭がち割った」

質問する前に答えられた。

あたしは沈黙。

「あーでも、割った瓶でザクザクやっただけ？椅子の足でグサリも
やっただし腕や足をむぎとったり目玉をくりぬいたりい」

「あの、やめてください、もう十分です」

だめだこの人。根本的に可笑しい。殺しを楽しんでいるのだから、
正常と言う方が変か。

あたしには到底真似できない。

「あの、つかぬこと訊きますが…：…家族は？」

「ん？帰ってきた時に殺した」

訊くんじゃなかった。

本当に怖い人だと、思った。

あたしは白瑠さんに背を向けてまた武器を眺める。

「嫌いだったんですか？」

「嫌いだったよ」

刀を手にして、抜いてみる。鋭利な刃があたしを映す。その表情は、あたしにもわからない。

「どんな家族でした？」

「うわべだけ幸せな家族だった」

白瑠さんの手が、あたしの髪に触れた。軽くなった髪の毛の間に指を入れて流れていくのを楽しんでいる。

しん、と静寂が流れた。

あたしはただ動かず黙って触らせる。

人間の人格は家庭を表すと言う。家庭が悪ければ悪い、良ければ良い。

あたしも白瑠さんも、家庭が悪かったから情けない人格になってしまったのかもしれない。

そんなことを嘆いたって、何も変わらないのが、苦しかったりする。

「夕飯、できたから食べましょって笹野さんが」

いつまでもこうしてられない為、切り出して言う。

ていうかこれ以上髪を触ってほしくない。軽く性感帯だもん。

「んー！」

そう返事して白瑠さんは立ち上がった。

三人で食卓を囲んだ。イタリアンのサラダとハヤシライス。何だか変な感じだが手をあわせて「いただきます」。むしゃむしゃと無言でサラダを食べる。

「はい、あーん」

「……………」

隣の白瑠さんが牛肉をスプーンですくってあたしに食べさせようとしたから冷たい目を向けた。やはり効かない。

「あーん」

「食べてあげてください」

ふふふ、と笑って向かい側に座る笹野さんが言った。まじか。

あたしはしぶしぶそれを食べた。白瑠さんは楽しそうに笑う。

白瑠さんは病んでいる上に精神年齢が低すぎる。

「あの、白瑠さん。明日は何やるんですか？」

「明日あ？んー、とおー」

え、考えてない？

行き当たりばつたりなんてやめてください。

「幸樹君の病院に行ってみよう！」

「それに何の意味が！？」

「捕まりますよ？椿さんが」

「あたしだけ！？」

「大丈夫、私の料理には口を割らない薬が入ってますので貴女が捕まっても私達の事はバレません」

「嘘をさらりとやわらないでください」

「え！？嘘なの！？」

「信じたの！？白瑠さん！」

初めての夜の食卓は奇怪な組み合わせで、くだらないことを話して騒いだ。

朝は車の音に目を覚ました。ちょっとだけ唸って枕に顔を埋める。少しだけ二度寝してから起き上がってベッドから降りた。

窓から外を確認すると笹野さんのクラウンがなくなっていた。出勤したらしい。

顔を洗ってリビングに入る。朝食がテーブルに並べられていた。

なんだか新しい家族が出来たようだ。家族と言っ言葉なんて嫌いだから、優しい兄が出来たみたいだと訂正しよう。

笹野さんにしたら迷惑だろう。

朝食をつまみ食いしてからソファに座って、テレビを見た。ニュースに昨日のアレが報道されていた。

駅で若者五人が惨殺。連続殺人事件として捜査中。

そのあと、あたしのニュースが再び流れた。一体何回このニュースを流すんだろう。進展がないなら無駄だ。変化は何もない。

「おおーはよつう、つばあちゃんっ」

背後から声をかけられて、ビクツと震え上がった。振り返れば、寝癖のすごい白瑠さんが大欠伸して背凭れに寝そべっていた。

「おはよつうございます…。あの今日のご予定は？」

「昨日話したじゃん」

「病院はだめだつて言われたじゃないですか……」

「病院じゃなくて……あ、話したのは幸樹か！今日は椿ちゃんの買い物にいくんだよあ」

「へ？」

「買い物？とあたしが聞き返せば、もう一度言つて白瑠さんは頷いた。

にやんり。

狂つた殺人者は理解も、何をするか予測できない。

白瑠さんの服を着て昨日のベルトをつけられて、彼と家を出た。

電車は嫌だと予め断つたら歩いて行けると笑われる。

歩いて一時間でデパートについた。どうやら必要な生活用品を買いとのことだ。

急かされながらあたしは購入した。因みに金は白瑠さん曰く血に濡れた金だそうだ。

殺して稼いだ金をポンポン出すからちよつと引いたが、あたしも稼いで買えそう。レシートはさつとポケットに。

「お昼ご飯にしません？白瑠さん」

「それより椿ちゃん、化粧品とかは？」

「え、あたし化粧品ませ……」

一階に降りて昼飯を食べようとしたが白瑠さんに手を引かれてマツキヨに。

化粧なんてしないのに、と呆れながら白瑠さんについていくと女のあたしより化粧品に詳しかった。

どうやら変装に使うらしい。

次々と化粧道具が入れられた。白瑠さんは先程購入した服の袋をいくつも持っているのに重くなさそう。

この人の身体は一体どんな作りをしているんだろうか。

あたしは歯みがき粉やシャンプーもかごに入れた。それからヘアースプレー。髪染めも買おうかと思ったが白瑠さんに「髪が痛むからやめなよ」と止められた。

それからやつと昼飯を食べた。一緒にピザを堪能。

「他に何が要る？」

「別にもう要りませんよ」

「そう？もつとさあーんー」

他に何が要るんだ。

下着も服も買ったしアクセサリーも買った。アクセサリーは白瑠さんが決めてあたしの反対を押しきって購入した物。一（あたし好みでかつこよかったが高かった…）枕のカバー等や財布、ブーツ、タオルまで買ったのにまだあるのか。

「あつ！バイクなんてどう？」

「免許ありません」

「免許なんて関係ないよ」

免許が要らない、となるとコレクションか。なんて生ぬるいこと微塵も浮かんではこなかった。

免許がなくていい、と言うことは無免許で乗れという意味だ。

犯罪ですよと言葉が喉から出かけたが飲み込む。

裏現実者イコール犯罪者。

「よっしゃあ！じゃあ買いにいこう！何がいい？原付？中型？それともっ」

「いいりませんいいりませんいいりません！！」

立ち上がった白瑠さんの腕を掴んで止めた。残念がって白瑠さんは腰をおろす。

「もう十分ですから。あと足りないと思ったら自分で買いにいきま
す」

「俺もいくーう！」

にぱーっと人懐こい笑顔を向けられては、断れない。

「白瑠さん…暇なんですか？」

「うん、仕事待ちなんだあ。つばちゃんと殺れる仕事をね」

「あたしと…二人？」

「うん、かるーいヤツにね。一般相手なら平気だろうから」

仕事の話になってあたしは身を乗り出す。確かに一般人相手ならば武器を手に行っている限り殺せる。

捕食者なのだから。

問題は一般人ではない者。

白瑠さんは気を遣って簡単な仕事を探して、いや、待っているらしい。仕事から舞い込んでくるのだろうか。

「はあ…。仕事は、白瑠さんに任せますが…笹野さんは一緒じゃないんですか？」

「幸樹君は大きい仕事だけ。あとは自分で見付けてちまちま殺つてるよ」

ふーん、と相槌を打つ。

一緒に住んでるが別行動をするのか。家に戻ったら仕事の探し方を教えてもらおう。

帰りは絶叫ものだった。

結局白瑠さんがバイクを購入。自分の物らしい。正直札束が何処から現れたのかが知りたい。ノーヘルでスピードは違反ですっ飛ばされた時は、荷物が飛ぶかと思った。怖かった。パトカーと会わなかったのは幸運。

「こっちゃんの家は仮住いみたいなもんだからあんまりこつゆうの買わないんだけど、交通手段はあった方がいいね！」

「はあ…そうですね…」

家に着いてそんなこと言われても困る。ん？仮住い？

「仮住いつて？」

バイクから降りる白瑠さんを見た。様になっている…。

「基本、フラフラするから。日本ならほぼ、幸ちゃんの家泊めてもらうんだあ」

「じゃあ他の国では？」

「お友達の家とか借りっぱの部屋とかだよ！」

何だか世界中をプラプラしている白瑠さんが想像できた。自由な猫みたい。

「え、じゃあ…外国で仕事があったら笹野さんとはお別れですか？」

「日本に戻れば会えるよ」

あたし的には笹野さんが居てくれなきゃ困る。白瑠さんとずっと居るなんて精神的に無理だ。

肩を落としながらも笹野さんの家へと入った。ならこの生活用品は要らなかったのではないのか？

パーカーを脱いでソファで買った物の整理をした。まずは小さい物から。アクセサリー等。

暇な白瑠さんはそのアクセを全部自分につけて遊ぶ。あたしは気にせず、服の値札をナイフで取った。家を出る時はベルトをつけると、貰った。

「今日はミッションはないんですか？」

「うん、毎日は流石に無理があるからね。…あれ？今殺したかったりする？」

「いいえ」

毎日殺しては足がつくからか。

目を丸めて顔を覗くからあたしは首を振った。では今日はゆっくりできるのか。

服を畳み、一息つく。あとは部屋に飾ったりすればいい。

「夕御飯はどうします？笹野さんは？」

「こーくんは遅くに帰ってくるはずだよ。俺ステーキが食べたあい！」

「じゃあ食べにいきましょうか」

外食ばかりになりそうだ。

「そうだ、白瑠さん」

「んーん？」

「裏現実者の知る秘密を教えてください」

聞きそびれた秘密を今訊こう。

目を丸めた白瑠さんは何のことかわからなかったのかきょんとした。だけど直ぐに楽しそうに白い歯を見せて笑う。

「んひゃひゃっ！知りたい？知りたい？」

「知らないきゃ裏現実者にならないんじゃないんじやあないんですか…？」

んふふ。そうもつたいぶる彼の後ろに猫の尻尾が見えそうだ。チエシヤ猫の笑み、と言うには無邪気過ぎる笑顔。

にまにま、首を揺らす白瑠さんはやっとな口を開いた。

「ヴァンパイア
吸血鬼が実在するんだ」

その言葉が頭の中に入るまで時間がかかった。

「ヴァンパイア？」

あたしは聞き返した。
それがやっとなだった。

「そう。吸血鬼、ヴァンパイア、ドラキュラ、ヴァンピーロ…血を吸う架空の人間の姿をした怪物だよ」

白瑠さんは笑ったままあたしの首を掴んだ。顔がひきつる。
冗談でも触られたくない、スカルクラッチャー頭蓋破壊屋には。

「闇の中で生きる彼らは裏現実者なあんだけ。たまに仕事と一緒にやるんだよ、裏現実者はみいんな吸血鬼を知ってるんだー」

「吸血鬼って…まじで？血を啜ってる？」

「うん。彼らの場合、殺りながら血を飲んで生きてるんだよ。首切つて、ゴクーンって」

クイツと親指があたしの首を曲げた。それから白瑠さんが顔を近付

けてぺろつと舌で舐められ、ビクツと震える。
ふふふつ、と濡れた首に白瑠さんの笑いが洩れた。

「やつらは不死身。だけど数は少ない。きょーぞん、してるんだよ、面白いでしょう?」

ケラケラ笑って白瑠さんはあたしを放した。

違和感の残る首を擦りながらあたしは質問をする。
吸血鬼には興味がわく。

「神話通り…十字架や日の光に弱かったりするの?」

「十字架には弱くない。日の光には弱いからサングラスかけてるよ
ー?」

「じゃあ……ゾツとするような美しい顔だったりします?」

「うん、白い顔でイケメン揃いだよー?」

「わお!あたし吸血鬼好きなんですよね!」

「……」

十字架は効かない。陽には弱い。白い肌でイケメン。

映画みたいな吸血鬼。

あたしは好きだ。

そう言ったら白瑠さんの顔から笑顔が消えた。

「……………へえ……」

冷めたように、そっぽを向いてしまふ。なんだいきなり。

「……不死身ってことは、誰にも殺せないんですか?」

「ううん!簡単には殺せないだけ!吸血鬼を殺すにはねえ!血を全部抜き取って身体を燃やせばいいんだっ!」

訊けば、ぱつと笑顔を向けて白溜さんは楽しげに言った。うん、グロイ。

「不死身の身体を燃やせば、復活しないってことですか。ほげえ驚いた、まさかそんな秘密だったとは思いませんでした」

何も想像できなかったが。

「不死身なら、なんかしら不死になる薬とかあるの？」

「そんなもんじゃないあいつ！」

プハハハハ！と笑い声を上げ転げた白溜さんは手を振った。

「吸血鬼は人間ではないから吸血鬼なんだ！人間も吸血鬼ではないから人間！似た姿をしていても、別の生き物！その細胞を入れるなんて、無理無理！人間は永久を生きる身体になりやしない！大昔にそんな実験やってたらしいけど、当然失敗したらしーよ？」

ケタケタと笑い足をバタバタする白溜さん。バカですみません。

「なるほど……つまりは、人間が吸血鬼になることも無理、てことですね」

吸血鬼の細胞を人間に取り込むのも無理。つまりは吸血鬼が噛んで人間を吸血鬼にするそんなお伽噺はないということ。

起き上がった白溜さんはパチパチと拍手した。

「そーゆーことー！」

似ても違う生き物。

吸血鬼は人間ではない。

人間は吸血鬼ではない。

可笑しな話だ。

似ているのに、どうして違うんだろう。そんな疑問を投げ掛けたところで答えは難しく更に理解できないだろうから口を閉じる。

「性格は…どうです？冷酷だったり？」

「んー、比較的、温厚だと思うよ。人間を食い散らかすような子供じゃない、大人しい感じかな。俺が知ってる吸血鬼は。あと無愛想だけだからかいのある吸血鬼があ、よく仕事するやつ！今度会わせてあげるよおー一緒に苛めよ！」

苛めよ、の意味がわからないから曖昧に頷くことにした。

冷酷ではなく比較的温厚。それは人間に比べてか。それとも裏現実者の中ではなのか。

吸血鬼にだって性格はありそう。

是非とも知りたいものだ。

予想以上に裏現実の奥が深いらしい。

なんだか、楽しくなりそう。

頬杖をついて一人の世界に入り、密かに笑みを、溢した。

殺しの仕事

戻る道なんてない。

後ろは引き返せない。

誰も。どんな生き物でも。

過去は引き返せはしない。

夜は白瑠さんのリクエスト通り、ステーキの飲食店で夕食を食べた。

白瑠さんは胃袋が一回り大きいのか大盛りステーキをおかわりしていた。

頭蓋破壊のエネルギーに回されるのだろう。どう見ても余分なお肉は見当たらない。

お会計は払おうとしたのに白瑠さんが全部払ってしまった。

笹野さんの家に戻ってからはそれぞれ顔を会わすことはなく部屋にいた。今日のレシートを全て暗算するには桁が多すぎた為、直ぐに断念。頭悪いんですすみません。

服を詰めた棚の引き出しをあけて、服の一番下にレシートを束ねていれる。篠塚さんの名刺も置いた。

別れるときに白瑠さんの言っていた注意を思い出す。

「枕元に武器を置かないと奇襲された時、足掻くことも出来ずに死んじゃうよー？」

ひゃひゃっと笑う白瑠さんの笑みはなんだか引っ掛かった。考えてもわからない為、ベルトからカルドを抜く。

ひゅんひゅん。

手首を回してカルドを振ればそんな音が聴こえた。ラケットを持つとしてしまう癖だ。

奇襲でもなんでもカルド一つで十分だろう。カルド一つで敵わないなら無理だ。

一応ベルトはベッドに掛けてカルド鞘に入れて枕の下に潜らせた。刃のままは流石に怖い。

下手したら切断だ。

奇襲されても白瑠さんがいるから大丈夫だろう。そう思っているからこそ眠れる。大体、まだ敵いません。

あ、でも助けるつもりがないからこそそんな忠告をしたのかもしれない。

やれやれ。

眠くなり、あたしはベッドに身体を沈めた。眠りに落ちる感覚が気持ちよくそのまま目を閉じる。

静かだった。

夢を見ることもなく眠れていた。

しかし、目が覚めたのはきつと物音に気付いたからで、あたしは虚ろな意識のまま眠りから覚めた。

何分、否何時間が眠ってたらしい。そんな感じがする。ぞくつ。

時間を確認する暇もなく、襲いかかった恐怖に震え上がった。芯まで血まで凍り付くような、死の恐怖。

考えるよりも早くあたしはカルドの柄を握んだ。

死の恐怖を抱かせる“何か”がそこにいた。

生きる為の、正当防衛。

あたしはカルドを振り上げた。

キンツと弾く音。

止められた。相手も武器を持っている。駄目だ。この大勢では押される。

大勢を立て直さなくては殺られる。まずは相手を押し退け、ベルトを掴み、反撃。

そこまで思考が動いたが、聴こえた笑い声により中断された。

「んひゃひゃひゃあー」

「……………白瑠さん？」

笑い声と同時に緊迫感がふっと消えてしまう。その独特の笑い方は、白瑠さん。

「んひゃっ、いーねっーちゃん。中々だよ。敏感なんだね？いーことだよ、賢い賢い」

本当に気付かなかった。

白瑠さんがあたしの上に跨がっている。どうやらベッドに侵入したから些細な揺れにあたしが目を覚ましたようだ。

「試したん…ですか…？」

「んー！抜き打ちテスト！いざって時動けなきゃグサツだもんねー？」

両手について笑う白瑠さんに脱力して押し退ける力がない。

あれ、カルドを止めた武器を持っているように見えないのは目が覚醒しないせいだろうか。

「殺す気満々だったんですか…？あたし…それで気付いたんですけど」

「襲うなら殺す気あるっしょ…！…あ、つばちゃんの場合は別の意味で襲われる可能性があるかっ」

…突っ込む気力がない。
のそのそとカルドを鞘に戻す。ああ眠いよ眠い。

「……………つーちゃん？」

あたしの頭の横に手をつけて、白瑠さんが顔を近づいてきた。
近い近い。

とうか退きなさい。
それを言う気力もない。

「つーちゃん？寝ちゃった？」

目、開いてますけど。

先ず顔を近づけるのはやめてください。離れる。

「眠い…です……………今日はも……………きしゅ……………しないで……………」
「キス？」

ちげーよ。コラ。

「おやすみ……………」

瞼が重い。あたしはもう強制的に終わらせた。
が、この中身は子供の大人は引き下がらなかった。

「えーっ！もうちょっと話そうよっ！」

「づぐっ」

浮いていた腰をおろしやがった。腹に圧迫と重みがのし掛かり、苦ししい。

「ちよ、はくつさ……」

退けよ。まじで。眠らせろ。

あたしはバシバシと白瑠さんの脚を叩いた。が身体はもう眠りモードで力が全く入らない。

「構ってよぉー」

「うげえっ……」

もう半场体重をかけられた。ただでさえ腹に乗られているのに次は首に両腕を置かれる。

顔近い。締まる。窒息する。重い。この人殺す気だ。

「つうーんちやぁんー」

今日散々構ったろうが。

白瑠さんは揺れながらあたしの髪をいじった。

「う……あしたに、して、よっ」

「んーんーっ」

駄々こねるな。

「寝たいんです、明日にしてくださいよ」

「じゃあ添い寝しよっ!」

……。

もういい。それで。

寝かせてくれるならそれで。

直ぐに白瑠さんは布団の中に潜り込んだ。ギュツ、と首や腹に巻き付く腕は気にしない。白瑠さんの顔が近くても気にしない。

眠ることがどんなことよりも最優先。男が況してや頭蓋破壊が趣味の殺人者が添い寝したって些細なことなのだ。

人間寝なきゃ生きてけない。

重くてそれ故に気持ちいい睡魔に身を委ねた。ポツンと落ちるように眠った。

目を覚ました時、隣に白瑠さんがいて心底驚いた。

完全に昨夜の事を忘れていたため、悲鳴を出すところだった。

すやすやと眠っている白瑠さんの腕を慎重に退かす。

この人、ずっとあたしにしがみついていたのか。器用だ。

眠れたあたしも。

「うにゃあ」と白瑠さんは枕に頬擦りして寝息を立てた。ヨダレを垂らしそうな気持ち良さそうな寝顔。

寝顔、可愛いな。

寝てれば可愛い生き物は多いものだ。

あたしはさっさと部屋を後にした。廊下に出れば朝食の香りがあった。

笹野さんがいるかと期待したがいなかった。

笹野さんの部屋をノックしてから開けると、空。

もう仕事にいったらしい。

この調子では暫く笹野さんには会えなさそうだ。

深夜に白瑠さんが部屋に侵入したことを愚痴りたかったのに。とソファに雪崩れ込む。

今日、白瑠さんのミッションがないなら買い物に行こう。食材の外食ばかりでは身体に悪いし、仕方ない。料理を作ろう。

出来るなら帰ってきた笹野さんにも作ってあげよう。一緒に住んで

いるのに寂しいではないか。

家族にもそんなことを思ったことがないのに、気持ち悪い。多分、他人だからこそその気遣いだろう。世話になってるのだし。

問題なのは、料理が出来ないと言うこと。白瑠さんに毒味してもらおう。あわよくばその毒の効果で大人しくなってほしい。

そうと決まれば行動だ。

起きた白瑠さんと朝食を済ませてから、買い物に行くとさえばついできた。

バイクを断り徒歩でスーパーへ。

お菓子を大量に注ぎ込まれたがまあ気にしないでおう。

お会計は当然のことのように白瑠さんが出した。

「椿ちゃん料理かあー何つくってくれるのかなかあ」

「期待しないでください。料理は出来ません」

「じゃあなんで作るの？」

「外食ばかりだと身体に悪いからです」

「あたしの料理の方が身体に悪いと思いますが」と小さく呟く。

「何を作る気なの？お肉やお魚やお野菜ちよこちよこ買ったみたいだけど」

持ったビニール袋を見る白瑠さんは懲りずに訊いた。あたしに訊かれても。

「魚なら焼くだけでいいから…あとはなるように…」

「あははっ！何そのアバウト！」

ケタケタと笑い上げた白瑠さんに心の奥で、覚えてろよ後悔させて

やる、と呟いた。

「あー、パソコンってありますか？」

「パソコン？」

ああ！と白瑠さんは笑って頷いた。

笹野さんの家に戻るなり白瑠さんは笹野さんの部屋に入っていく、ノートパソコンを持ってテーブルについた。

「いいんですか？笹野さんのパソコンを勝手に借りて」

「いいと思うよ、ファイルとかいじんなきゃ。使うのはネットですよ？」

無断で使うのは気が引けたが確かにファイルをいじらなければ大丈夫だろう。

座ってネット検索をした。

簡単な料理のレシピを探す。横からリクエストが聞こえるが総無視。何が七面鳥の丸焼きだ。

サラダならなんとかなる。

あとはあとは主役のおかず。というか大問題のおかずだ。

とことこと白瑠さんは冷蔵庫を確認してある材料を読み上げてくれた。

「肉じゃが！肉じゃががいい〜！ねーっ！っーちゃん！」

結局、白瑠さんのリクエストにすることにした。

昼は食パンがあった為、フレンチトーストを作って白瑠さんに出した。

散々料理が苦手と言ったのに白瑠さんは躊躇いなく食べてしまう。
チャレンジジャーなのか、バカなのか。

「んーっ！いいねっ！つばちゃん上手じゃんっ！美味しいよー！」

むしゃむしゃと一枚を食べたあとに白瑠さんは元気よくそう言った。
あたしは誰かの為に料理はつくらないから、寧ろつくれないから、
そうやって褒められると顔を伏せてしまう。
不意打ちだ。

ちよつと嬉しいぞ。毒を盛るとか企んですみません。

「ありがとうございます」

「んーんっ！美味しい！明日もフレンチにしてよ！んひゃあっ夕飯
が楽しみだにゃ」

ゴロゴロと喉を鳴らしそうな白瑠さんはまた一枚と食べた。

あたしも食べる。

うん。奇跡の成功だ。

ランチを食べ終わったあとは、白瑠さんの武器講座を受けた。い
かにこの武器で大ダメージを与えることができるか。

感想は、面白かった。

参考になった。

夕食。三人分の肉じゃがを作ったのだが、自信は。あえて言わな
い。

感想は他人から訊こう。

「……………」
「……………」
「……………」

沈黙。

すごい。

白溜さんが大人しい。

毒で大人しくなったよ。

さっきまで仔犬みたいにキャンキャン煩かった白溜さんが大人しいぞ。

深夜まで構ってと煩かった白溜さんが大人しい。

うん仕返しはできた。

「……すみません……」

とりあえず謝罪だ。

何をどう間違っつてこの味になったのかは知っている。材料全て適当に入れたあたしが間違っつてました。

全て適当の結果、肉じゃが？と首を傾げなくなるような味になった。つまりは微妙。

不味くはないが美味しくもない。どちらかと言えば不味い分類。あたしの失敗作。

なんでも平らげてしまいそうな白溜さんさえ、一口で止まっつてる。

どうしよう。

あたしは代わりに出すものを考えた。

すると直ぐに白溜さんが二口目を食べた。三口目とがむがむ食べ始めた。

「え、白溜さん！？無理して食べなくてもいいですよ、他の物を……」

「駄目だよ。せっかく椿ちゃんが作った料理だもん！食べれるから……」

にこつとした笑みのまま器に盛った肉じゃがを平らげた。

「作ってくれた料理を食べなきゃ！つーちゃん、ありがとう」
「……」

礼を言われる程ではないのに。調子が狂うな、と唇を尖らせる。

「毎日食べるから、作ってね！」

そう言っただけ残りも食べてしまう。全くこの人は……。
あたしは小さく「はい」と頷いてから、食べた。

翌日も笹野さんとは会うことはなかった。本当に帰って来ているのか疑問に思うが朝食が置いてあると言うことは帰って来ているのだろう。

今日は焼き魚。それを見下ろしてから、興味本意であたしは笹野さんの部屋に入った。ノックしたから別にいいだろう。許可はとっていないのだからどのみち不法侵入だけど。

ベッドは左側に置かれている。シンプルな机に昨日使ったノートパソコンがある。医療関係の本が並んであり、整っている。机の隣には、棚があった。棚の上には写真立て。

「だあーめだよあー、勝手に入っちゃ」

それを視認する前に白瑠さんの声が後ろから掛けられて震え上がる。

「え、いや……パソコンを借りに」

後ろを振り返れば白瑠さんは眠そうに欠伸を漏らしてドアに寄りか

かっていた。

あたしはすぐにパソコンに手を伸ばす。誤魔化しは通じなさそうだが。

「ふわわあっ」と白瑠さんは大欠伸をしただけで何も言わなかった。朝食を食べ、午前は武器講座を受け、ランチを作り食べて、夕食に向けて対談。

「ここは無難に」と何度も白瑠さんがリクエストしたが、あたしが食べたくないと言う理由で却下する。しかしよく考えると食べたい料理がなかった。のでリクエストの一つにあったチャーハンを作ることにした。

その結果は昨夜同様。

沈黙。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

何でかなんてわかりきってます。

あたしがアバウトだからです。

指定された量をきっちり計るなんてO型であるあたしには苦痛のことであるのだ。

全ての原因はこのあたしにある。

最早ちゃんと料理をする気があるのかないのか。定かではない。

「んー！でもこの春巻きは美味しいよ！美味しい美味い！」

「……………」これはまあ、食べれますね」

無理しながら失敗作を食べていたが白瑠さんの褒めた品に手を伸ばす。

「あたしの家庭での春巻きです」

これを春巻きと呼んでいいのかは知らないが。

ひき肉にみじん切りにしたニンニク、人参、玉ねぎ、それから塩コショウ、味の素を混ぜたものを春巻きの皮で巻く。細い棒状になったそれを揚げる。それだけ。

好みでケチャップをつけたりする。

それを白溜さんは気に入って次々と平らげた。奇跡が起きました。

「うわーっ！？ちよ、白溜さん！全部食べないでください！」
「えー？」

遅かった。気付くのが遅かった。

最後の春巻きはゴクリと白溜さんの胃袋にいつてしまう。

おい、こらっ！

「笹野さんの分……」

「ん……まあいいじゃん？ひき肉はあるし」

「同じ奇跡が起こせるとでも？」

あたしは白溜さんを睨みつけた。

白溜さんはただ笑い退けるだけ。

大体、この人突っ込めよ。

適量に材料をぶっ込むのを突っ込めよ。そして注意したまえ。

その夜は最悪だった。

上機嫌な白溜さんがまたもや、深夜に抜き打ちテストを仕掛けてきたのだ。

今度ばかりはキレて蹴り飛ばし怒鳴り散らして追い出した。

入ろうとする度にナイフを投げつけた。その内、諦めたのか静かになってあたしはそこから気を失ったかのように眠りに落ちた。

起きた時、何故ドアにナイフが突き刺さっているのか、真剣に考えてしまった。

そうだ夜這いだ。

あ。違う、夜襲の抜き打ちテストだ。

ぶちギレて白瑠さんを蹴り飛ばして追い出したのか。

溜め息を吐き、あたしは支度をした。確か今日は直々に武器を持ち、相手してくれると言っていたはずだ。

だが、しかし。

白瑠さんは口をきいてくれなかった。まるで。というよりそのまんまだ。

ソファの隅で、膝を抱えて拗ねている子供が一名。

あたしは何したのだろうか。ただ深夜女の子の寝室に入り睡眠を妨害したから追い出したただけだろう。

あたしは悪くない。

ナイフを投げたが、当たっていないのだから、悪くないはずだ。

あたしは悪くない！

暫く、あたしも白瑠さんの存在を無視していたのだが、子供の態度にムキになっても仕方ない。諦めて話し掛けた。

「白瑠さん。お昼ご飯にしましょう」

肩を叩いて声をかける。

白瑠さんはしぶしぶといった感じで振り向き、テーブルにつく。膨れっ面をしたまま。

まるで小学生の弟を相手しているようだった。

「ラーメン！？フレンチは！？フレンチがいいっ！！」

「食パンがないんですよ…」

バツバツ、と机を叩いた白瑠さんが駄々こねる。

実はあたしは笹野さんに白瑠さんの子守りを押し付けられたのかも
しれない。

駄々をこねた白瑠さんはあたしが作ったインスタントラーメンを
口にした途端「絶品っ！」と絶賛してご機嫌になった。

毒のせいできとうとう味覚が狂ったらしい。インスタントラーメンは
適量にすることが出来ないから、失敗しないから故なのか。

食べた後にご機嫌な白瑠さんが「食後の運動をしよう」と言い出
した。

互いにサーベルを持ち、いざ食後の運動。

「いやいや。待った。白瑠さん。食後の運動ならもっと…軽いのに
しません？」

「軽いよちょーかるい」

もつと常識的な食後の運動をしようと言いたかったが裏現実者に常
識的なものなんてないだろう。

あいつ悪魔だ。

絶対恨みを今晴らす気だ。

カキンツとサーベルが混じりあった。白瑠さんが突いてきた為、下
がる。

サーベルは突くだけの剣かと思っていたが、切れるそつだ。
こんな慣れないリーチで何するんだ。

「ちょ、白、るさ…ん！」

「ほらほらー反撃しなよー」

「ちょ、仕返しでしょ！？昨日ナイフ投げた！」

どンドン突いてきて攻める白瑠さんのサーベルをなんとか弾きつつ後退ると壁。

素早く廊下に向かう。

白瑠さんは器用に壁に穴をあけなかった。すげえ。

このまま廊下を行けば玄関を出なくちゃ行けなくなる。

広い場所で反撃。

そう思考が行きつき、あたしは目にはいったドアを蹴り開けた。

「ナイフを投げたことは怒ってないよー！」

「ん、きゃ！？」

まずった。

白瑠さんにはかり気を配っていて、後ろのベッドに気付かなかった。脚をとられ、ベッドにダイブ。

「君、昨夜きのうなんて言ったか覚えてないでしょー？」

白瑠さんは何の躊躇いもなくあたしの上に跨がった。サーベルの刃はあたしが動かないよう首に当てる。

おっと…殺される？

「君はねえー“うげえんだよてめっ！変態！寝かせろや！このクソ餓鬼！！串刺しにしてやんぞ！”って言って俺を追い出したんだよ」

あたしの真似だろうか、口調を変えて昨夜あたしが言ったであろう言葉を口にした。

覚えてません。

「おつかしいよねえ、俺、君より歳上なのにい」

「すみません、ブチキレて、記憶にございません。餓鬼とか言ってますみません。」

「それだけ？」

「串刺しなんて出来ませんすみません」

「違う違うちがぁう」

鈍い口調で白瑠さんは首を振り、顔を近付けた。他に何を謝るんだろうか。

きょんとしていれば、白瑠さんは言った。

「変態だよ、変態！」

……………。
謝るべきなのだろうか。

「俺、ただ添い寝したたって言っただけじゃあん？それを変態だなんて心外だぁ！」

演技じみた風に白瑠さんがやれやれと肩を落とす。

「いや……えーと、すみません」

「変態？あれかなあ、つーばきちゃんは、俺に犯されるとか思っちゃってるわけ？」

あたしの謝罪を無視して白瑠さんはニヤニヤと笑みを浮かべた。
え？

なんだろう。

この妙な危険な状況。

「んひゃひゃひゃひゃっ」

この笑い方は、絶対によくない。非常によくない。この大勢でそれはよくない。

「え、と…」

「犯してあげようかあ？」

「っ！！！！？」

頬に白溜さんの長い舌が這った。ビクリと震え上がる。

何考えてるんだコイツ！？

「ちょ、ちょっ白溜さん！？」

「ん」。可愛い反応、そそるねえ」

ぞわわっ。

「白溜さんっちょ、あたし未成年ですよ！？犯罪ですよ！？」

おっと、やってしまった。

ついに犯罪と言う言葉を使ってしまった。大量殺戮者に犯罪するなど、戯言だ。

「んひゃあ？強姦はまだやったことなかったなあんひゃひゃひゃっ」

火に油。

「白溜さん白溜さん白溜さんまじで勘弁してくだうひゃい！？」

じたばたしたらサーベルが頬の皮を切った。それだけならまだしも

その傷を白瑠さんが舐めたのだ。舐めたと言うより、吸った
だめだ。

こんな経験ない為、対処法がわからない。

強姦なんて…。え？経験ないよね？あたしだけか？

まだ秀介の方が可愛い。

いや、まだで秀介は可愛かったが。唇を奪うなんて可愛いもんだ。
この目の前の子供^{ガキ}なんて、操まで奪おうとしているのだから。

サーベルを持っていない手であちらこちらを触りまくる。

サーベルを持っていない手はあたしのサーベルを持つ手を押さえ込
んでいる。故に互いに使えるのは片手。

しかしあたしの片手ごときが白瑠さんに敵うわけない。

「っ……っ！」

白瑠さんの唇は今度、あたしの耳をもてあそんでいる。

撥ったくって気持ち悪くてなんだか。なんだか……変な気を起こし
そうだ。

とりあえずヤバイ。

あたしの理性が。

「ふふ…耳、性感帯」

何故秀介とこの人はわかるんだ。

「他にどこが性感帯なのかなあ？」

しかも同じことしてるよ。

耳元で喋りながら服の中に手を入れてくる。

もう限界だ。

「あはははっ、つばちゃん可愛いなあ、真っ赤」

真っ赤にもなるわ。

蒸気が出るくらい顔は熱い。赤くなったであろう頬をまた舐める白瑠さん。

「白瑠さん、あたしに手を出したら笹野さんに泣きつきます。笹野さんが何もしてくれなかったら出ていきます。料理ももうやりませ
ん」

ピタリ。

利いたのか、白瑠さんは手を止めて目を丸めた。手はかなり際どいところにある。

暫くして白瑠さんは起き上がって腕を退ける。

その顔が残念そうなのは無視だ。

「……ちよつとだけ」

「だめだ」

何がちよつとだけだ。

ちよつとつてどこら辺だ？いや、別に好奇心なんて微塵もないぞ。これっぽっちも。

本当に残念そうに白瑠さんはあたしの上から退いた。ぷくーと頬を膨らませてる。

「……添い寝は？」

「襲われた相手に許可すると思ってるんですか」

起き上がって乱れた服を直す。直すと言ってもズボンとワンピースだけなので大して乱れてない。

白瑠さんは落ち込んだ。落ち込んだと表現していいのかわからないが黙り込んだ。

「あ、えーと……今日のご飯は何かいいですか？」

そう言えば、白瑠さんはピアと輝いた顔で振り返った。

「ハンバーグがいいーっ！」

子供だこの人。

真剣に、そう思った。

白瑠さんのリクエスト通り、無難にハンバーグを作った。添える野菜も忘れない。じゃがバターも作ったがコイツは失敗した。それでも食えると白瑠さんは平らげた。

笹野さんの分はラップをして白瑠さんの手が届かない場所へと置いといたので大丈夫。

「んひゃあー！美味しいー」

絶対この人今までろくなものを食べてこなかったに違いない。

絶賛する白瑠さんは信用しないようにしよう。あたしの味覚も信用できないから笹野さんには毒味をしてもらわなくては。

ごめん、笹野さん。

そう呟きながらあたしは白瑠さんが寝室にこもったあとに笹野さんの夕飯の支度をした。

そう言えば笹野さんはいつも何時に帰宅しているのだろうか。病院からここじゃあ車で二時間かかるらしいが。

壁に秒針を進ませるシンプルな時計を眺めながら考えた。
チクタク、時計の音しか聴こえない。

チクタク。

チクタク。

チクタク。

チクタク。

チクタク。

チクタク。

いつしか、他の音が聴こえてきた。

それで目を覚ました。

どうやら寝てしまったらしい。

うつすらと目を開くと、部屋は光りに照らされている。もう朝のようだ。

カチャカチャと振動まで伝わる音はすぐ近く。コーヒーのいい匂いがする

テーブルに腕を乗せて眠っていた。肩には毛布がかけられている。

あたしは肩の毛布を掴んで顔を上げた。

目の前には数日ぶりの笹野さんがいた。

ノートパソコンを開いて片手に持ったコーヒーカップを口元に運び飲んだ。

カチャカチャとした音の正体はキーボードだった。

あの気品のある微笑であたしを見た。

「おはようございます、椿さん」

「……おはようございます、笹野さん……」

視線を落とすとテーブルの上には、別の料理が並んでいた。朝食だ。ハンバーグは見当たらない。

「ハンバーグ。美味しかったですよ。料理、出来るじゃないですか」
「……あれは……偶然上手くいったんです」

丁寧な口調で言われて、照れくさくなり髪をいじって顔を伏せる。
ちゃんと食べてくれたらしい。

椅子に背中を預けて、時計を見上げた。9時だ。いつもなら笹野さんが出勤している時間。

「お仕事は？」

「休みですよ」

なんだ……。と落胆する。

てつきりもつと会えないとばかり思っていたのに。

「寝たのですか？」

「はい？」

「白瑠と、寝たのですか？」

笹野さんの唐突の質問に固まる。

60人の人間を殺してあれだが、あたしは。純粹です。下ネタを男と盛り上がって話せるゲス女ではありません。

「この前一緒のベッドで寝てましたよね」

「起こしてくださいよ……。眠気に負けて添い寝を許しただけです。

何もされてません。……昨日は犯されかけました」

最後の部分を聞いて笹野さんは吹き出した。口元に拳を当て笑った姿は、大人の魅力とやつが出ている。

笑われてるが悪い気はしない。

「白瑠も男ですからねえ？許してあげてください、ふふっ」

「やられてたら許しませんよ。侵入した上にヒトの睡眠妨害したので追い出したら拗ねて押し倒されました、どうにかしてください」

「へえ？その気になった白瑠をどうやって止めたのですか？」

うん。軽くスルーされたぞ後半の台詞。

「笹野さんに泣きつくと」

「それは残念」

何が。

「でもそれで白瑠がやめるとは思いませぬ」

「味覚が可笑しくなったらしくあたしの駄目作の料理を作らないと言ったらやめてくれました」

笹野さんはクスクスと笑った。

器用にあたしと喋りながら笹野さんはパソコンのキーボードを叩いていく。

「あ、笹野さん。パソコンお借りしました、ありがとうございます」

お礼がまだだった。

あたしが礼を言うつと笹野さんは「いいえ」と微笑んで首を振った。

一体今、なにやっているかを訊くと笹野さんは手を止めコーヒーを飲んだ。

「有給休暇を取ったので、裏の仕事を探しているところです」

「裏？」

目を丸めて首を傾げる。

裏。では殺しの仕事か。

笹野さんはちまちま仕事を探してやっていると言っていた。白瑠さんは言った。たな。

「今夜、白瑠は貴女を連れて出掛けると思いますよ。仕事が入ったらしいですから」

「え？」

それは初耳だ。

なんであたしは知らないんだろうか。

「笹野さんは別の仕事を？」

「ええ。そうですよ」

「見てもいいですか？」

「どうぞ」

笹野さんの許可を貰ってから立ち上がり背中に回った。笹野さんの肩越しから見えたパソコンの画面は何処かのサイトを開いていた。なんともオカルトサイトみたいなデザイン。

「ネットなんかで仕事を探すんですか？所謂、裏サイト？大丈夫なんでしょうか？」

「はい。他の人間にはアクセスできませんよ。知り合いのハッカーが守っていますからね」

なるほど。裏サイトは犯罪目的に依頼などが書き込まれて以前ニュースでも騒がれていたやつだ。

こちらは裏は裏でも裏現実サイトらしい。

「知り合い、よりも友人ですかねえ」と笹野さんは付け加えた。

「へー？ハッカーも裏現実にいるんだ…。その友人を通じて仕事を見付けるんですか？」

「ええ、名の売れない殺し屋はこれか、自ら交渉に行くしかないのです」

名の売れない殺し屋。

笹野さんが？

鬼と恐れられる秀介を相手に時間稼ぎをしたのなら十分手練れだと思っていたのに。

「こーきくんはあ名を売る気ないからねえ」

眠そうな白瑠さんの声。

大欠伸をしながら白瑠さんがあたしの座っていた椅子に腰を下ろした。

名を売る気がないから笹野さんはネットから仕事を探す。

対しての白瑠さんは有名らしい。

「頭蓋破壊屋で有名な白瑠さんは向こうから仕事くるってわけですか？」

「そーゆーことおー」

「腕利きの方が確実に遂行してくれる、成功確率が高い方がいいでしょう？」

ふむ。

何よりもプロの方が安心だ。

笹野さんに相槌を打っていけば、パソコンの画面が変わった。どうやら仕事が決まったらしい。

住所が見えたが白瑠さんが口を開いたため、視線を向ける。

「今夜はねえー仕事依頼したいって言ううーヤクザのところに行くからね」

「……ヤクザですか」

なんか嫌な響きだ。

「大丈夫大丈夫っ。ただのヤクザだよーお？裏現実には足突っ込んでる」

何が大丈夫なのだろうか。

全く謎だ。あたしはまだまだ平凡人のもよう。

「出向くんですか？危なっかしいですね」
「まー、その分信用は厚くなるはずですよ。少なくともネットよりは」

笹野さんはあたしを振り返ってそう答えた。

白瑠さんは白瑠さんで朝食を食べ始める。自由人め。

あたしも食べようと笹野さんの隣に腰を下ろす。

そんなあたしの行動が意外といわんばかりに目を丸める白瑠さん。
え？なにか？

「残念でしたね、白瑠。椿さんを抱けなくて」

「ぶふっ！！」

「ぎゃーっ！！」

笹野さんが然り気無く言ったら白瑠さんは口に入れたものを吹き出した。

「もぉ、やだなあ幸樹。食事中だよ」

「食事中に吹いてる貴方に言われたくないですよ、白瑠」

ご飯粒をパソコンから退ける笹野さんがやれやれと肩を竦める。
汚いな！

「いきなり未成年に欲情して、どうしたんだい？」

「えー？そりゃあ、つばちゃんが可愛いからあ。押し倒したらつい」

にまつ、と白瑠さんはあたしに向けて笑いかける。

…寒気が。

「おやおや。それはそれは。秀介君が聞いたらどんな反応するのでしょうか？」

笹野さんはあたしに目を向けて意地悪に笑った。だからもう秀介は忘れてくれ。

「なんならナースの制服を持ってきてあげましょうか？似合いそうですね」

「うわぁ！いいねえそれっすぐくそそるよ！」

「私もまぜていただきましょうか」

「ちよつと！やめてくださいよ！冗談は！食事中ですよ！」

完全に食欲が失せた。

二人してとてつもないことを話すから食べやしない。
白瑠さんが乗り気なのが恐ろしい。

「無理矢理なんてしたら出ていっちゃいますよ」

「えー？つばちゃんつたら、真つ赤になると凄く可愛くて食べちゃいたくなるんだよー？誰だつて押し倒したくなるよお」

「真つ赤になつて欲情する男子は最近出会つた貴方ともう一人だけですよ。因みにもう一人の名前は教えません」

キツパリとあたしは吐き捨てる。

異性に抱きつかれたことは…まあ、あるとして。唇を奪われたり押し倒されたりは、初めてだ。すみませんね！

真つ赤になると可愛いとからかわれたのは山ほどだがな！

「そおーなのお？最近の若者の好みはわかんないねえ」

「白瑠さんだつてまだ若いじゃないですか……」

オッサンみたいなことを言わないでほしい。うん。

午前は笹野さん達と他愛もないことを話した。多分世間話。

途中から裏現実の世間話が出て、ちよつと困つた。

「なにやら集団がかき集められてるそうですね。一体何が目的なのでしょう」

「さーねえ。でも名の知れた殺し屋ばかりだから、暗殺部隊みたいなもんとかかなあ？」

何やら裏現実で妙な動きをしているらしい。それも名の知れた殺し屋ばかりが集まつて何かを企んでいるとか。

「手を組んで仕事とか珍しいんですか？」

ジュースを注いだコップを渡してあたしは会話に入った。

「珍しくはないよ。でも一人の方が報酬は多いからね、仲間割れも

生じる。そんなリスクを負うぐらいなら一人でやるのが殆どだよ」

珍しく真面目な口調で白瑠さんは答えて、ポテトチップスの袋を開ける。

「問題は数だな、五人以上の腕利きな殺し屋が集まるのは驚きだ。どうやらそいつらは何だかチームを作ってるみたいなんだよ。近い内に虐殺が起こりそうだねえ」

「大金持ちが確実に成功してほしくて集めたって可能性は？」

「可笑しいのは一依頼者がいない(、、、)と言うことなんですよ。依頼者がわからないのは珍しくないのですが、どの情報屋も依頼者の存在が掴めていない」

笹野さんは強調して言った。「まるで、ではなく依頼者がいない」と。

これはただ事ではないようだ。

「何かまずいんですか？」

「それはそいつらの出方次第さ。油断ならない奴が一人、コイツがきつとリーダーだな。俺とは仲が悪い奴でねえ、もしかしたら俺に喧嘩売るかもしれない」

あくまで一つの可能性だ。と白瑠さんは言った。その雰囲気はただならぬ感じ。

仲が悪く油断できない奴が殺し屋を集めているのならかなりまずいのでは。

あたしが苦い顔を見ると笹野さんは優しく笑いかけた。

「大丈夫ですよ、彼はそんな冷酷ではありません。私や貴女には被害がこないと思います。喧嘩を売るなら白瑠だけ被害を受けるでし

よう」

「あーよかった」

「ちよつと、二人が冷酷だよお」

おどけたように言ったが白瑠さんは無表情。ポテトチップスをパリパリ食べていく。

「違う可能性は？」

「単なる暇潰し」

は？

暇潰しだと？

まだ白瑠さんに喧嘩売るのがましだ。実力なんて知らないが、白瑠さんに喧嘩売るとなればそれ相応それ以上の力をつけるはずだから凄いはず。

それが、暇潰しなんて。意味がわからん。

「あとは大量殺戮とか？大物と対決するとか？まあ可能性なんて無限にあるさ。大半は暇潰しだろうね、あいつの考えはそんな感じだよ」

やれやれと白瑠さんは演技じみた風に手を振り、ポテトチップスを全て平らげた。わお。一人でもう食べちゃったよ。

「つまりは何か事を起こしてくれないと彼らの目的がわからないってことですね」

「そーゆうこと。まあ、椿ちゃんは心配しなくていいんだよ」

「わかってますよ」

あたしは別のポテトチップスを開けて食べた。

「その人ってどんな人なんですか？」

関わることなんてないと思ったが興味本意で訊いてみた。

白瑠さんと睨み合うような人間なんていないと思っていたもの。一体どんな奇人なのだろうか。

「アイツ？アイツあねえ…食べない奴だよ。気持ち悪いねえ、ニヤニヤしながら血で真っ赤になるんだ。何考えてるかわかんない奴だよ！」

真っ赤になる以外、白瑠さんが当てはまるのは気のせいだろうか。

「俺に何て言ったと思う？“お前のその人間の頭を粉碎する手は自分に使えるのか”って！バツカだよねえ！アイツ相当イカれてんだよ！」

「因みに自分に使えるんですか？」

訊いたら白瑠さんに冷たい目を向けられた。怒ってる。

とりあえず謝罪してポテトチップスを差し出した。白瑠さんは受け取りバリバリと食べた。

「何度か彼は白瑠と獲物を取り合った仲なのですよ。白瑠を怒らせる才能の持ち主なんです」

「それはそれは…貴重な逸材ですね」

「でしょうっ？」

笹野さんは愉快そうに笑った。あたしは白瑠さんの冷たい目から避けて、笹野さんの影に隠れる。

白瑠さんを怒らせる珍しい存在か。会ってみたい。

でも逆撫でされるのは勘弁してほしいものだ。
名前も知らない彼のことはひねくれた策略家、とあたしの頭の中に
インプリントされた。

ランチまで白瑠さん是不機嫌だったがフレンチトーストを出せば
機嫌を直してくれた。

うん。単純だ。

笹野さんもいつもの調子で褒めてくれた。笹野さんが言うなら、出
来栄えは上々だな。

午後は仕事にいく準備をした。

服装はまた白瑠さんの服だ。身体中にナイフを仕込む。ブーツの中
にも底にもダガーナイフ。

勿論、あのベルトもつける。腕にもホルダーをつけてナイフを装着。
これなら大丈夫そう。

「腕は動かせるね？」

「はい。問題ないです」

完全武装。なんだかか兵士になった気がする。

パーカーを着れば武装は隠れた。パーカーは凄いな。マシンガン
を入れててもバレなさそうだ。

髪を束ねて、その中に針を入れられた。ピッキングに使うそうだ。
念入りだな。

「様になりますね。はい」

笹野さんがあたしにハンチング帽を差し出す。女の子の帽子だ。妹
さんの物だろうか。

そんな物を仕事に使っていいのか。

笹野さんの顔を伺っていれば微笑んで無理矢理被らされた。

「じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃい。生きて戻ってきてくださいね」

笹野さんはそう明るく笑ってあたし達を見送った。

死ぬかなあ。

なんて現実逃避しつつもあたしはバイクの後ろに乗った。

またもやノーヘル。次は無理言ってヘルメットを買ってもらおう。
エンジン音を轟かせ、白いバイクが風を切る。

数時間と飽きるほど走ったあと、目的地についたらしい。

空はもう真っ黒だ。

バイクを降りれば、一つのビルの前へと白瑠さんは歩む。

ビルの入り口にはスーツに身を包んだ男が二人。銃を隠し持っていて
そんな顔だ。

「スカルクラッチャー
頭蓋破壊屋だよ」

その一言を言えば中に入ることを許された。非常に中に入りたくな
かったが、白瑠さんに手招きされては入るしかない。

通された部屋には、スーツの男達が十人はいるだろうか。高そう
な黒皮のソファが二つ。部屋の奥には男達が囲む机があった。

その机の前にいるのが恐らくお偉い人だろう。

「君が頭蓋破壊屋かね？」

「うん。君が毅春風組きはるかせの組長でいいのかな」

白瑠さんに声をかけたのは依頼者である毅春風組の組長。

黒い着物を身に付けた中年の男性。顔の右頬には唇にかけて切り傷
があった。

その組長は頷いてから、あたしに目を向ける。

白瑠さんは何も言われていないのに、ソファにどっかり座ってしま
いあたしも引つ張り座らせた。

「そのお連れは？」

「俺の相棒さ」

「相棒……ね」

じろじろ見られたがあたしは口を開かない。喋らなくていいと言わ
れている。

笹野さんにも喋らない方がいいと言ったのだ。

帽子を深く被っているから女だとバレていない。バレたらからかわ
れるだろう。

恐らく組長はこんなチビな若そうなガキが頭蓋破壊屋の相棒とは。

とかなんとか思っているのだろう。

相棒ではない気がする。

「仕事はなんだい？ 毅春風組の組長さん」

白瑠さんが本題に話を持って言った。

組長は顎で指示して部下の一人でソファの前にあるテーブルに写真
を置いた。

「雲山華組くもはんかの組長だ。そいつを消してもらいたい」

「ふうん？ 組同士の争いか。彼だけでいいだね？」

白瑠さんは写真を手にして見たら、あたしに渡してきた。

写真にはまだ髪が黒い中年男性。隠し撮られたものだ。

ヤクザ同士の抗争らしい。

「彼を殺してくれればいい」

毅春風組の組長はそう一言頷いた。

可笑しいな。白瑠さんはあたしの為に一般人の殺しの依頼を探していたのではないのか？変だなあ。

「りょーかあい。じゃあ明日にでも始末するよ」

「それがな。どうも問題が起きてしまったのだよ」

「問題？」

組長が「つれてこい」と言えば、拘束された男が部屋に入れられた。酷く怯えた彼は傷だらけだ。

「彼は雲山華組に寝返ったんだ。裏切りおつて、殺しを頼んだことをチクつたのだよ」

「それはあ、問題だねえ？隠れられる前に見付けて片付けなきゃだ。今すぐ片付けにいくよ」

つまりは警戒している。なんとも殺りづらい状況の上、身を隠されでは困難な状況。

急げ、と言っわけか。

白瑠さんが立ち上がると組長は言った。

「裏切りはどうしても許せなくてねえ…。金は出すからそやつを今ここで殺してくれぬか？君が本当に頭蓋破壊屋かどうかを知りたい」

裏切りが出た。

だから白瑠さんも疑っている。

この部屋に脳みそをばらまけなんて言うとは。やめた方がいい。しかし口を開く気がない為、言わない。

「んひゃあ？わかったよ」

白瑠さんは軽く笑ってその裏切り者の前へと歩み寄った。ガクガクと震える男が見開いた目から涙を落とす。

「助けてくれっ！！死にたくないっ！！頼むっ……！許してくださいっ組長おっ！！！！」

情けないほど声を上げた。まるで悲鳴だ。

誰もがそんな悲鳴を聞き流す。

白瑠さんは縛られた彼の首を掴み上げて立たせた。

「ばあいばあい」

「っひい！！！！」

一瞬で終わった。

男の頭は破壊され、爆発したかのように残骸は壁に貼り付く。

部下である男達に動揺が走る。たじろぎ。青ざめ。吐く者もいた。

恐怖で震える者もいる。

一人だけ。動じていない者がいた。

組長だ。

頭の残骸が貼り付いた壁を満足そうに見てから、あたしを観察するように見た。

半場呆れたあたしは動じてはいない。それが良かったのか、満足そうに笑みを浮かべた。

「ありがとう。頭蓋破壊屋。では、仕事を頼むよ」

「オツケー。終わったら金を取りに来るから用意しておいてねえ」

白瑠さんは手を振り、ドアを開いた。あたしも立ち上がりドアに向

かう。

不意に背後に気配を感じた。
ポケットに入れていた手を抜き、背後に立つ男の首に当てた。握ったナイフを。

その男が凍り付く。片方の手には宙に浮いたまま。もう片方には写真。

「忘れ物だよ。相棒君」

組長が言った。愉快そうに。

ただターゲットの写真を渡そうとしただけのようだ。
あたしは黙ってナイフを下ろし、写真を取って待っている白瑠さんと一緒にその場を後にした。

「すごい組長でしたね」

「ん？何があ？」

「部下は皆貴方にびびってたのに彼だけは笑ってましたよ」

流石は組長と言ったところか。

白瑠さんは大して興味がないようでバイクに跨がった。あたしは写真を見てからポケットに入れて乗り込む。

「徹夜になりますか？」

「帰るまでそうなっちゃうねえ」

何だか楽しげな白瑠さんの身体にしがみつけば、バイクは走り出した。

一時間で辿り着けた。

深夜だからかなのか、人気がない街中だ。

「作戦はあるんですか？」

「部下は蹴散らして頭を潰す」

シンプルな作戦。

最早作戦ではない。訊いたあたしがバカだった。

バイクを降りて、歩く白瑠さんの後をついていけば、一台のリムジンが目に入る。

そこで白瑠さんが止まれる合図で手を上げた。

「あれ？」

「うん。間に合ったみたいだね。俺が部下を引き付けるからつばちやんはターゲットだけに集中して」

「ああ……はい」

どうやらあたしを援護してこの仕事を成功させるつもりのようにだ。

「準備は？」と訊かれ、深呼吸。「大丈夫です」と頷いた。

ニツと笑った白瑠さんはリムジンに向かって歩き出す。

あたしもついていく。片手は背中のカルドを握る。もう片方はポケットのナイフを握る。

「こんばんにゃー！雲山華組の組長はいるかあい？」

そう陽気に話し掛けた相手は、リムジンの隣に立つ四人の男。

「なんだ貴様は」

「んん？俺はねえ届け物をしに来たんだよ」

「届け物だと？」

「うん。地獄行きチケットをね」

白瑠さんはそう男に告げて、蹴り飛ばした。

「なんですか今の。ダサいです」

「そーお？」

「てめえらっ！！」

「殺し屋が来たぞ！！」

ビルの中にいる仲間伝えたのか、一人が声を張り上げた。

その男を白瑠さんは顔面を掴み、粉碎する。

他の三人がたじろぐ中、頭のない男の懐から銃を抜き取った。

「チャカだあ」

「こいつっ…！！」

男達が銃を取り出し、こちらに向けてくる。だが、白瑠さんの方が早かった。

ドカドカドカッ。

銃声三発が命中。彼らは倒れた。銃の腕前も中々だ。

「つばちゃん、裏口から行きな」

白瑠さんはそう指示した。

言われた通り向かう。

始まったのか銃声が響いた。

裏口は無警戒ですんなり入れた。どうやらほぼ表に向かったらしい。部下達を白瑠さんが引き付けている間に上にいるであろうターゲットを殺そう。

上に階段を上がっていく。

ドアに男達が立っているのを見付けた。あの部屋にいるようだ。カルドを取り出す。もう片方にはダガー。

カウントをして、飛び出す。
一人にダガーを投げつけ、もう一人を切りつける。
他の男達が銃を構える前にドアを開き、中に入る。
鍵をつけて侵入を阻止。
素早く中にいる人物を確認。
いた。
写真の男だ。

「殺し屋め！」

雲山華組の組長は素早く日本刀を抜いた。

面白い。日本刀を相手にするのか。思わず笑ってしまった。
カキンツ。

日本刀とカルトが交わり弾く。

一筋縄ではいかないようだ。

カルドより長い刀を振り、攻めてくる。距離を置きながらカルドで防ぐ。

ナイフを投げ付けるが避けられた。

ふむ。一般人相手は激楽だ。

白瑠さんのように動揺させる技はない。なんとか隙を作り、殺らなければ。

ドアが蹴り破られるのも時間の問題。

距離を取り、睨みあう。

あたしはカルドを握る左腕のホルダーからナイフを取り、構えて向かった。

左手のカルドを振り下ろす。無論、刀で受け止められた。

それはわかりきっていたこと。

もう片方のナイフを、振り上げた。

惜しい。

肩を掠めただけだ。

「く、うっ！」
「ぐっ」

雲山華組の組長に蹴り飛ばされた。窓の下の壁にまで飛ばされる。

「いつてえな…」

立ち上がると、ドアが蹴り開かれた。

銃を構えた大男と目が合う。

素早くあたしはテーブルを踏みつけ、盾にした。
しかしテーブルごとくときでは弾を防げず、貫通する。

「ちっ」

貫通した弾が割った窓から外に出る。弾丸の雨だ。落ちる前に壁にナイフを突き刺し留まる。

帽子が落ちた。ああ最悪。

そう長くは持たない。

直ぐにあの大男が確認で窓を覗いた。腕に力を入れてその大男に蹴りをお見舞いしてやる。

ナイフを取り、中に戻り倒れた男の首を裂く。銃を掴み、ドアにいる男達に発砲。

ターゲットがない。

ちっ。逃げられた。

廊下に出た瞬間、先程とは比べ物にならない弾丸の数が飛んできた。腕にナイフがなければ腕はやられていた。

直ぐに部屋に引っ込む。

出口は窓しかない。

残念ながら四階だ。

白瑠さんのように降りたら足が折られてしまう。

窓を覗くと手を振る人影が見えた。

白瑠さんだ。

あの人あんなところで何しているんだらうと停止する。

停止している場合ではない。発砲してきて身体が思わず動き、落下。
下。

幸い、白瑠さんが受け止めてくれた。

まだ生きてます、笹野さん。

「うひゃっひゃっ、血液はあるかい？」

「ありますあります。組長の首取り損ねました」

動揺しつつ頷いて報告。

白瑠さんはいつもの調子で笑いあたしに帽子を被らせた。

「らしいねえ、バイクで追いかけましょーか」

「白瑠さんは表にいたんじゃないんですか…」

「リムジン動かして裏から行っちゃったんだよお」

なんだその子供の言い訳のような口調。

とりあえず降ろしてもらい、追跡する為にバイクを取りに向かうことになった。

路地から出ようとしたが、白瑠さんにナイフが飛んできて止まる。

「……………んう？」

そのナイフを軽く避けて白瑠さんは振り返った。

「止まりやがれ！！スカルクラッチャー頭蓋破壊屋！」

酷く、懐かしく感じる声にあたしも振り返る。

そこにいたのは、秀介だった。

黒いジーパンにジャケット姿。

片手にトライデントを握り、白瑠さんを睨み付けている。

「ありやりやあー？しゅーくんじゃん。早いねえもう骨折治っちゃったの？」

「てめえの足をへし折ってやる！」

軽い口調で白瑠さんは秀介に話し掛ける。秀介は変わらず睨み付けた。

「秀介君……」

「！、椿っ！！」

名前を呼べばあたしだと気付き、秀介は目を丸める。

「椿！無事か！？」

その言葉にズキツと胸が痛んだ。

「てんめえ！クラッチャー！椿に何の用だ！？さらいやがって！」

「何って。世話してあげてんの。裏現実の新参者だからねえ」

白瑠さんは躊躇いもなく、隠そうともせずには答えた。

「ああ！？てめえ勝手に引き込んだのか！」

「56人殺して裏現実に入らないわけないじゃん、ひゃひゃっ……」

ギロリ、と白瑠さんを睨み付ける秀介。
あたしにチラリと目を向けてから秀介はまた白瑠さんを見た。

「椿を返せ」

「んう？やあーだっ」

低く言った台詞を白瑠さんは悪戯な笑顔で断る。

「椿は俺のものだっ！！返しやがれっクラッチャー！！！！」

ブチキレて秀介は怒鳴った。

あたしは顔をひきつらせる。

「えー！つばちゃんはしゅーくんの物なのお？」

「違います違います違います！秀介君！君の物になった覚えはありません！」

「クラッチャー！てめえ！俺の椿を気安く呼んでんじゃねえ！」

「あたしの声聴こえてる！？」

「椿と俺は付き合ってる！！」

「えー！？本当！？」

「違います！付き合ってます！秀介っ！デマを堂々と言い切るな
！」

「椿は俺と付き合っただろ！？付き合いたって言ったじゃん！！
俺達恋人！」

「いつ、言っていないもん！！！！」

三人で声を上げる。

夜の路地は異常に響いた。

何故か勝手に秀介は恋人にしている。言っていないもん。真っ赤にな
って否定する。

「白瑠さん先に行ってください！」

「え、でも……」

「白瑠さんしかバイク運転できないでしょ！失敗する気ですか！」

きつく言えば白瑠さんはしぶしぶと歩き出した。

「待てっ！」

追おうと踏み出した秀介に先程飛んできたナイフを投げ返す。

グサリと秀介の足元に突き刺さった。

あたしが立ち塞がるのを見て、秀介は眉間にシワを寄せる。まるでこの状況が理解しがたいと言いたげな表情だ。

「椿……」

「仕事中なの」

「…殺し屋かよ。やめろ、こっちにくるんだ椿。間に合う、帰ろう」

秀介は武器を持っていない手を差し出した。

「帰る場所なんてないよ。帰って刑務所に入れて？」

「椿が犯人だなんてバレてない！南ちゃん達が帰ってくるのを待ってる！」

「血まみれになったのを忘れて南達と笑えって？無理よ。殺しちゃう」

あたしが首を振れば、秀介はもう南達の名前を出さなくなった。

あたしはカルドを秀介に向ける。

「構わないで。忘れて。あたしは白瑠さんについていくから。それ

を許さないのなら」

許さないのならば。

「あたしを殺して」

冷たく、吐き捨てた。

酷いことを言ったかもしれない。いや、言ったんだ。

好意を抱いてくれて、守ると言ってくれた秀介にこんな仕打ちは、酷い。

わかっている。

わかっているからこそだ。あたしのは忘れるべきなんだ。

これは秀介の為と言いついて聞かせて、本当は自分を守る予防線。

秀介が心配してくれるだけで痛む。優しい人間に想われる罪悪感。劣等感や自己嫌悪に押し潰されたくないから、突き放す。

やめてくれ。近寄るな。離れてくれ。痛いんだ。

カララッ。

トライデントがコンクリートの上に落ちた。秀介は手を差し出したままあたしを見つめる。

「来て」

そう言った。

「ここに来るだけでいい」

それだけを言う。

何を企んでいるんだ。

その瞳はただあたしが近付くのを待っている。

見つめて、見据えるように、哀れんだような苦しそうな瞳。

爆発音が轟いた。白瑠さんが仕留めたのだろうか。

「早く…アイツについていくのは許すから!」

頼むと秀介は辛そうに言った。

刹那だけ考えて、秀介の元に歩み寄る。静かに警戒しながら、秀介の元に来た。

「!?!」

ぐいっと引き込まれる。

思わずカルドを掴む手を振り上げようとしたが、その手首は握り締められ、固定された。もう片方の腕は背中に回され、締め付けられる。

苦しいくらい、抱き締められた。

「アイツについていくのは…許すから…許すから…。死ぬな!誰にも殺されるな!それだけは…それだけは許さないからなっ!」

ギュッと抱き締め、秀介はそう苦しそうに言った。あたしも苦しくなる。

喉の奥が痛い。胸が痛い。

「俺は…俺が帰る場所になる。だから…死ぬな、椿。椿…好きだ…」

あたしの頬を両手で押さえ、秀介は真っ直ぐあたしの目を見た。やめてくれ。

「好きだ」

そんなことを、言わないでくれ。

真っ直ぐな瞳を見れず、顔を伏せる。

すぐに秀介の唇が重なった。押し付けられ、口付けをされる。

秀介の温もり。

変わらない。

あの病室にいた時と、変わらない。

あたたかい温もり。

身を委ねたくなる。

激しくも優しいぬくもり。

「椿……」

甘く名前を口にする秀介があたしの弱いところを撫でる。耳を、首を、うなじを。

思わず声を洩らす。

秀介はまた、あたしを抱き締め引き寄せる。

その時、バイクのエンジンが耳に届いて、咄嗟に秀介を押し退けた。

路地の向こうにバイクに乗った白瑠さんが見えた。

あたしはそっちに向かって走り出す。

「椿っ！！」

秀介が追い掛けてくる。

振り返らずバイクに乗り込む直ぐに白瑠さんはアクセルを回して走り出す。

「椿いつ！！！！」

秀介の声は、轟くエンジン音によって掻き消されていった。
耳は風を切る音とエンジン音しか聴こえないはずなのに、秀介の声
が幻聴として聴こえた。

椿。

死ぬな。

俺が帰る場所になる。

椿。

好きだ。

好きだ。

椿。

彼も。酷いことを。言う。

「あたしを殺して」

小さく呟いた言葉は風に掻き消された。

兄、二人

「白瑠、どうしたのですか？浮かない顔をして」

眠い。先ず、思ったのはそれ。

重たい瞼を上げる。テレビとテーブルが目にはいった。どうやらソファで寝ていたらしい。

テーブルの上には毅春風組から受け取った報酬の入ったアタッシユケースが置かれていた。

「昨日ねえ、秀介に会ったんだよお」

「相変わらずの神出鬼没ですねえ」

「その時さあしゅーくんが、つばちゃんの恋人だって言ったんだ」

「秀介君が？はつきりと？」

何を話しているのだ二人で。

恐らく笹野さんと白瑠さんはテーブルのところだろう。

「つばちゃんは否定したけど……秀介君はゾッコンって感じだったよ」

「ほーう？」

笹野さんの笑う声が楽しげだ。ああ、もう。秀介のバカヤロー。

あたしは起き上がった。すぐに二人はあたしに気付いた。

「にゃほーつばちゃんおはよう」

「おはようございます、椿さん」

「…おはようございます、お二人とも」

うーんと背伸びして息を吐く。

「あたしいつ寝ちゃいました？」

「帰ってくるなり、ソファに倒れて報告してから眠りましたよ。“あのクソじじいが刀なんか振ってくるから”とか“大の大人が銃で応戦とかばっかじゃねえの”とか“クラッチャーはなんでノーブランなんだよアホたれ”と言っていました」

「……」

「ついちゃんつて眠くなると口が悪くなるのかなあ？」

さらりとコーヒーを飲みながら笹野さんは言った。

ニコニコ。白瑠さんが笑顔。

笑顔なのになんか怖い。

「えっと……本当に覚えがないツス」

「白瑠、どうやら酒を飲ませて潰せば記憶が飛ぶタイプみたいですよ」

「わーい！やりたい放題だねえ！」

「ごめんなさいっ！！」

笑顔で何言っただこいつらー！！

「さて、出掛けますよ」

操の危機を感じて背凭れに隠れていれば笹野さんが顔を出して言った。

「え？どこに？」

「昨日話しましたが、忘れちゃったのですか？」

「覚えてません……」

「スパイを殺した分の金を使っつていったじゃあん」

覚えてないことをいいことにからかつているかもしれないと警戒していれば、白瑠さんも顔を出して笑って言った。

アタッシュケースを見てみる。そう言えば余分に依頼され殺すことになったんだっけ。それで予定よりお金が。

「何して？」

「だから、行きますよ」と笹野さんに急かされてテーブルにつかされた。

朝食を食べとのこと。

食べ始めれば、髪をいじられた。櫛で髪をとかされている。誰かと思えば、白瑠さんだった。

「何してるんです？白瑠さん」

「髪整えてんの」

「何故……？」

「椿さん、服はこれに着替えてくださいね」

え……。なんかすごい着々とじゅんびされちゃってるんですけど。

あれ？もしかしなくても、待たせちゃってます？あたし待ちだったのか？

こっしちやいられん！

あたしは早く噛んで飲み込んだ。急ぎすぎて喉を詰まらせた。そうしたら素早く笹野さんが飲み物をくれた。

「ありがとうございます」飲んでからお礼を言う。食べ終えた皿を重ね持って台所に向かったら、白瑠さんが「俺がやるから、歯磨き」

皿を取り上げて片付けてくれた。

あたしは言われた通り洗面所に行こうとしたら「ついでに着替えてください」と笹野さんに服を押し付けられる。

なんだこの慌ただしさは。

なんか。なんかあたし。手のかかる娘か妹みたいだぞ、あたし。

バタバタと服を着替えてから顔を洗い歯磨き。片手に歯ブラシ、もう片方でワンピースの紐を結ぼうとしたが無理難題だ。

何故背中に紐タイプのワンピースなんだ。

顔を下げて見てみれば、これはこれは清潔そうなワンピースだった。淡い桜の花弁がスカートに薄く散らばっている白いワンピース。

あれ。これ着てどこいくんだっけ。

疑問になって、不意にフリーズした。

そもそも“あたし”のまままで出掛けるなんてあり得ない。警察やニュースであたしの顔を覚えている人に見付かったら……。

鏡を見たままボケーとしていたら白瑠さんが入ってきた。

「着替え終わった？」

確認しながら言って、白瑠さんは後ろの紐を結んでくれた。

おっと。早く準備をしなくては。

思考をやめて歯磨きに専念していると、白瑠さんがこの前買ったヘアスプレーに手を伸ばした。

シューと噎せる匂いが蔓延する。

ごほっ。思わず咳き込む。

白瑠さんは構わず、あたしの髪を整えた。スプレーの効果で髪はストレートに仕上がった。

歯磨きも終えたら、スカートを捲られ思わず白瑠さんの頭を叩く。バシッという音が響いた。

白瑠さんの頭の中は……。あえて言わないでおこう。

「痛いなあ……」

「どこ触ってるんですか!?!」

「ベルトをつけるんだよお」

白瑠さんの手にはまた違うナイフと黒のホルダーが合った。

自分でつけます!と取り上げると「無理だと思つよ」と言われたが無視。

スカートを捲りギリギリの太ももにつけようとしたが。どうも上手くベルトをつけれない。なんでつけられないんだ。

むう、となり足をあげてみながらつけようと試みた。

しゃがんでいた白瑠さんがスカートの中身を見ようと首を傾けた為、また叩く。

やっとなつつけた。

「こんなのつけさせるならもつと隠しやすい服にすればいいのに」

「万が一ですよ」

あたしに返答をしたのは、笹野さんだった。

あたしの手をとり、アクセサリーをつける。あたしの部屋から取ってきたのか……。

センスは悪くない。ワンピースに合う。

笹野さん、女性に間違いなくモテるな。

「万が一が起きる場所に向かうの……?」

「いいえ。何事も予想外はおきますからね」

危険な場所に向かうわけではないようだ。

じゃあ何処に行く気なんだろう。

悶々と考えてみる。

清潔ワンピースを着て行く場所。

白瑠さんはいつもの襟つき白いシャツ。手首にはアクセサリーがじやらじやら。黒いズボン。いつもと似た格好。

笹野さんは黒いジャケットに白いシャツに白色のズボン。

どこにいくんだ…。

訊いてもこの際知らなくてもいいじゃん的なことを返される。

納得いかない顔をして白瑠さんに背中を押されて玄関へ。

「わぁー、幸樹ー、サイズが合わないよお」

「ああ、私の妹は足が小さいですからねえ」

「すみませんねえ足がでかくて」

あたしはししだもん。

笹野さんの妹さんの靴を出されたが一目で履けないとわかった。

白く可愛いリボンのついたは可愛いが無理なものは無理だ。

「仕方ないですね、買いに行きましょうか」

「へ？うわっ!？」

「だねえ」

玄関で座っていた身体が浮いた。

白瑠さんに抱え上げられた。

そのまま笹野さんのあとに続いて白瑠さんに運ばれていく。

何故。降ろせ。

そのまま笹野さんのシルバーのクラウンに乗り込んだ。

「あのお…素足なんですが…」と言ったが無視された。

クラウンが走り出す。

もうされるがままで。沈黙していれば、車の密室の中で香る匂いに気付く。

香水だ。

白瑠さんと笹野さんではない。

何処から香るのかと鼻を利かせる。

前に乗り出して、後部座席から助手席に移る。

笹野さんと白瑠さんが小首を傾げた。そんなの気にもせず、シートベルトをしながら匂いを吸い込む。

白瑠さんも笹野さんも香水つけないのに、何故きつめの香りがするんだろう。時間が経って薄くなったがそれでもキツイ香水だ。あたしが好かないキツイ香水。

キツイ香水をつける女性ってどんな基準で選んでいるのだろう。嗅覚が可笑しいのか？理解しがたい。

「あの、笹野さん」

「はい？」

「彼女いますか」

「いませんよ。今は募集中ですが……」

彼女はいない。

じゃあこの香水の匂いはなんだ。誰の物なんだ。

顎に指を添えて考えていれば、笹野さんがチラリと視線を向けて「それが？」と訊いてきた。

「いや……別に……。不意に思っただけです……」

あたしは目を窓の外に向ける。もう住宅街を抜けていた。

ふと、椅子を掴んでいた手に何かに触れる。覗いてみると何か光るものがぶら下がっていた。指で摘まんでみれば、何かがわかった。ピアスだ。

女物。男はつけないだろうデザインのピアス。

唸るのは堪え、眉間の下に親指をぐりぐり押し付ける。

恋人はいない。しかし、香水の匂いと女物のピアス。

考えられることは一つ。

全く。男と言う生物は。

笹野さんは違うと思っていたのに。
なんか気持ち悪くなった。

あたしはシートベルトを外して、後部座席に戻る。

白瑠さんと距離を取って、座り、シートベルトをした。

「落ち着きのない娘ですね」

笹野さんがミラー越しに笑う。あたしは唇を尖らせて腕を組んだ。
真剣に出ていくことを考えるべきかもしれない。

「あれれ？拗ねちゃったよ、幸樹」

「どうしたんです？椿さん」

「何でもないです」

白瑠さんが身を乗り出し、笹野さんが首を傾げるが、あたしはきっぱりと言う。

「私怒らせるようなこと、言いましたか？」

笹野さんが不安げに訊いた。ちよっとチクリ。あたしは弱々しく何でもないと言った。

「椿さん……」

「言わないとわからないよお」

何でもないと言っているのに。全くも男と言う奴は。

「何でもないってば！」

「怒ってるじゃないですか」

「怒ってません！」

「怒ってるよーおそれ」

「椿さん」

うーっ！！苛々する！

貧乏揺すりをしてしまいそうだが、正座をしている為それはできない。

ナイフに手を伸ばすのを堪えて、助手席に向けてピアスを投げた。ポトリと落ちたピアスを見て、悟ったのか白瑠さんは笑い声を上げる。

「にやはははっ！なに？なに？っーちゃん、幸樹の彼女みたあいに浮気の証拠見付けたり！？うひゃっ！“これ誰のピアスなの？”だつてえー幸樹い」

助手席に貼り付いたまま愉快そうに笑って白瑠さんは笹野さんに代わりに質問した。

笹野さんは「ああ…」と心当たりがあるような声を洩らす。

「助手席に香水の匂いがします。匂いとピアスの持ち主が一緒とは限りませんが……彼女、いないんでしょ？」

あたしは鏡越しに笹野さんを睨み付ける。笹野さんは苦笑した。

「わあ！つばちゃん探偵みたい！」

ほんとだあ、と白瑠さんは匂いを嗅いだ。あたしは無視する。

笹野さんはピアスを拾い、こう言った。

「夏木さんのですね。仕方ありません、私だって男ですよ」

確が夏木と言う看護婦がいた気がする。看護婦に手を出したのか？
笹野先生！
しかもさらりと自白をしゃがった。

「正直に答えちゃうんですか？ 言い訳とか嘘とか言わないんですか！」

思わず身を乗り出して運転席に顔を出す。

「おや。言い訳や嘘を言つて欲しいのですか？」

笹野さんは意地悪に微笑んであたしを少しだけ見上げた。

意地悪なのに、綺麗。ずるい。

あたしは席に引っ込み、大きな息を吐き、腕を強く組んだ。

「あーりやりやっ」

白瑠さんも椅子に座った。

その白瑠さんにシートベルトをしてくださいときつい口調で注意する。

「なんですか、椿さん。私が貴女しかいないと言って宥めなきや機嫌を直してくれないのですか？」

笹野さんは運転しながら言った。あたしは沈黙を返す。

「それとも貴女しか抱きません、ですか？」

顔がひきつる。

「もうやめてください！」

「ふふ、軽いジョークなのに」

「ジョークなのにねえー？」

笹野さんと、白瑠さんまであたしを笑った。くそおう、毎日セクハラを受けるのかあたし！

女の子なんだぞ！あたし！

あんまり女だと主張しないから違和感あるけど、警察に駆け込むぞ！殺人犯だとバレル前に捕まえてもらうからな！強姦未遂で！

クラウンは駐車場に停め、一つの店に入った。

なんともあたしが入ったことのないような綺麗な店。ピカピカの床に、輝く靴が並んでいた。高そう。

それに見とれてる場合ではなかった。

笹野さんに抱えられて店に入ったのだ。クラウンを降りてからずっとそう。

恥ずかしすぎて顔が上げられない。

「彼女に似合う靴を」

白の椅子にあたしを降ろして笹野さんは店員さんに一言言った。

なんだしよら。

綺麗な女の店員さんは頷いて靴を探しに向かった。

白瑠さんはあたしの隣に腰掛けて、顔を上げたあたしに眼鏡をかける。伊達眼鏡だ。

「似合う似合う」と白瑠さんは髪を指で撫でた。

すると店員さんが一足の靴を持ってきてくれた。それを履かせてくれる。

シルクのパンプスだ。
おお、可愛い。

「だめ。違うのにして」

店員がどうですかと訊く前に白瑠さんが一蹴した。

すぐに店員さんは他の靴を探しに行く。今度は違う店員さんと一緒に幾つか箱を持って来た。

また履かせてもらったが、その度に笹野さんや白瑠さんが首を振る。

どれならいいんだ。

どれもこのワンプピに合うのに。

店員さんは流石に苦笑。顔がひきつっている。任せられないと思ったのか白瑠さん達は店の中を品定めし始めた。

おいおい。靴ひとつくらい妥協しろ。

あたしは小さく店員さんに謝った。

「素敵なお兄様ですね」

「えっ？」

靴を箱に詰めていた店員さんがいきなり言ったから、思わず間抜けな声を上げた。

「あ…恋人でしたか？」

あたしの反応に慌てたように店員さんが訊く。
いや、どっちでもない。

まあ、どちらかだと思つのが妥当なのだろう。

「私の妹ですよ」

そう言ったのは、笹野さんだった。
まさと驚く。

「俺の彼女だよ」

一足手に持った白瑠さんが笑顔で言った。その白瑠さんを笹野さんが小突く。

「私達の可愛い妹です」

笹野さんは訂正させた。それから白瑠さんの持ってきた一足の靴を却下する。

「なんだよお」と店員さんがいなくなつてから白瑠さんが口を尖らせた。

「私が椿さんの兄なら、白瑠が恋人なんて認めませんよ」

たしかに。

白瑠さんの素性を知つてて妹と付き合うことを認める兄は最低だろう。

だがあたしが、この二人の妹なんて無理があるだろう。二人は美形と言う共通があるが、あたしは美形ではない。

大体、笹野さんが妹と嘘をつくなんて意外だった。妹を亡くした事実があるし、あたしなんかはその。妹の代わりとは言わないが、笹野さんの妹だなんて。

あたしは笹野さんを見上げて見た。顎に指を当てて品定めをしている。

あたしの視線に気付いて笹野さんが向いた。あたしはさっと顔を下げた。

「……。まだ怒っているのですか？」

しゃがんで笹野さんはあたしを見上げた。うっ。あたしは顔を逸らす。

店員さんが持つてきた靴を今度は笹野さんがあたしに履かせた。サンダルで紐を絡み付けるタイプだ。

「ん？」

笹野さんにはっこり微笑んで、訊いてくる。

あたしが妹でいいの？

なんて、訊けるわけない。

「…これがいいです」

あたしはそう呟き声で言った。

笹野さんはまた微笑んで頷く。それから店員さんに会計を済ませた。もう片方は白瑠さんが履かせてくれて、立ち上がる。

「んじゃあ行こう！」と白瑠さんに手を引かれて店を出た。

店を出た白瑠さんは通りを見回してから駐車場と逆方向に歩き出した。

「え。白瑠さん？駐車場はあっちじゃあ…」

「お店に行くんだよ。ここ東京だしいい服買えるよお」

「は！？服！？何それ！？」

まさかと大声を出す。

「洋服を買うのですよ。家では咲の服を着てもいいですが、仕事や

その他に着てほしくないですし白瑠の服ばかりでは不便でしょう？」
笹野さんが一歩後ろの位置で答えてくれる。ここで初めて笹野さんの妹の名を知った。

「服ならこの前買いました！」

白瑠さんの手を払おうとしたが、無理だった。畜生バカ力め。

「たった五着の安物じゃん！パーカーとかだしーつばちゃん女の子なんだからセクシーかキュートなのを着ようよ！」

「指名手配同然なのに…着るかつ！」

敬語を吹き飛ばしてしまったのは手を払うので精一杯だからだ。

踏み留まってみるが買ったばかりのサンダルが壊れそうなので断念。腕を振っても通じない。

切り落とすしかない！

思考がとんでもない方へいきスカートの上からナイフに触れれば、笑顔で店を探していた白瑠さんが振り返った為、バツと手をあげた。

「見ーつけた！こっちこっち！」

探していた店を見付けたいらしい。そのまま歩いていく。あたしを引いたまま。

「ちょっと白瑠さん！どんだけ使う気ですか！？衝動買いばかりしないてください！」

「え？たった50万だよ」

「たったの………。50万って……アレですか？今持っている金ですか全財産ですか」

「今日使おうと思っっている金」

さらりと顔色変えず、白瑠さんは言った。あたしはぐりんつと笹野さんを振り返る。

「笹野さん笹野さん笹野さんっ！！！！この人を止めてください！！」

「いいじゃないですかそのくらい」

「そのくらい！？そのくらいを無駄に使うんですよ！？募金しなさい！！！」

なんだこの人達！金銭感覚まで狂ってやがる！！

「この前使った金とこのサンダルも、昨日の報酬から差し引いてください！」

「んー？いいよそんなのお」

「私達の仲で金の貸し借りはありませんよ。金なんて仕事をすれば入るのですから」

軽く考えている二人。

駄目だ。あたしついていけない。

「そりゃあ…！一回が相当の報酬みたいですが…あたしは嫌なんです！買うなら自分の報酬で買いますから！！」

アタツシユケースの中身を見たが、万札がぎっしりだった。分前は聞いていないが、殺つたのは白瑠さんだし少ないはずだが、買いたいものは自分で選んで買う。

はつきり言えば白瑠さんが止まった。やっと解放されると思ったが、白瑠さんの表情が変わる。

「……………」
「……………」

じつと見下ろされる。

見下ろされるのは身長差のせい。

じつと。と言うより、うるうるとしたような、涙目。

泣きそうなしよぼくれた表情。仔犬に見つめられたような感じた。

「俺…妹…いないから……………こつゆうの、初めてなのに……………」

涙声で白瑠さんが言う。

「だめなお……………」

すぎるような声。弱々しいことを言う者を、こんな可愛げな弱々しい小動物に、首を横に振れない。
あたし、可愛いのに弱いんです。

「……………わかりました……………どうぞ……………」

「ほんと？今日だけお兄ちゃんって呼んでくれる？」

「……………。は、く……………白瑠、お兄ちゃん……………」

精一杯。慣れない言葉で呼んでみた。

顔が微かにひきつるが白瑠さんの反応からして上手く笑えたかもしれない。

「んひゃー！じゃあいっぱい買おうねえー！」

白瑠さんはコロツと笑って、一人でスタスタ歩いていった。

のせられてしまった。

ガクリとあたしは額にを押さえる。逃亡しようか。

「私のことは幸樹にいいですよ？」

「……………。妹さんにも、そう呼ばれていたんですか？」

「まさか。お兄さんと呼ばれてましたよ」

笹野さんが横に立って言うから、そう訊いてみたらサラリと否定された。

「あたし長女だったので、兄ができたのは嬉しいです」

肩を竦めてあたしは小さく言う。

笹野さんの妹云々は流石に図々しい為、それは言わず「（というか言葉が見付からない）本音を言った。

本音だ。兄はずっと欲しいと思っていた。

優しい美形な兄。嬉しい。

だけどそれは包容力のある人物が欲しかっただけにすぎない。

長女だから。

母にも優しく包まれた記憶のないあたし。温もりを欲しがっていたバカだから。

だから、そう口にするのはなんだか重く感じた。

嬉しいのは事実。

でも、自分がずるい。

「私も、また、妹ができて嬉しいですよ」

笹野さんは穏やかな微笑を向けて、あたしの頭を撫でた。大きくて温かい掌。

先に歩む笹野さんに咄嗟に言おうとした。言おうとして口を閉じ

る。

咲さんの代わりにはなれない。

そんなことを口にしようとした。

違う。駄目だそんなの。

あたしは咲さんの代わりじゃない。

あたしは咲さんの居場所を奪ってはならない。

なんであたしは咲さんの居場所に位置にいるんだ？いてはならない。咲さんの仇を討った優しい兄の笹野さんの、妹だなんて。

そんなの駄目だ。

死人に対する罪悪感？それはない。殺した相手にも抱かないのだから。

それとも荷が重いから？それかもしれない。なんだか、嫌なんだ。

「椿さん？」

いつまでも動かないあたしを振り返る笹野さん。視界が歪むのを感じて、あたしは背中を向ける。

バカ。泣くんじゃない。

「椿さん？」

違う。あたしは。なんだ？この嫌な気分は。気持ち悪い。

クラリと意識が揺らいでよろめく。

「椿さん、椿さん！」

襲いかかる吐き気に耐えきれず、足から力が抜けて、意識が途切れ

た。

欠けていた。

生まれてからずっと欠けていた。

家庭も欠けていたし、片親の愛情も受けたかもしれないが愛なんて解らない。

弟や妹とは片親が違うだけで拗れていた。喧嘩する度「本当のお姉ちゃんじゃない」と吐き捨てられ傷付いても文句は言えず泣くこともしなかった。

唯一の居場所で明るく振る舞える学校でも支障がでて、友人に八つ当たり。

陰口ばかりの女の子達。信用できなくて、人間不信。

一歩下がって小さな輪の中で満足していた。

たまに温もりが欲しくなり、淋しくて、泣いたりしていたが。それでも。それでも。

一歩下がっていた。

なのに、どうして。

いつの間にか、温もりがあるんだ。

「目が覚めましたか？椿さん」

殺人を犯したのに。

「つーばちゃん大丈夫？」

大勢の人間の血を浴びていたのに。

「ストレスで倒れちゃっただけですよ。気分は？椿さん」

どうしてあたしは温もりを手に入れているのだろう。

どうしてあたしを心配して見つめてくれる人がいるのだろう。

酷く、それは理解できないことだった。

「……………」

ベンチで笹野さんの膝の上にあたしは寝てて、白瑠さんが顔を覗いて頭を撫でてくれる。

いつも凍えていたのに、温かい。

温かい場所にいる。

温かい人に優しくされている。

喉が痛い。視界が滲む。

眼鏡が外されているからあたしは掌で目を隠した。

あたしは知ってる。

温かい場所なんて、長続きしなくて、すぐに消えてなくなる。それでまた凍える。

それを知っているから、温かい場所にいたくない。

だってすぐに凍える。

失望が苦しい。

だから。だから。だから。

嫌なんだよ。

そうかだからか。なんて今更気付く。

秀介に言ったのもそう。

やっぱり自分を守る為だ。

自虐的で自傷的なのに、自分を守るのに精一杯。

痛いから、苦しむから、離れてほしい。
一歩下がっているのに、近付いてくる。
ずかずかと近付いてくる。

笹野さんや白瑠さんも。特に秀介が、近寄るんだ。
それが、怖い。痛い。

「大丈夫……」

温かい場所から冷たい場所なら、殺してくれ。

「お兄ちゃん」

自虐的なんだ。

あたしは起き上がって笑いかけた。

「じゃあ買い物行こうか！」

白瑠さんがはにかんで笑い、あたしの左手を掴んで立たせた。

「無理しないでくださいね。さあ、行きましょう」

笹野さんがあたしの右手を握って歩き出す。二人に手を引かれていく。

ズキズキ、と痛い。

胸の奥。ずつと奥。

無くなる恐怖に怯えてる。

あたしはそれを振り払い、ギュウツと二人の腕に抱き付いた。

「妹としてわがままきいてもらいますよっ！」

「喜んでっ！」

「お手柔らかに」

そう言ったのだが。

笹野さんに言葉を返したい。

若い女性やカップルが行き来するビルの中で、店を幾つもまわり、服を何着か購入。

もう数えきれない程だ。

白瑠さんにせがまれ、幾つも試着。あたしが気に入った服は勿論、白瑠さんや笹野さんが気に入った服も必然的に購入。

あたしの服だ。

「うひゃひゃっつーちゃん可愛い可愛いっ！」

「椿さん、次はこれ着てください」

着せ替え人形か。

そうは思っていないと思うが。――（あたしがそう思いたい）

白瑠さんの反応はシスコンだぞ。

流石に何度も着替えるのに疲れた。

時には際どいミニスカや露出の多いシャツだとかがあった為、ヒヤヒヤさせられた。

もしかしたら今現在、あたしは妹プレイと言う名のセクハラを受けているのかもしれない。

疲れたのを口実にベンチで休憩。

レシートを見させて欲しいと言ったが目の前でゴミ箱に捨てられた。畜生。いいもん。値札があるもん。

ふくねながらも渡されたジュースを飲む。

そう言えば今、いくらくらい使ったのだろうか。

チラリと白瑠さんが持つ紙袋を見た。推測は10万なのだが…。

「あの、白瑠さん。今日、50万使つとか言っていましたますがまさか全

部あたしに注ぎ込む気じゃないですよね？」

「え？そっだよ」

あたかも当たり前じゃん、みたいな口振りで白瑠さんは言った。

「50万も服いきりませんよー!!」

「何も服だけとは言っていないよお」

あたしの反発に口を尖らせ「ほら、あれとか」と白瑠さんは笑顔で立ち上がり視線の先にあるアクセサリー店に入ってしまった。

「アクセサリーなら買ったじゃないですか！たくさん！」とあたしは追い掛けて白瑠さんの腕を掴む。

「俺の好みのものばっかじゃん。もっと女の子らしいの」

「ピンクの花なんて趣味じゃありませんよ」

「ピンクの花が女の子らしいとは限りません。赤いリボンとか」

いつの間にか笹野さんが背後に立ち、あたしにリボンをつけやがった。カチューシャ風に。

目の前に鏡があった為、もろ赤いリボンを頭に垂らした自分を目撃。気持ち悪くなった。

素早くそれを取ったら今度は黒い物体が頭につけられる。

「うにゃー！可愛い可愛いっ！」

つけた犯人が大騒ぎ。

あたしはあまりのことに硬直。

頭につけられたのは、猫耳のカチューシャだ。こんなものを置くないで！何考えてんだこの店！

直ぐに外し白瑠さんが届かない遠くにやる。黒髪に馴染むから黒い耳が似合う、とかよく安ちゃんに言われたっけ。女友達と騒ぐのは別にいいのだが…。

「やめてくださいっ!」

「えー可愛いのにいー。あっ、藍くんに頼まない? 藍ならいっぱい持つてるでしょー」

「やめてくださいよ、白瑠。彼女を彼の趣味に巻き込んではいけません」

「えーえ、絶対可愛いのにい。椿ちゃんはナースより制服だと思っよ、うん、猫耳付きがいいねっ」

笑顔でアブノーマルなことを言う白瑠さんに悪寒を感じて身を引くあたし。

アブノーマルシスコン。この場合シスコンは関係ないかも。

「やめてください、貴方まで。彼の話をしたら出てきますよ、もうやめましょう。…椿さんも怯えていますし」

笹野さんは本当に嫌そうに肩を竦めてあたしを視界に捉える。

「えーなんでー?」と白瑠さんは首を傾げる。おちよくってんのか。アブノーマル発言は終わり、アクセサリーを買ってもらい、そのビルをあとにした。

もう空は夕陽に染められている。かなりの時間、振り回されていたようだ。

今日のお出掛けはこれで終わりかと思っただが、どうやらまだあるらしい。

あたしはくたくただ。

初仕事のあとだと言うのに、鬼か。鬼兄か。

ぐったりと後部座席に頂垂れていれば、目的地に着いたらしい。

降りて、見てみた。停止。それから顔をひきつらせる。

「え……と？」

「予約した笹野のです」

あたしの声がまるで聴こえていない笹野さんは店に入っていった。白瑠さんがあたしの背中を押す。

来たのは、予約しなくては入れなさそうな高級イタリアンレストランだった。どうやら夕食はここで食べるらしい。

何も言えないまま、促され店内へ。無論、高級レストランは初めてだ。

テーブルにつき、一息つく。

「聞いてませんよ…こんな高い店に来るなんて」

「昨夜、言っただけなんですけどねえ」

「忘れたって言ったじゃん！」

「そんな顔をしないでください。椿さんの初仕事を無事終えた祝いと思って、堪能してください」

向かいに座る笹野さんは気品のある微笑でそう言った。

「そんなのマックで十分ですよ…。大体、仕留めたのは白瑠さんだし」

「お兄ちゃん、でしょ。そーなんだよなあ、でもあの場合仕方なかったじゃん」

右隣にいる白瑠さんはそう言った。別に責めている訳じゃない。ただ、結果的にそうなったのだからあたしの初仕事祝いをここでやる

必要はない、と言っているのだ。

「素直に喜んでくれない妹ですねぇ」

「……わあい、嬉しい」

来てしまったものは仕方ないと言っこと。ついてきたあたしもあだし。

棒読みだが、言ってみる。

「お酒は飲みますか？椿さん」

「え？嫌だな、未成年ですよあたし」

読めないメニューを眺めていれば、笹野さんがそんなことを言うからおどけてみせる。

嘘だと見抜かれたらしい。笹野さんは微笑んで待っている。

「笹野さんにお任せします…甘めで」

「ではカクテルにしましょうか」

「つばちゃん飲めるんだあ？いつけない子」

「飲ませるお兄ちゃんも同罪です。去年からたまに飲んでます…ちよこちよこと友人と。未成年に喫煙者がいるようにお酒を飲む人もいるんです」

とか笑いかけた白瑠さんに言い訳してみる。

「喫煙者よりは周りに迷惑かけてないでしょう？」

「酔い潰れなければ、の話ですね。喫煙はしたことない？」

「……………全ては好奇心に負けて」

笹野さんに微笑みられて、俯きながら白状。

「え？吸ったのお？うわあっーちゃんが煙草をパカパカなんて見たくなあい」

白瑠さんが驚き一杯で苦々しい顔であたしを見た。

「もう吸ってません！一度や二度ですし！今は嫌いだから！」

言うんじゃなかった。

「お酒だつて毎日じゃないし」とぐちぐち言つと白瑠さんに笑われ、頭を撫でられる。

「うひゃひゃ、ムキにならなくていいよ。それくらいが健全なんだよ」

むう、としていたが白瑠さんがあまりにもゴシゴシと撫でるから振り払う。

こうゆう大人がいるから未成年の飲酒や喫煙が絶えないんですよ。

笹野さんに注文を任せて、あたしは店内を見回す。落ち着いた綺麗な白い壁に装飾に高そうな絵が飾られている。店内はシャンデリアが照らしていた。

他の客はドレスやスーツ姿。かろうじであたしは馴染んでいた。良かった。

「椿さん、明日から夜は早めに帰ってきますが…注意を一つ覚えてください」

料理を待つ間に笹野さんが口を開く。

「なんです？」

「訪問者が来ても、扉は開かない方がいいですよ」

「訪問者、ですか？」と目を丸めて首を傾げる。

「無視をしてください、例え何度も呼び鈴を鳴らされても。しつこさに耐えきれず扉を開けたら、セールスマンが立っただけでも扉を直ぐに閉めてください。どんなに人が良さそうでも無視して鍵を閉めチェーンをかけてくださいね」

なんだろう。その具体的な物言いは。「よくわかりませんが…注意します」と曖昧に頷くことにした。

とにかく訪問者は無視すればいいのだろう。簡単だ。

そこで飲み物が運ばれた。あとから料理も置かれる。ガーリックトーストとパスタ。

「それじゃあ、愛しき妹の椿ちゃんの初仕事無事完了を祝して」

なんか嫌だな白瑠さんに言われると。とか心の中で呟きつつもカクテルの入ったグラスを持つ。

あたしのカクテルはなんだか赤い色と白色。何かは知らないが可愛い。

白瑠さんと笹野さんは白ワインらしい。

「かんぱあーい」

「乾杯」

「…乾杯」

三人のグラスが、重なり弾く音を奏でた。それは不快でもあり、素敵な鈴の音みたいないい音だ。

二人を真似て、一口飲む。

甘い味から喉に苦味が通っていく。

それをテーブルに置いて、控えめに食べ始める。
なんだか緊張してしまう。

あたしと違い、白瑠さんはいつも通りバクリと平らげていった。

「それで椿さん。初仕事の感想は？」

笹野さんが話題を振る。

「作戦がなくて無茶苦茶だなあと思いました」

「俺の悪口？」

「だらあんとフォークを加えたままの白瑠さんが眉毛を垂らす。「いえ、感想です」と言ってみる。

「そう言えば“クラッチャーはなんでノープランなんだ”とか愚痴ってましたね」

朝の会話ででた言葉だ。

確か“アホたれ”がついていた気がする。そして白瑠さんが怖い笑顔だった気がする。

恐る恐る白瑠さんに視線を戻す。白瑠さんはワインを飲み干していた。

「……………今朝のは冗談ですよね」と笹野さんに言う。

「朝？」一瞬なんのことかわからない様子だったが笹野さんは思い出したのか笑う。

「酔い潰すって話ですか？冗談ですよ。椿さんが潰れない限り」

後半嫌なことを呟かれた。

また白瑠さんを見ている。

…笑顔だった。

ニヤニヤとあたしを見ている。嗚呼、悪寒が。

大丈夫。酔い潰れない。眠くない限り。それに今、今日はいいい切り札がある。

兄妹だもん。それをフル活用してやる。

…アブノーマルに走られたら、終わりなのだが。

「あれ、笹野先生ではないですか」

不意に笹野さんが男の一人に話し掛けられた。先生、と呼んだなら病院関係の人間。

あたしは顔を伏せた。

伏せたより、伏せられた。

頭には白瑠さんの手。

白瑠さんに顔を伏せさせられた。

そのまま黙ったまま白瑠さんに手を引かれて、その場を離れる。

「こんばんは、田中先生に松山先生」

「こんばんは。おや、お連れのお嬢さんは？」

「私の妹です」

笹野さんはそう知り合いに答えた。また、妹と言った。

しかも、知り合いに。

「ふう。危なかったねえ？」

「……………」

トイレの前で立ち尽くす。思考は完全に笹野さんの方に向いていた。

どうして調べればバレてしまうような嘘を言うのだろうか。知り合いの兄妹ならばバレないのに。何故なんだ。

「椿ちゃん？また気分悪くなった？」

視界が見えていないあたしの顔の前で白瑠さんが手を振って顔を覗いた。

「いえ……別に。考え事を。どうします？戻るに戻れないですね」

静かに我に振り返り白瑠さんにこれからどうするかを訊いた。

「バレたら始末」

「…笹野さんの立場を考えましようよ」

「冗談だよ。あの客は帰るところだったからいなくなるよ」

何気見ているではないか。白瑠さんは店内を確認してから「ほらっ帰った。戻ろう」とあたしを手招きした。あたしはその手を掴んで引き留める。

「白瑠さん」

「んにゃ？」

「初仕事。どうでした？」

「どうって？」

「上手くやれましたか？これから役に立てると思いましたが？」

「思ったよおー？」

本当だろうか。

疑いの目を向ければ白瑠さんは笑顔のまま答えた。

「確実にターゲットのいる部屋を当てて、ボディーガードを押し退けてターゲットと二人きりになったのはいい感じだ。速やかに始末してその場をされれば上出来。そうだな、次は幸樹と仕事しようか？大企業辺りにしよう、もっと大きいステージで作戦を立ててやってみようか」

白瑠さんは真面目なのかいい加減なのかわからない解答で頷いた。半分半分か。

始末出来なかったのが減点。

後半は興味深い。笹野さんと、そして作戦付き。まさにミッシェンみたいなイメージが浮かぶ。

だが、その前に言わなくてはならない。

「前に言ったように、あたしが使えないと思ったのなら」

温かい場所から冷たい場所へ突き落とすのならば、いっそ。

「殺してくださいね」

十 訪問者は少女趣味

どんなに着飾っても
紅色の血塗れ殺戮者
瞳は人形といっしょ

「気が向いたらね」

白瑠さんはそう笑って言った。曖昧な答え。どっちなんだろう。なんて考えたって無駄。

堪能したあと、帰宅した。

カクテルを一杯と白ワインを一杯飲まされて、ちょっと危うい感じだ。ほろ酔い。

その気になればのび太を超えて即眠れるだろう。眠い。

眠いのだが、どうやらまだ寝かせてはくれないようだ。

リビングのソファで皆で集まる。

笹野さんに渡された水で何とか酔いを覚まそうとした。

「それで、椿ちゃん。初仕事で何か思ったことはない？」

「もっと怪盗風に速やかに済ませたいと思いました」

ソファに寝そべり上半身裸で愉快そうに足を揺らす白瑠さんに淡々と返す。

酔っているのだろうか。がぶ飲み同然で一瓶飲んでいたが。

「そおじゃなくってえーもつとお……」と眠そうな目で薄く笑っている。

「こおゆー武器があるといいとか」

「ああ！閃光弾やマシンガンが欲しいと思いました」

「軍人かつ！」

ボケたつもりがないのにケラケラと笑う白瑠さんに突っ込みを入れられた。

あ、酔ってるよこの人。

それにしてもいい身体をしている…。イケメンは身体もイケている。腹筋は程よく割れているし腕も引き締まっている。際どいV字なんてもう…。

なんかあたし変態？

あたしがどうにかなりそうなのが、白瑠さんにシャツを着させた。にまにま。嬉しそうな、どちらかと言えば幸せそうな笑顔だった。

「大勢を相手に短剣はキツイです」

「56人を三センチのカッターで殺ったのに？」

白瑠さんに真面目に指摘され、笹野さんに失笑された。笑いを堪えながら笹野さんはあたしの隣に座る。

「銃を持っている56人にカルドは無理です」

「それは椿ちゃんの腕次第だよお」

「それはつまり、カルドで銃を使う大勢を倒せと？」

「そうなりますね」

無茶苦茶だ。

「白瑠は素手ですよ」

「頭蓋破壊屋と比べられたらおしまいですよ」

気付くと、白瑠さんが眠っていた。一人で寝やがった。

「変ですね、今日はペースを崩して飲んで……」

笹野さんが不思議そうに呟いて毛布を掛けてやる。

「ペース崩して潰れちゃったんですか？」

酒はペース配分すれば呑まれないらしい。誰かから訊いた気がする。笹野さんも白瑠さんと同じくらい飲んでいたが、ペース配分が違うのか笹野さんは酔っていないみたいだ。

あたしは呂律まで変になりそうなのに。カクテルとワイン一杯で。

「みたいです。椿さんもお疲れでしょう、寝てください」

「はあい」

おやすみなさい、と一言言ってから部屋へとよろめきながら向かった。

カルドを確認しつつ、ベッドに潜り込んで一息つく。

初めて。

この生活を始めて、初めて覚えている夢を見た。

暴れるかのように早送りされた映像。夢なんて、たった一瞬に見るものだから可笑しくはない。

曖昧な知人の顔。

知人よりは親しい人間達の顔は、ボヤけててはつきりしない。

起きたあたしの脳内で当てはまる人間に仕上がる。

彼女彼らはただあたしを見るだけだった。

まるで一步下がられているような位置に立ち、あたしを見ている。

あたしが一步下がっていたんじゃないなくて、相手が皆が一步下がって

いた。

夢を見ている間も思い出した時もそう思った。

壁なんてものは、なかったんだ。

無意識の自分がそう告げるような、不愉快極まりない夢だった。

不快だ不快。

起き上がって髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き乱す。苛々する。殺したい。

友人、家族、知人全てを　なんてバカな考えは直ぐに一蹴する。めんどくさいと言う理由で。

起き上がり顔を洗ってからソファにダイブした。確認しなくてもテーブルには朝食がある。

あたしが殺しに行ったとしよう。どんな顔をするだろう？それはそれは愉快的な気分になって笑えるだろう。

それも頭蓋破壊屋のように。

それだけで満足してもうその思考をやめてテレビを付けた。

緊急生放送と言う字幕が一番に目にはいる。ニュースだ。

場所は埼玉の警察署だった。誰かが現場の状況を緊迫した口調で説明している。

「篠塚さん……」朝の第一声でその名前は中々良いが、声は掠れていた。

テレビの画面。カメラマンが揺れながらもアップする。そこに映ったのは、懐かしい篠塚さんの姿だった。

眉間にシワを寄せて声をあげる様子だが彼の声はあたしには届かない。ガヤガヤと雑音を出す虫けら達によって聴こえない。

またもや不快だ。

篠塚さんが、他の刑事や警察官が相手にしているのは不良達だった。あたしが見覚えのある不良もいるし知らない不良もいる。不良だけならまだしも暴走族までいる。格好はやはりそうだとわかりやすい格好だった。

「なんじゃこりゃ」

洩らした声は限りなく、冷たく聴こえた。

雑音の訴えを聞く。「サツはなにやってる」「犯人は誰だ」「情報を提供しろ」「殺したのは誰だ」とかなんとか言っている。警察を罵声するのも聞こえた。

なるほど。弔いがしたいらしい。全く笑えることをしてくれる。

篠塚さんの手を煩わせるな。煩わしているのはあたしか。

つまりは57人目以降の不良の仲間達が警察署に押し掛けて、情報提供を求め、警察に八つ当たりし、仕事の妨害をしている。

不良なのに暴走族なのに警察署に押し掛けているのが滑稽。まさに失笑だ。

単細胞の連中はそのうち警察に手を出して捕まるだろう。アホらしい。

どうでもいいが篠塚さんに怪我をさせるなよ。させるならこちらも考えがある。

皆殺し。

テレビがあろうと関係ない。乗り込んでカルドを振り上げ、一人残らず身内と同じようにしてやる。

縄張り心で集まった不良達に、仲間と同じ末路を歩ませてやるのか。ガクガクと震えさせ情けない悲鳴を上げさせてやる。

なんて、ちよつと現実離れた妄想をした。

警察の前で、あの大勢はやはりマシンガンや爆弾でなければ無理があるだろう。

ざっと見て50人だが中には金属棒やバッドを持った不良がいる。ちよつと骨が折れるだろう。

ふと、一人の男に目がいった。

篠塚さんではない。大声を上げる不良達と違い、ただ突っ立って、覚めた目で見ている少年。

秀介だ。

なんで。なんで秀介があの場合にいるんだ。
その疑問は吹き飛ばす。
背後にいる気配のせいだ。

「んひゃひゃひゃっ」

酷くあたしは怯えて震え上がる。白瑠さんはその反応を気にもしな
かった。

あたしの肩に顎を乗せて、テレビ画面を眺めながら愉快そうに笑う。

「面白いことになってるねえ？被害者の家族達がやることを、ヤン
キーがやるなんてねえーうひゃっひゃっ」

確かにそう。何の進展のない事件に不満を持ち、被害者の家族達が
詰め寄るだろう。

詰め寄ったところで何もならない。テレビに訴えた方が効果的。

おかげで情報提供に懸賞金が出ている。たんまり。

犯人がわかれば指名手配。

しかし警察は目星にしている頭蓋破壊屋のことは公表していない。

ただでさえこんがらがった事件なのに不良達の妨害が来たのだ。

犯人側はさぞ、愉快だろう。

あたしはそうでもない。

だってあたしは警察を錯乱したいわけではない。寧ろ篠塚さんに負
担をかけたくはないのだ。

それに単細胞の雑音は不快だ。あたしはテレビを消した。

「そうですね。なんとも滑稽ですね」

あたしは淡々とリモコンをソファの隅に投げ捨てる。

リモコンとは逆のあたしの左側に白瑠さんは滑り込むように座った。

真つ逆さまに。

「んひゃー」とあたしをにまにまで見上げる。

読心術を使おうとした。今、白瑠さんが考えていることはなんだろう。

秀介のことか？

違った。

「昨日のことは覚えてるかにゃあ？覚えてなかったら押し倒すからね」

何だか語尾にハートをつけているような、声だった。

昨日。昨日？

昨日なんかあったかな。

え。覚えているよねあたし。

「カルドで大勢を倒せと、の話ですよね」

どぎまぎしつつあたしは一番最後に白瑠さんとした話題を口にする。途端、白瑠さんが唇を尖らせた。どうやら胸を撫で下ろしていいらしい。

「ちえー。そうそう。そのちよっと前だね。覚えてる？」

「武器の話でしたよね」

「うん。武器の話でしょう」

「武器講座？」

「ニュー武器講座だね」

ニュー。新しい。新武器講座。

新しい意味はなんだろうと少し考えた。

「新しい武器を……つくる？」
「そおーゆーことお」

良かった。当たっていた。
でも作るって、なんだ？

「例えば腕切り落として代わりにナイフをつけるナイフ船長！」
「フック船長とは気が合わないと思うので他の例えを、どうぞ」
「ナイフをチェンソーに改造！」

「もう一声」

「ナイフに銃弾を装着！銃剣！」

「それは魅力的。もう一声」

「………つばちゃんはどんな武器が欲しいの？」

おお。白瑠さんが折れた。

折れたぞ。ひねくれた策略家にも負けないぞ！…なんつって。

そうだな、とあたしは改造武器を考えてみた。思い付かない。

「改造じゃなくても、あるんじゃないですか？より、殺しやすい…
じゃなくて狙ったところを切りやすい武器とか。あたしの場合首で
すね。そこをより切りやすい武器が欲しいです。どんな工夫がある
のかはあたしじゃなくて白瑠さんの意見が欲しいです」

ペラペラと言ってみれば、最後のが気に入ったのか笑顔を取り戻し
た白瑠さん。

「じゃあ、先ずは挙げていこうか。どんな風に殺したいのか」

朝から殺しについて語ることになった。

「相手と気分によると思います」

朝食を食べながら。

「白瑠さんがトドメに頭を破壊するように、あたしも首の頸動脈を切るのが好きみたいです。貴方を頭蓋破壊屋だと知っているなら頭を守るでしょ、ターゲットは。その時はやっぱり腕をもぎ取ったり切り落としたりするんでしょう?」

「うんー。その通りだよ」

「首を狙えば狙いが首だとバレて避けられ守られる、あたしの場合。邪魔な部品は排除。それからトドメ。あたしもその手ですね。

避ける足を止める武器。首を守る腕を退ける武器。まあ色々。喉以外と言われれば頭に弾丸一発や心臓一突き……相手や気分、臨機応変ですね。そこは。相手が一般人でないのならチキンなあたし的にはより優れた武器を使いたい」

「優れた武器ねえ。武器は持ち主次第さ。キャノン砲だって子供に持たせて、当たる確率は?それとおんなじ。使いこなせば相手より優れる」

「つまりは何事も使いこなせ、てことですか。使いこなせば優れるのは相手も同じ。あたしは素人ですから、持たされたナイフを使いこなすつもりですよ。でもナイフだけで挑むのは、素人すぎます」

なんだかとおつてもつても真面目な話をしていると自分でも驚く。何よりあたしは今日よく喋っている。ペラペラと。

「よく喋るねえー今日は。ナイフや短剣だけじゃあ不服だったわけか」

白瑠さんがうんうんわざとらしく頷く。

それもあるが、原因は朝眠っている間から白瑠さんと顔をあわせる

までに在る。

「そおだね、椿ちゃんは振り返り血を浴びるのが大好きだ。じゃあ血飛沫のでる急所を教えてあげよう」

「それは笹野さんに訊きます」

「そうだね、血飛沫ドクターに任せよう。俺は武器だね」

そうゆうことだ。

何故だろう。

セクハラを受けている時より食欲があるぞ。

「じゃあ、まずは場数を踏もうか？それから君のスタイルを整えていく。君は喉裂き魔だからナイフ系は必須。銃はお薦めしないな、あれは一对一じゃあ不利になる。素人じゃないなら尚更」

「何故です？」

「銃なんてスナイパーじゃなきゃ効果的とは言えない。いつぺんに大量に殺したい時にマシンガンは最適でもね、一对一は避けられちゃう。ほら君が病院でやったでしょう？」

最後のを訊いて頷く。喉裂き魔は聞き流しておいた。

そう言えば一对一で相手した。名前は………忘れたがイカれた刑事とメスと銃でちよつと相手した。

確かに銃口さえ向いていなければ、凶器ではない。

「銃を奪われたら終わりだあ、弾丸も当たらないしね」

「じゃあ素人相手には最適。サイレンサーついているのならあたしは使いたいです。暗殺向きですし」

「あつ！暗殺でいいもん思い出したっ！」

あたしの話を聞いているだろうか。

「喉裂き魔にぴったり！バグ・ナウ！」

「バグ：ナウ？」

「喉を引つ掻けば確実に致命傷的に抉れる武器だよ、こつ：爪みたいにね、俺が持つてるのはフックみたいになってんだ。この手に縛り付けるタイプでね」

白瑠さんが説明して、手で表現した。三つの指を丸く曲げ、くいくいと猫の手招きのような仕草をする。実物があるなら持つてくればいいのに。

「ああ、虎の爪つてやつですか？」

「……………んにゃ？椿ちゃんつてなんか：妙に武器を知ってるよね？」

「映画の見すぎだと思ってください」

「ふうーん？そう、バグ・ナウは虎の爪つて言う意味だよ」

朝食を食べ終えた白瑠さんは皿を放置して、自分の部屋へと入っていた。

開けっ放しの扉を見る限り、中に入っているのだろう。

あたしも遅れて食べ終え、白瑠さんの皿も一緒に片付けた。それから部屋を覗く。

「入って入ってえ」

前回同様に足場に困るほど様々の武器が並んでいた。

白瑠さんは鉤状の武器を片手にベッドに腰を下ろして、あたしに隣に座るよう手招きする。

「これだよこれ、バグ・ナウ！」

手に縛り付けているバグ・ナウを振り回す白溜さん。危ないのでちよっと離れて座る。

「それを持ち歩くんですか？なんか嫌だ」

「そうだねえ、一々装着する暇ないだろうし。これは隠せるように工夫しないとね。それを除けば、いい感じの武器だろ？」

白溜さんはバグ・ナウを自分の腕から外してあたしにつけた。

三つ引つ掻き爪が指の間から伸びるよう腕に装着。

「うん、これはこれは…いい感じですよ」

納得してしまう。ナイフを持たなくていい。本当にただ手を振り上げればいい。

三つの爪はより大口の傷をより深く抉れそうだ。

持つとなんとも言えない好奇心が膨らむ。

これは凶器を手にした人間の心理だろうか。

チラリと白溜さんを見てみると。

「俺の首をやってみる？」

「……………」

「冗談だよ、んひゃ。試しに使おうか簡単な仕事で」

「仕事で試させるんですか？」

「あの様子じゃあ道端にいる人を殺したら火に油じゃん、っーちゃんは望んでないだろ」

疑問形ではない。

あたしの心を丸わかりなのか、それとも客観的に見てもあたしの立場をそう思えるのだろうか。

白瑠さんは平然だ。

「そうですね。簡単な仕事で」とあたしも平然を装い頷く。
実践で試すしかない。

「……………本当に簡単な仕事ですよね？」

「この前のも簡単な仕事だったじゃん」

「……………そーですね」

一応、次の仕事でバグ・ナウを試すことになった。

それからまた武器講座。

昼飯抜き夜まで剣や槍相手にカルドで対決する。

白瑠さんは一（多分）手加減をして相手してくれた。

家の中でやるのはやはり変な気分だが、室内で殺るのが多いならばこれでいいかもしれない。

白瑠さん相手だとこちらも手加減一（寧ろできない）しなくていいので思う存分カルドを振れた。

夜は笹野さんが帰ってきて、夕御飯を作る手伝いをしながら今日のことを話す。

簡単な仕事ならば笹野さんが探してくれると言った。

「いいね。じゃあ三人でやる大仕事は俺が見付けるから、それまでの経験値を増やす簡単な仕事は幸樹に見付けてもらおう」

「白瑠に舞い込む仕事は大仕事ですからね」

食卓についても会話は続いた。

白瑠さんは賛成。

だからか。あのヤクザの仕事……………。

「そう言えば……………笹野さんの仕事は？済んだの？」

「ええ、君が刀相手に苦戦していた時にね」

同じ日に仕事をしたわけか。

「あっさり、終わったんですね？本当、簡単な仕事みたいですね」

即座に仕事を決め、殺つて解決なんて、本当に簡単なようだ。それは笹野さんが優れているからかもしれないが。

「あたしが選んでも？」

「ええ、いいですよ」

夕食を終えてから笹野さんがパソコンを出し、例のサイトを開いた。やっぱりオカルト風。

悪くはないが作っているのがハッカーと思うと、変なイメージが出来る上がる。

笹野さんはパスワードを入力して、説明をしてくれた。

リンク付けをしてある仕事内容は明細に説明が並んでいる。

ハッカーが依頼人に頼まれここに載せ、ハッカーが信用のある殺し屋に薦める。

そんなサイトらしい。

そうになると、ハッカーは頭がいつてことになる。

「仕事は近場がいいですね。白瑠がバイクで…なんなら私が車で送れる場所にしましょう」

「送るのは俺！白瑠お兄ちゃんがやる！それに一緒に手伝わなきゃ」

「はいはい、お兄ちゃん。ヘルメットをちゃんと購入してね」

まだお兄ちゃんごっこが続いていたのか。別に構わないが、ヘルメットは被ってほしい。パトカーに追い回されたくない。

笹野さんの言う通り近場で簡単でややこしくないシンプルな仕事

を選んだ。

ノートパソコンの画面上に付いているカメラの横に赤いランプが
ついていることに気付いて見たがそれはすぐに消えた。

大したことはないと思ひ、笹野さんには言わなかつた。

仕事は二日後決行。

本当にハッカーは優秀で、ターゲットのスケジュールまで調べたもの
を寄越してくれたのだ。ターゲットは休暇でホテルに泊まってい
るらしい。

白瑠さんにヘルメット装着でバイクで送られ、ホテルへ。それ相応
の服装一（お兄ちゃんに選んでもらつた服）でターゲットの部屋に
行き、バグ・ナウをつけて、速やかに殺した。ターゲットは男。声
も出さず死んだ。

一人で殺つたようなものだったが白瑠さんがいなければ侵入出来な
かつただろう。一人で殺るのはまだ早いだろうと思つた。

仕事を片付けたあとは、依頼人に金を貰いに行った。

依頼人は裏現実に片足を突っ込んだ企業会社の人間だ。

一人で会いに行つたら、なんとも奇妙な目で見られた。女だと丸わ
かりの上に若いとバレバレ。驚かれたが殺しの証拠の写真を見せれ
ば金を貰えた。

「また仕事を頼むよ」

「……………機会があれば」

「では仲介役の彼に次は君を指名するよ」

仲介役はハッカーのことだろう。

話し掛けられたが、女だとバレているなら口を開いてもいいか。あ
たしは小さく言い頭を下げた。

気に入ってくれたらしい。

こうやってお得意様が増えるようだ。

帰ってすぐに爆睡。

翌日起きたのは昼だった。

「寝坊助ちゃん、おはよー」

「…こんにちは。お昼ご飯つくりますね」

白瑠さんに寝坊助と笑われたがスルーしてお昼ご飯にした。

「どうよ、バグ・ナウの味は」

「凄く挟れました。いい感じですよ」

「だっしょー」

お昼ご飯を食べながらする会話ではない。

でもやはり装着したり外したりは面倒くさいと言えば、工夫を考えようと言われた。

言われたのだが、本人は部屋で寝てしまった。

何故だ。

起こす勇気のないあたしは白瑠さんの部屋の前で立ち尽くす。

ベッドに俯せでカーカーとイビキを聞いた白瑠さんを眺めていたら、呼び鈴が鳴り響いた。それでも白瑠さんはピクリともしない。

誰だろうと廊下を二歩歩いて思い出す。

笹野さんが訪問者を無視しろ。と言っていた。気がする。

「……………」

無視する事にして部屋に入るとまた呼び鈴が鳴らされた。

それも無視したらまた鳴らされた。

出てくるまで押すのか。

あたしは仕方なく、カルドを。では隠せないのもっと小さな短剣

をワンピースの下に忍ばせた。

玄関に向かって、扉を開けば。

「こーんにちは、お嬢さん」

一番に爽やかな笑顔が出てきた。

とつてもとつても。あたし好みのイケメンだった。

ちよつと眺めの黒い髪にパツチリした黒い目の男の人。

秀介より好きな顔だ。

だが、黒縁眼鏡。それはまあ、眼鏡をかけた男の人の色気が出てい
るのでオツケー。

しかしその身を包んでいるスーツ姿が全て台無しにしている。

いくらイケメンでもセールスマンならば台無しだ。

一気に冷めて冷静に対処する。

「親はいません。何も買いません。じゃあ」

「わっ！超ドライ！ツボ！待って、お嬢さん！ちよつとだけでも聞
いてください！」

さっさと閉めようとしたが止められる。なんか前半奇妙なことを言
わなかっただろうか？

あれ。待てよ。

なんか笹野さんの言った通りになっていないだろうか。

しつこく呼び鈴を鳴らされ耐えきれず扉を開いたらセールスマン。
閉めてチェーンをかけるべきなのでは？

「お願いします、可愛いお嬢さん」

お世辞なんて一蹴できるのだが、そのセールスマンの表情は、断
れないほど笑顔。

ただの笑顔ではない。
興奮したような無邪気なきらつきらした笑顔だ。
眼鏡の奥の瞳が爛々している。
例えるのなら。病室で見た秀介の何とも言えない表情にプラス白瑠さんの無邪気すぎる笑顔のよう。

「少しだけなら…」

「ありがとう！お嬢さんは超可愛い上に優しいんだね！うんもう…
ツボだよ」

笑顔のまま嬉しそうに頷いたあと何故かじろじろと上から下まで見られた。

やっぱり可笑しいなこの人。

歳は白瑠さんと同じくらいだろうか。

セールスマンはしゃがみ、鞆の中から紺色のノートパソコンを取り出した。

その間にあたしは短剣を握る。

パソコンをカチャカチャいじる目付きは真剣でかつこいいが、セールスマンはいただけない。

「さあ！画面を見てみて！」

しゃがんだまま言われた。

仕方なくあたしは一步近付き、彼の膝の上に乗せてあるパソコンを覗く。

必然的にセールスマンと顔が近付いたが、そんなこと気にとめることができなかった。

画面を見た瞬間。

意識はブツリと。

まるでパソコンの電源が落ちたかのように、途切れた。

意識が戻った。

自分は座っているようだ。暗い天上はコンクリートに見える。笹野さんの家ではない。笹野さんの家ではないのなら別の建物だ。何処だ？それよりも誰が？畜生。やられた。あのセールスマンめ。

座っている背凭れに置いた頭を上げれば、玄関の扉を開いた時と同じ。

「やあ！目が覚めた？可愛い可愛いお嬢ちゃん！」

無駄に爽やかな笑顔のセールスマンが目の前にいた。驚き身を引くが椅子に座ったあたしはこれ以上は距離が取れない。こいつ！と睨むが彼の後ろに光るものが見えてそれに目を移す。

テレビ。いや、パソコンの画面だろうか。長い黒っぽい机の上に幾つもの画面があるパソコンが在った。

その画面に、あたしが映っていた。

真っ直ぐカメラ目線のあたし。パソコンと向き合いあっている時に撮られたものだろう。背景が笹野さんの家だ。

つまりはあたしを最初から狙ってきた。

「…何が目的ですか…？」

あたしは目の前のセールスマンを睨み付けた。彼はスーツではなく、青いYシャツとズボン一枚の格好だ。

にんやり、笑みを浮かべている彼はあたしを見下ろした。

「ええ？そんな睨まないでよー可愛い可愛いお嬢ちゃん。僕はね、

君と仲良くなりたいたけなんだよ」

「はあ……？」

「ぐふふ………やっぱりいいねえゴスロリは」

堪えきれず笑う彼の最後の言葉に眉間にシワを寄せる。

ゴスロリ？ゴスロリとは。やっぱりゴシックローリータのことだろう。

「似合う似合う！」

すっごい笑顔で言われて、自分の手を見る。

ぴきりと固まる。

手は。ていうか見えない。

長い袖がヒラヒラしている。

あたしの着ていたワンピースと明らかに違う。

バツと自分の格好を見た。

ゴスロリのドレスを着ている。白と黒。スカートも袖と一緒に、白の

ヒラヒラ。そしてそのヒラヒラには黒いリボンが垂れている。

嫌いではない。

しかしあたしが自ら着るようなものではない。

自分では着てない。

つまりは。つまりはつまりはつまりは。

「なっ、ななっなに着させてんだアンタっ……！」

「超可愛い可愛いー。似合うーッボーぐふふー」

声を上げても彼は何の反応もしなかった。なんだかデレエーとした顔であたしを眺める。

よく見たらパソコンと逆側には、多くの服が在った。

ゴスロリのドレスやチャイナ服やメイド服等、色々数多くある。それだけじゃない猫耳カチューシャや尻尾やらそんな感じのアクセマ

であった。

調節したのか、切れた布とハサミが床に置かれている。
真っ先に浮かんだ言葉はそう。

変態。

こいつに脱がされ、着せられた。屈辱だ。

「あつ、あなたな…！なんであたしにこんなことを！」

「それはお嬢ちゃんが超可愛いから」

「理由になつてねえっ！！」

「理由になつている！超正当な理由だ！」

きゃぴきゃぴとはしゃぎ笑う変態がいきなり真剣な顔付きになりあたしの右手を両手で握った。

あたしを浚い、こんな格好にした超正当な理由はなんだ！？

「ぴゅちぴちの可愛い可愛い女の子に可愛い服を着させるのが僕の趣味だから」

両手を握ったまま、真面目に答えられた。

何を言っているか理解できず、あたしは数秒停止。

その間にも彼はあたしの身体を見る。

「いいね、いいね。未成年は肌がぴちぴち。うん。お嬢ちゃんはほつぺが柔らかいし髪サラサラだしニーソの足はそるしゴスロリ似合うしチャイナ服もいいかもしれないなあ」

限界だ。

「うにゃあつっつっ！…！」

奇声を上げて彼の胸を蹴り飛ばす。
そのあたしの足はニーソでした…。
倒れた彼は、ひょいっと起き上がって。

「ああ！猫コスもいいね！うん！お嬢さんがにやあって言うのは…
ぐふふ、ゾクゾクするねえツボだよ」

利いていなかった。

寧ろ奇声を上げて火をつけてしまった。あたしはぞわぜわします。
怖い。怖いです。変態が怖いです。

白瑠さんのセクハラより怖いですこの人。

椅子にすがりつきながらもこの状況を切り抜く方法を考えた。

着替えさせられたのなら短剣は奪われただろう。武器になるもの。

ハサミがある。

ハサミを掴んで滅多刺し。うんそうしよう。出来るならもう触れた
くないが。

「全く、幸樹もズルいよね！こんな可愛い可愛い美少女と同居して
いるのを僕に黙ってたなんて！」

美少女じゃねえ。睨み付けたが、彼は幸樹、笹野さんの名前を出し
たことに気付く。

「……………貴方……………笹野さんの知り合いですか？」

「へ？えー！？幸樹、俺のこと話してないわけ！？うっわぁー幸樹
つめてえー」

どうやら知り合いのようだ。

なんだかシヨックを受けたより拗ねた顔をした。

「僕の名前は穀田藍乃介だ」
こくたあいのすけ

「……………アイ……………?」

「白瑠には藍って呼ばれてる」

「あ…ならちよつとだけ話題に出ました。猫耳の話で。笹野さんは貴方の趣味にあたしを巻き込むなって…」

言っていた。

白瑠さんは藍くん、と言っていた。藍くんなら猫耳などたくさん持っている。

確かに持っている。仰山。

笹野さんはあたしをその藍くんの趣味に巻き込むなと言っていた。

……………こんな趣味に、巻き込まれたのかあたしは。

「猫耳？お嬢ちゃんが猫耳？やっぱり似合うよねえ！白に黒に…ん
！豹でもいいね、全部着てみよつか！」

後半の台詞をまるで聞いていないのか、猫耳の話をしやがった。

今助けに来てほしいのは笹野さんだ。白瑠さんじゃあ悪ノリして事態は悪化するに決まっている。

「着ない！！服返せ！家に返せ！」

「えー！来たばっかじゃん！もつと僕と楽しもうよ！」

「楽しんでるのはてめえだけだろっ！！近付かないで！」

精一杯威嚇。

白瑠さんと同じ種類の変態。

そして白瑠さんよりランク上の変態野郎だ。

勝、て、な、い。

ジリリリリ。

不意にそんな音が響いた。

落ちる墮ちる

「なんだ？」

あたしの台詞だ。

藍乃介さんは目をぱちくり瞬きしてパソコンを覗いた。何事かあたしも恐る恐る近づいて覗く。

パソコンにはこの建物の玄関が映し出されていた。そこに映るのは女性。

「彼女さんですか？」

「まさか。僕のタイプは少女だもん」

女性は美人の分類に入るというのに、それよりも少女だと言う。

少女趣味。ロリコン。

こんな顔の良いロリコン、初めてみた。

あたしはドン引きした。

だが笹野さん達の知り合いのようだから殺せない。畜生。

するといきなり警報が鳴り響いた。煩いほどの警報。

「げ！敵だっ！やっべえ！」

画面には女性の指示で男達が扉を蹴り破り侵入している姿が映っていた。

「敵？そうですかあたし帰っていいですか」

「それ冗談キツすぎだよ！僕頭脳労働派だから戦えないんだよ！」

真剣に言ったのに、大慌ての藍乃介さんは右手をブンブンと振った。その様子だと本当にまずいいらしい。

「じゃあ裏口から逃げましょう。白瑠さんのところへ」

「無理だ！奴らの狙いはこのパソコンに入った大事なデータだ！」

「じゃあ破壊したらどうなんですか…データ隠滅。バックアップしているなら」

「時間がない！あと…五分でここにくるよ！」

あたしにどうしろと言っただ。

カチャカチャと隠滅にかかったのかキーボードを物凄い速さで押ししていく。

「もしかしてハッカーですか？」

「ん？そうだよ、依頼の仲介役のハッカーさ」

笹野さんの友人のハッカー。あのサイトの仲介役のハッカー。ハッカーが変態ロリコン。

変態ロリコンだが、自分だけ逃げるのはだめだ。仕事の仲介をしてくれた相手だ。

仕方ない。

「武器はありますか？あたしの短剣は？」

「え、君の短剣なら…そこに。武器は…護身用の銃だけ…」

「むう…相手は裏の人ですよね」

「うん…」

「……キツいな。とにかく藍乃介さんは銃を。あたしが食い止めますから作業が終わったら逃げてください」

短剣一つは流石にきついが仕方ない。

藍乃介さんに短剣を受け取り、ホルダーを脚につけた。

裏現実者の武装した男三人を相手か。女も銃の一つや二つ所持しているだろう。

「え！？戦うの！？お嬢ちゃん！」

「お嬢ちゃんって呼ばないでください。あたしの名前は椿です。一応殺し屋ですから」

そう言えば殺し屋という自覚がなかったのによく今言えたな。なんて思いつつ、階段に向かった。

「待つて！椿お嬢！無謀だ！」

次はお嬢かよ。

「いいから隠滅を……」

「建物のあっちこっちにカメラがある！僕がエスコートするよ。気を付けて！」

投げ渡されたのはイヤホン。いや、小型通信機というやつだろうか。これで相手の場所がわかるし自分の場所もわかる。

「わかりました。ハサミ借りますね」

あたしは足元のハサミを拾ってから、今度こそ階段を降りた。

あ。着替えてない……。
こんな格好で戦うのか。

あたしは落ち込みつつ小型通信機を耳につけた。

「いやあ、意外だな。椿お嬢がそんな勇者なんて。うん、いいねク
ーデレ。そそのるよお、ゴスロリ美少女が戦うのを見るなんて」
「それ以上言ったら見捨てます」

耳元で早速、変態発言。

いつあたしがデレた。畜生。変態ロリコンめ。

「椿か。いいね。いい名前だ。ツボだよ。ところで君は幸樹と白瑠、
どっちの恋人なんだい？」

「……………二人の妹になりました」

「ぶふっ！妹プレイ！？ズルい！二人だけ楽しんで！」

「ねえ、帰っていいですか」

ていつか帰らせてください。

耳元で吹くな。くそう。見捨てたい。

心の中で涙目で嘆きつつ、次の階段を探す。

どうやらこの建物は迷路のようになっていて階段があちらこちら
と散らばっているようだ。

人が住んでいるようには感じれない。暗い建物中。

六階建てと言うことはあと五階降りなくてはならない。

早足で耳元の指示に従い次の階段に向う。

「四階に一人来た。気を付けて。拳銃だ」

それはまた嫌だな。

四階に降りて警戒を強める。ハサミは袖の中に潜め、もう片方は短
剣がすぐに取りれるようにした。

この階にいるであろう男を探す。息を潜め、足音を立てないように
歩む。

「だめだ後ろだ！」

藍乃介さんが叫んだ。

気配に気付き振り返ろうとしたが「動くな」と言われた。恐らく銃口が向けられているだろう。

「手をあげる」

「……なんですか……？」

「女に用はない。男は何処だ？」

「し、知りませんっあたし初めてきたので……」

撃たれないようにゆっくりと振り返った。防弾チョッキを着ている。そこにナイフを見付けた。他にもありそうだ。

ガチャ。

銃口がこめかみに押し付けられた。耳元で藍乃介さんが息を飲む音が聞こえたが、あたしはニヤリと笑う。

左手でその手首を掴む。

身体の向きを合わせ、右手にハサミを出して喉に突き刺した。

「うぐ、がっ……」

思いっきり突き刺した為、深い。気管も貫通しただろうか。

ハサミを抜けば血が吹き出し、口からも血が出た。

そして膝から倒れていった。

蹴って仰向きにする。

それからチョッキからナイフを抜き取る。うむ。いいダガーがあった。

「もしかして二人の弟子？」

恐る恐ると藍乃介さんが訊く。

「どちらかと言うと白瑠さんが師匠ですね」

そう言えば納得した。

納得されるなんて納得いかない。

あたしはカメラを探したが暗くて見付けられない為、止めた。

ナイフは二つ。あとは銃だけだった。しけてる。

藍乃介さん曰く反撃はないと思われたから軽い武装だと言う。自分で言っただけ悲しくないのだろうか。

ハッカーだから力でねじ伏せられると甘く見られているのだぞ。…
事実だからか。

「この調子なら大丈夫そうだな。良かった椿お嬢がいて」

「まだですよ。今のはこの人が油断してたから。あとは三階？一人ずつなら大丈夫かと……全員殺して構わない？」

「まだ二階にいる。あ、女は生け捕りにできるかな」

「了解」

あたしは頷き、三階に向かった。

「三階に一人来た。二階に女が二人で行動してる」

「ラジャー。どっちです？」

今度は方向を聞いて近付いた。ライフルを持った男を見付け、柱に身を隠す。

ライフルか。

どう相手しようか。

軍人のような歩き方で警戒しつつ歩む男。

「……………あ、あの」
「誰だ!？」

声をかければライフルを向けられた。

「う、撃たないで!あたし…武器を持ってません」

両手を上げて訴える。

大嘘だ。

「パソコンは何処だ」

「あ、案内します…」

「前を歩け」

ライフルで指示され、前を歩く。

距離を取られて後ろを。だからゆっくり歩いて距離を近付ける。

チラリと見る。いい距離だ。

カウントをして、動く。あんまりカウントは関係ない。ただの緊張をほぐすためだ。

がっ。ガシャン。

回し蹴りが決まってライフルが飛ぶ。つかさずダガーを首に向けて振り上げた。

しかし男は反応してあたしの手を掴み止める。

舌打ち。

掴む手首を掴み、左膝を振り上げたが止められる。

それは狙い通り。

手首を掴んだのも膝を上げたのもフェイク。

右腕の肘を顔に打ち込んだ。もろくらい、男は反動で後退りあたしの手を話した。

自由になったダガーを持つ手を首に向けて振り下ろす。

首が切れ、血を出した男は何も言わないまま背中を向け、倒れた。また俯せで倒れた為、蹴り起こす。

「お嬢こっわいねえーツボー。女優の道も夢じゃいよ」

「こんな格好だから殺し屋だと思わないこいつらがバカなだけですよ。残りの二人は？」

「今階段上がってる。二人とも拳銃を構えてる」

「了解」と返事してナイフを抜き取る。ナイフが四つ。ライフルは扱えないので止めよう。

階段付近に身を潜めた。

耳から二人の様子。そして向いている方を聞いて不意打ちを食らわせるタイミングを待った。

今だ。

飛び出して女の銃を持つ腕にナイフを投げ付ける。命中。

男にも投げて、短剣を抜く。

男は銃でナイフを防いだが突き刺さり使い物にならなくなった為、捨てる。

その隙に距離を詰めたあたしは振り上げるが、腕を掴まれ止められる。

避けるか止めるかの2つしかないのだから別に驚かない。

ただ、あたしの腕は二つあることを忘れて、彼は両手で止めてしまった。致命的なミス。

もう片方に持つダガーを喉めがけて振り上げた。が。

止められた。

男にじゃない。

女があたしの腕にしがみつき、止めた。油断した。

次の瞬間、腹に鈍い痛みが走る。

男に蹴られた。カラカランとナイフや短剣と一緒にコンクリートの

床を転がる。

「げぼっ……」

痛い。にやろつめ。

「小娘が……！藍乃介は何処！？」

ナイフを抜き、銃を拾った女の人があたしに問う。よく見たら外国人だ。アジア人。中国か韓国辺り。

「うつつ……」

あたしは演技でお腹を抱えながら起き上がる。

「剣を捨てなさい。撃つわよ」

銃口が頭に突き付けられる。バカだな。そんなに近付いて。

あたしは素早く女の手を掴みそれを引きながら立ち上がり腹部に蹴りを入れた。

「ぐはっ！」

「っ！」

銃は奪い遠くに投げ捨てる。

男がダガーナイフを取り出し構えたが、短剣の方がリーチがある。短剣でダガーを叩き落とす。

今度こそ喉を裂こうとしたが、また腕を掴まれた。また女だ。しつこい。

あたしはまた蹴り飛ばし、男の首を切った。

「終わった。今連れていきますね」

あたしは短剣を女の人に向けて、藍乃介さんに報告した。

「ヒヤヒヤしたぁー大丈夫？怪我は？」

「平気です」

一息ついてあたしは女の人を連れて藍乃介さんの元に向かう。一応武器を持っていないかを確認したかなかった。

短剣を彼女の首に当てて、尋問開始。

「良かったぁ、椿お嬢がいなきゃデータ消す羽目になってたよーありがとう」

「いいから、すませてください」

「オツケーオツケー。よし、じゃあ李さん。君の仲間を潰すから話してよ」

藍乃介さんは椅子に座り、得意気に女の人に笑いかけた。

女の人は名前を呼ばれたことが酷く信じられなかったのか目を丸める。

「君の素性は調べたよ。李さん。僕のデータを盗って何をする気なのかな？」

ニコニコ。縁眼鏡の奥の瞳が李さんを射抜く。それでも李さんは口を開かなかった。

面倒くさいな。

あたしが肩を落とすと、あたしを見て藍乃介さんが何かを思い付いた顔をした。

「君の仲間を一瞬で殺ったその可愛い可愛い美少女はね、頭蓋破壊屋の弟子なんだ」

その名前を口にした途端、李さんは震え上がりあたしを怯えた目で見た。

おいおい。あたしはまだ殺しの仕事を二回しかしてない小娘だぞ。白瑠さん。恐るべし。

「口を割れば逃してあげてもいいよ。どうするかい？彼女の拷問を受けて死ぬのは嫌だろう」

意地悪に藍乃介さんが問い掛ける。頭蓋破壊屋の名前の効果は抜群だ。李さんは揺らいでいる。

口を開こうとしている。
もう少し。待てば。

しかし。

「後ろっ椿お嬢！」

藍乃介さんが言い終わる前にあたしは振り返った。

さっきの男だ。しまった。確認していなかった。傷が浅かったよ
うだ。

手元の短剣が蹴り飛ばされ、首を掴まれ押し倒された。

「ぐっ…！」

「椿お嬢っ！うわっ！」

ガウン。発砲。

藍乃介さんが机の上に置いた護身用の銃を掴んだが、李さんが形勢

逆転のチャンスに飛び付いた。揉み合い、天上に弾丸が飛ぶ。

「っ……うぐう」

男に首を締め付けられてあたしは何気ピンチ。いや、超ピンチだ。こんな死に方まっぴら御免だが、武器がない。

短剣には手が届きそうにもない。

いや。手が届くのがある。この男のチョッキにナイフが一つあるはずだ。

直ぐに見付けた。

ナイフを抜き腕に突き刺す。

解放されて息を吸い込む。

あたしもミスをしていた。

首がから手を離したいが為に腕に刺したが、奴の喉に刺し仕留めるべきだった。

ナイフを持たせる事になってしまう。

男は今度あたしをナイフで殺そうと振り上げる。あたしは足で男の胸を蹴った。

次はどうする。銃だ。藍乃介さんから銃をもらって頭を撃ち抜く。そう考えたが。

バシヤアアン。

顔にもろ飛び散った。

男の頭が爆発。

血はおろか粉碎した頭蓋骨や脳味噌まで頭からかぶった。

目も開けない。袖で顔を拭く。口に入らないよう吹いて文句を言う準備を整えた。

「白瑠さんっ！！！！なんてことしてくれるんだっ！！！！」

「ええー、つばちゃんを助けたのにい」

「気持ち悪いわっ!!」

頭のない男の後ろに予想通り、白瑠さんが立っていた。

「あー白瑠！助かったよお」

白瑠さんと呼んだ藍乃介さんは安堵の息を吐く。その藍乃介さんの上に頭蓋破壊を目撃した李さんは青ざめている。

あたしは呻いて脳みそを髪から払い除けた。ああもう最悪だ。

「わあ！つばちゃん可愛い格好してるね！ゴスロリ！」

「脳みそかぶってなければね、師匠」

毒づいていれば「師匠？」と白瑠さんは首を傾けた。
李さんはもう希望をなくし、床に座り込む。

「ああ、台無しだな。タオルだよ、はい」

「ありがとうございます…」

藍乃介さんがタオルを投げ渡してくれた。それで顔を拭いていけば、白瑠さんがタオルを取って顔を拭いてくれる。

「ごめんごめん。怪我は？」

優しく笑いかけて白瑠さんは首を覗く。

優しいのが。なんか違和感。

「大丈夫です…」

あたしは唾然としながらも答える。白瑠さんはあたしの首に手をかけて眺めた。それからあの時の傷を親指で撫でる。その時の顔は無表情。と言うより表情がわからない表情だった。あたしに目を戻せば、にっこり笑う。いつもの笑みだ。無意味な笑み。貼られただけの笑み。

「あーあー。あーあー、あーあー。折角のゴスロリが台無しだよお白瑠ー」

「えー？よくない？ゴスロリに血は似合うでしょ」

「頭から被ったのは頭の残骸だろ。このドレスは白と黒でいいんだ」「椿ちゃんは血をかぶってなんぼだよ！」

なんぼの意味ちゃうわ。

なんだよ。血をかぶってなんぼって。いくらだよ。

なんだか二人でゴスロリ。正式名はたしかゴシックアンドロリータ。について熱く語りそうなので引き裂く。

「藍乃介さん、あつちを片付けるべきですよ」

あたしは顎で李さんを指差した。

頭蓋破壊屋本人登場のおかげで李さんは全てを話した。あたしには関係ないし、聞いてもわからない話だった為、あたしは聞かず着替えをする。

「なるほど、なるほど。なーる」

着替えが終われば話も終わったらしい。

すると「白瑠」と藍乃介さんが李さんの後ろに立つ白瑠さんと呼んだ。

ビクッと李さんが震えがったが何も頭を粉碎する訳ではなかった。

首に白瑠さんの手が落とされ、李さんは気を失い倒れる。

「本当に命は助けてあげるんですか？」

「んー？まーね。本体を潰せばこっちのもんだから。彼女は怖くないし」

「うわっ」と情けない悲鳴を上げたのはどこの誰だろうか。女性との揉み合いに苦戦していたのはそのお前だ。

「あーれ、椿お嬢。咲ちゃんのワンピース？二人して純白タイプ？なら甘口リにする？それともセーラー服とか。椿お嬢なら白のセーターに赤いミニスカだなグフフーツボー」

「あーいいねいーねえ。それでニーソにローファーだったらピツタリだあ可愛いねえ」

「可愛いよねえーグフフ」

「可愛い可愛い、ひゃひゃっ」

変態二人は両手で四角をつくりその間からあたしを視る。二人のヴィジョンではもう制服を着たあたしが見えているに違いない。

怖い。怖いです。二人揃ってかなり怖いです。

「全く……何をやっているのですか藍乃介」

そこで笹野さんの声が聴こえた。見れば階段の方からこちらに歩んでくる呆れ顔の笹野さんを見付けた。

あたしは迷わず笹野さんに駆け寄りその胸に飛び込んで抱き付く。

「おや……」

あたしの行動に笹野さんの声はすごく驚いていたが今日だけは許

してほしい。今だけは。

「変態が怖いです」ボソリと訴えた。

「いーなあーっちゃんのおグー」

「っーお嬢のおグー、ッポー」

「黙りなさい二人とも」

あたしはビクリと震え笹野さんの背中に隠れた。

笹野さんは二人にきつく言う。

「椿さんが怯えています。藍乃介、君の趣味に彼女を巻き込まないでください」

「えーえ！まだゴスロリしか着させてないのに！」

「着させ……貴方まさか着させたのですか？服を脱がせて」

ああ。そうだよそれ。恥ずかしい屈辱的だ。その辺だけは忘れない。ギョウツと笹野さんの身体に回す力を込める。

「藍乃介……少女に猥褻行為をしたと警察に突き出しますよ」

ワオ！言ったよ！裏現実者が警察に突き出すって言っちゃったよ！……ジョークかな。

「勘弁してよ！僕手なんか出してないよ？下着も脱がしてません！このパソコンに誓います！ただゴスロリを着させてそのあとほっぺと髪をいじっただけだよ！」

藍乃介さんは両手を上げ降参のポーズ。眠らされている間に何されただあだし。

「全く。椿さんに会いに押し掛けると予測してましたが……まさか
浚っていくなんて。それも本人の断りもなく着替えさせるなんて」
「いや、うん、でもズルいじゃん。二人で僕に椿お嬢のことを黙っ
てるなんてさ、お互い様だ」

「それは貴方がロリコンだからですよ、お互い様ではありません」

おお。キツパリ切り捨てた。

「白瑠がゴスロリを真つ赤にしたんだ、お互い様でもう一回椿お嬢
の着せ替えを」

「何がもう一回ですか。他の階に転がっている死体を見ると、椿さ
んが殺ったようですが……守ってもらったのでしょうか？報酬をあげる
べきです。貴方の趣味なんか報酬になりませんよ」

「……………はい」

ごもつともな笹野さんの言葉に藍乃介さんは落ち込んだ。
首を垂らして俯いた。

「えーだめえー？」

「だめですよ。椿さんが嫌がってます。だいたい、白瑠。何故貴方
がいながら椿さんが浚われてしまったのですか」

「う…それは昼寝してて……………」

「もしも藍乃介ではなかったら大変な事態ですよ、反省しなさい」

白瑠さんも落ち込んだ。

笹野さん、すげえ。

保護者だ。保護者。

チラリと笹野さんがあたしを見た。お。次はあたしか。

「あ、ごめんなさい…、注意されてたのに…すみません」

「いいえ。貴方は悪くありません」

注意されていたのに扉を開けてしまったあたしがそもそもの原因なのに笹野さんは微笑んで頭を撫でてくれた。

甘やかしてはだめだぞ。お兄ちゃん。

照れくさいため、何も言えない。

「あつ。やっべえ！本体を潰さないと」

藍乃介さんが我に振り返り顔を上げたかと思えばパソコンと向き合った。

「本体つて、死体達の親玉ですか？」

「んー。僕のデータ狙ってきたの」

「サイバー企業かその変ですか」

「まあ、そんな感じだよ」

笹野さんと会話しながらまたもや藍乃介さんはキーボードを全ての指を使って叩いていく。まるで別の生き物のように指は動いている。

無数の画面が動く動く。

「何してるんですか？」

「ハッキング」

藍乃介さんは集中しているようだから笹野さんに訊いたが、藍乃介さん本人が答えた。

親玉であるサイバー企業にハッキング。

「ハッキングして…？」

何をするのだろう。あたしはPCに強くない。ハッキングの知識だつてないのだからよくわからない。

ドラマや映画で観たつてやり方はわからない。

カチャカチャと藍乃介さんはキーボードを叩き続ける。

誰も黙ってそれを見た。

そして。

藍乃介さんの右手が高く上げられた。

それが振り下ろされ1つのキーがカチツと押される。

藍乃介さんの「ぶあああん」と言う一声と共に。

クルツと藍乃介さんはあたしを向いた。

「親玉のところの全てのパソコンにアクセスしたんだ。んで、全てのデータを削除した。ついでに全てのPCが焼き焦げるように仕掛けをしてそのついでに建物の電気も止めてやった」

得意気に藍乃介さんは「ぐふふ」と笑う。ついでに「ついでに。簡単そうに言うがきつとただのヒトでは難題なのだろう。」

「今頃真つ暗ん中で火事になってパニックじゃん？ぐふふーツボー」

愉快そうに笑った。

今、夜か。と気付く。笹野さんがいるし電気が落ちて真つ暗と言うなら、外は夜。長い間眠らされていたらしい。

「よし、じゃあ」と藍乃介さんはまたパソコンに向き合った。まだ何かあるのだろうか。

「引越し手伝って」

てへつと言いそうな笑顔であたし達三人に言った。

この男は！どれだけ煩わせるんだ！浚って着せ替えして殺させて…

最後に引越しの手伝いだとお？

住みかを知られているのにこのままこの建物に居られない。

優しいあたし達は引越しの手伝いもしてあげた。

藍乃介さんの荷物は六階に全てにあり、ほとんどが服だった。（四
分の一は女物……）

机は放置。PCは解体されダンボールにしまわれた。

「あつ！やつべえ！」

また藍乃介さんが思い出したように顔を上げた。

「なんですかっ！？まだあるんですか！？」

ギロリとあたしは睨み付ける。重い物は持つなと気を遣われ、軽いダンボールを抱えたが猫耳力キューシャ等が沢山入っているのが丸見えで、目をつけた白瑠さんがさっきからあたしの頭につけてくる。笹野さんがいない上、両手は塞がっているのでされるがまま、故に不機嫌。

「うわっ、可愛い！ツツボー！いいねいいね、メイド服だったらまた超ツツボー！」

「殺してやるつか」

またもや変態トークが始まりそうだったので自然と殺意が出る。声も低い。

白瑠さんや笹野さんには言えないが、殺し屋ではない藍乃介さんになら言える。

殺してやるつか。

利いたのか藍乃介さんが身を縮めて青ざめた。

白瑠さんも目をぱちくりして身を引く。効果抜群。

直接白瑠さんに使う勇氣はないが。

「えっとあの…すみません…」

とりあえず椅子の陰から藍乃介さんは謝罪。

「椿お嬢様に伝言があるんでありんす」

何故遊女口調？

伝言。誰からだろうか。

藍乃介さんがあたし宛の伝言を受け取るあたしの知人なんていただ
るうか。

「多無橋^{たなはし}氏が君宛にメールを送ってきたんだ。PCしまつちやつた
から引越し終わったら幸樹のPCに送るね」

たなはし。たなはし。たなはし。

誰だろうと右上に視線を上げて思い出そうとする。

「わーわー、記憶力も師匠譲りなんて言わないよね？昨日だったか、
やったじゃん仕事。ホテルで暗殺。依頼人の多無橋氏に会っただろ
？」

ああ。依頼者か。

思い浮かぶのは、眼鏡をかけた男性。短髪で焦げ茶の髪。人の良さ
そうな笑顔で次の仕事はあたしを指名すると言っていたあの依頼者。

「ああ、あの人ですか。覚えてますよ」

何も言わず白瑠さんはあたしが抱えたダンボールを持ってくれた。

手があいたのでカチューシャを取ってダンボールの中に放り込む。
ブーイングは蹴散らす。

「その……多無橋さんが、あたしに何か？」

「君の名前が知りたいんだってさ。本名じゃなんだし通り名とかないかい？」

「ないですよ、まだ駆け出しの殺し屋ですよ。椿でいいです」

通り名。白瑠さんが頭蓋破壊屋と名乗る名前みたいなもんだろう。
殺し屋の名前のようなもん。

勿論あたしにはないし、考えるのも面倒くさい。

「だめだめ本名は」

「名前だけならバレないでしょ」

「バレるよ、名前と顔がわかれば誰だって素性わかるよ」

ハッカーならわかるだろうね。ハッカーならば。

「んじゃあつばちゃんの通り名を考えようかあ！んーとねんーとねえ！猫！猫ちゃんにしようか！これからバグ・ナウ使って殺りまくるから！ピツタリ！」

どこが。

「バグ・ナウって虎の爪だろー。虎もいんじゃない？いや、豹がいよ、セクシーだよ、ぐふふ、ツポー」

虎から何故豹になる。

またもや変態レンズ越しから見てくる藍乃介さん。

アンタの眼球は何が見えてんだ。知りたくもありません。

嗚呼、秀介が恋しいです。

「フーちゃん紅が好きだからね！返り血を浴びるのが趣味だからあ
「趣味じゃない」

「べに？いーねえぐふふー。コスチュームはどんな感じ？」

「何コスチュームって」

「少女はコスチュームを着て仕事をする鉄の決まりがあるんだ！」

「少女限定じゃねえか！」

耐えきれずあたしは藍乃介さんの頭を叩いた。ナイフじゃないだけ
ましだと思え。

「コスチュームと言うか、仕事で動きやすい格好の方がいいのは確
かですよ」

笹野さんが戻ってきた。

ほっと胸を撫で下ろす。

「じゃあ先ずはコスチュームから行こうか！藍くん明日幸樹の家に
集合ね！コスチューム作り！イエー！」

「はい！？あたしの！？要りませんよ！」

「ぐふふーオツケイだよ白くん！」

「ちよつ、やだ！笹野さん！」

「必要なものですよ。白瑠の服や私服では持つ武器が限られますか
ら」

二人が揃ってコスチューム作りなんて無理だ。あたし耐えられませ
ん。

すぐに笹野さんに救いを求めたが打ち砕かれた。

「大丈夫ですよ、藍乃介は手が器用なのでお望みのコスチュームを作ってくれますよ」

問題なのは変態二人の変態癖だ。

「私もいますから」

にっこりと笹野さんは微笑んだ。

「ほんとっ？お休み？なら安心！」

「ええ、お休みです。ほら、白瑠。残りのダンボールを持っていてください」

あたしに頷いて見せてから笹野さんは白瑠さんにダンボール三つを持たせた。その上にあの軽いダンボールを乗せている。白瑠さんはしぶった顔をしながら笹野さんと最後の荷物を運んだ。

「変だな。幸樹、明日も仕事だったはずなのに」

そう藍乃介さんは呟いた。

「それにしても、どうして幸樹だけ笹野さんって他人行儀なんだい？一番なついてそうだけど」

あたしが不思議そうに見ていけば、ニコツと藍乃介さんは笑いかけた。

「え？それは……笹野さんと会ったのは病院で、初めから笹野先生と呼んでたのでそのまま」

「ふうーん。そっかそっか。でもこれからは幸樹さんって呼んであ

げなよ」

何度も頷いて藍乃介さんはあたしに言った。

「はぁ……」

「喜ぶよ。あ、僕のことは藍くんって呼んでね！」

「藍さん」

うん。絶対藍くんって呼んだら喜ぶだろうねアンタ。
ツボー、とか言っつてぐふふー、とか笑いそうだ。

翌日。

「やぁ！椿お嬢！昨日ぶり！可愛いねえ！ちよつとハグっていい？」

「おはようございます。入りますか？死にますか？」

「入りさせていただきます」

カルドを見せれば頭を下げて藍乃介さんは家にあがった。

スーツ姿だったが上着を脱げば、昨日と同じ紺色のシャツ。

リビングにつくなり、パソコンを開き、荷物を広げた。

布だの細胞セットだのミシンのだの。本格的だな。

「カルドにバグ・ナウにナイフばかり…そうだな。まずはナイフのポケットをどこにするかを決めて…」

「そうだねえ。上着の裏とかが妥当だよねえ…」

「重くなるかな。切りつける動作になるべく支障しないように考え

…」

「あとバグ・ナウだ。あれは初めから装着して隠せるようにした
んだって、つーちゃんは。左手に」

「左手にバグ・ナウ。じゃあそこは武器を改造だな」

真剣だ。真剣だった。

意外すぎるほど真剣に紙に書き入れる白瑠さんと藍さん。

紙を覗くと人の形をした図がありそこにバグ・ナウやコートなどが
書かれていた。

「じゃあ上着はコートチツクで」

「中は？スカート？ズボン？」

二人が一度顔をあわせてからあたしを見た。それからあたしの下
半身を見る。

「スカートだね」と二人は声を合わせて言っただけでまた紙と向き合う。

こらこらこら。あたしの意見を訊け。あたしが着るんだぞ。

「タイトかなあ」

「タイトはいいねえぐふふツボー」

「ロングは論外だねえ」

「ロングは論外だ。動きにくいしね」

「動きやすいならプリーツだねえひゃひゃ。やっぱりつばちゃんの
制服姿が見たいなあ」

「ぐふふー、いいねーいいねー。あータイトならミニスカポリスだ
よねーいいねーぐふふーツボーだあ」

何故だ。何故何故何故何故だ。

あたしはギギギツと笹野さんを振り返る。何故？

何故この人達はスカートを知ってるんだ、語ってたんだ。常識なの
か？常識なのですか。怖いよ笹野さん！

笹野さんはまるで関係ないと言わんばかりにコーヒーを飲んでいる。

「ミニなら動きやすいよなあ、コートに合わせるならタイトでいい？」

「うんいいんじゃない」

動きやすいのかタイト!?

あたし的にはプリーツが。

いや、スカートを下させてください。君達とスカートについて語りたくないから言わないけれど。

本人の意見を訊け!

「とりま、まずは測らなきゃだね、つーちゃん」

「そうだね、つーちゃん」

クルリと二人があたしを振り返った。その手にはメジャー。

「嫌だ」

あたしは即答した。

「いいか。絶対にあたしに触れんじゃねえ」

「うひゃっひゃっひゃっ敬語がどっか飛んでっっちゃってる。藍くん何したの?」

「え? 僕? 僕が悪いの? 僕が嫌われてんの?」

自覚ないのかこの二人。

落ち着くんだ俺。落ち着けええ!

「ゴスロリ超可愛かったのに。ツボだったのに。黒と白のフリルド

レス。白ニーソ黒ローファー」

「うんーあれは良かったよおひゃひゃっ可愛かったなあニーソいいねえニーソ。ニーソの何がいいかって？ニーソとスカートの間がそるんだよねえ」

「いいよねえそこお。こう…撫で回したくなるよーぐふふふうーいやああ椿お嬢の太ももと言ったら………あ。そうか、あのドレスピッタリだったんだ。測んなくてもわかるや」

な。な。な。な。な。泣きそう。泣きそうだぜ。

鳥肌が。鳥肌が。震えるよ手足。太ももがああ！

「いい加減に作業を始めなさい。追い出しますよ、二人とも」

やっと。やっと笹野さんが変態トークを止めてくれた。流石の笹野さんも止めてくれる。

あたしは涙目で振り返り、笹野さんに抱き着いた。

「あ、ありがとうございます！幸樹さん」

一瞬詰まったが礼を言う。昨日藍さんに言われたのを思い出して、笹野さんを幸樹さんと呼んだ。

すると笹野さん、じゃなくて幸樹さんはきよとんと目を丸めた。そりゃそうだ。

しかしすぐに微笑んであたしの頭を撫でてくれた。

視線に気付き、向く。藍さんがあたしを見ている。先程の変態な眼差しではなく、ただあたしを無表情で見ていた。

それからニカツと笑ってから作業に入る。

なんだか。何考えているかわからない人だ。尻尾が出てるのに、隠れる。そんな感じ。食えない。

作業は続いた。真面目に。

コートを作ってもらえた。秘密ポケット沢山のコート。サイズはちよこつと大きいくらい。袖にナイフがしまえるようにだ。着させてもらった。

うん。気に入った。動きやすい。

まるで武器庫のように裏地に沢山ナイフが入られるから重いが、思っていた程ではなかった。

ぴよんぴよん跳ねたり、クルリと回ってみたりした。

深紅のコートは揺れる。

まるで血が固まった色だ。闇に溶けてしまう色。

中々いい色だ。

「きゅはー、可愛いねえ、つーちゃん。回ってぴよんぴよん！」

「うさ耳もいいなー、ぴよんぴよん！甘ロリでくるくる回るのもいいねえぐふふ」

その色に見とれ、変態意見を無視した。軽く現実逃避。

お前らの視界はどうなってやがるんだ。

「悪くないですね。返り血を浴びた貴女がみたいです」

まー悪くない意見の幸樹さん。そう言えば返り血を浴びたあたしが見たいとか前に言ってたっけ。

「あ、そうだあ。大仕事があるんだよ、藍くん。サポーターやってよ」

「椿お嬢の？喜んで」

変態コンビ基白瑠さんと藍さんがバグ・ナウの改造に入った。

んー何故だろう。

またあたしは初耳だぞ。

次の大仕事。

大企業の誰かを殺すそうさ。大企業のビルに寝泊まりして外に出てこないターゲットなのでビルに押し掛けて殺す。らしい。

幸樹さんも入るだけあって警備は凄いらしい。だから油断大敵。故に藍さんの手も借りたいそうさ。

かなり重要な仕事。

「ぐふふ、白瑠の仕事かぁーひっさびさー。腕が鳴るねえーいいよいいよ。お嬢もやるなら是非っ」

「決まりですね。四人で決行です」

どうやらあたしに選択肢は与えられていないらしい。

「その仕事を見て、つーのお嬢の通り名を決めようか」

「そうだねえーうんうん」

「それで多無橋氏に返事できる」

「あれ。多無橋さんはそれだけ？名前だけ訊いたんですか？」

「うん。そうそう。その後は大仕事を終えてから話すよ、僕が返事するから」

例の伝言。

なんだかわからないがそうしておこうか。あたしは頷く。

多無橋さん。なんであたしを気に入ったのだろうか。

白瑠さんは何だかウキウキしたような様子だった。胡座をかいて揺れている。

どうしてそんなウキウキしているのかを訊けば「なんだか楽しいじやん！皆と殺しやるの！」と無邪気な笑顔で答えられる。

あたしは薄い笑みで「そうですか」と返した。

楽しいのだろうか。あたしは全くわからなかった。

だが、白瑠さんはいつだって笑っている。いつだって。

笑っている。楽しげに。でも感情なく笑っている。冷たそうに。ただ笑みをつり上げて笑う。

だから。白瑠さんが楽しいかどうかなんて。わかんない。そう見えても、違つかもしれない。狂ったような笑みだから。わかんない。

人間なんてものは仮面をつけてるから、わかんない。あたしもまた、仮面をつけた人間だ。

それから数日。藍さんの詳しい情報を元に作戦が立てられた。

二十階建てのビル。一階には六人の警備が入り口を固めている。そして五階ごとに三人ずつ警備が徘徊しているそうだ。

監視カメラ各階に数台あり、それを見ている警備はいないとのこと。ハッキングしてそのカメラを藍さんが見て、あたし達に指示をする。残念ながらターゲットの詳しい位置までは特定できず情報がないが、警備員以外がターゲットだと言う。

侵入する時間帯にはビルの社員はいない。ターゲットだけ。依頼人から写真は受け取っているの、建物に入り警備の目を潜りターゲットを見付け出す。そして殺す、それだけだ。

先ずは正面から侵入。

それぞれ分担して階をくまなく探して、ターゲットを殺す。

計十八人の警備員は武装をしている。注意しろとのことだ。それは武器にということ、裏現実者ではない為敵の内には入らない。

あと警報を鳴らされてはならない。とも言われた。

詳しくは聞かなかつたが警報を鳴らされれば殺しは無理だそうだ。

つまり警備に見付かつたのならば、仲間に知らせる前に静かに殺せ。警報が鳴つたのならば、仲間を待たずに建物から逃げる。

それだけは守れ。

藍さんはきつく。あたしに言った。何故かは聞かなかった。逃げると言うのなら逃げて方がいいのだろう。それだけだ。

「ターゲットは？戦闘能力はあるんですか？」

「え？」

白瑠さんが持つてきた仕事なのに、驚かれた。

「無駄だよ、椿お嬢。白瑠は相手であろうと殺すから頭蓋破壊屋だと恐れられてる。誰であろうと関係なく殺すから、皆恐れるんだ。誰であろうと関係なく殺すから、白瑠は相手を知ろうとしない」

藍さんはパソコンを叩きながらそう言った。

相手を知ろうとしない。だから殺した相手など、忘れてしまうのか。あたしは納得した。

向かうところ敵なしの頭蓋破壊屋。

ターゲットを白瑠さんから訊くだけ、無駄だということだ。

藍さんがいて良かった。

あたし白瑠さんと二人で仕事するのやめようかな。

「戦闘能力はないけど護身用に何か持っているだろうね。裏現実者だ。そして自分が狙われる理由があることも知っているだろうね」

藍さんがあたしに教えてくれた。

依頼人がターゲットを殺したい理由。

それは不都合だから。邪魔だから。ムカつくから。消したいから。殺しの依頼の理由は簡単に言えばそのどれかになる。

その存在を消さねばいけないから。それ以外に、ない。

なんとなく。そんな理由で金を出して殺させる変わり者はいないだろう。いてもあたしは関わりたくないものだ。

大企業の核である人物。敵対する依頼人はその人物のターゲットを消したい。

その詳しい事情は聞かされなかった。あたしも訊きはしなかった。興味はなかったしそこまで知る必要はないと思った。

興味がないなら知らなくていい。

頭もよくないし、裏社会はおろか表の社会の仕組みだって知らない。企業の何かを話されたって左から右へと流れるだけ。ちんぷんかんぷん。

ただ夜の警備員だらけのビルに入り、ターゲットだけを速やかに殺しだけ。

それだけわかれば十分だ。

殺し決行の日。藍さんのワゴン車でビルの近くまで来た。

深紅のコート。反対を押し切りデニムを履いた。譲らん。ブーツにナイフを仕込み、もう何十個ナイフを持っているのかわからないくらい武装完了。

左手にはバグ・ナウ。掌のスイッチを押せば爪が出る仕組みになった為、隠せる。スイッチのことで「肉きゅうしょ」とか言っていたので全力で止めた。

しゃきしゃき。本当に虎の爪みたいだ。虎の爪がこんな細い鉄で曲がっているわけではないが、出たり引つ込むのが面白い。

腕に仕組んだ短剣を確認。ベルトのナイフ。腰のカルドも確認オツケーだ。

「つーばちゃん」

顔を上げれば白瑠さんが目の前にいた。

今日はYシャツ。ボタンがしめられていなく、上半身の肌が丸見えだ。この人はまた丸腰でいくのか。

そんな白瑠さんの肌から手元に目を移す。

リンリンリン。

まるで静寂の闇に転がり落ちそうな鈴の音。

白瑠さんの手には赤いリボンのような布にぶら下がる鈴があった。

白瑠さんはいつもの笑みのまま、それをあたしの首につける。

「うん。これでよし」

チョーカーだ。

「なんです？これ…首輪？」

「チョーカーだよ。傷が隠れるでしょー」

鈴だしあたしを猫だとか言っているから首輪感覚なのかと思ったがチョーカーとしてくれたらしい。

傷。

そう言えば、白瑠さんにつけられた傷。目立つんだよね。

買い物とか店員さんにじろじろ見られていたっけ。

あたしは指先で鈴を鳴らす。そうすればこしょこしょと顎を白瑠さんに撫でられた。

「にゃあって鳴いて」

「……さあ仕事しましょう」

やはり首輪感覚だった。

「では、準備はいいですか？」

幸樹さんの格好は黒いジャケットと黒のデニム。バイクが似合う格好だ。うんかつこいいい。

「んひゃ、オツケー」と白瑠さんも黒いジャケットを羽織る。なんだか映画の強盗犯みたい。

通信機の確認で「椿お嬢ーミニスカはいて」と藍さんの声が耳元から聞こえたので即座に頭を叩いた。

藍さんはこのワゴンの中で指示をする。モニターが六つ。もう既にビルの中身が映し出されている。

階を上げる手段は、2つの階段と四つのエレベーター。手分けして探す為、それぞれ別ルートから行く。

あたしは東の階段。幸樹さんは南の階段。エレベーターは白瑠さん。エレベーターはあまりにも危険だから白瑠さん。白瑠さんが最上階から探し、幸樹さんが中間から、あたしが二階から探す。

「んじゃーチーム頭蓋破壊屋、決行！」

「いつからチーム頭蓋破壊屋になったんですか…」

「あとで改名しましょう」

「じゃあチーム頭蓋破壊屋、無事生還を誓って、さあっ！」

幸樹さん、白瑠さん、藍さん、あたしで右手を重ねてパツと放した。

裏現実の仕事、開始。

侵入は正面突破。玄関を守る警備のおじさん二人を幸樹さんとあたしで静かに殺す。

幸樹さんもナイフ。喉に一刺し。

ずるり。死体は受付の机の下に隠す。隠し終われば白瑠さんが二人の警備員を引きずって来た。頭はある。

「もう二人は裏口だから気にせず行こうか」

「はい。では、椿さん。何かあれば連絡を、すぐ駆け付けます」
「はい。二人も……ないと思いますが、気を付けて」

白瑠さんと幸樹さんの心配は要らないだろう。寧ろあたしが心配の種。

白瑠さんが堂々とエレベーターに乗り込むのを見てから幸樹さんは別の階段を登った。

二階につき、ターゲットを探した。二階にはターゲットはおるか、警備員もいない。

「二階は無し」と通信機に報告。ボタンを押せば話せる仕組み。四人の会話は全員聞ける。

「二階無しね」藍さんから返事がきた。

エレベーターを確認するとまだ六階だ。白瑠さんはまだ最上階についていないらしい。

次は三階。見たところただの会社みたいだ。「三階も無し」と告げる。

四階。踊り場に出た瞬間に警備員と鉢合わせした時は驚いた。直ぐ様、後ろに回り首をバグ・ナウで引き裂く。

心臓が止まるかと思った。

「四階で一人警備殺りました」と報告。「七階は無し」幸樹さんも続いて報告した。七階についたのか。

「藍さん、死体の隠し場所は？」

「ん。前方いつて右にトイレがあるよ。幸、エレベーターがそつちに停まった」

藍さんに訊いてから死体を引きずって男子トイレに運んだ。どうやら白瑠さんの他にエレベーターを使っている者がいるらしい。警備員か。

「七階八階に二人いる」

「ターゲットの姿は？」

「まだ見付からない」

藍さんが見ているのは六つのモニターだが建物の全てのカメラの映像をランダムに見ている。全てを把握するのは無理だ。藍さんはあたし達に気を配りながらこれでもターゲットを探している。だからあたし達が早く見つけなくては。

「六階もターゲット無し」

さっさとあたしの担当の階を確認し終える。白瑠さんもやっと二十階を確認し終えたそうだ。

「じゃあお嬢。好きな階にいつ探して、今のところ……十階と十三階はいない」

あたしは短く返事して足音立てずに階段を上がっていった。あたしが向かったのは十三階。十三つて不吉な数字と言われるがその不吉な数字があたしは好きだったりする。十三階も誰もいなかった。

「十三階無し」

「あ、ねえ、会社員がいるよ。残業らしいねえ」

「それ、困りましたね」

「あっちゃん待って、残業してるってことは」

白瑠さんが残業の会社員を見付けたらしい。藍さんは策があるらしい、カチャカチャとキーボードを押す音が聴こえた。

「電気がついている」ザア。とノイズがはさみ藍さんの声が聞き取

れない。

主に建物は真つ暗。電気で残業社員を見付けたいらしい。

「十」ざああ「八」ザアあ「階に」あああ。ノイズが強くなった。

「あの、藍さん聴こえません」

「女が二人、男」ざああ「ターゲットじゃ」ざああ「つーちゃ」と白瑠さんの声。どうやらあたしの通信機が故障したらしい。あたしの声だけ聴こえていないようだ。

耳に付けた通信機を指で叩きながら歩いていたら、鳴らさないように注意した鈴が鳴った。

チリリリン。

それは何故か。衝動に襲われたからだ。

壁に叩き付けられる。

背中から、まるで身体を貫通したような衝撃。何かが飛んできて当たった。

リンリンリン。

違う。比喻なんかじゃなく、身体を貫通した。左腹部に触れると棒状の物が、壁に食い込んでいる。

壁から離れようと身体を貫くそのせいで身動きできない。

痛みを感じてきた。

動くと思がった傷から血が溢れ、落ちる。生暖かい血を手で感じた。

チリン。

嗚呼、この感覚。

チョーカーの下の傷と同じ。流れ落ちる血とまるで。

「あれ」

まるで。落ちるような感覚。眠りに落ちてしまいそうな感覚。足元がないような墮ちる感覚。

「女の子?」

冷たい壁に頬を重ねたまま声の主を振り返る。暗い廊下に誰かが立っていた。

チリーン。

闇を転がるように落ちてしまいそうな、鈴の音。

頭蓋破壊屋

身体を貫通し壁に突き刺さったのボウガンの矢。壁から抜こうにもビクともしない。身体から抜こうにも痛くて動けない。

「うっ、ああ……」

情けない声は小さい。

「女の子だ。女の子。変だな、男が侵入してるって聞いたのに」

男が近付き、髪を鷲掴みする。顔が見えた。お互い、顔が見える距離だ。

やる気のない据わった瞳があたしを見る。

「変だなあ。間違った？でも君会社員でもないよね」

「う、ああああっ！」

悲鳴が、闇を転がる。

バグ・ナウで男の首を狙ったが止められた。左腕を壁に叩きつけられ、ボウガンが射たれる。2つの矢が、あたしの腕を封じた。貫通はしてないが矢に切りつけられ、痛い。どうする。動けない。畜生。

「物騒なものを持ってるね、君」

「っ……」

「俺、弥太郎やたへやと矢都。君は裏現実者？」

耳元で問われた。
なるほど。こいつも裏現実者。

「殺し屋、なのかな？」

うなじを撫でられ、囁かれる。手は背中に触れながら徐々におりていった。

「なら、君を殺さなきゃいけない」

ターゲットが。

ターゲットは狙われる理由を知っている。

だからターゲットはビルにこもっていた。十八人の警備員と。だがそれは、全然安全ではない。

裏現実者は簡単に警備員を突破する。

だから。だから、この裏現実者を雇っていても。可笑しくはない。

「アンタ、誰に雇われてる」

「あ。喋った。多分君が狙ってるターゲットだと思うよ、これ通信機？仲間がいるのか」

なんとか声を絞り出して言う。あっさり彼は答えた。あたしの耳から通信機を取り踏み潰した。

「仲間はどこ？愛子が言ってたっけ、男がいるって」

「愛子…？アンタは仲間がいるわけだ…何人？」

質問を無視して質問を返す。

そうすると、グイッと背中に突き刺さる矢を動かされた。

「うぐうっ！」と悲鳴を上げる。激痛にもう喋る気力がなくなった。仲間がいる。裏現実者の敵がいる。白瑠さんか幸樹さんが確認されている。知らせないと。誰かに誰か一人でも。でも、その術がない。その時。

弥太郎が離れた。

視界に見えたのは、白瑠さん。

白瑠さんが飛び掛かり、弥太郎が避けた。

「いた。男の侵入者」

「……」

白瑠さんだ。何故。白瑠さんがここにいるのだろうか。

それにどうして。どうして白瑠さんの笑い声が聴こえないんだろう。

「白、る……さん……」

あたしを見ていない瞳は一点に、弥太郎を見ている。見ているんじゃない。睨んでいる。

こんな白瑠さん。

あたしは知らない。

その表情は、知らない。

睨み付けるその目。固く閉ざされた唇。深く寄せられた眉間。

その表情を、その白瑠さんの表情を、あたしは見たことがない。

なんで。

そんな。

顔をしているのだろうか。

あたしには。わからない。

「ふ、あつ……！」

白瑠さんは弥太部を睨み付けたままあたしの腕に突き刺さる矢を抜いた。

「おっと。それ、俺のおやつ」

弥太部が黙ってみているはずもない。ボウガンを白瑠さんに向けて射った。

白瑠さんはそれを避ける。

あたしは腕を解放されたが、身体に刺さった矢が抜けない。これじやあ動けない。

「…おやつ？」

一瞬誰の声だかわからなかった。白瑠さんの低い声が弥太部に向けられる。

「おーやーつー。こんな若い殺し屋、きちよーだもんな」

弥太部のやる気のない軽い声。裏現実者は可笑しい奴ばかり。正常はないのか。

「その口……引き裂いてやる」

「へっ。こわいこわい」

白瑠さんの低い声を弥太部は鼻で笑い退けた。どうやら戦いが始まったらしい。

視えないが音がする。

自分でこの礫から抜け出さなければならぬ。

一息つき、カルドに手を伸ばす。左腕がズキズキする。それよりも腹が重傷だ。

「んぐ…」と悲鳴を噛み殺し、カルドで矢を力の限り切った。支えをなくして身体が倒れる。痛い。痛い。

ゆっくり起き上がれば、二人の戦いが見れた。

弥太郎がチャクラムを投げる。白瑠さんは身を引いて避けた。弥太郎が飛び道具ばかり使い、白瑠さんが近付けないようだ。

白瑠さんの頭蓋破壊は触れないと使えないだろう。

加戦しなくては。

立ち上がろうとすれば。

「つーちゃん。短剣貸して」

「え」

淡々と言われた言葉に思わず目を丸める。

「短剣一つ貸して。君は藍んどこに戻って手当てを。動けるよね？」

ちらり。白瑠さんがあたしに目を向けて訊いた。

「でも、ターゲットが」

「ターゲットは幸が殺る」

遮られた。

「でも、まだ敵がいて」

「それは藍に言って。そうすれば幸にも伝わるから。戻れ」

強く。冷たく。突き放されるように言われた。

その表情に笑顔なんてない。

その顔にいつもの仮面はない。

仮面はない。笑顔が仮面ならば、今の表情はなんだ？

「……………はい…」

あたしは返事をしてから、左腕から短剣を抜き、白瑠さんに向けて滑らせた。

「エレベーターは向こう」とあたしに言い、白瑠さんは弥太郎を視界に捉えながら短剣を手に握った。

あたしは立ち上がり、白瑠さんの背後に向かって壁に沿いながら歩く。

「おっと。逃げんな」

弥太郎があたしに向かって何かを投げてきたが、全て白瑠さんが叩き落とす。

「破壊してやる。指を切り落として手首を切り落として腕を切り落として、腹を切り裂いて、頭破壊してやるよ」

凍り付くような空気を。白瑠さんが。白瑠さんの存在が作る。

「……………っこわい、こわい……………」

弥太郎の声が強張ったように感じた。

ドガッ。

まるで。まるでハンマーを叩き落としたような音が響いた。

弥太郎に向かって行った白瑠さんの手を弥太郎は避けた。その手が廊下に触れた途端にクレーターが現れる。

「っ…」

弥太郎は二つのチャクラムを投げ付けた。それも白瑠さんは短剣で叩き落とす。

白瑠さんから距離をとる為、休まず弥太郎は武器を投げ付けた。暗い中、見えたのはクナイや手裏剣。

一旦、身を引いた白瑠さんはあたしに目を向けた。

「早くっ！」

怒ったような口調に急かされて、あたしはまた歩き出す。

矢が刺さったままズルズルエレベーターに行き、乗った。

チリリリン。

扉を閉めて、一階を押しして、座り込めば首の鈴が鳴った。

手を見れば、真っ赤な血。

落ちる。浮遊感は、エレベーターのせいだろうか。血が流れている

せいだろうか。

ポオとしてきた。

もう一度手を見る。真っ赤な血だ。腹から、腕から、流れている。

大好きな。赤い紅い血。大好きな紅が、流れている。血が。ドクドクと。

あの電車の中を思い出す。

白瑠さんに殺されかけたあの時。

白瑠さん。頭蓋破壊屋。狂った笑み。狂ったような笑い声。陽気な愉快そうな喋り方が彼。彼のはずなのに。

どうしちゃったんだろう。

白瑠さん。

ぼんやりとした頭で考えて考えてみた。ぼやけた頭じゃあ考えられない。

顔を上げて見付けた。監視カメラ。無意味に、何となく、手を振ってみた。

意味ない。藍さんが見ているかどうかなんてわからないし、通信機

はないのだから。
フワツと吐きたくなる浮遊感に襲われて、エレベーターが着いたことに気付く。

のそつと立ち上がり、カルドを握る。左右を確認。誰もいないようだ。

あと少し。痛みを堪えて歩き出す。

弥太郎の他に愛子とか言う仲間がいるって言っていたが、幸樹さんは大丈夫だろうか。

早く藍さんに伝えて、知らせてもらわなくちゃ。

やっと玄関についた。ドアに寄りかかりながらも一歩。一歩と歩く。ワゴンが見える。

ワゴンから藍さんが降りるのが見えた。何かを叫んでこちらに向かって走ってくる。

どうしたんだろう。

「後ろっ!!」

ぼけた頭じゃあすぐ理解できなかったが、振り向いた。

女。女が短刀を振りかざしていた。

素早くカルドで受け止める。

「うあっ」受け止めた衝撃に腹に痛みが走った。左手で押さえれば、その左手ごと傷を蹴られた。

今まで感じたことのない強烈な痛みに悲鳴さえでない。

痛い。身体が重い。

「お嬢っ」

視界の隅で藍さんが銃を構えた。だが女が投げたクナイによって弾かれる。

だめだ。藍さんじゃあ勝てない。あたしは思ったが、藍さんは立ち

向かおうとした。

女と揉み合ったがすぐに蹴り飛ばされて倒れる。

あたしは手放したカルドに手を伸ばしたが、女に阻まれた。腹に女の足が踏み下ろされる。

「うぐあっ！！」

もう声が出ないとばかり思ったが出た。物凄く痛い。

あたしと大して背は変わらなそうだが、歳上の女はあたしを睨み付ける。多分。愛子かな。

「どいつもこいつも！うちの大事な兄貴を狙いやがって！殺し屋だろうが小娘だろうが一人残らず殺してやる！！」

短刀が振り上げられる。

殺される。そんな単語。頭には浮かんでこなかった。

ただ痛くて。痛くて。

何も考えられなかった。

「同感ですね」

下ろされる前に。女が悲鳴を上げる。まるで引っ張られるように仰け反った。

「私も妹が大事ですよ。殺すつもりならば…ソレを殺すまで」

細い、包丁のようなナイフが女の首に刺さった。

女の後ろにいたのは、幸樹さん。

女を捨てて、あたしに手を伸ばす。

「意識を手放さないでください。聴こえますか？」

「藍さん…は？」

「無傷です。貴女の手当てをしましょう」

「う、ん…ターゲットは…」

「無理して喋らなくていいです。私が始末しましたから」

「お、お嬢！しっかりっ！！」

視界に藍さんも入った。

喋るのがしんどい。痛みはどれだっけ。

瞼が重い。身体が重い。

意識飛ばしちゃいけないから目を閉じちゃだめだよな。

痛いつてなんだっけ。

幸樹さんがあたしを抱え上げた。もう腕も上げられない。眠い。

だらしなく垂れる腕から血がポタポタと落ちていくのが見えた。

一面が血の電車を思い出す。

全身に。返り血を浴びたことを思い出す。

あれ。走馬灯かな。

視界さえもぼやけていく。

真っ赤な。真っ赤な。血塗れ。

落ちる。墮ちる。感覚。

瞼が落ちる。

紅い紅い紅い紅い紅い紅い紅い。全部が紅い。紅い電車の中で。揺れている。

死んじゃおうか。

このまま揺られて死ぬ。痛いつてなんだっけ。

とつてもとつても。楽な死に方。

紅い紅い紅い紅い紅い紅い。大好きな紅。

誰もいない紅まみれの電車に一人。揺られている。

紅い紅い紅い紅い紅い紅い。独り独り独り独り独り。

何も聴こえない。

あれ。誰かいる。立っている。この男の人。誰だっけ。いや。知ってるでしょ。名前はなんだっけ。嗚呼。そうだ。白瑠だ。真っ白なシャツ。血に濡れてない。笑っている。頭蓋破壊屋さん。笑っている。白瑠さん。

あれ。

白瑠さんは何処だ？

「椿お嬢！」

藍さんの声。一点が視れない。視界が揺れる。藍さんがあたしを呼ぶ。

「椿さん！しっかりしてください！」

幸樹さんの声。汗を拭う手が血に濡れている。藍さんと一緒にあたしを呼んでいる。

そこに。白瑠さんがいない。

白瑠さんは何処だろう。

また睨が落ちる。

じりりりりりりりりりり。

耳障りな警報の音にまた目を開く。なんだ。この音。

自分の腹が見えた。包帯が巻かれている。もう手当てがされたようだ。血が。滲んでいる。

「椿つ！！！！」

また呼ばれた。顔を上げれば、白瑠さん。

白瑠さん。白瑠さんなのに真っ赤だった。真っ赤だった。血で真っ

赤。見たところ返り血だろうか。

「椿！大丈夫！？生きてる！？」

心配している眼差し。あたしの顔を覗く。生きてるように見えな
いのかな。変なの。変なの。白溜さんが変なの。

白溜さんの手があたしの頬に触れた。あたたかい。あたたかい。あ
ったかい。

そっと右手を上げる。

上げた右手で白溜さんの頬に触れた。あたしの手も。白溜さんの手
も。真っ赤。血塗れだ。

「……………真っ赤……………真っ赤あ……………」

声が出た。声が出せた。こんな状況で笑うべきじゃないのに、笑っ
てしまう。

だって。可笑しいんだもん。

白い服を汚す白溜さん。変なの。真っ赤な白溜さん。変なの。笑顔
じゃない白溜さん。変なの。血相かいてる白溜さん。変なの。
変なの。どうしちゃったんだ白溜さん。変なの。

「……………うん。つばちゃんと一緒…真っ赤だよお…んひゃ」

驚いたように目を丸めた白溜さんは自分の手を確認。それからへに
やあっと白溜さんは笑った。

ギユウツと、あたしの右手を握り締めて、安心したように笑った。

あ。

白溜さんがいた。

いつもの白溜さんだ。

笑ってる。

白瑠さんだ。

あたたかい手が握り締められる。

「白瑠！早く乗りなさい！血が足りません、病院に、藍！」

幸樹さんが怒鳴るように言う。白瑠さんは直ぐに乗り、扉を閉めた。

「びよ……いん……嫌い」

「何言っているんですか」

幸樹さんの声が出た方を向いたら、案外幸樹さんは近くにいた。

ぺしっと呆れた顔で頭を叩かれる。怪我人なのに。

ちよつと笑いを洩らす。そうすれば幸樹さんも笑った。安堵した微笑であたしの頭を撫でてくれる。

嗚呼。あつたかい。

あつたかい。

眠りへと。落ちた。

次。目を覚ましたらあたしの部屋のベッドの上だった。右腕に点滴。病室じゃないだけ、嬉しい。

「つーばちゃん？生きてる？」

「死んでるように見え……んぐっ……」

「ぎゃ！？椿お嬢大丈夫！？」

「わわつつばちゃん！死んじゃ駄目だよ！！」

「うる……痛っ」

「騒がしいです、出ていきなさい二人とも」

左右でわーわーっと騒ぐ白瑠さんと藍さんを叩いて幸樹さんは黙らせた。二人は追い出されまいとベッドにしがみつく。

「具合はどうですか？寝ててもいいですよ、傷は縫いましたが喋ると痛いでしょう」

また喋ると痛い怪我が。

幸樹さんは手をついてあたしの顔を覗く。

「大丈夫……です……。すみません……。迷惑かけて」

「いいえ。迷惑なんてかけてませんよ」

幸樹さんは微笑んで首を振った。

「そ、そうだよ！僕のミスなんだ……ごめん！あの女が監視カメラで見て……裏現実者がいること気付かなくて……本当にごめん！僕のせいだ！」

右側にいる藍さんが頭を深々と下げて謝る。その顔が苦痛そうだ。

「違います……あたしが気を抜いてたから。通信機が」

「それも僕のミスなんだよ……」

慌てて説明しようとしたら、情けない声を出して藍さんが頂垂れた。いや。あたしのミスなんだって。通信機に気をとられて射たれたんだから。

そう言いたいのが、腹が痛い。腹が痛くて喋れない。

宥める方法。ああそうだ。右手を伸ばして、あたしは藍さんの頭を撫でた。

目を丸めた藍さんは涙目であたしを見つめる。

やめてくれ。イケメンの涙目は弱いんですよ。なんで黒縁眼鏡を取ってるんだ。

「ううん……俺が悪いんだよ……大仕事なんかをやらせたからだよ……俺が悪いんだよ……ごめん……」

そして左側でも同じことを言い謝罪する白瑠さん。なんだかじめじめしたオーラがあたしにまで影響してきそうだから扇いで退けたい。左手はズキズキするので使えない。

「あの……白瑠さん……。あたしの不注意ですつてば」

「俺が持ってきた仕事のせいで……」

嗚呼なんだか。

「僕のせいだ……適当な階に行けなんて言ったから……」

「俺のせいだよ……俺がさつさとつばちゃんのところに行けば……」

うざいぞ。このじめじめ。

あたしより先にじめじめするんじゃない！迷惑かけたあたしが拗ねたいわ！こら！

なんて心配させたあたしが言えるわけもない。

「やめなさい。自分を責めるなら他所でしなさい。椿さんが眠れないでしょう」

幸樹さんが大きな溜め息をついて二人の頭を叩いた。またもや追いつけまいと二人はベッドにしがみつく。

「あー、ターゲットは殺ったんですよね？幸樹さんが」

「はい」

「何階にいました？」

「十階」

「…まじか」

「そうです」

あたしが十三階で弥太郎と会い、その下にターゲットがいたのか。

「そう言えば。白瑠さん。どうして十三階にいたんですか？」

「ん？つーちゃんが自分のところ確認したから一緒にターゲット探そうって言ったの聞こえなかった？」

「聞こえませんでした……ノイズが酷くって」

一番の疑問を白瑠さんに訊いた。理由は白瑠さんの自由奔放にあつたらしい。そのおかげであたしは助かったみたいだ。
じゃあもう一つ。

「白瑠さん。真っ赤でしたが、弥太郎をどうやって殺したんですか？」

「んにゃ？やたべ？」

白瑠さんはきよとんと首を傾けた。

あれ。あれあれ。もう忘れちゃったのだろうか。

「弥太郎？弥太郎って、弥太郎火都？」

藍さんが目を丸めて訊いた。

「いえ。弥太郎矢都と名乗ってましたが」

かど？弥太郎はヤトって言ったよね。ちょっと傷が痛くなり声が震える。

「まじか。弥太郎矢都を雇ってたんか？ターゲットは」

「そのようですね…」

「知っているんですか？弥太郎矢都」

「ええ。一人だけだったんですか？」

一人だった。

「一人って？弥太郎は一人でしたが…愛子って仲間がいると言っていました」

「愛子はターゲットの妹の名前だな」

「玄関で私が殺った女ですね。他に男は？」

「いえ…見ませんでしたよ」

なんだかわからないな。何にかあるのだろうかと首を傾げながら、幸樹さんと藍さんを見る。

「ねー、ねー。皆で何の話をしてるの？」

そこに話題に入れない白瑠さんがあたしと幸樹さんの顔を伺う。

「弥太郎ですってば、あの男！」

「……………だれ？」

白瑠さんは眉毛を歪ませ、心底わかっていないような顔をした。…この人海馬に異常があるのだろうか。

「ボウガンの」

「…ん？」

「クナイの」

「…んん？」

「……チャクラムの」

「しらなあい」

あれ？この人あたしが怪我を負った原因さえも忘れたのか？

「白瑠、昨日殺り合った人間くらい覚えておきなさい。弥太郎火都の弟、椿さんに深傷を負わせた裏現実者です」

叱り口調で幸樹さんは教えてやった。白瑠さんは目を丸めてぱちくりと瞬きする。

「あー、あーん、アイツね。うん」

思い出したのか、なんとも曖昧な声で頷いた。そのまま白瑠さんは何も言わない。

「いや、あの、白瑠さん。だから…どうやって殺したんですか？」

同じ質問をすれば、視線を落とした白瑠さんの目があたしに向けられた。

その顔に笑顔がない。

じいっと白瑠さんがあたしを見た。何を考えているかわからない目。真っ直ぐに見ているのに、読めない。

「白瑠さ」

「指を切り落として腕を切り落として腹を切り裂いて頭をぐっちゃぐちゃにした」

ただの台詞を吐いたかのように、白瑠さんは答えた。
淡々と。当たり前のように。

「切り裂いたっていかめつた刺しにしたから返り血浴びたんだ」

それから白瑠さんは椅子から腰を上げ、あたしに背を向ける。

「一眠りするよーおやすみい」

そのまま部屋を出ていった。

扉が閉じられたあとに、シンと沈黙が落ちた。

どうやら驚いているのはあたしだけじゃないらしい。

「あの、あたし…怒らせましたか…？」

「さあ…？白瑠の怒ったところ見たことねえ。あんな白瑠初めてみた」

戸惑った様子の藍さんが首を横に震える。

「……………椿さんに怒っていませんよ。気にすることありません」

扉を見つめていた幸樹さんはにっこりとあたしに笑いかけた。そうかな…。

「白瑠さんが笑わずに人を殺すなんて、思いもしなかった…白瑠さんを怒らせるのは前に話していた人だけだと思ったのに」

「…私が白瑠でも、激情していましたよ」

「え？」

「いえ。何でもありません。私も一眠りします。何かあったら天井にでも物を投げてください。駆け付けます」

幸樹さんはさっさと話を終わらせて、あたしの部屋をあとにした。物を投げるか。新しい…斬新だ。

「藍さんは眠らなくていいんですか？」

「うん。へーきへーき！っていうか、病的な椿お嬢がツボだからもうちょっと眺めたいっていうかあ」

藍さんは寝なくてもへっちらと言わんばかりの笑顔で言った。今見なくとも暫くはベッドの上だろう。

「いやあー椿お嬢の寝顔は可愛いねえ？ぐふふ。まさに天使の笑顔、ツボーふふっ！もう食べちゃいたかった！」

「藍さん、寝れないならあたしが殴って眠らせますよ」

藍さんは丸めていた背中をピンと伸ばし、口を閉じた。

ちよっとしてから「それにしても…」と頬杖をついて口を開く。

「白瑠が殺した相手を忘れるのは珍しくないけど…武器の名前を言っても思いつけないなんて…。返り血まで…。頭に血でもものぼってたんだろうか…」

まるで独り言のように藍さんは前方の壁を見つめた。いや、独り言だ。

ぐふふ。といい顔が台無しになる笑いを洩らしてあたしに向かい合う。

「林檎食べる？」と訊いた。

昨夜から何も食べていない。今は時計の針が真上を向いている時間。食欲があるのかと問われれば、悩むが一応腹に入れておこうと頷いた。

「ねえ、藍さん。白瑠さんはどのくらい裏現実で恐れられてるんです?」

「ん?なにそれ。白瑠の恐ろしさを知らないってこと?お嬢ちゃん」
林檎を持って部屋に戻ってきた藍さんに訊いたら、怪訝そうな顔で返された。

「そりゃあ人間離れた白瑠さんは怖いと思いますよ。でもあたし、最初に会った裏現実者は白瑠さんでしたので、まだ裏現実のレベルってやつがわからないんです」

あたしがそう白状すれば「なーるほどねえ」と藍さんは何度も頷いた。

「レベルねー?みんなバラバラだからどこを区切れればいいかわかんないなーん」。初めて会った白瑠を…レベル100にしようか!んで弥太郎矢都がレベル50だ。幸樹もそこらへんかもしんないな」
「白瑠さんと幸樹さんの差が激しいですね……。まあ、幸樹さんは名の売らない殺し屋ですもんね」

「あははっ!名の売らない殺し屋?いーねえ!いーねえツボ!まさに幸樹はそうだね。でもそこそこ売れているよ、実力は確かだからね。串刺しドクターって依頼人は呼ぶよ」

「それはそれは…知り渡って欲しくない名前だ」

椅子に腰を落として笑いながら、藍さんは果物ナイフを取り出した。「ちよつと、藍さん。皮剥く気ですか」と訊くと「え?皮剥くつしよ」と驚かれる。

「いやいや。皮食べれますから」と反論。

「えーえー。僕は皮を剥く派だよ。僕が食べれない!」とわがまま

を返される。お前も食べるのかよ。
そのままじょりじょりと皮を剥き始めた。

「白瑠の頭蓋破壊は喰らったら終わりだ。頭に一撃喰らったらゲームオーバーだからね。誰だろうと気が向けば殺す。狙われたらジ・エンド。映画みたいなホラーの怪物みたいなもんなんだよ。ジェンソンとか。フレディとか。あれはまだまだよね、ナイフとかチェーンソーとか。まだ目に見える武器がいいよ。白瑠は素手だ、素手で頭が爆発なんて見たくなかったよ。人間こわっ！て感じ。白瑠が人間だつてのがまた怖いよねー？」

藍さんはホラー映画が好きらしい。

藍さんに見ればジェンソンやフレディよりも白瑠さんはランクが上。

確かに白瑠さんが同じ人間なんて驚きだ。サイボーグとかじゃないんだ……。

「藍さん、ちよつとそれ失礼じゃないですか？」

「ん、大丈夫。本人に言ったことあるから」

「……………そしたら？」

「ケタケタ笑われた」

この程度では怒らないのか。あの人は。
地雷がわからない人だ。

「心が広いんでしょうか……」

「あるいは狭いんじゃないかな」

心が広い、ではなく狭い？

一つの紐のように皮が剥けていたが千切れた。あたしはそれをむしやむしやと食べた。

「うわ、皮を食べる人初めて見た」

「林檎の皮は食べれますよ。駄目です、好き嫌いしちゃ」

「うえー」

「真っ赤に熟してるでしょ」

「真っ赤好きだね、椿お嬢」

あたしだってこんな風に林檎の皮を食べるのは初めてだ。でも幸樹さんが買ってきた林檎は奇妙なほど真っ赤で綺麗なんだもん。

「真っ赤。赤。紅。返り血。林檎。ルビー。ガーネット。レッド。レッドトレイン」

皮剥きを続けながら藍さんは呟く。最後のは聞き流せない。

「聞いたんですか？レッドトレイン」

「うん。ニュースも見たよ。裏現実のみーんな愉快そうに笑っているさ、みんな一体誰の仕業かを知りたがってたんだ」

「まじですか？どこのばかが大量殺人をやらかしたって、感じ？」

「まー、それもあるね。日本は恐怖に震えてるから」

裏現実者がどう思っているのかは実に興味深い。

「頭蓋破壊屋がやったって噂が最初だった。でもあとから違つという噂がたつたんだ。それからはざわめきだね。頭蓋破壊屋ならばそう、みんなは納得するんだ。どうしてかは言わなくてもわかるよね？」

頭蓋破壊屋だから。

彼が何を起こしたって、当たり前。可笑しくない。そう思われる存

在。

「だけど違つとなるとみんな吃驚だ！だって頭蓋破壊屋だと噂されたのに違つ。それでみんなこう思ってる」

ぐふふ。と藍さんはニヤニヤと笑つ。なんだか意地悪な目付きであたしを見た。

しゃり、と皮が剥けた林檎を切り分けもせず噛み付く。こら。

「頭蓋破壊屋に並ぶ存在なんじゃないかってね」

その台詞は、ギョツとするほどとんでもないものだった。

「ちよ、なに？なんそれっ！あたしが！？みんな頭可笑しいでしょ！」

「だって、頭蓋破壊屋の次に浮いてきたレッドトレインの犯人は名前もどんな人間さえもわかってないんだ。そう思うのが妥当だろう？」

あたしの反応が面白かったのか凄いい笑顔で笑う藍さんは楽しげだった。

「わかるわかる。わかるよー？白瑠の恐ろしさのあとにそんなこと言われちゃね。でも実際そうだ。だって君の寝顔なんてツボるほど可愛い可愛い。その君がだよ？カッターで56人！僕が調べたところー高校生男子が6人リーマンが16人その他が19人。男が何人かって？41人だ！どいつも裏の存在を知らない、知らないけれど君よりは体格も身長も上。なのに、なのにだよ？君たった一人に殺されたんだ！」

学生なんていたんだ。サラリーマンにその他：？あとは女の人。覚えてないんだよね。誰の顔も。覚えてない。

「武器がただのカッターだ。しかもデザインカッターで刃が3センチもないやつ。男達を取り押さえれば君はお陀仏だった。なのになーのーにい。56人殺害！なーんでだ！」

爽やかな笑顔で藍さんは言った。
「なんでだろう。知らない。ただ。うん。出来てしまったのだ。それだけのこと。」

「…あたしと白瑠さんが似た者同士だから」
「ああ、だから、みんなが思っていることは妥当だろう？」

前に白瑠さんと幸樹さんが言っていた。

藍さんはフツと笑う。

頭蓋破壊屋とあたしは存在が同等。

似たような者。殺戮者。

……複雑だ。

落ち込みながら林檎の皮を食べていけば。

「ぐふふ…ぐふふふふふっ」

藍さんが不吉な笑いを洩らす。

「レッドトレイン。それにあの白瑠が乗ってた。これはこれは凄いだろ。それから拾われて裏現実。ぐふふ…。頭蓋破壊屋の激情。ふふ。んーふふ。面白いなー面白い。うん！」

またブツブツ呟く藍さん。

今度は意地悪な感じではなく。どこか楽しげな笑みを浮かべていた。楽しくて楽しくて仕方ない。そんな笑みだ。プレゼントの箱が今すぐにでもあけたい。そんな子供の笑み。

「椿お嬢様はこれからどんなことを起こすんだらうねー？」

妖しげな黒い瞳で、藍さんはあたしを見上げた。

この人。この人は。この人はちょっと。狂っている。どんな比喩を使えばいいかなんて、バカなあたしにはわからないけれど。

本当に。なんだかわからない人だ。

よく知らない故か。何を考えているんだ。その黒い瞳で。何を考えているんだらう。

「椿お嬢は天使かな。いや、黒猫かなー？」

「…あたしは不吉を呼ぶのか」

あたしはつつこんだ。藍さんはニヤニヤと笑うだけ。不吉を呼ぶ黒猫かよ。

「黒猫ー、赤、紅、レッドトレイン、ルビー、ガーネット、林檎、苺、トマト、石榴ー」

ブツブツと林檎をかじりながら藍さんは独り言を続けた。

あたしは枕に頭を乗せて無視をした。

無防備に寝る気はないが独り言に構うつもりもない。

天井を見つめたまま、ぼんやりと考え事をした。

考える考え事を考えた。

もう暫く、ベッドの上だから。

「ねえ、つーちゃん。時々ぼんやりしてるけど。何考えてんの？え。もしかして悪い病気？」

3日後。

白瑠さんしか家にいなく、暇を持て余していた頃にいきなり訊かれた。

あたしがぼんやりしてたのがそんなに珍しかったのか。それとも暇潰しか。

どちらにしろ、病気は失礼だ。

「暇だと思っただけですよ」

「なら俺とお喋りしよーよ！」

こちとりや怪我負ってんだ畜生め。

「はあ、そうですね」とあたしは話題を考えた。

「白瑠さん」

「んっ？」

「白瑠さんはあたしと…」

「…つーばちゃんと…？」

三日前に話した藍さんとの会話を思い出して、何て言おうかと言葉を考える。

同類。似た者同士。同じ存在。

「白瑠さんはあたしと…似たような存在だと思いますか？」

戸惑ったような口調で言ってしまった。仕方ない。あとには退けない。

「いや、あたしは白瑠さんと似たような存在だと思えますか？」

うん。こっちの方がしっくりする。

「んー」と刹那だけ間が空いたあとに白瑠さんが頷く。

良かった。怒った反応はしていない。逆に気をよくした様子だ。

「ひゃー、そんな話になるとは思わなかったな。ん。でもねえ」

チエシャ猫の尻尾みたいに揺れてにんやり笑う白瑠さん。

「そうかもしれない」

白瑠さんはそう答えた。

「つばちゃんと俺は似た者同士だ」

その笑顔は、冷たい笑みではない。

「似たような存在だよねえんひゃっ。本当にそんな感じだ」

そうだな。

「全然違うけどお、おんなじ。手が真つ赤な殺戮者だ。そーゆー存在だよねえ、俺とつばちゃんは」

嬉しそうだった。

裏現実の狩人

「もう大丈夫です！」

「私は医者です！許しません！」

「ちょっとだけですよ！大丈夫です！」

「駄目と言ったら駄目です！」

朝から幸樹さんと口論。

2週間が経った。ベッドから降りて家の中を歩けるほど回復したのだが、家から出してもらえなくて、こうなったのだ。

「自分がどんな怪我をしていたかを思い出さない！安静にしないと傷口が開きます！」

「単なる散歩ですよ！」

これほど幸樹さんに反対されるとは思っていなかったのであたしは思わずムキになる。くそ。なんか悔しい。お兄ちゃんめ！

「つーのお嬢ちゃん。ドクターの言う通りだよ。安静にしながら。そつだよ幸樹先生の言う通りにした方がいいって。つばちゃん」

避難している藍さんと白瑠さんがソファの背凭れに頼杖つきながら言う。

あたしは二人を睨み付けた。元はと言えば、白瑠さんと藍さんが変態トークを左右でやるからだ。

苛々してんだ！ムカムカしているんだコンチクショウ！ストレス発散したいんですよ！

「藍さん…白瑠さん…。賛成してくれたら一着だけ！コスプレしてもいいですよ？」

捨て身。

目付きを変えた二人がガバツと身を乗り出した。

「賛成！」

「ずいぶん元気になったみたいだし？いいんじゃないのかなー？一人でちよつとくらい散歩！」

「そうだよお幸樹！ちよつとくらい散歩させてあげようよお！」

目を輝かせて藍さんと白瑠さんは幸樹さんに説得し始めた。幸樹さんは呆れた目で見据える。

「あんなに嫌がっていたのに………そんなに散歩がしたいのですか……？」

それから目の前のあたしを見下ろす。

「したいんです！一時でも変態と離れたいんです！………」

後半は小さく、でも強くあたしは幸樹さんに伝える。幸樹さんは沈黙して、白瑠さん達を冷めた眼で見た。

「……仕方ありませんね。少しだけですよ」

「！、ありがとう！幸樹お兄ちゃん！」

お兄ちゃんと呼べば、フツと幸樹さんは笑った。

「ナースの格好でウオツカを一杯飲むと約束するならば許可します」
「やっぱり鬼兄だ。」

顔の筋肉が痙攣するのを感じながらもあたしは小さく頷いた。

「ちゃんと護身用に武器は忘れずに。あ、飲食はだめですからね」
「はぁーい」

護身用に短剣は持っていきますとも。飲食はしますとも。

あたしは見えないところで、ベツと舌を出した。
変態から離れたいのにコスプレを許可するか。

本当の目的は別に在る！

着替えをして、ナイフや短剣を服の中に忍ばせる。デニムに紫色の蝶がプリントされたシャツを着てパーカーを着た。パーカーは白瑠さんのだ。

腹と左腕は包帯に巻かれているから、短剣やナイフは右手で扱えるように左側に隠す。痛いから左腕は使いたくない。

準備完了で万札を枚かポケットに入れて玄関に。サンダルを履いていれば気配を感じた。振り向くと幸樹さん。

「くれぐれも道端で通りかかった人を殺るなんてことはしないように。敵に襲われたとしても仕留めず逃げなさい。私のケイタイです、家に連絡を」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

過保護お兄ちゃん。

あたしは差し出されたシルバーの携帯電話を受け取り立ち上がる。
扉を開けて、戸惑う。

数秒固まってから幸樹さんを振り返り「…あの、いつてきます…」

と自信なさげに言った。

幸樹さんはにっこりと微笑み「いってらっしゃい」と返してくれた。ちよつとふわふわした気分でとことこと歩いていく。長い道のりをサンダルでばかばか歩いた。風が髪を撫でる。

あ、帽子を忘れた。

まあいいかとパーカーのフードを被る。

あとをつけられてないだろうかと時折振り返るが、どうやらつけてはいないようだ。

一人はいい。

うん清々しい。

コスプレという地獄タイムを味わう前に自由を満喫しようではないか。

うんと背伸びをすると傷が痛いので右腕だけ伸ばす。

住宅地を抜け、人とすれ違う人通りに出たら、真っ直ぐに駅ビルへと向かった。

駅ビルの一階。

飲食コーナー。

この2週間、病院食チックなものばかり食べていた。

流石医者と言うべきか。味っけない料理ばかりで腹が減っているのだ。

だから来た！

ステーキと言わないが、マックを食べてやる！マック。チーズバーガー。ナゲット！

もうスキップしたいほどの浮かれた気分ですっ直ぐにマクドナルドに向かう。

誰もいなかったが、同時に他の客も来た。その客と目が合う。

黒髪。黒い瞳。格好はヴィジュアル系。揃わない前髪はヴィジュアル系だろう。とっても似合っている。とても格好いい。

スラッとした細身。ズボンのポケットに手をつ突っ込んだポーズはカ

ツッコついでなくても10人の女の子が10人、かつこいいと言っただろう。

派手なメイクをしていたら引いていたが、ノーメイク。比較的、控え目なヴィジュアルファッションだが、後ろに立つ連れが目立たせていた。

金髪のパフパフツインテールのゴスロリ少女が彼女だろうか。

うん。これは。デート中だろう。

デートには似合わない場所だが。うん。ここは知らぬふりをしてあげよう。

例え、ばつちりとヴィジュアルファッションの秋川秀介君と目が合おうと。無視をしてあげるべきなんだよ椿。

あたしは数秒固まっていたがスツと顔を逸らした。

秀介だってデート中なのだからあたしのことは知らぬふりをするのだろ。

「つばきちゃんっ！！！！」

「ふぎゃ！？」

しなかった。大声であたしの名前、じゃなくてアダ名を叫び、タツクルにも似た。いや絶対抱きつきと言う名のタツクルをしゃがった。懐かしい衝動。プラス必然についてきた痛み。嗚呼懐かしいパターン。

わざとなのか。わざとなのですか何故腰回りを抱き締めやがる。

「い、痛いっ！痛いよ！怪我してるの！」

「えっ？」

怪我をしていると言えば秀介は放した。あたしはズキズキする傷を

押さえながら、秀介に手をついて支えてもらう。

「いたあい……」

「え？大丈夫？仕事で怪我したの？」

「あー平気平気。てか。秀介…デート中じゃないの？」

慌てて心配する秀介に訊いたらきよとんとした顔をされた。
それから金髪ゴスロリ少女を振り返る。

「いやいや違うし。つばきちゃん。ミサだよ」

爽やかな笑顔で秀介は首を振った。その名前には聞き覚えがある。
あ。秀介の元カノ。

「え！？み、ミサさん!？」

金髪ゴスロリ少女基、ミサさんは黙ったまま軽く会釈をした。

「デートじゃないよ、仕事の話できてんの。マック食べる？俺が奢る」

ニカツと可愛い顔で笑い、秀介は言った。

自分で買うと言ったのに聞かず、秀介はあたしの分まで買った。

それで三人でテーブルについて食べる事になってしまった。
…
あたしの予定が狂ってしまったぞ。

「い、いいの？仕事の話するんじゃないかあ…」

「いいのいいの」

大きな口をあけてバーガーにかぶり付く秀介。うん察してほしい。

完全にミサさんのことを吹っ切れたのだろうか。

「それにしても、大丈夫？怪我だろ。誰にやられたんだ？」

「ん。あー……弥太郎矢都」

秀介と口を開こうとしないミサさんが反応してあたしを見た。

「弥太郎火都の弟？」

クールな口調でミサさんが聞き返した。おお。予想通りな感じの人だ。

「はい。そう言っていました」

「あの弥太郎火都の弟と？つばきちゃん強エんだなあーさっすがあ」

「あ、いや……倒してないよ？あたしは不意打ち喰らっただけで頭蓋破壊屋が相手したんだ」

「頭蓋破壊屋が？弥太郎矢都は死んだの？」

「あ、はい。恐らく」

誤解しないようにちゃんと告げる。頭蓋破壊屋の名前を出した瞬間、秀介が苦い顔をした。それを気にもせずミサさんが問う。

「そう……いい情報が手に入ったわ」

そう独り言を洩らすミサさんは続けた。

「それでも怪我を負った程度で済んだのは、流石と言うべきね」

「え、いえいえ。あたしは本当、不意打ちを喰らって死にかけましたから」

「いえ。弥太郎は一撃で仕留める飛び道具使い。一撃だけで避けた

なら上々の殺し屋だわ」

「いや……遊ばれた感じてしたが……」

うう……。またあらぬ誤解があ……。

「私なら一撃で死亡です。私はただの情報屋ですね」

「あ。こちら側の人なんですか」

「ええ、初めまして。椿さん。良かったら情報を売りますよ？仕事も手配します」

いきなり敬語口調でミサさんはそう言った。営業口調？殺し屋なんですけど……。

「あ、仕事と言えば……秀介と仕事の話じゃないんですか？」

「仕事は二の次の女たらしだから。仕方ないわ」

嗚呼、ズバリ言った。

やっぱり軽いのかこいつ。とあたしは冷めた眼で秀介を見た。

「ちょ、ミサ！何言いやがる！たらしじゃないよ！？つばきちゃん！」

あわわつと秀介は手を振って否定。

あたしは無視してチーズバーガーを平らげた。美味しい美味しい。

「ちょっと、椿ちゃん……？俺一途だって」

「あーはいはいはいはい」

「ちょっと、きけよおー」

適当にあしらい、ナゲットに手を伸ばす。

「ああ、椿さん。今の情報は頂きますね。売ります」

仕事の話になると敬語を使うのだろうか。ミサさん。

「ええ、まあ…どうぞ」

「椿！下手だなー情報屋だけ？買ってくれんだから交渉しねーと！」

「はい？え。知らないよ、そんなの」

何故か秀介に怒られた。そんなこと言われても。

「こーゆーの。教わってねーの？ドクターとか」

「全然。まだ仕事三つしかやってないんだよ？大してこっち側知らないよ」

とか。愚痴ってみる。

「あなたは出して知らないのに、裏現実があなたを知っているのはちょっと危ないんじゃない？」

ミサさんがそう言った。

言葉の意味がわからず首を傾げる。

「血塗れ電車の紅色の黒猫。あなたの名前は知り渡っているわ」

そう続けて言われても、あたしには全くわからなかった。

血塗れ電車って…。

あれ？

あたしがやらかしたレッドトレインのことだろうか。

あたしが反応を示さないでいれば、ミサさんが小首を傾げた。

「椿のことだろ？紅色の黒猫。例の電車、頭蓋破壊屋じゃなくて紅色の黒猫が殺ったって噂、もう出回ってるぜ」

秀介が頬杖をつきながら言った。

「え…？あたしのこと？」

混乱したまま、あたしは確認する。そうすれば二人は目を丸めた。

「え？ちげーの？裏現実に入ったばかりの駆け出しの殺し屋、紅色の黒猫」

「電車を紅色に染めた不吉を呼ぶ黒猫、あなたのことよね？椿さん」

紅？不吉を呼ぶ黒猫？

あれれ。聞いたことないかい？あたし。

2週間前くらいに…。

ふわわん、と藍さんの笑顔が浮かんだ。

……………あ。

「あ……………のお、ロリコン野郎の仕業だなっ！！アイツ勝手に名前つけて流しやがったのか！」

ぐしゃりとナゲットの箱を握り潰す。

「ちくしょー！あの変態野郎！帰ったら蹴り飛ばしてやるー！」

嘆きながらも頂垂れる。

多無橋さんにその名前を送りやがったな。ああ！もっつ！

「勝手につけられたの？…頭蓋破壊屋に！？」

秀介が問う。後半はいきなり鋭くなったからギョツとして顔を上げる。

「変態つて…ロリコンつて…あいつに何かされたのか!？」
「いやいやいやいや」

あたしは首を激しく振った。

あんなことやこんなことか…あははははは！言いませんって。

「名前が独り歩き、ね。それは大変」

「狙われるぜ？あぶねえよ」

お二方に心配された。

「変な噂がたつてるみたいだから目立ちたくなかったのに…。ロリコンめえ」

「結構騒がれてるわよね、頭蓋破壊屋に並ぶ殺し屋って」

「んー。ざわざわしてやがるよな、最近。裏現実には妙に活発しているよな」

背凭れに身を預けて秀介は怪訝そうに呟きポテトを口の中に放り込んだ。

秀介達にも頭蓋破壊屋同等とか噂が届いているのか。肩が重い。

「ざわざわって？」

「名の売れた殺し屋や吸血鬼、情報屋、泥棒が集まっているの」

「ああ、はく…頭蓋破壊屋さんが妙だと言っていました」

「それも丁度樁が事件起こした直後だよなー」

……え？なにそれ。あたしのせい？あれかい？あたしのせいとでもいうのかい？

あたしは秀介を睨み付けた。

睨み付けたのだが、気付いた秀介に微笑を返された。

くっ！イケメンの微笑なんて…ず、ずるいつ！

「椿、暇？暇だよな、怪我してんだし仕事ねーよな？遊ばね？てかデートしようぜ！」

人懐っこい胸をズキャンとさせる笑顔で秀介がいきなり誘ってきた。

「え。いや。あたし…散歩するっていつて出てきたから早く帰んなきゃだし…」

「いいじゃん！俺今泊まってるって近くにあるし…三日ぐらい泊まってるよ！なっ？」

ま、負けない。そんなキラキラした笑顔で頼まれたって。

「なっ？いいだろ？」

そんな可愛い眼で見つめたって…。うっ。うっ。

「やめた方がいいわ、ヤられちゃう」

そこに割って入ってきたミサさんの声。

あ、そうか。泊まるって。そうなるよね。結局秀介もそーゆー男ですか。

とあたしは冷たい眼差しを送った。

「バカッ！怪我人を押し倒すかよ！椿といたただけだ！」

ミサさんに否定してギョツと秀介はあたしの手を握り締めた。うん…一応信じてあげよう、下心はないと。

「あの。個人的なことを訊きますが、どうして秀介君をフツたんですか？」

ズバツと訊いてみた。

「それは簡単。依頼をされていないのに執念深く頭蓋破壊屋を追い回し挙げ句に遊ばれて脚を骨折したからよ。しかも仕事が近付いているのに入院…呆れてフツたの」

ミサさんから裏切らないきつーい返答をいただいた。なるほど。あの骨折は頭蓋破壊屋に遊ばれた結果か。

「えーと…？どうして秀介君は頭蓋破壊屋さんを追い回すのかな？」
「ムカつくから」

きつぱりと秀介のムツとした顔付きで答えられる。

「聞いた？俺がどんな存在かを」
「こ…ドクターにシユウのことはナマハゲ…てか正義のヒーローだつてきいた」

ナマハゲ。と聞いて秀介の顔がひきつった。徐々に歪み、怒った表情が出来る。

「それなんだよ！あのドクターもクラッチャーも！俺のことを逆撫でしやる！ナマハゲ？ヒーロー？あんの野郎！」

かなりムカついている様子。

白瑠さんと幸樹さんが笑いながら秀介をからかう光景が簡単に想像できた。…怒るよね。うん。わかるわかる。あたしもそうですから。

「俺は狩人！弥太部と一緒に、殺し屋狩りに殺し屋の邪魔をする狩人だ！通り名は」

「声でかいでかい！」

怒りを込めて声を上げるから慌ててあたしは止めた。

「最凶の狩人と言ったら俺のこと。気に入っている名前は三槍鬼、グラディエーター、鮫狩りのポセイドン」

「主に鬼って呼ばれてるわ。裏現実の鬼、最凶の狩人と言えば秀介ね。名の売り出した殺し屋も、秀介を雇ったターゲットを狙った殺し屋も潰すからね。鬼の用心棒ね」

へ、へえー。思ったより怖い感じの鬼的な存在なのかな。

幸樹さんが言ってたのは嘘でもからかいでもなかったのか。

つまりは狩人って、殺し屋を狩ったり殺し屋に狙われるターゲットの用心棒。

弥太部矢都はそれだったんだ。納得。

「じゃあ……あたしのことも狩る？」

単なる興味であたしは訊いてみた。

「んな、わけないじゃん！依頼されたって椿を傷付けるもんか！椿は俺が…守るって言ったのに怪我して……」

あたしの左手を両手で握り締め、秀介は真剣に言った。似たような光景を前にも見たような…。

「しかも相手は狩人…畜生、クラッチャーのやつめえ！俺んとこ、来ない？椿。まじで」

「無理」

「うぐつ。きつぱり……。こうなったら！ミサ！紅色の黒猫が俺の恋人だつて情報を流せ！」

「それなりに報酬をくれればね」

「ちょ、やだ！やめてくださいミサさん！シユウもあたしと付き合ってるなんてデマはやめて！」

真剣な眼差しで俺のこと来いよ、と言われたが前同様断った。そしてたらいきなりデマを流せと言つし、ミサさんは断らないし。これ以上厄介なことにしないでくれ！

「何それ！椿：あんなに抱き合つてきすむぐお」

ミサさんの前でとんでもないことを言いそうだったから両手で秀介の唇を押さえ込んだ。焦った。こいつう…！
何事もなかったように話していたのに！

「……えへつ。真つ赤な椿、かつわいい」

嬉しそうにふんにやりと笑みを浮かべた秀介がそう洩らす。

どうやらあたしの顔が赤いらしい。どうりで暑いわけだ。

気を取り直して座ったあたしの頬を秀介は撫でた。やめてくれ。

ミサさんは全く興味がないのかシェイクを飲んでいた。

「俺の真つ赤な華」

そう可愛い顔で微笑み、あたしの髪を撫でた。

う…。そんな。そんな顔…。そんな台詞。また弱いところを突くな…。

「爆発的に赤くなったわね。ほんと、可愛い人ね」

驚いたようにあたしを見るミサさんが言った。あたしは耐えきれず両頬を手で覆い伏せる。

「純情というのか…。こんなやつ歯の浮くような台詞で可愛い反応するなんて」

「るせーな！椿はそうゆう娘なんだ！可愛いだろ？ゾッコンなんだ」

端からしたら歯の浮くような台詞かもしれないが。駄目なんだ。そうゆう台詞や微笑や仕草にときめいてしまう。

イケている顔なら尚更だ。

白瑠さんや藍さんならばまだ対処できるが、秀介と幸樹さんには無理だ。可愛い、と言われるだけでどうしようもなく戸惑ってしまう。「ウブね。初心」とミサさんが言った。「今時貴重な女子ね」だそうだ。

「椿。ポテト六本」

「はあ？」

いきなり秀介が言ってきたから顔を上げる。秀介の視線の先は、真っ白なテーブル。

「きゃ！？」

引っ張られ、秀介の膝の上に。そのまま抱き締められた。

元カノの前で！まさか元カノに見せつけてんのか！最低だ！と怒ろうとしたら。

「さつきから視線気にならない？椿の客か…それとも俺の客かな」

ボソリとあたしの耳元で秀介はそう呟いた。それで気付く。背中に集まる視線。

誰かが見ている。複数も。

ゴスロリが珍しくてミサさんを見ている、そんな視線とは別だ。そんな視線など、気にもとめない。

射抜くような、視線。
裏現実者か。

「つばきちゃん！デートしようぜ！」

「へっ？」

「じゃあミサ。仕事の話は明日な」

「ええ」とミサさんは頷いた。秀介は立ち上がり、ミサさんに手を振ってあたしに腕を回したまま歩き出す。

「気をつけて」

流れるような動作に戸惑っていけば、ミサさんがそうあたし達に言った。

流された…。

つまりはあれか？

今から視線の奴らを相手するのか？

「椿。武器は？」

「短剣くらい…いや、ちよ、無理だよ。殺るなって言われてるの怪

我してっから」

密着したまま歩き、秀介が耳打ちする。本当にやる気だ。なんで？あたしの客なわけないじゃん。

「シユウの客でしょ？さつき大声で名乗ったじゃん！」

「そーうかも。でも椿の名前も聞いてたかもよ？名を売らないやつがいれば、名を売りたくて売りたくて仕方ないバカもいるんだ」

あたしの名前。

血塗れの電車、紅色の黒猫。

そして最凶の狩人、裏現実の鬼。

名を売りたい。名高いものを倒せば、名が売れる。そんな輩も、いるということか。

厄介なことを。あたしは額を押さえた。頭痛を感じる。

「大丈夫。俺がついてるから」

秀介はあたしの腰を引き寄せて、自信満々に言った。

何もかも上手くいくと言う笑顔で。こうして歩くことが楽しそうな笑顔で。いや、嬉しそうな笑顔で。秀介は言った。

「ああ………言い忘れてた」

あたしは戸惑いながらも言葉を発する。

「久しぶり」

と。一言を口にした。

安堵にも似たその温もりと存在を感じながら。

嫌だった病室が、ちょっと好きになりかけたあの時を思い出しながらも。

そう。あたしは言った。

そうゆう意味であたしは言った。

秀介も。多分その意味で返した。

「久しぶり」

狩人と殺人鬼

あたしは殺戮者で
あたしは殺人鬼で
あたしは人殺しで
あたしは血塗れで
あたしは真っ赤で
あたしはあたしで
真っ赤な真っ紅だ

「どうしてつばきゃんは56人を殺したんだ？」

視線の奴らを誘き出して倒すために建物から出て気のない道に入ったのだが相手がまるで動きを見せない。

それで暇を持て余して二人で他愛ない会話をしていたら、秀介が何の前触れもなくそう訊いてきた。

問われたことのない質問だった。

驚かれ、褒められたことはある。あると言うよりそのどちらかしかない。なかった。

当たり前の質問。それが。それを誰も訊いてはこなかったのだ。

一人だけは。一人だけは、その理由を知っているから解っているから訊かなかった。あとの二人もそうかも。

その他は、訊かない。訊きもしない。

殺しの理由？

そんなもの。そんなものは。

些細なもので無意味なもの。

「ない」

冷たい口調。違う。感情のない声が、口から零れた。

「ない？」とあたしを見つめたまま秀介は聞き返す。ただ、あたしの返答を待っている瞳。

「ない。ないと思う。電車に乗ってた。何も考えてなかった。違うな。何も覚えてないんだ。境目。境界線を踏み込んだ時の記憶は酷いくらい朧。気付いたらね、皆死んでた。死んでた。ああ、殺してたの方が正確か。血塗れでもう一度座ってたよ」

淡々と。他人事のように。感情なく。あたしは答えた。

覚えている血塗れの車内と音を思い出しながら、彼を見つめる。どんな反応をするのか。どんな風にあたしを見るのか。一体、殺戮者のあたしをどう思うのだろうか。

「殺しちゃった。理由も意味はない。それだけだよ」

「……そっか。理由はないか。だよな、裏現実の手前だしな。裏現実者ならあの事件は隠滅されちまう。裏現実者が殺ったことじゃないから騒がれてる……うん。理由はねえか」

独り言みたいに呟く秀介。そんな反応じゃない。

「理由があると思った？」と冷酷ぶった口調で問う。

秀介は「いや」と言った。

「考えたんだ。椿が犯人だって知って、俺は考えたんだ」

「何故？何の為に？どうして？……と？」

突っ掛かるような口調のあたしに秀介は頷いた。そしておどけたよ

うに笑った。

「椿ちゃんが殺る理由を考えたんだけ。仮説も立てた。冷めた椿ちゃんが復讐？それじゃあ数が多すぎだし家族が欠けている素振りも友達に欠けている様子もなかったからさすがにそれはないと思った」

おどけた秀介に苛立ちを覚え「仮説は？あたしが殺る理由はなんだと思ってたの」と尖った口調で問い詰める。

「ないと思っただ」

薄い微笑で、秀介は答えた。

「鬼の狩人って呼ばれてる俺だけ？俺が見抜けなかったことが驚きだ！人殺しには血の匂いが染み付いているからな…わかるんだ。頭蓋破壊屋にしたって、ドクター笹野にしたって。ん、あの刑事にしたって見抜ける」

刑事。殺人と言えば、あの病院のイカれた刑事。見抜いていたのか。

「なのに、椿だけは見抜けず、普通に、話し掛けたんだぜ。まー、恋は盲目っていうしな！」

ニカツと。眩しい笑顔で秀介は笑った。眩しすぎる笑顔。

「……理由なき殺戮者で、殺し屋のあたしをまだ…好きだとか言うの？」

何言っているんだ。秀介はそんな顔で目を丸めた。

「好きだ。好きだよ。それでも椿が好きなんだ」

バカだとわかっていない笑みで、そう頷いた。

「椿と会った時、思ったのはやけに冷めた少女だなんてこと」

「間違ってるよ。いつも、愛想悪い」

「いつもじゃない。椿は優しい。俺のこと、慰めてくれたじゃん」

「それは…。刑事と二人つきりが嫌だった。君を利用しただけなんだよ、秀介君」

違うのに。違うのに。違うのに。

もどかしさが込み上がる。

秀介は勘違いしているんだ。あたしは冷たい人間。あたしは優しくなんかない。

「椿。俺は椿を嫌わないよ」

ギクリとした。

まるで見透かされた言葉だった。

嫌ってほしい。嫌ってほしいんだ。

好きと言われるより、嫌いと言われた方がマシ。

あたたかい場所から突き落とされるなら、殺された方がマシ。

それだけなんだ。

「忘れた？椿だけを愛する。永遠に君だけを見てるって、言ったろ？」

その台詞を言った時と同じ。余所見なんてしない真っ直ぐな瞳で見つめてくる。

最後のつもりで。あの時、見つめていたのにまた。

これを見つめているなんて。

間違っているよ。

間違っているんだ。

下手な恋愛小説に有りがちな台詞みたいに。あたし達は出会ってはいけなかったんだ。

君は間違っている。

あたしが何も言わないまま、秀介はあたしを抱き締めた。

両腕で。抱き締めた。

秀介の匂い。秀介の温もり。秀介の鼓動。秀介の存在。

それに包まれる。

それから感じる視線と気配に。切り替える。

まるで沸いてきたかのように出てきた奴らに冷徹な瞳を向けた。

自然と秀介はあたしを放して、振り向く。あたしは秀介とは逆の方を見た。

計六人。格好は様々。年齢も違って見える。どうやら友達や仲間でもなさそうだ。20代か、30代辺りの男五人、女一人。

「あ？何？名前を売ろうってことで団結して殺ろって決めたわけか？」

秀介が茶化すように問う。しかしそれは答えなんて必要としていなかった。

その返答は一目瞭然。

六人で立ち向かうつもりだ。遅かったのは話し合っていたからか。

「じゃあ、名乗るところか。狩人の鮫狩りのポセイドンだ。こっちは紅色の黒猫」

「勝手に名乗らないでよ」

律儀に名乗り、秀介は三ツ又槍トライデントを取り出した。組立式はどこにで

も隠せて便利だ。

ムカツとしつつも左腕にある短剣を取り出す。

また裏現実者相手に無謀大勢。今度はしっかり仕留めよう。

「今度はそちらさんが名乗れよ」

「……………」

「ハッ！名乗る名前さえ…ないってか！？」

秀介が動いた。早っ。

本当に名を聞く気があったのか疑いたくなる程の速さだった。

がしゃんっ。

一人の男と武器を交え合わず秀介。他の五人も動いた。

武器所持した人間を三人相手か。しんどい。そう考えながらも、構えた。

右手しか使えない。そして極力動かないことを心掛ける。そのつもり。

だから、来るのを待った。

短剣が届くその範囲に入るのを、待ち構えた。

そして女が入った。

あたしは右足を、踏み込んだ。それから短剣を首に振り下げる。

女の得物ぶきは偶然にもカルドだった。あたしのカルドとは違う装飾だが、なかなかいいセンスだ。彼女を殺して、カルドを戴こう。そう瞬時に思っていたのだが。

「くっ！」

足を取られた。詳しくは足に気を取られた。足に何かが巻き付いたのだ。

その違和感に思わず足を見た。敵が目の前にも関わらず、視線を外した。

左の足首に、糸のようなものが巻き付いている。糸には重りらしい石があり、その石が違和感を生んだ。誰が投げたかは知らないが、これは間違いなく、隙を作る為に投げられた物だ。

気付いた時には目前に迫っていた。女のカルドが首を切るうとしていた。洒落になんない。

あたしは意地でもそれを防いだ。

ギリギリ。短剣で防いだ。

まさか防ぐとは思っていなかったのだろう。女が動揺した。

これで。この策であたしを仕留めようとしたのか。

それはなんとも。…ム力つく話だ。

重りがついた左足を振り上げ、女を蹴り飛ばした。

その足を上げたまま、糸を切って外す。

「過大評価も嫌だけど、甘く見られるのはもつと嫌だね」

あたしは吐き捨てた。

ちんけな策であたしを名を売る土台にしようとした三人を睨み付ける。

「ああ……名乗らなくていいですよ。貴様達みたいな名前、覚えたくも知りたくもありません。息の根を止めてやる」

女が起き上がり三人はたちろぐように後ずさる。

「椿……？」

三ツ又槍で叩き潰し殴り飛ばしていたが、秀介があたしの台詞に気付いて振り返った。

その行為に隙はない。刀を振り上げて斬りつけようとする男を何でもない振る舞いで蹴り飛ばす。

華奢な身体で簡単に蹴ったような素振りだったのに男は吹き飛んだ。三ツ又槍を振り回し、槍を向けるが視線はあたしに向けている。

あたしはまた、相手の三人が向かってくるのを待った。そして彼らは動いた。

三人同時にくる。

正面と左右。武器はカルド、短刀、バタフライナイフ。

なめてんのか。

短刀は蹴りあげ、バタフライナイフを掴む手を掴み、カルドは短剣で止める。

掴んだバタフライナイフの男をカルドの女に叩き付けた。

二人は崩れるように倒れた。

あいた左腕の肘を、短刀の男に向けて振った。振ろうとしたが、腹に激痛が走り、それができなかった。

「うっ、があ！」

短刀の男に蹴り飛ばされたのだ。それも傷を蹴られた。

倒れたあたしは傷を押さえて呻く。

男はその傷の上に足を振り落とした。

「うああっ！」情けない悲鳴が上がる。

右手ごと踏まれ、回避ができない。左腕は倒れる際に痛みが走り、動けない。

「うおおおおっ！！！」

短刀を握った男が、カ一杯に振りかざし、首目掛けて振り落とされる。

殺られる。

その思考はなかった。

まるで必要ないと悟っていたかのように、微塵も思っていなかった。

目の前で。刀が、槍に阻まれる。
理解する暇も与えず、秀介が短刀の男を蹴り飛ばす。

「椿！立てるか！？」

ぐいつと左肩を掴まれ、立たされた。

秀介は、あたしを死なせないと言っていたっけ。
なんて心の中で呟く。

短剣を拾う。腹がズキズキ痛い。

「痛いじゃん……」

「椿……？」

「殺してやる！！」

「椿っ！！？」

短剣を逆手に握り、踏み込んで短刀の首を取りに向かう。

焦りか恐怖か。短刀の男は顔を歪めながらも決死で避けた。

その男が避けたあとに見えたのは、こちらに飛んでくる武器。

ナイフを避けるため、しゃがむ。

休む暇もなく、あたしはナイフを投げたバタフライナイフの男に向かう。

スパツと盾にした腕を切りつけた。その瞬間。

「椿！やめろ！殺すなっ！！」

秀介の声が路地に、響いた。

ギロリとあたしは秀介を睨み付ける。

「……………殺すな、だつて？」

あたしがその言葉を発している間にも、敵は襲い掛かる。秀介は三ツ又槍を振り回し、叩き飛ばす。

「あたしに言ったの！？秀介！」

怒声が、味方に飛ぶ。

秀介は目を丸くした。

あたしの反応が意外と言わんばかりに、吃驚した顔だ。

あたしは飛び掛かった女をかわして、顔に肘を食らわせ、短剣の柄でコンクリートの地面に叩き付けた。

「あたしに殺すな！そう言ったのか！？」

もう我慢の限界だ。ズキズキズキズキと、腹が痛い。傷が痛いんだ。

「あたしが…あたしがどんな人間かわかってない！！ここに来るまですつと堪えてた！」

秀介が銃を出した男の手を突く。銃を破壊。既に一名が、戦闘不能で倒れている。

「すれ違う人間を殺したくて殺したくてたまらなかつた！！ナイフに手を伸ばすのも堪えてたのに…殺すなだつて！？」

どちらの男のかわからない手首が切断された。

秀介もあたしも。視線は眼は、離さず合わせていた。

あたしは睨み、秀介は視る。

「依頼されてない人間を殺すな？そんな戯れ言を言う気？ハッ！い

「い？あたしを好きだとか言ってる秀介君！あたしは殺し屋である前に」

手首が切られた男の悲鳴に負けられないようにあたしは声を張り上げた。

「あたしは殺人鬼だ！！殺し屋なんて金が入るから人が殺せるからって理由でやつてるだけだ！人を殺してなきや生きてけない人間だ！理由なく殺す鬼だ！2週間と3日も苛々して殺しを我慢してた！いい獲物が出た上に！傷を踏みつけられたのに！それを…殺すなだと！！？」

あたしは、殺した。

視界にも入れず、不快な悲鳴を上げ続ける男の首を引き裂いた。

静かになった。その場にいるものは動きを止める。息すらも止めた。

一人、死んだ男を見て、息を止めた。

視もせずに、殺したあたしを見て、息を止めたのだ。

まるで、凍り付いたような空気の中。

怒りを飲み込んで、落ち着いた口調であたしは言った。

「あたしに死ねって、言っているようなもんだよ」

最早背にしているのは、敵でも何でもない。

秀介をじつと睨みつくように見据える。

秀介は目を開いたまま、あたしから目を逸らさない。逸らせないから見ている。

あたしから目を逸らした。

秀介はあとだ。先ずはこのバカ者達を。

この獲物達を。

「殺戮されても、文句ないね？」

振り返り、凍り付いたバカを睨む。電撃が走ったかのように二人は震え上がった。短剣を握り、向かう。

「つつ、椿っ！だから、……くっ、やめる！」

「死ねって？」

秀介が止めようと声を上げる。あたしは鋭利のような台詞を向けた。

あたしはもう。秀介に嫌われる台詞しか言えない。刺々しい声しか出ない。

間違っている。わかっていない。

あたしが殺人鬼だっけ解ってない。

踏み込んだまま腕を振り上げる。握っていた短剣を、女の肩を挟む。

男があたしの左側から短刀を突き出した。身体を捻ってあたしはそれをかわす。

身体の向きを変えて見えたのは、秀介が男二人に挟まれているところ。

顔色変えずに、それを三ツ又槍を振り回すだけで蹴散らす。

突く武器である槍のほずなのに、一度も人間を突き刺してはいない。打撃ばかりで倒している。

それだけで倒したのは、流石鬼と呼ばれているだけあると言えるが。あたしは今は冷静ではないから、そう褒めてはいられない。

何がポセイドンだ。何が鮫狩りだ。何が鬼だ。

嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。

嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。

嗚呼。嗚呼。嗚呼。嗚呼。

殺したい。殺したい。

気が付いたら、そこにいた。

真っ赤な、真っ赤な、路地にいた。

あれ。終わった？

地面と壁に返り血。

真っ赤。鮮明な赤。

気付いたら五人の血塗れの死体が転がっていた。

そこに立つのは、あたしと秀介だけ。

うん。終わった。

さっきの自分の問いに自分で返事をする。

秀介は啞然と立ち尽くしていた。或いは茫然。愕然。

いつの間にかあたしの相手ではない男二人を殺していたらしい。き

よとんと首を傾げたあたしを見て、呆然とするだろう。

あたしは。覚えてない。

終りだ。

これで秀介とは終りだ。

あたしは秀介に目を向け、それから背を向けた。

「っ……………椿!!」

秀介はつかさず、あたしの左手を掴んだ。あたしが短剣を持っていない方。

引っ張られて、あたしは、短剣を振り上げた。

ガキンッ。

秀介に向けて振り上げた短剣は、三ツ又槍に防がれる。

驚きつつも、秀介はあたしから目を放さない。

ああ、あたしは何をやっているのだろう。

右手から短剣が落ちる。

「ねえ…あたしがどんな想いで君と話してたか知ってる？」

「……………」

「どんな気持ちで君の告白を聞いたか、知ってる？」

何かが入み上がる。これはなんだっただろうか。
泣きたくなる衝動が喉まで突っ掛かる。

「罪悪感と自己嫌悪。あたしを知った君の苦しみ傷付くと思って、
ビクビクしてたんだよ」

自分がどんな顔をしているかなんてわからない。秀介は、少しだけ
目を見開いた。

「それならばいっそ、頭蓋破壊屋に殺されようと決意したのに…」
なのに。

「知った君になんて言われるか、ビクビクした。この人殺し！なん
て言われたらきつと、握ってたメスで君を殺してた」

ねえ、なんで。

「ねえ、なんで？なんで嫌わないの？殺人鬼だよ、殺戮者だよ。君
の狩るべき対象だよ。殺すな？じゃああたしが殺しをする前に殺せ
よっ！…！」

震えた声を、腹の底から出して怒鳴った。

秀介は、三ツ又槍を振るうどころかあたしを抱き締めた。引き寄せて、痛いくらい強く抱き締める。

「嫌いになるかよ……！好きだって言ってるじゃねえか！殺すわけないだろ……殺せるわけないだろ……どうしようもなく……好きなんだ、椿。椿が好きなんだ。殺し屋でも殺人鬼じゃなくて椿が好きだ」

苦しそうに、秀介は言う。

「殺し屋だって殺人鬼だって暗殺者だって何人も見て相手して潰してきた！なのに……椿だけは、椿だけは……好きなんだよ……」

秀介の声。温もり。匂い。鼓動。存在に抱き締められる。つつまれる。

嗚呼。だからどうして。

冷たい世界にいるはずなのに。

どうしてあたたかい温もりが在る？

どうして？

あたしを突き落とす。とっておきの冷たい凍える地獄が用意されているのか？

「……………」

それでもあたしは。

その秀介の温もりに涙を落とした。

十分、二十分。いやもつと短い時間だったかもしれない。漸く、冷静さを取り戻して身体の痛みが襲い掛かった。

腕に、腹。傷がズキズキ。

「うっ」と呻きながら秀介に身を任せる。慌てた秀介があたしを抱え上げた。

まさか秀介まであたしを抱えあげることができるなんて。意外だった。

あれかな。細身の人は皆力持ちなのかな。

「あー、頼む。隠滅してくれ。死体が五体、一人が気を失ってる。

……あ？俺じゃねーよ、俺の恋人の紅色の黒猫ちゃんが殺ったの」

誰もいない公園のベンチにあたしをおろして、秀介は電話をした。裏現実者の死体隠滅作業員とかいるのかな。

隠滅作業員。…なんかいそう。

てか、あ？何言ってるの!?

「ん？知りたい？じゃあー報酬はそれでいいのか？……あっそーかい。じゃあ頼んだ」

どうやら情報の報酬より、お金の報酬がいらしい。直ぐ様秀介は電話を切った。

「ちよつと…言いふらすのやめなさ…痛っ」

「そんな力まない。あー傷口が開いちまってんな。何でやられた傷？」

文句を言おうとしたが傷に響いてそれは無理だ。シャツを捲って秀介が確認すると、包帯に血が滲んでいた。

「ボウガンの矢…」と答えたら、秀介が顔を歪めた。

「矢都も容赦ねーのな」と呟きながらも包帯を取る。

「これでも手加減されたみたいだけど。あたしのことおやつとか言ってた」

「あ。確か変わった趣味持ってるって言ってたな…ゲスめ」

眉間にシワを寄せながら傷の処置。持ち歩いているのか、ポケットから包帯を取り出して巻き付けた。

「秀介は人殺したことがある？」

「あるよ。相手は殺し屋、殺すつもりで狩らないと狩られるからなあ、雑魚は別」

つまりは先程のは雑魚。

まあ当然と言えば当然だ。

「本当、返り血を浴びるんだな」

吹き出したように笑って、秀介は黒いハンカチであたしの顔を拭いた。

どうやら顔に返り血を浴びたらしい。それも覚えてない。

「血の色が好きなの」

「赤？へえー。俺も好きだが、赤い食べ物もつと」

「あたしも好きだよ。林檎もトマトも人参も」

「他に何色が好き？俺はね、黒と青、シルバーが好み」

「あたしも黒は好き。青も好き。青空が好きだから。シルバーもまあ好き。あとは紫色かな、その他は普通か嫌い」

その公園で少し話した。

一時間くらい。二時間くらい。話をした。
また他愛ない話だ。

何が好きか。何が嫌いか。好きな店は。嫌いなファッションは。好みの武器は。相手にしたくない武器は。好きな空は。嫌いな雲は。星は好きか。月は嫌いか。夜は好きか。寒いのは嫌いか。プレゼント

トは好きか。サプライズは嫌いか。
好きか嫌いかの話ばかり。

ブランコに腰をかけて、ギイギイ揺れながら話した。下校途中の学生カップルみたいだ、と秀介は言ったがあたしは全然違う、と否定した。

「つばきちゃんは人間嫌い？」

「あたしは嫌いだよ。君は好きなの？ シュウシュウ」

人間が嫌いかどうかを訊いてきた。人間が好きって言う人間はできすぎだろ。

「俺は…どつちでもないと思う。嫌いか好きか…どつちでも関係なく、大して思っていないよ。つばきちゃんはなんで嫌いなんだ？」

「人間がうじゃうじゃしていると吐き気がする。人間はいなくてもいい存在と思ってる。人間の、根本的な何かが嫌いなんだよ。あたしもよくわからないけど」

ギイコギイコ。揺れる。

「ふーん。それも自己嫌悪？」

「ああ、そうかもしれない」

「椿はいつも自己嫌悪感じてるわけ？」

「そうですねにかあ？」

「超優しいじゃん」

「偽善だよ」

「いいや、違うね」

秀介は笑って否定を否定した。

ギイギイと大きく揺れて、笑う。

そこに親子が来た。子供が父親を引っ張って公園に駆けて入ってくる。

何も言わずあたしと秀介はブランコを降りて、出口に向かった。

「じゃあ最後の質問」とあたしの隣に立つ。

「家族は嫌い？」

その質問には間もおかず、考えもせずに答えられた。

「嫌い」

その一言だけ。

「あの子と同じくらいなら、好きだって言ってたかもね」

ブランコで父親に背中を押されて揺れる子供を振り返り答えた。

「そっか」と秀介は頷く。

「俺もおんなじ」

そうやって笑った。

少しだけ歩いて、立ち止まる。

「じゃああたし、帰るね」

「あー、うん……」

「あとつけないでね」

「うーん……」

秀介はなんとも曖昧な返事をする。

幸樹さんの家なんて病院で調べればわかることだが、あたしが白瑠

さんが幸樹さんの家にいるとは知らないはずだ。
つけられては困る。

「ついてこないで」

「あー、はいはい。つけません」

おどけた反応。信用できない。

「つけなかったら……今度会った時に、キスしてあげる」

捨て身だけれどコスプレよりは幾分もマシだ。秀介とのキスならあたしにとってもご褒美みたいなもの。

目の色変えてキラキラした笑顔になった秀介は、本当に癒される。
可愛いなコイツ。

「絶対約束する！大好き！次会ったらつばきちゃんからキスな！」

うんうんと頷いてやる。

「絶対だよ？」と確認。

「絶対！」と秀介は頷く。

「じゃあ、またね」

ちゅ、と躊躇のない動作で秀介があたしの顎を上げて唇に唇を押し付けた。

またねのキス。

「あ、うん……じゃあね」

あたしは自分から背を向けて歩き出す秀介に返す。

秀介は振り返って手を振った。あたしも手を振りながら歩く。見えなくなるまで互いに手を振った。

秀介は、角を曲がって姿を消した。それを見てから手を下ろす。本当に約束を守るかはわからない。でも秀介は頭蓋破壊屋よりあたしを優先してくれるはずだ。

それを信じて、あたしは真っ直ぐ帰宅した。

さあ。ここからが正念場だ。(意味違う)

殺人を殺るなと言われたのに殺ってしまった。服にも若干返り血を浴びたがバレないだろう。部屋に行つて即座に着替えよう。

その為には先ず、会わないようにしなくては。

あんなに大丈夫だと言いつつたのに傷が開いたとバレたら…。仕事より緊張する。

深呼吸。ぐつとドアのノブを開き入る。

「ただいま！」

リビングに向けて大きな声で声をかける。そうすれば「おっかえりー」と白瑠さんと藍さんの揃った声が返ってきた。

「おかえりなさい。遅かったですね」と幸樹さんが返してきた。ガツポーズ。皆顔を出さない。

「うんーつい時間忘れちゃいました」と幸樹さんに返事をしあたしは急いで靴を脱ぎ、ゆっくりと廊下を歩く。

部屋に入つて、着替えるだけだ。

あと一步。部屋まであと少し。ノブにあと一センチ。

「あつれー？血の匂いがする」

びくう、と震え上がった。

白瑠さんの声。ひよっこりと廊下に白瑠さんが顔を出した。

ひい！お前は犬か！？

捕まる前に部屋に逃げ込もうとしたが。

「椿さん…？」

白瑠さんの後ろに立つ幸樹さんが黒い感じの笑顔で呼ばれ、動けなくなった。

結果。失敗。

「す、すみません…五人殺りました…」

致し方なく白状。

「五人？どおりで遅いわけですね」

鋭い視線が突き刺さる。頭が上がらない。あたしのせいじゃないもん…。

「まーまあーいいじゃん？つーちゃんも2週間我慢してたんだしいひゃひゃ！殺るとは思ってたけど五人かあ」

意外に白瑠さんが庇ってくれた。こ、心の友よ！

「すつげえー。さすがだねー。椿お嬢。死体はどこ？隠滅してあげるよ。知り合いにねー隠滅が趣味の変人がいるから」

「隠滅しないとまた騒がしくなります」

リビングに重い足取りで入れれば藍さんがパソコンを開いて笑いかけた。

「あ、それならもう隠滅してもらいました」

ついつい口を滑らせた。

え？と三人が目を丸めてあたしを見る。

しまった…。まさか隠滅の話をするとは思いつかなかった。

「えっ…と…あははっ、実は相手は裏現実者でして…一緒に…
…秀介くんとボコボコにしてみました」

結局隠すことができなく吐いた。

出来るなら、黙っていたかった。

「んにゃー？秀介くん？」

「え？誰？秀介って…お嬢のカレ？」

「恋人未満ですよ…椿さんが言うにはね。狩人の鬼です」

白瑠さんが瞬きして、幸樹さんがニヤニヤする。藍さんは仰天した顔であたしを見た。

「まつじで？あの鬼と？椿お嬢が共同戦線張ったわけ？ほぎゃー！
そりゃすげー！おったまげー！」

「椿さん。裏現実者相手…しかも秀介くんと殺ったというなら…それ相応に暴れたわけですね？」

興奮した藍さんとは真逆に、幸樹さんは冷やかな口調だった。

「まさか…傷が開いたなんてこと…ありませんよね？」

氷の微笑の威圧感に。あたしは何も返せなかった。

翌日。最悪だった。

幸樹さんは医者なのか似非医者なのか、わからん。頭がぼんやりする。ちよつと気持ち悪いかもしれない。

昨日は当然叱られた。

そして昨夜はナースの格好でロツクなしのウオツカを飲まされた。…怪我人なのに。

あたしは必死に意識を繋ぎ止めた。襲われたくなんかないから。変態トークはまるで聞こえなかったのは幸い。

おかげで朝から気分最悪だ。

溜め息をつきながら、テレビをつけて適当にチャンネルを回す。全てのニュース番組は同じものを放送していた。

「うひゃー、つばちゃんあん、おっはよおお」

こっちが眠くなるような眠そうな声で部屋から出てきた白瑠さんが挨拶をしてきた。

「んひゃ？つばちゃん？」

あたしからの返事はなかった。返事はできない。

停止していた。思考も呼吸も。

鼓動さえも止まっていたかもしれない。

眼だけが、それを視る。

身体他の機能は停止していた。

混乱と困惑が沸いて、戸惑いながらも息を吹き返す。

「椿ちゃん？」

「……白瑠さん……」

何故？

それしか頭に浮かばなかった。

あたしは白瑠さんを振り返える。

「あたし、なにも…してませんよね…？」

確認。

指を指すのは、テレビの画面。

テレビの画面にはこう、字幕が映し出されていた。

「レット・トゥーン再び」

狩人と殺人鬼（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。

これから執筆できるかぎり更新いたします。

主人公が殺しをやったりしてきましたが、次は探偵ごっこをさせてみます。推理小説とまではいかないかもしれませんが。

これからも裏現実を知って、色んな裏現実者に関わって、とんでもないステージに向かわせたいと思います。

たまに恋愛だとかほのぼの家族愛とかシリアスだとか、思い付くままに入れていきたいです。

よろしく願いします！

紅色の黒猫

レッドトレイン再び。

血塗れ電車でまた大量殺人が起きた。発見は夜。終電電車に乗車した十数名が惨殺。恐怖が再び日本を震わせる。

大々的にニュースは世界中にまで広がった。日本は嚴重体勢になりざるおえない事態になった。

各駅も電車の中も、警察や機動隊がちらつく。

日本は今。最悪な事態に陥っていた。

表だけではない。

裏現実も騒ぎになっていると言う。

紅色の黒猫が堂々と宣言したらしい。

「我は紅色の黒猫なり」

事件を殺ったのは自分だと言いのけ、言いふらしているそつだ。

「……………」

紅色の黒猫、本人のはずのあたしは最高に苛々していた。

「本当に椿お嬢じゃないの？」

裏現実の情報を集めている最中の藍さんがもう何度目かわからない質問をまたした。

堪えて静かに否定していたあたしは。限界だ。

「あ、た、し、じゃな〜っい!〜!」

クッションを投げ付ければ見事に命中した。

「あたしじゃないもん! アリバイあるもん! 昨日はウォツカに潰れてたもん!」

子供が痙攣を起こしたようにジタバタ跳ねたり蹴ったりクッションを殴ったりナイフで刺したりするあたし。

そんなあたしを変態な眼差しで見る藍さんと白溜さんは幸せそうだ。コンチクシヨウ。

「なんでよ!?! あたし殺ってないのに〜っ!〜!〜!」

「ま〜ま〜、椿ちゃん。落ち着きなよ。椿ちゃんじゃないってことは、まねっこだよまねっこお」

あたしを眺めながら白溜さんは陽気に宥めた。

「まねっこ…?」

「まねっこお。俺にもいたなあ〜ええ〜とお〜誰だったかなあ」

「……まねっこ刑事」

「あ! そうだ刑事だあ。俺の殺しを真似ようとしたまねっこお」

んひゃひゃつと白溜さんは笑う。

「まねっこ刑事とこの事件が何の関係があるんですか!?!」

「椿お嬢。中にはね〜、恐怖を抱く奴がいれば憧れを抱く奴もいるんだ。頭蓋破壊屋にだってファンは少なくない。椿お嬢に憧れを抱いて、真似たっつことだ」

白瑠さんと似た笑みを浮かべて藍さんはわかるように言ってくれた。

「だって。椿お嬢はあの頭蓋破壊屋と同等の紅色の黒猫だもんね、ぐふふ」

紅色の黒猫。裏現実で騒がれているのはそう。頭蓋破壊屋の陰があるからだ。

噂がざわざわ。噂が噂が呼び勝手にざわついているだけ。

ざわついた元凶は。

この二人だ。

「元はと言えばアンタが勝手に名前つけて噂を流すからだろうがあああ！！！」

「うぎゃあああつ！！！！ちよ、ナイフだけはナイフだけはタンマ！！！」

「何が黒猫だ！てめえが騒ぎを呼んでんじゃねえーか！！！」

藍さんに掴みかかり、ナイフを振り上げる。藍さんは真っ青になってナイフを握る手を掴んだ。

「紅色の黒猫の名前をつけたのは、私ですよ」

そこにリビングに入ってきた幸樹さんは言った。

「へ？」とあたしは呆気にとられる。

「幸樹さんが？」

「ええ、白瑠と藍乃介が口論していたので私がつけたのですよ」

「え。つまりは藍さんの単独犯ではなく、二人とも容認してたんですか！？」

てつきり藍さんが一人で名前を決めて情報を流したとばかり思っていた。

「ははっ？ 僕が単独行動するのはハッキングと少女誘拐だけだよ」

藍さんがムカつくほど爽やかに笑ったからナイフの柄で殴ってやった。

「帰ってきてくださっただんですね、幸樹さん」

「緊急事態みたいですからね。それにしても……こんな状況にも関わらず……」

笹野さんがあたしに目をやる。とても興味深そうに見た。

こんな状況にも関わらず、この変態に着ると言われたんですよ。と藍さんの首を絞める。

約束だから仕方ない。あたしは約束通り着てやった。

黒のミニスカメイド服。というかエプロンドレス。

頭には猫耳。ミニスカートには尻尾。

そして白瑠さんの大好きなニーソ。

そんな格好で藍さんの上に跨がっていたから、絞められているにも関わらずニマニマしている。

白瑠さんなんて例のスカートとニーソの間に釘付けだ。

「つばちゃん。ちょこつと触っていい？」

「あ、僕もーぐふふふ」

「お触り禁止だっつうのー！！」

バシッとあたしは藍さんと白瑠さんの頭を叩いた。

「いったあい！」と涙目で訴えられる。当たり前だ。痛くしてんだ。二人から離れて腕を組む。

「荒れてますね。椿さん」

「苛々しても事件は消えないよお？別に椿ちゃんが犯人だって表で騒がれてる訳じゃないし、ほっとこうよ」

「そーそー、どうせただの三流だって。気にしてたらノイローゼになるよー」

白瑠さんと藍さんが言う。あたしはギョツと黒い尻尾を握り締めた。「ちょ、つばちゃん…尻尾切れるよ」と白瑠さんが尻尾の心配をするが無視。

ギギギギ、と握って引っ張る。

ズボツ。

ソファに足を落とす。

「裏は騒いでんじゃねえーかよ。はあ？あたしに憧れ？真似？ふはは！ばつかじゃねえの？胸くそわりいつつーのー！！」

声を上げれば白瑠さんと藍さんがビクリと震え、後ずさった。

「紅色の黒猫だつてわかってんなら裏現実者だな…？探し出して犯人見付けてやる！」

「…見付けて、どうするのですか？」

「憧れじゃなくて恐怖を植え付けてぶっ壊して警察につき出す！！ついでになすりつけてやる！！！」

黒猫メイドが腹黒いことを吐いた。「お、お嬢…」と白瑠さんと藍さんがあたしをそう呼ぶ。

「ふふ、それはいい案ですね。表沙汰になったのなら犯人が見付けないと日本人は落ち着けませんからね」

幸樹さんが笑って乗ってくれた。

「真似た犯人も憧れの紅色の黒猫に締め上げられるのは本望でしょう」

「文句は言わせません！きつちりとケジメつけさせてやらあ！」

「…。白くん、つーのお嬢ってマジでお嬢の素質あるんじゃない？」

「…ん、藍くん。こお…うん。一回着物着せてもらおうか」

ブツブツと白溜さんと藍さんが話す会話は聞こえないフリ。

「二人は！？元はと言えば二人のせいで噂が酷くなっただですよ！犯人捕まえるの手伝ってくれるんですか！？くれないんですか！？」

ギツと睨み付けて指差す。

ビシッと二人は手をあげた。

「面白いから乗るうー！」

「けじめつけるので乗るー！偽者にも興味あるしー？」

「んひゃっ！楽しそーだあ！ひゃひゃひゃひゃっ！やろうか犯人さ、が、しい」

不気味なほど、白溜さんの笑い声が響いた。

「思い知らせてやんなきゃねえ？黒猫ちゃんの真似をしたらどおなるかを。んひゃひゃひゃ」

にんやり笑っていたが、どこか別を見る眼は冷たかった。

「お願いします…」

そんな白瑠さんを見たまま、あたしは頷く。

「つばちゃん来てからいい具合に面白くなるねえ？裏現実」

一人だけで。楽しんでいる。

そんな様子だった。

1

紅色の黒猫。

藍さんが流した情報は些細だった。血塗れ電車の犯人は頭蓋破壊屋ではなく、紅色の黒猫だということ。

56人の人間の首を掻き切った。

密室で、しかも小柄な少女が。デザインカッターだけで。ただの三センチの刃だけで。

そんな情報までは流していない。

ただ。裏現実素人の若い人間とだけ。

それだけで、憧れを抱かれる。そんな奴。そんなバカ者。不快だ。見付け出して、あたしを教え、どんな感情になるかを、見定めてやる。

狂った貴様に。狂った貴様を壊して晒して、恐怖で裏現実を語れなくして、表だけ罪を被せて警察に突き出してやる。

先ずは藍さんに偽だと言う情報を流させた。それから情報元を探ってもらった。探って辿り着いたのは。

「……………漫画喫茶……………」

東京にある小さな漫画喫茶だった。

「ふざけんなよ…現場の近くじゃねえか」

藍さんが突き止めた漫画喫茶を見回して毒づく。

「つばちゃん、昨日から敬語吹っ飛んでるねえ」

クスクスと白瑠さんが笑う。

敬語は対人用だ。独り言だよ今のは。

ふざけたことに現場のすぐ近くだった。なんていい加減。

藍さんの話によればここでアクセスして情報を流したそうだ。しかも犯行直後。全くもっていい加減だ。

「で。つばちゃん、どおやって容疑者を見付けるのかな？」

「殺人鬼は血の匂いがする。白瑠さんは鼻がいいみたいですから探し出してください」

「なるほどお、それで同行に俺を指名したわけかあ。んひゃひゃっいいいよ？殺人鬼さあがし」

同行者は選べた。やっと選択肢が与えられたのだ。

幸樹さんも協力的だったが、殺人鬼には殺人鬼をと鼻のいい白瑠さんに同行してもらおうことになった。

現場付近ということもあって警察が聞き込みを一人では危険だから白瑠さんのバイクで来た。白瑠さんの運転なら警察に見付かっても逃げ切れるだろう。

当然あたしは女物の服だが、顔を隠すように帽子を深く被っている。これだけでバレないのだから案外わからないものらしい。

まずはここにいる殺人鬼。もしくは裏現実者を見付け容疑者として調べる。

無論。いつまでもここにいるとは限らないのでアクセスした時間帯に誰がPCを使っていたかを聞き込みする。

手順はそんな感じだ。

「んふふっ、いいねー探偵ごっこ！解決しようぜワトソン君！」

どっちかと言うと探偵より刑事よりだ。

ていうかあたしが助手かよ。ホームズをやらせるや。あたしホームズ好きなんだぞ。キャラが。

あたしが睨み付けていれば。

「あつ、つばちゃんはコナンだね！俺はキッド！」

「キッドは怪盗じゃん」

「え、じゃあ工藤新一」

「どうして同一人物が一緒にでるの……」

「じゃあ金田一少年」

「案外漫画読むんですね…白瑠さん」

雑談はこれぐらいにしてあたしは一步踏み出した。同時にタックル…、じゃなくて人がぶつかってきた。

女の、人が。

平日の真っ昼間だから学生ではないだろう。どうやらこの店員さんらしい。

ひ弱かドジなのか、あたしにぶつかり倒れて抱えていた漫画をぶちまけた。

「あ、すみません…」

あたしは直ぐに広い集めた。コナンと金田一少年だった…。あとはちよつと古い漫画。

「あ、いえっ！ぶつかった私が悪いんです！すみません！」

髪を赤めの茶髪にそめた女の店員さんは深々と頭を下げた。
いや、いいから漫画を拾おうよ。
ドジだなあと思いつつ名札を見る。
猫山だつて。可愛い苗字だ。
くいくいつ。

可愛い苗字の店員さんを全く気にしてない白瑠さんはあたしの襟を引つ張つた。リードじゃないんだから。

「はい」

「あ、ありがとうございます！」

最後の漫画本を渡せば、にっこりと笑顔で礼を言われた。
懐かしい。一般人の笑顔だった。

ふむ。女の人の笑顔がすごい懐かしく感じる。あれ？よくよく考えたらあたし逆ハー生活してない？

軽い現実逃避をしつつ白瑠さんについていった。

「アレ」

白瑠さんの視線を追う。中年らしき男の背中。貧相な感じがするが白瑠さんが嗅ぎ付けたのなら間違いない。裏現実者だろう。或いは殺人鬼又は殺し屋。

その男は個室に入つていった。あたしは白瑠さんと顔を合わせてから追う。

「いざつていう時は白瑠さんの名前を出しますね」

「つーちゃんの名前の方がいんじゃない？」

ケラケラ笑う白瑠さんを無視して男の個室に入った。

「!?!、なんだ」

「しー。店内ではお静かにい」

押し入れば、男が声を上げようとした。直ぐに白瑠さんが男の口を塞ぐ。

無理矢理椅子に座らせて、あたしは机に腰掛けた。

ナイフを取り出し、男の首に突き付ける。

「……………違つかもしれませんね」

「だめだよワトソン君。勘で判断しては」

なんとなくこうもあっさりで見付かるのは、呆気に取られてしまう。探偵だつて落胆する。だからホームズ役はあたしだろ。

「正直に話してください。一昨日の夜は何してましたか？」

答えはパソコンに打ち込め。とキーボードを叩く。

白瑠さんに押さえ込まれ、あたしにナイフを突き付けられた男は答えるしかない。死にたいのなら話は別だ。

仕事をしていた。

と、返事が画面に出る。

「裏での名前と仕事内容を吐け。さもないと頭吹き飛びます」

誰にも聞かれないようにボソリと耳打ちする。何かこの状況を切り抜ける方法でも見付けたのか、先程よりも落ち着いてキーボードを押ししていく。

あたしはそれを見て幸樹さんの携帯電話を開いてメールを送信した。暫くして藍さんから返事がきた。一致。つまり、アリバイは成立。

故に彼は犯人ではない。

「なあんだ。スピード解決かと思ったのにい」

あたしの顔を見ただけで白瑠さんは解ったのか男を放した。

「手荒な真似してごめんねえ？犯人探ししてるんだ、ごめんごめん。じゃあ行こうかワトソン君」

助手かよ。

白瑠さんは男の肩を叩いて謝り、個室をあとにする。

あたしもついていく。

「お邪魔してすみませんでした」と一言謝り頭を下げるのは忘れな
い。

「はい、次」

「ラッジャー」

やっぱりあたしがホームズだろう。納得いかない。

「うむー。なんだかなあ」

天井を見つめて白瑠さんは項垂れる。

「この店自体、血生臭い」

一点を見つめてはやく白瑠さん。それはつまり。

この店自体、裏に関わっているのか？

藍さんからそんな情報はなかったはずだ。

「ほらあれあれ」

あたしの思考はまるきり無視して白瑠さんは裏現実者を見付けたのかあたしの手を引く。

漫画の棚の前で読む本を選んでいる長身の男。スツと彼を挟んであたしと白瑠さんは立った。

「ちょっと聞きたいことあるんだけどお」と馴れ馴れしくも白瑠さんは腕を回す。あの腕を振り払うのは無理だろう。

「な、ず、頭蓋破壊屋！」

「んにゃ？俺知ってんの？会ったことあるっけ？」

どうやらこの長身の男は白瑠さんと顔見知りらしい。でも白瑠さんの記憶力は相変わらずだから彼のことを訊いてもわからないだろう。

「安心してください。危害を加えるつもりはありません。一昨日の夜何をしていたかを訊きたいだけです」

あたしが質問する。

なら話は早い。頭蓋破壊屋は効果的だ。

帽子を深く被っても若い女だとわかるので長身の男は困惑の色を隠せないでいる。

あたしの存在は頭蓋破壊屋に比べたらどうでもいいでしょ、と一言言う。

「一昨日……？こ、ここにいたが……」

「………確かですか？」

「あ、ああ……」

「それは……夜ですか？」

「あ、ああ……夜は大抵ここで過ごしている……仕事がない限り」

「しけてんね」

白瑠さんがハッキリと思ったことを言った。男はギョツとした顔をする。

あたしは気にせず思考する。この男になら犯行は可能だ。この喫茶にいたなんて言う嘘はないだろう。つまりは容疑者。

「ズバリ訊きます。貴方は紅色の黒猫ですか？」

ズバリすぎて、白瑠さんが目を丸めた。男は仰天。

「ま、まさか！んなわけないだろ…オレは違うぞ！」

ブンブンと首を振ってまで否定。何を言い出しやがる、と言った表情だ。

「…そうですか。残念ですね。実は紅色の黒猫さんを探しているんです。一昨日、ここにいた人間を…教えてくれませんか？」

あたしは肩を竦め慎重に問い掛けた。

「例の電車のか…？ここに…？…まあ、いいが…」

紅色の黒猫がいる可能性があると知り、男は苦い顔をする。それだけならまだしも自分の首に手を回す頭蓋破壊屋に、青ざめた。

男の名前は、たたくらほるよこ多度倉春吉。

今この時間に居る者で一昨日の夜にも居た者は五人もいた。

「暇人なんだねえみんな」

「暇を潰すための店じゃないんですか？あたしは利用したことないんすが」

個室に入り、白瑠さんと一緒に整理した。

サラリーマンらしき男。ギャル女。学生服の少年。眼鏡をかけた地味なお姉さん。ダサイ服の青年。

多度倉さんの話が本当ならば、容疑者だ。

「ふうん…一応五人だねえ。先ずはその五人の中で裏を見付けていこつか」

「いや。容疑者は六人ですよ」

白瑠さんが出口を見張りながら足を振る。あたしは訂正させた。「多度倉さん」と。

「えー？あの人違うっしょ。あの反応は嘘じゃないよあ。ビビってたじゃん。ズバリ言うのは良かったよあ」

「嘘には見えなかったのはあたしも同じです。憧れでやったとは限らない。ただ真似たって線も捨てられないでしょう」

「あーね。確かにそうだね。悪戯みたいな。その場合もつーちゃん怒る？」

「怒りはおさまりませんね」

笑いを堪えながらも白瑠さんは先程購入したお菓子をバクバクと食べていく。

「深夜は五時間で千円くらいですから…誰でも利用できる。どう容疑者を絞ろつか」

「裏現実者に手をあげてもらおうよ」

「強引手段ですね…」

めんどくさいから頭蓋破壊屋の名前を出して反応した者に話を訊こうか。店内自体血の二オイがするなら白瑠さんの鼻を宛にはできない。

「あ、つばちゃん。ドリンクの方に三人集まってるよ」

「あ？じゃあ……話に行きますか」

腰を上げて、セルフサービスのドリンクの前にいる容疑者三人に近付いた。

「こんにちは」

小さく。素っ気なくあたしは声をかけた。元々知らない人に話し掛けるほどフレンドリーではない。

あれ。白瑠さんにやらせるべきではなかったかと後悔。

しかし運よく三人は振り返ってくれた。

サラリーマンとダサ服の青年と地味なお姉さんは戸惑いながらも会釈した。ほっとする。

「仲が良さそうですね、お友達ですか？」

にしては年齢がバラバラだ。

「あ、まあ……なんといいですか。ここで知り合った共通の趣味を持った友人ですかね」

おどおどしつつサラリーマンの男は言った。糸目。気が弱そう。

「共通の趣味ですか？」

「あ、漫画やゲームです…」

自信なさげに地味なお姉さんは言った。全ての髪を後ろにまとめた髪型。洒落ているとは言い難い服装。

「どんなゲーム？PC？」

白瑠さんが話題に入る。笑顔を向けるのは、ダサイ青年。

「……流行りのRPGです…」

ちよこつと退いて青年は答える。三人の共通はひ弱そう。根倉。自分からは喋らないタイプだ。

こんな三人で仲良くやっているのか。…どうやって？ちよつとした疑問点。

「へえ…毎日のように来ているんですか？」

「今週は…ほぼ。ね？」

「はい…」

そうか。何も犯人が一人とは限らないだろう。この三人が共犯。…なんて。

「そうですかあ、仲がいいんですね？失礼ですがお仕事は？」

「…僕は、大学生です」

「見ての通りの…サラリーマンです」

「漫画家のアシスタントです」

「あたしは探偵です」

「俺は怪盗キッド！」

だからなんで怪盗が探偵といるんだよ。

ふざけて言ったら怪しい者を見る眼差しを向けられた。

愛想笑いで軽く会釈してから飲み物を購入。

個室席に戻ろうとすれば、本棚の間を歩く学生くんを見付けた。

「白瑠さんは容疑者が帰らないように見張ってください」

白瑠さんに指示をしてあたしは学生くんに近付いた。

学生くんは漫画を熱心に探している。チラチラと気付かれない程度に伺う。

漫画を手にとつては戻す。

嗚呼遅いな。待っていられなくなってあたしは話し掛けた。

「何探してるの？」

静かに話し掛けたのにギョツとした顔をされる。

「……………どつかで会ったことあるっけ？」

ぎくり。おっとまずい。

さっと髪で顔を隠す。

「ううん。初めてだよ」

「…ふうん…そう」

良かった。気付かれなかった。

そうだ。あたしにはそのリスクがあるんだよな。ひやひやする。

「何か探してるなら手伝うよ。暇だし」

「でも…彼氏といただろ」

見てたのか。怪訝そうな顔をされる。

「勘違いしないでよ、逆ナンじゃないよ。それにアレはお兄ちゃんなの」

「ふうん…そつか」と興味なさげに学生くんは本棚に目を移す。

「よく来るの?」

「…まーね」

「学校は?」

「お前こそ」

「あたし中退したの」

「…ふうん」

「何探してんの?」

「面白そうな漫画を探してんだ」

淡々と会話を交わしていく。

「あたし、恵って言うんだ。よろしく。どんな漫画が好みなの?」

手に取った漫画のヒロインから偽名をいただき名乗る。

「よろしくって…友達になろうってこと?」と学生くん。名乗ったんだから名乗れよ。

「別にどつちでもいいけど。よく来るならまた会えるでしょ」

「ふうん。まあいいけど。ナタクだよ。暑苦しいスポ根とっざい少女漫画以外なら読む気起きる」

「ナタク君。じゃあ少年漫画のこれは?」

「それはもう読んだ」

「じゃあ…古いけどこれとか。ナタク君、夜とかいる？」
「これは読んでない……。居るよ、没頭してれば。他にやることないし」

高校生だろ。勉強は勉強。

なんて面倒だからツッコミはいれない。

ならよかったと笑みを向ける。

「…お前、どつかであった？見たことある気がすんだけど。同じ学校だった？」

目を細めてナタク君が首を傾げる。ギクリ。

「まさか。東京の学校じゃなかったよ。ナンパにありがちな台詞言わないでよ。じゃあまたね」

あたしは顔の前で手を振って背を向けた。ふう…。危ない危ない。

「あ。恵。サンキュ。この漫画読んどくよ。じゃあ」

勧めた漫画をナタク君は掲げて礼を言って背を向けた。

彼は一番まともだな。うん。

ダンッ！

何かを叩く音が響いた。

しんと嫌な沈黙に包まれる。

何の音だ？と客が見回すが、音の出所がわからない。
なんだろう。

首を傾げながら白瑠さんの元に戻ると。

「つばちゃん。ギャルの子が帰っちゃったよ」

「な。なんで引き留めないんですか!？」

「だって。見張れって言われたただけだもん」

言い訳すんな!

「あたし追います。さっきの三人の名前を聞き出してください。忘れないでくださいよ」

「やだなあ生きてる人間の名前は忘れないよ、多分」

多分じゃねえか。あたしは苛々しつつも、店を飛び出した。えーと。ギャル。ギャル。

ギャル、苦手なんだよなあ。

不自然な金髪にピンクのリボンをつけたギャルに「あの!」と声をかける。

「このブレスレット、落としませんでしたか？」

自分が今までつけていたブレスレットを振り返ったギャルに問う。

「そんな趣味してない、違うし」

わかってるよ。あたしもお前みたいな幼稚な趣味はしてねえよ。と苛々しつつも笑顔を向ける。

「あ、そうですか…すみません。つかぬことを伺いますがいつもあの喫茶を利用してるんですか？」

「暇なときわね。それが何よ？」

「いえ。聞いてみただけです、これからあたしも利用しようと思っ
ているので。たまにお話ができる相手が欲しいなあと思ったので良
かったら。恵っていいいます」

精一杯。普段の自分と比べたら気持ち悪いくらい愛想を振り撒き名乗らせる。名乗ったら名乗ってくれるだろう。常識な人間なら。

「あつそ、いいけど別に。かなみよ、苗字は真田」

そう大してあたしに興味無さそうに名乗られた。名前がわかったらこちらのものだ。適当に会釈して戻る。

漫画喫茶に戻り、白瑠さんと合流して多度倉さんを捕まえた。

「な、なんだ、まだ用なのか!？」

「暇なら手伝ってください。今いる五人以外に一昨日の夜にいた客が来たら名前を聞き出してください、それが裏現実者かどうかわかるなら確認して」

ビクビクした多度倉さんに頼む。選択の余地はないのだけれどね。パシリを頼む。

「は、はあ?お、オレだって仕事が」

「あたし達がまた来るまででいいので」

「お願いねえ?」

断ろうとしたので遮り言い、白瑠さんは有無言わせぬ笑顔で頼んだ。多度倉さんは、無論逆らえない。

これでいい。

一先ず家に帰ろう。と白瑠さんのバイクで帰宅。喫茶は多度倉さんに押し付けて基代わりに見張ってもらう。

今のところ容疑者が上がった六人を藍さんに調べてもらう。

「あーあ。スピード解決しなかったなあ」

「したら苦労しませんよ」

「裏現実者に手をあげてもらえれば良かったのに。しかもほら、多度倉くんにはさあ言ったみたいに“この中に紅色の黒猫はいますかあ”って言えばいいじゃん」

「だから！何も憧れを抱いて真似たとは限らないですよ！引つ掻き回してケタケタ笑っているイカレヤローっていう線もあるんです！」

玄関に入り、飽きたのかしつこく白瑠さんにもう一度言いながら廊下を歩いた。

「いいじゃん、動機なんてえ。殺ったのは間違いないだし、反応はするでしょ？」

「逃げられたらどうするんですか！」

「そんなの問題じゃないよあ。どうせ三流、簡単に殺せるよ」

「殺しちゃだめですよ！殺されるより苦しい目にあわせるんです！」

「こわいこと言っなよおワトソン君。この前みたいに幸樹に“これ誰のピアスなの？”って畳み込まなきゃ！犯人はお前だ！って俺やってみたあいいい」

「ホームズにはなれないですね、白瑠」

リビングについて幸樹さんはそうやって笑った。

「それにあの時は証拠品があったから確信して椿さんは拗ねた。今回は証拠品と容疑者が揃っていないですよ」

「浮気の証拠品ね」

「あーはいはい。私は椿さんしか愛しませんよー」

白瑠さんが訂正したら幸樹さんは顔色変えずにあたしに嘯く。もっ

と上手く言っただけらしいものだ。

「今上がった容疑者です」とあたしはメモをソファにいる藍さんに渡した。

その顔が。何故だか浮かない。

「ちょっと藍さん……。藍さんまで飽きたとか言いませんよね？」

「んー……。だつてさーお嬢？こんなさーこんなのさー。ただの刑事ごっこじゃん。僕は飽きたよ。やだよ」

ハッキリと飽きたと言いやがった。

本気で言われたのがマジム力つく。

「そんなに調べるの面倒ですか？ならいいですよ」

あたしはむっすりと子供みたいな態度でそっぽを向く。

「や、やだなあ。そんな可愛い反応を僕の隣でしないでよー」

何故だか涎を垂らしそうな顔をしゃがった。こんな態度が効果的だとは思わなかった……。

そう言えばあたしは藍さんが好みの少女なんだっけか。

「藍さん…自分でもロリコンだつて言っていました。ロリコンの対象ってもつところ…幼い子じゃないですか？小学生とか中学生辺りじゃないですか？」

ロリータコンプレックス。ロリコン。少女が趣味。少女以外論外。どんなナイスバディーの美人よりも、少女を選ぶ少女趣味の藍さん。

「いや、僕のストライクゾーンは未成年までだから。つーのお嬢は

ドストライクだぜ」

藍さんは爽やかな笑顔で言いのけた。ビシッと親指まで立てられる。殴っていいですか。

「俺、藍くんが5歳の女の子を着せ替えしてるのみたことあるう」

「私なんて中学生にお金まで出して着せ替えさせているのをみましたよ。赤子にだって涎を垂らすロリコンですよ、藍乃介は」

正真正銘の変態だった。

自他共に認める変態だった。

「少女と言うか……そうですね。未成年に見える150センチ以下の美女ならストライクなんですよ、藍乃介は」

「ちょ、まるであたしが150センチ以下みたいな言い方ではないですか！」

…あれ。あれね。

沈黙したぞ。皆あたしを凝視して沈黙しちゃったよ。

あれ。どうしたんだろう。

あれ。視界が霞んできた…。

「と、とりあえず…少女であるあたしの…頼みが…聞けないですか…」

落ち込みつつなんとか顔を上げて藍さんを見上げた。

どうしてだか胸が痛いよ。

「……………」

何故だか藍さんは。涎をたらたらたら垂らしそんな顔をしていた。

ていつかもう涎が垂れている。黒縁眼鏡イケメンが涎を垂らした。

…寒気が。悪寒が。憎悪が。

「ぐ…ぐふふふふ…ツボ…じゅるっ」と笑いながらやっと口を開いてくれた。涎も拭いてくれた。

「あー勘違いしないで、お嬢。僕はおりるなんて言っていないさ。やるよやる。でも、ね。お嬢」

身構えたが様子からして真面目な話らしい。ロリコンだと言つても真面目に言うから気は抜けない。

「多無橋氏の伝言」

「……あっ」

すっかり忘れていた。

そう言えば伝言があったのだ。

「怪我が治ってから言おうと思ったけどコレじゃん。でもさっきまたメールが来てさ。君に仕事の依頼だ」

目を丸める。

あたし？

あたし指名の仕事？

「……………断ってください。今は偽者を吊るしてなぶってあぶって刺して切って折ってやらなきゃいけないんです！」

「そんなことより仕事でしょー」

「そんなことよりっ！…!？」

今のはツッコミが欲しかったのだけれど、この際いい。

「元はと言えばですねっ！」

「わかっているわかってるよ！短剣しまおうか？僕が元凶なのはよ
おおくわかってます！今夜やっちまって明日から犯人探しに…ねっ
？多無橋氏は僕のお得意様でもあるんだ」

昨日と同じ台詞を言おうと短剣を出したら咄嗟に藍さんは下がり
両手を振った。

苦笑しながら藍さんは言う。

どうやら藍さんの立場上苦しいらしい。殺し屋と依頼人の間にいる。

「つばちゃん。藍くんの顔を立ってあげなよ。初の指名の仕事を蹴
つちゃうなんて大物おーんひゃひゃ」

膝掛けに座って白溜さんがあたしの髪を引っ張った。

女の髪を引っ張るものではない…。でも痛くはなかった。

そのまま白溜さんに引き寄せられる。

白溜さんの目当ては傷を隠したチョーカーだった。

チリリリン。

指で鈴を鳴らす白溜さんはご機嫌な笑顔で見下ろす。

「…でも、怪我治ってないし」とかい訳。

「二度目のレッドトレインをしたのですか？」幸樹さんが意地悪
を言う。

そっか。多無橋さんはそれで催促のメールを送ってきたのか。

「多無橋さんに言わなきゃ、あれは偽物だって」

「直接言ってきなよ。会う約束はしたぜ」

びし、とまた藍さんが指を立てた。勝手に決めたのかよ貴様。

「わかりました行きますよ行きます！だから藍さん容疑者を調べてください！」

少しかだけ考えてからあたしは諦めて仕事を引き受けることにした。自棄だ。

「オツケーオツケーオツケー！プリティなガールの椿ちゃんの為に仕事中に調べあげる！ぐふふっ」

藍さんは約束してくれた。

絶対だからね。と睨み付ける。

「よしじゃあつーちゃん行こうか！」白瑠さんが同行してくれるのは必然だった。

「そおだね。つばちゃんの為に俺より鼻のきく奴を紹介してあげる」

「鼻がきく人？」

「んー。前から紹介するつもりだったあよっ」

そう言いながらまた白瑠さんはチョコレートカーの鈴を揺らす。見上げるのが辛くなった。

「では彼を連れてくるのは私の役目ですね」

幸樹さんが頷く。今の言葉だけで誰のことかわかったらしい。一体誰だろう。

二人は教えてくれそうにもないのであえて聞かなかった。

多無橋さんに会う前に、藍さんと容疑者調べ。名前と特徴を話して

ほしいと言われた。

外見や第一印象を話す。一通り話したところで、藍さんが「あのさ」と我慢していたようにためて話し出した。

「学生のナタクってさあ、苗字？名前？」

「名前：だと思っけど。あたしも偽の名前を言ったから名前だとそれが？」

「ん。ああ、いや。ただ気になったただだよ、ちよつとね。裏現実」
にナタクっていう苗字の危険人物がいるからさ」

なんだかただならぬ雰囲気であたしの書いた字を見つめた。

ナタク君は普通に見えたけれど。

「あー、でも学生なんだよね？じゃあ違うね。うん」

無理矢理自分を納得させたように藍さんは頷いた。

「多度倉氏も僕は知り合いだ。白瑠も会った気がするんだけどね。

アイツが忘れるのは当たり前かな、あんま売れない、けれどコッコツやってる殺し屋だよ。除外してもいいんじゃない？」

「そこにいたなら犯行は可能です」
「仰る通りですね、椿刑事」

藍さんは肩を竦めてまたパソコンに向き合った。容疑者だと思っ
やつは容疑者だ。

アリバイがなければ、容疑者。

「全く、監視カメラがあつたらいいのに」ごもつともな意見だ。監視カメラさえあればなんとか絞れたはずなのに。あの店にはない。会員制でもない。

「初めて裏現実での危険人物なんて聞きました。参考に教えてください。さい。ナタクってやつ」

「うん？ナタク。ナタクねーうん。そんなの知る必要ないよ」

興味が沸いたから訊いたら首を振られた。その藍さんの顔が何とも言えない表情だ。

苦笑のような嫌そうな言いたくない顔。

「でももしもは起こりうるだろうから…」

「いやー。まさかね。だって学生だし……ああでもあり得るか」

ぴたりと藍さんの動いていた指が止まる。

「産まれてから裏現実で生きて人間はいる。マフィアの子供がいるように。あの鬼もまたそうだな、秀介くんだけ？僕達のように表から裏にきた人間とは違う初めからいた人間ってのはね、桁が違なんだ」

説明に困った様子で藍さんは顎をさする。

秀介の言葉を思い出す。

俺もおんなじ。

家族が嫌いと言う質問にそう笑って返した秀介。

産まれてからずっと。裏現実者。裏現実者の親を持つ子供。

「ナタクは結構有名な家系の名だ。何十年も前から、ナタクっていう奴らは危険人物だと言われている。どう危険かなんて…説明できやしないけど…。ナタクに関わるのは避けるべきだ。これは僕の忠告だ。味方でもヒヤヒヤする相手だ、敵にしてもいけないよ」

秀介からナタクに思考を戻す。きつく藍さんはあたしの頭に叩き込

むよつに言った。

「まあ…学生つて歳のナタクなんて聞いたことないから違う可能性は大だから、その子に警戒はしなくていいと思う。ナタクなら学生なんてやってないと思うしね。やっぱり気にすることないよ、お嬢」
「…そうですね。藍さんの情報を信じます」

あたしの返事を聞いて藍さんは話を終えたのか、また指が動かし始めた。

「因みに」とあたしは続ける。「ナタクの漢字は？」

「刹那の那に、拓殖の拓。那拓」

那拓の話はそれつきりだった。

ナタク君以外の素性は調べられた。偽りはなく、裏現実者ではないだろうと藍さんは推測する。

夕方になってあたしは白瑠さんと仕事に向かった。紅いコート。藍さんがまた作った物だ。今回はスカート。ではなく短パンにした。足が出るだけで白瑠さんと藍さんとはご機嫌。因みに黒のニーソだ。バグ・ナウをつけ、カルドを腰に、腕には短剣を、コートの中には大量のナイフ。ブーツにも仕込みを忘れない。

3週間ぶりの仕事だ。

まずはホテルで待ち合わせしている多無橋さんに会い、仕事の詳細を訊く。ついでに誤解も解いておこう。

白瑠さんはあくまであたしのサポートをしてくれるだけだから多無橋さんに顔を出さないそうだ。頭蓋破壊屋がサポートなんて、聞いたら混乱させてしまう。

エレベーターに乗り込み、約束のスイートルームに向かう。

たかが、話をするだけなのにスイートルームって。金持ちってやつは。

指定された部屋にノックした。
直ぐに開かれる。

見覚えある女性。スーツ姿。多無橋さんの秘書だ。

「お待ちしておりました」と中へと通された。

「やあ、紅色の黒猫さん。また会えて嬉しいよ」

多無橋さんは部屋に立って出迎えてくれた。短髪で人が良さそうな眼鏡の男の人。

「こんばんわ。」指名頂きありがとうございます

ペコリと会釈する。

一応白瑠さんのように接することは出来ないから口調はかしくまる。

「ふふ。Iの言う通り、ドライだね」

Iは藍さんのこと。イニシャルなのかどうなのかわからないが藍さんはIと名乗っている。…ドライだろうか。

「まあ、座って」と言われたのでソファに腰を下ろした。

「それで…仕事の内容は？」

「ああ、標的は隣にいるよ」

手っ取り早くすませようと本題に入ったらさらりと言われてしまった。隣かよ。

何考えてんだこの人。

「驚かないでくれ。今夜は取引で呼び出したのだからね」
なるほどね。取引、か。

「それまで時間はある。話をしよう、Iから聞いたよ。例の電車も君がやったそうだね」

「……はい。ですがこの間の二度目の血塗れ電車はあたしではありません」

「そうなのかい？」 仕返しができた。多無橋さんは目を丸める。

「はい。偽物でしてね…今、探しているところです。見付けて犯人に仕立てあげるつもりですので終わるまで、次の仕事は引き受けません」

「ふふっそうなんだ。うん、辛抱しよう」

ちよつと生意気な口調だったが多無橋さんは笑って応えた。
ソファの背凭れに身を預け「しかし」と付け加える。

「被害者と思われていた君が犯人だなんて、ね？」
「……………」

「ああ、これはIから聞いてはいないよ。こちらで勝手に調べただけなんだ。テレビで見たよ、写真の君に見覚えがあったからね」

調べたんだ、とそう答えた。

「綺麗な顔立ちだから。印象に残りやすい、しかも似た顔はいなさそうだ」とあたしの顔を眺める多無橋さん。
あたしは自然に警戒を強める。

この人は、敵か味方か。
おちよくっているのか。

「私は産まれる前からこちらの世界の住人なんだ。うん、だから言わせてもらおう。裏現実へようこそ」

人のいい笑顔を浮かべてそう言った。

藍さんのバカ。

本名言ったってよかったじゃん。素性バレバレ。

「年相応に拗ねた顔をするんだね。殺しは年相応ではないけど」

「年相応の殺し方なんてないでしょ」

「そりゃそうだね」

おかしそうに小さく多無橋さんは笑った。あたしは目を背ける。

「君には期待をするよ、紅色の黒猫さん」

「……………ありがとうございます」

なんか嫌な人に入られたらしい。金持ちってやつは。大人ってやつは。元々裏現実者ってやつは。

こんな面倒くさいやつらばかりなのだろうか。

裏の顔だけの人間達。

那拓は一体。どれくらい。

危険なのだろうか。

ちよっとした。

興味が沸いた。

殺戮の黒猫

多無橋さんは 最低だった。

あたしが経験が無すぎなだけかもしれないがあまりにも酷い。最悪だ。

「時間だ。では行こうか」

時間だ。は理解できた。

行こうか。は首を傾げる。

行こうか。…一緒にか？

嫌な予感。

その嫌な予感は的中した。

取引にあたしは連れていかれたのだ。隣の部屋へと秘書さんと一緒に。

白瑠さんと呼ぶ暇も与えられず連れていかれてしまった。つまりは取引中に殺せ、とのことらしい。否、わからない。いいのか悪いのか。

隣の部屋には筋肉質のボディガードのような男二人が立っていた。その男に許可をもらい中に入る。

殺せとの命令が出ないことを願った。

部屋の外の男と似たような体格の男達がうじゃうじゃといたのだ。過激なスポーツをやっているような男達が何人も。

白瑠さんと呼ばなきやヤバイってこれ。

あたしがヒヤヒヤしている間に多無橋さんは取引相手と挨拶を交わした。

「見慣れない顔だな」

取引相手は背の低い太った男だった。顔からして下品そう。中身もそんな感じに見える、外見判断していい男だ。

「ああ、彼女は私のボディガードだよ」

多無橋さんがそうあたしを紹介すれば男は高らかに笑い声を上げた。

「そんな小娘がか？」と。本物のボディガードまで笑いやがった。

殺してえ…。

殺したいがあわよくばこんな状況でやりたくない。

依頼人が死ぬ。

依頼人だって、今この場で「殺れ」なんて言わないだろう。

……有り得そうで怖い。

血塗れ電車の犯人だと知って過大評価をしているのではないだろうか。密室ならばどんな人数でも殺せると勘違いしているに違いない。自殺行為だ。死んでも知らないからな。助けて白瑠さん。

「それで。例の物は？」

取引は始まった。

何の取引だろうと横目で多無橋さんと秘書さんを見たのだが、何も持っていないさそうなのは気のせいだろうか。

多無橋さんと太った男はソファに座り、あたしと秘書さんは多無橋さんの後ろに立った。

取引相手は間にあるテーブルにアタッシュケースを出した。その中身は金。

「金を確認してくれ」

「ああ、確認したよ」

見もしないで多無橋さんは頷く。

「じゃあこちらもブツを確認させてもらおう」

「ああ、その必要はない。持ってきていないからね」

どうやらマジで「殺れ」と言う気らしい。あたしは構えた。

「大体、それぽっちの金なんかで買える品物ではないんだよ。おバカさん」

挑発。この人は他人を不快にさせるのが趣味だろうか。

太った男が青筋を立てる。

「きつ貴様」

「では黒猫ちゃん。始めてくれ」

太った男の言葉を聞かずにあたしに「殺れ」と命令した。

同時にチリリン。と鈴の音がその場に転がる。

多無橋さんの背を預けた背凭れに足をかけて、飛び込んだ。

太った男の顔を踏みつけ、後ろにいる四人の男達を左手から伸びた3つの刃で、たった一振りで、首を掻き切った。

ぶしゃあと血飛沫が上がる。それをもら受ける。足元の男もそう「ひい」と情けない悲鳴を上げた。

そんなの勿論、お構い無しだ。

他の男達は反応が遅れている。隙だらけの今が好機だ。

右手に持つカードを握り、右に飛ぶ。無造作に置かれた椅子を足場に壁を蹴って次の男を殺った。太い首だが案外スパツと切れた。いけそうだ。

視界で懐から銃を取り出すのが見えた。左手でそいつらにナイフを投げ付ける。

「ぐあつ」と三人倒れた。

チラリと多無橋さんに目を向けると、目を丸めてその倒れた三人を見ている。

もしかしたら「殺れ」との命令はあたしの勘違いなのか。と過るがこの部屋の人間を全て殺しても構わないだろう。

チ、リーン。

鈴を鳴らしながら、逆手に持ったカルドを振り上げる。漸く反撃を始めた。

五秒だったかな。もつとか。それぐらいあれば理解して身体を動かせるだろう。

後ずさったり蹴りあげたり、銃口を向けられたり押さえ込もうとしたり、自分の身を守るうと抵抗を見せた。

チリリリン、チリーン。

引き金を引かせる前に手首を切り落とせばいい。悲鳴をあげる前にバグ・ナウで首を引っ掻く。突き出される腕や脚を避け、切りつける。身を屈め、脚をバネに息をつけて爪痕を残すように裂いて裂いて裂いていく。

呻く者がいればトドメをさす。

チリリリンチリリリン。

抵抗と言う抵抗を無抵抗と化して殺戮をした。今さつき笑ったことを後悔させる暇も与えず。

ほぼ何も考えず。

ほぼ本能的に。

一方的な暴力。

一方的の殺し。

気付いたら真っ赤なスイートルームの出来上がりだ。

十数人のボディガードが死亡。カルドをしまい、髪を掻き上げる。大の男が情けない。子供の女さえ取り押さえられないのか。なんて

呆れも何も感じなく興味もないから、生存している人間を振り返る。ソファに倒れてガクガク震える男に歩み寄る。

チラリともう一度彼らを見た。

秘書さんは青ざめている。多無橋さんは満足げな顔をしていた。

面倒くさいから彼らも殺してしまおうか。なんて刹那に思ったがこれはあくまで仕事だ。しゃんとしよう。

血に濡れたソファの背凭れにコートの上から腰をおろして男を踏みつける。目にするのも面倒くさいから、多無橋さんに目を向けた。多無橋さんは満足げに頷く。

あたしは目も向けず、首にバグ・ナウを突き刺す。抜くだけで大きな穴ができただろう。

仕事完了。

「多無橋さん。もしも、また仕事で指名する気ならば二度とこんなシチュエーションはやめてください。あたしはまだ若い殺し屋です」
目の前にいる多無橋さんにあたしは文句を言った。

「それとも秘書さんと心中するつもりだったんですか？」

「ふふ…まさか。君がちゃんとやってくれると思っていたよ。瞬殺なのは予想外だったがね。若い殺し屋だなんて謙遜だよ、黒猫ちゃん」

笑いながら多無橋さんは言った。謙遜も何も若い殺し屋なのは事実だ。過信しないでもらいたい。

「秘書さん」ビクリと秘書さんは震え上がった。「すみませんがタオルを持ってきてください」

直ぐに秘書さんはバスルームに向かってタオルを持って来てくれる。差し出してくれた手は震えていた。

あまり怖がらせないように礼を言ってタオルで顔を拭き、髪を掻き

上げる。

白いタオルはあっという間に真っ赤になった。

「なるほどね。名は体を表すと言うが：紅色の黒猫か。いい名だ。まるで黒猫のような華麗に歩み紅色に染まる」

ふふ、と多無橋さんは唇を押さえて笑う。

白瑠さんだってこんな酷いことはしない。

玩具にされた気分だ。遊ばれた。腹立たしい。

殺してしまおうか。

また思考がそこまでいった瞬間、扉が蹴り破られた。

表にいたボディーガードが物音を不審に思い入ってきたのかとカルドを掴んだが、そうではない。

そこにいたのは、白瑠さんだった。

首、ではなく頭のない大男を引きずって中に入ってくる。

血塗れの車内の二の舞になったスイートルームに足を踏み込まれると、デジヤヴを感じる。

「んひゃっひゃっひゃ！ずるいなあっーちゃん一人で殺っちゃうなんて」

見回して愉快そうに笑う白瑠さん。

「仕方ないじゃないですか、師匠。強引に連れていかれてそのまま、これですよ」

師匠の部分を強調してあたしは大まかに説明した。

ソファから降りて、白瑠さんに歩み寄る。

「ふうん？」と引きずった男から手を放して、死体達をあの時同様に眺める白瑠さん「いい感じ」とあの時と同じことを言った。

「黒猫ちゃん、師匠なのかい？君」

白瑠さんが頭蓋破壊屋だと知らないのか多無橋さんは訊いた。

「うん。俺の弟子だよ。まだこの子は駆け出しで慣れてない殺し屋だから、こおんな勝手な真似をするのはやめてくれるかなあ？暫くは俺が面倒見なきゃダメだから」

首に白瑠さんの腕が巻き付いたかと思えば、頭に白瑠さんの顎が置かれた。

あたしに合わせてくれたのか、それとも本当に弟子だよ思ってくれて言ったのかはわからない。

師弟……。それでいいのだろうか。なんか微妙だ。

「そうかい？とても、師匠様がお目付け役などしなくても、いい殺し屋だと思うんだがね」

多無橋さんはソファから動かないまま、人のいい笑顔で言う。

「それは師匠である俺が決めることだよ」と師匠は返した。

「でも今君は彼女をほめたよね？」と依頼人。

「この子は初めからいい感じの殺しなんだよ」と師匠。

なんか。よくわからんがあたしを間に話さないでもらいたい。話もあたしの話だけあって、なんか嫌だ。

「あげないよ」

まるで子供が意地悪で言うような台詞を白瑠さんが言う。

「ふふ……それは残念だ」

多無橋さんは目を細めて微笑んで残念そうに言わなかった。

「んで、黒猫ちゃんの今回の報酬は？」

「ああ、それならこれだよ」

やっと白瑠さんの腕から解放され頭をポンポン叩かれた。あ、そっか。報酬忘れてた。

多無橋さんは返り血のついたアタッシュケースを指差す。それを秘書さんがあたしに差し出してきた。

この人。あたしを試すだけに取り相手を呼び出したのではないのか。消してしまうのなんてただのついで。

そうだったのかも知れない。なんて自意識過剰だろうか。あたしはなるべくそれを顔に出さないように受け取った。

白瑠さんが踵を返すのを感じて、あたしも背を向ける。

「また頼むよ、紅色の黒猫ちゃん」

多無橋さんは不吉なことを言った。あたしはピタリと足を止めて振り返る。

「……………機会があれば」

あたしは前同様に軽く頭を下げて、白瑠さんの後に続いて部屋を出た。

廊下を歩いて大袈裟なほど大きな溜め息を溢す。面倒くさい人間に気に入られたものだ。

「あの多無橋さんって人おー」

白瑠さんが口を開く。いつもの笑みだ。不快に思っていたりしないのだろうか。

思っていたところで顔には出さないだろう。いや、不快に感じるような人とは思えない。

「つばちゃんが欲しいみたいだねえ」

「…面白い玩具、として気に入られたみたいツスね」

「んー、だねえ。んひゃひゃ。でもあっげなあい」

愉快そうに笑い声を上げて、白瑠さんはエレベーターに乗り込む。それって。

あたしは足を止める。

白瑠さんもあたしをそうだと認識しているということか？

「つばちゃん？乗らないのお？それともあっちに乗り換える気？」

「え、まさか……」

あたしは首を振り、エレベーターに足を踏み込んだ。

「白瑠さんの方がマシです」

「マシ、ねえ？」

別に構わない。

玩具であるのが、使い捨ての駒であるのが、構わない。

初めから、そう決まっていた。

翌日。

白瑠さんとまた喫茶に向かった。そこにいたのはナタク君と多度倉さんだけだった。

多度倉さんは白瑠さんに任せてあたしはナタク君と接触することにした。

ナタク君は昨日と違って個室席にいた。見付けてノックもせずにあたしはお邪魔する。

「あ、読んでるんだね」

「あ。うん…面白くてね、ずっと読んでた」

なんだお前か、程度の反応をしてナタク君は昨日勧めた漫画に目を戻した。

何冊も積み重なった漫画。

「昨日からずっと読んでたの？」

「まさか。んなわけないだろ」

まさかと思ったが一度は帰宅したらしい。学生服のままなのは変わらないが。

「またサボり？」

「説教でもする？」

「君何歳？」

「16。アンタは？」

「……18」

ナタク君は漫画を読みながら16歳と答えた。意外だった。タメかと思っていたのに。

チラリとナタク君があたしに目を向けて「意外って顔だな」と言った。

あたしは曖昧に口こもる。

「歳の割りには生意気な口調だね」

「年相応だと思っけど、年下嫌いなわけ」

「違うよ。ただ…年下の男の子だとわかんなかっただけ」

「ふうん」とナタク君は興味なさげに漫画の続きを読んだ。

こうしてみると、本当にナタク君は年下っぽい。

睫毛長い。目がおっきい。童顔ってやつかな。

「昨日の夜はいなかったの？」

「うん」と頷いてペラリとページを捲った。

「じゃあ四日前は？」

口調はなるべく自然に、訊いてみた。

ペラリと捲ってから「いた」とナタク君は頷く。

まあ嘘についても意味はないか。

「よく漫画読みながら話せるね、ナタク君」

「普通じゃね」

「あたしは無理。内容が頭に入らないもの、喋りながら読めない。小説だつて不意に他のこと考えちゃってわからなくなっちゃうもん。集中がないんだ」

「へえ。じゃあ俺の場合、集中力があるってことか。頭の仕組みが違っんだ多分」

話ながらもナタク君は読んだ。

「読むと話すのは別じゃん。頭に入るし、話せる。元々、好きだしね、物語」

「ふうん？好きなんだ。漫画や小説とか…映画とか？」

「そう。だから楽しみながら話せるし歌えるし宿題だってできる。ある意味特技だ」

特技、ね。

活かせるかどうかなんてわからないけれど。

見た目は何も興味がないって顔だが。

あたしには真似できない。静かな場所で黙って小説を読んでいたって気付いたら思考していた。

気付いたら考え事。

白瑠さんが隣にいたって考えにふける。それと同じ。ナタク君のそれが特技ならあたしのは悪い癖か。

「椿は色々な思考が働くんだ？それってどんな感じだかわかんないな」

「えっ？あ…そうね…あたしだってナタク君がどんな感じなんて」

そこまで言って、違和感に気付く。あれ。今…。

「あれ…ナタク君…？」

「なに？」

「…今…あたしのこと」

考え事をしていたせいか、なんて呼ばれたかはわからないが。思いつけないが。

今、名乗った名前じゃない方で呼ばれた気がする。
ナタク君は大した反応しない。

「…………… ナタク君。 ナタクって。 名前？それとも……………」

言葉を変更した。

するとナタク君から思わない反応が返ってきた。

口元に笑みが浮かんだ。

初めて見るナタク君の笑み。 漫画本が閉じられ、向かい合う。

「やっぱり裏の人間か、椿」

あたしの本名を口にした。

裏の人間。 裏現実者。

藍さんの言っていた。 那拓だ。

「学校では名前として名乗ってるけど本名は苗字が那拓だ。 昨日は気付いた素振りは見せなかったけど、調べたようだな。 こっちも調べたよ、山本椿、レッドトレインの唯一の生存者」

藍さんが危険人物だと言うのだから、警戒しておくべきだろうか。
白瑠さんと呼ぶべきだろうか。

話を聞きながら思考する。

「ま、調べたと言ってもただ家に返ってニュースを見てたら気付いたただけけど」と那拓は言う。 また顔か。 あたしってそんな覚えられる顔なのだろうか。

「聞ってる？思考中？名乗るのは予想外だったか？」

「…予想外だよ。 仲間からあり得ないって聞いたから警戒なしで来たんだよ」

「まー、そりゃそうだな。昨日は聞き込みでもしてたよっけど……今噂の紅色の黒猫探してるんだろ？」

当たり前だと言わんばかりに那拓は言い図星をつく。それでもとぼけて「どうしてそう思うの？」と返す。

「唯一の生存者で、この前のレッドトレインの現場に近い。紅色の黒猫と絡んでるって考えたら妥当だろ。なんかの情報でここに辿り着いたってとこだな、違う？」

当たっている。なんて言わない。

「君は紅色の黒猫？」

「違うね」

その質問をしたら即答された。

その反応は、あまりない。微動だにしていない。

ここまで当てたのならば、わかるような反応はしないだろう。

「てか、お前がそうなんだろ」

確信をつく口調だった。

反応せず相手の出方を見る。

「唯一の生存者で誘拐されたはずのお前が探してるなんて変じゃん。探すってんなら顔を覚えてはるはずだからこんな回りくどいことしてるはずない。まあ見てないって可能性もなくもないが。被害者なら探さないだろ、よっぼどのバカなら話は別だ。バカじゃないなら。」

お前が本物で偽物を探してる。

違うか？」

得意気でもなくただ変わらない笑みで、那拓は言った。

誤魔化しても無理なようだ。

彼はそう、確信した目をしている。

あたしが紅色の黒猫だと確信している。

「二度目のレッドトレインは偽物。探しだして一体どうするんだ？」

「知りたい？じゃあ手伝ってくれないかな」

「いいよ。ただし」

ただの冗談だったがすんなりと頷かれる。那拓はあたしの方に身を乗り出して五センチの距離まで詰めてきた。

「お連れと仲間には俺のこと内緒にしてくれたら、いいよ」

そう潜めた声で告げてから、椅子に腰を戻す。

思考する。那拓だと発覚したらこの捜査を中断されかねない。言わない。

言わないことで協力を得れるなら……。

だが、彼が偽物かどうかはまだ明らかじゃない。容疑者だ。

「うん」

あたしは頷いた。多度倉さんと同じだ。まだ容疑者だ。

那拓はまた漫画を開いた。

「じゃあまた話に来るよ。連れが飽きてきたみたいだから戻らなき

「や
」
「うん。それまでに読み終わっとくよ」

那拓は見向きもしなかったが気にせずあたしはそこをあとにした。那拓のように頭が良さそうならば、直ぐに見付かりそうだ。彼が犯人ではなければ。

白溜さんのところに行けば、多度倉さんが青ざめていた。多分、大方、白溜さんが暇潰しに遊んでいるのだろう。

「あ、つーちゃん。遅かったねえ？もうたどつちに容疑者きいたよ
お」

たどつち基多度倉さんから助けを求める視線が投げられる。が、華麗に無視。

白溜さんが遊んでいる最中に多度倉さんから聞き出した容疑者の特徴と名前が書かれたメモを見た。

これから絞らなくては。藍さんの情報収集で裏現実者を絞り出すか白溜さんが見付け出すかどれかしか選択はない。

昨日の那拓以外の四人の容疑者は表の人間の情報があつたが、幸樹さんのような裏現実者もいるから容疑者から外せない。

容疑者が増える一方だ。全く、ムカつく偽物だ。アクセス時間はわかつている。その頃に入店した者が犯人だ。それを知ることができない。どうしたものか。

那拓。
生意気な口調で年下でなんか危険人物らしいが頼りになるだろう。知恵をもらおう。

「白瑠さん、先帰ってもいいですよ。あたしもうちちょっと粘って容疑者が来ないか留まります」

「んにゃ？そう？…でも」

「帰りは歩けますから」

「んにゃ、迎えにくるよお電話して」

よっぽど帰りたかったらしくあっさり白瑠さんは腰を上げた。問題ないと思ったのかマジで飽きたのか。どっちかはわからないな。白瑠さんが出ていき、残されたのはあたしと多度倉さん。

「も、もう帰ってもいいか？」

「ん……あと三十分いてくださいよ」

暇でしょ、と言えば多度倉さんは押し黙った。

とりあえず、多度倉さんには容疑者が入店しないか見張ってもらうことにした。

三十分経っても新しい容疑者が来なかったので多度倉さんを解放出ていったのを見て、ナタク君のところに向かおうとしたら、ナタク君を見付けた。

本棚の前だ。

もう読み終えたのか。

「あ、終わった？椿」

「…うん。連れは帰したよ。なんで…コナン？」

ナタク君が手にしていたのは、名探偵コナンだった。

「いや、なんとなく。探偵ごっこだから」

ナタク君は可愛い発想の持ち主だった。お姉さんキュンとしました。

「あ、でも探偵は殺人鬼か。あ、違う殺し屋だっけか？」

「……どっちも正解。探偵ごっこより刑事ごっこだよ」

「どっちも似たようなもの。探偵ごっこの方が面白くない？コナン」

「あたしコナンかよ。君は誰？」

「キッド」

「………ちなみに何故？」

「たまたまサポート」

うん。違う。ナタク君は白瑠さんタイプじゃないさきつと。

「てかキッドの二枚目がいい」とナタク君。

「そっちかい」とツツコミ。

「まあ、トリックなんて相手は仕組んでないと思うから悩むことないか」

「トリック殺人ではないわね」

「殺害方法とかわかってんの？」

「殺害方法？」

思わず聞き返した。

「偽物がどんな手を使ったか。あ、どんな凶器をつかったか、だ」

「それ、知る必要がある？」

「持ち歩いてるかもしれないだろ。ニュースでも凶器は見付かってないって言ってるし。成りすましなら違うことはしない」

なるほど。と年下に納得させられた。凶器か。藍さんに警察のファイルにハッキングしてもらって情報をもらおう。

「調べてみるよ、ありがとう、ナタク君」

「調べたら教えて」

ナタク君はコナンを読み始めた。裏現実者が持ち歩いている武器を確認すればかなり絞り込めるはずだ。

「確認で訊くけど」

ナタク君は漫画を読みながら口を開いた。

「ぼくは容疑者に入ってる？」

その目は漫画の文字を追っている。表情に感情はない。あたしは素直に頷くことにした。

「入っているよ」

「じゃあぼくの話は聞いてないんだ」

「参考にしてるよ、君が犯人だったら無駄足だけど」

彼が犯人だったらとんだ茶番だ。褒め称えてやって頭を撫で回す。

「じゃあぼくが犯人じゃない証拠を教えてやるよ」

ペラペラと捲った漫画を閉じてナタク君は棚に戻した。

「ぼくが那拓だからあり得ない」

そうあたしの目を見て笑みを向けるナタク君。

「ぼくはまだ、人を殺したことがない」

また五センチまでの距離に近付いて囁いた。

人を殺してない。なら白瑠さんの鼻が気付かないのも無理ない。

「よくわかってない顔だ。てかお前写真で見るより童顔だな」と離れたナタク君に言われた。童顔の年下に童顔って言われた…。

「新参者だから仕方ないか。教えてやるからここを出よう」

「えっ？」

「犯人に聞かれて逃げられたら困るだろ。話しやすいし。荷物とるから先出でて」

勝手に決定してしまうナタク君。迷っていれば。

「きゃっ

」

「やっやめてください！」

何かあったのか。女の声と男の声が聞こえる。あたしはそちらに足を向けた。ナタク君も気になったのかついてくる。

「け、警察を呼びますよ！立派な痴漢です！」

「あん？ちげーよお話してんだよなあ？」

昨日ぶつかった店員、たしか猫田さんが必死で睨み付けるのは男。

猫田さんが庇うように背中にいるのはあのギャルの子だった。

彼女が男に痴漢を受けたらしい。露出度の高い超短いミニスカなんてはくからだ。

男は男で酔っているのか頬を赤らめている。

状況的には女の敵から客を守る店員さん、てところか。

では誰をどうすればいいか一目瞭然だな。

男が手を伸ばしたのを見て、動く。視界でナタク君が動こうとした

ように見えたがまあ気にしない。

もしかしたら男の子がやるべきだったかもしれないが、あたしだって女だ。女の敵は許さない。なんだか白瑠さんと藍さんの変態な目付きを思い出したら止まらなくなった。

男の手首を掴み、捻る。捻れば男は背中を向けた。捻ったまま突き出せば片膝をついた、あたしは痛がる男の背中に足を置いて身動き取れなくした。

「警察呼んでください。突きだしてしまえばいいんです」

振り返ると猫田さん達は目を丸めていた。それからあたしに目を向ける。

「す、すごいです！今どうやったんですか!？」

「かつこいいい…」

「いや、だからけいさつ……っ」

何故か感激されてしまった。猫田さんは顔を真っ赤にして、あ、名札を見たら猫田さんでした…。真田さんは呆気に取られている。

はた。と気付く。やばいじゃん。警察とかやばいじゃん。と冷や汗。

猫田さんは早速警察に通報。まずいぞまずい。

「あ。あたし、急用なので！これで！さよならっ」

ぱっと男から手を離して踏みつけて店を出ようとした。

「てめえっ!」

「!」

「きゃああ!」

男が立ち上がり、分厚い雑誌を振り上げた。女の悲鳴。

あたしは振り下ろされた雑誌を避けた。どん、と床が叩かれる。本だって凶器になるのか。否、この場合武器か。とか暢気なことを考えていれば男がまた向かってきた。

ナイフ　はまずいので、がら空きの腹に一発蹴りを入れる。

呻き声のあとに、男は倒れた。加減したのに…。

沈黙のあと。

パチパチパチパチ。

拍手をされた。一人や二人ではない。騒ぎを聞き付けて顔を出した客まで拍手をしている。

まずい。目立ってしまった。

深く帽子を被る。逃げよう。

「逃げないように誰か押さえた方がいいですよ、では！」

そそくさと踵を返して店を出た。そこから早歩きで店から離れる。

はあ…。やべえ。

あの店に入りにくくなっちゃったよ。

重たい溜め息を吐いた。

すると肩に、ぽんっと手を置かれ「うにゃ!？」と思わず震え上がって振り返る。

「お前猫語でも話すのか?だから黒猫なわけ?」

「っ……んなわけないでしょ」

なんだと肩を落とす。ナタク君が追い掛けてきただけだった。警察かと思つた。確認次第警察を殺すところだったぞ。

確実に探されてる山本椿だと気付かれて話し掛けられたら殺すな、うん。

「かつこいいってさ、良かったな」

「良くあるか。はあ…やっちゃまったよ…全く」

ギヤルがあんな格好しているからだ、とブツブツ文句を言うがナタク君からのツッコミはなかった。

「どこ向かって歩いてんの？」

「……………」

適当に歩いてるだけなんだけどな。

そつだ。那拓の話をしてくれるんだっけ。人がいない場所に行こう。

「何処で話したい？」

「……………あ、こつちこつち」

東京は人混みが多くて嫌になる。現地に住むナタク君は少し考えてから方向を変えて歩き出した。

「何処行くの？君の家？」

「まさか。…お前何も聞いてないわけ？」

驚いたようにナタク君は振り返った。

「聞かせてもらえなかった」と白状する。「ふうん」と興味なさげにナタク君は前を向いた。

辿り着いたのは広い広い公園。木々に囲まれた道を歩いて、ナタク君はベンチに座った。人気は少ない。聞かれる心配もないだろう。あたしも隣に座った。

「まずは、お前がなんでぼくを容疑者だと思つかを教えてよ」

「ん？容疑者から外す理由がないから」

「厳しい刑事さんだ。あ、抜け目のない探偵か」

「手伝うつても怪しいからね。君は頭いいしそれくらい楽しんでやりそう」

「正直に言うんだな」

「あたしの嘘なんてバレバレでしょ」

「ぼくは嘘ついてないだろ」

横目でナタク君はあたしを見た。思い返せば、恐らく嘘はついていない。

「まーいいけど。本物の紅色の黒猫に容疑者だと疑われるなんて光荣だ」

演技じみた口調でナタク君は言った。怒らせようとしているのか。まあ、でも不快は感じなかった。

「ぼくは那拓だ。那拓はプライドが高い」

そうナタク君は言い切った。

清々しい程に。他の模範回答は間違いだと言わんばかりに。言い切った。

「プライド？それが容疑者じゃない理由って言うの？」

演技じみた台詞に続いて、呆れてあたしは聞き返す。

「お前躍起になってない？」とナタク君は「そんな怪訝に見るなよ。納得できるように言うからさ」肩を竦めた。

「那拓つてのは、超プライド高い一家みたいなもんなんだ。裏現実での最強の一家、そう信じて疑わない程に自分達、己と一家を誇つてんだ」

ナルシストだな、とナタク君は口元をつり上げて言う。

「皆優秀な裏現実者。裏現実者のスペシャリストって感じかな。殺しはおるか企業だつてお手のもの。那拓を知っているなら…偽者だと思わないんだよ」

「プライドがあるから。だから真似事なんてしない、そう言いたいよね？那拓がプライドを壊すような真似はしない。だから違う」

ナタク君は頷いた。

「那拓は那拓の名前を誇りに思っている。だから紅色の黒猫の名前を名乗って殺しをやるなんてあり得ない。他人の人気を横取りなんて、バカがやることだよ」

本心でナタク君は嘲笑った。犯人を、真似したアイツを、あたしの偽者を、嘲笑う。

「犯人がお前に成り代わろうとしているのならばえサイコヤロ―だ」

「確かに。同感。わかったわ。君を本当に信用して、容疑者から外す」

少しだけ。ほんの刹那だけ考えて、あたしは彼を容疑者から外すことにした。

あたしと同じことを思っている。バカなサイコヤロー。成り代わろうとするのならよっほどの野心家が変態だ。

見たところ本当に嘲笑っているのだから、嘘ではないだろう。

「ありがと、椿。まあ、お前のことだから本心は疑ってるんだろ」「疑ってないよ。警戒はしてるけどね。仲間が那拓は危険人物だつて言ってたからね」

「危険人物？よせよ、ぼくはそいつじゃない」

首を振ってナタク君は嫌そうに笑った。立ち上がってあたしの前に立つ。

「ぼくの兄貴、那拓なたくそつだい爽乃だ。関わることさえ危険だとか言われてるよ。アイツはなりふり構わずぶつた切る。殺意を向けられたり敵だと認識したらすぐぶつた切るんだ。野蛮。そのせいで那拓は危険人物認定さ」

自分の兄を面白くコミカルに話すナタク君は笑った。面白がってるよこの子。

「プライドが高いゆえ。敗けることは恥。だから敵に皆気を張ってる。殺られちゃー一家の恥だからね。そんな奴らばつかだから危険人物。でも、ぼくはさっきも言ったけど殺しはやったことないって」

凄い家に産まれたようだ。

ぶつた切る侍を想像しつつ、両の掌を向けるナタク君を見る。

それからベンチの隅に在るナタク君の荷物を見た。長い棒状の包み。

バッドには見えないから。

「剣道？」

「あ、うん。でも中身は竹刀じゃない」

「……………刀は人を斬るものでしょ」

中身は竹刀と推測したが違う。竹刀じゃないが剣道。ならば真剣。刀。

「剣道を兄貴達に教わっているけど、まだ殺しに使ってないんだって」

「ふうん、じゃあよくよくは君も刀で殺しをやるってこと？」

「そうゆうこと。それで一つ、紅色の黒猫に訊きたいことがあるんだ」

あたしに？と首を傾げる。この話の流れで、あたし、紅色の黒猫に訊きたいことは。ナタク君はまたあたしの隣に腰を下ろした。

「それはあとでいいから、詳細を教えてよ。全面協力するために、どこまでわかっているかどう思ってるかその犯人をどうするか、まです」

協力してくれるのならば。というか多度倉さんのようには騙せないので話すべきだ。

あたしは話すことにした。ニュースを通して初めて知り、仲間を通して情報収集、そして漫画喫茶に辿り着き容疑者探しの最中まで。そして目的も話した。

「とりあえず、だ。容疑者が快樂犯愉快犯かどうかは一先ず考えるのやめろ。出会す人間みーんな疑っちゃあ容疑者が増える一向だ」

相槌を打っていたナタク君は話し終わったあとに自分の意見を言った。もしかしたら命令だったかもしれない。

「疑ってないよ、ちゃんと容疑者じゃない理由があれば外すもの」

「頭にきて殺してやるって目だな」

「…殺してやりたいけど」

「わかっている。偽者の望み通り、自分に成り代わり罪を被ってもらって警察に突き出すんだろ。何の目的かなんて容疑者を少数に絞ってからでいいじゃん」

年下に言いくめられると少々ムカつく。まあ多少は躍起に暴走していたかもしれないから落ち着こうか。

「犯人は犯行直後に入店した客だ。多くはない。その人間をあぶり出すために聞き込みっていう手を使うしかないか…」

口元に指を添えて考えるナタク君の横顔を見ると某イケメン高校生探偵を連想してしまう。うん。今更某とかけちゃったよ。

「……何じろじろみてんの？」

「モテるだろうなあと思って」

「モテないよ」

「うっそおだあ」

「モテたって嬉しくない」

「君って実は女子が嫌い？」

「……なんでそう思うんだよ」

「あたしを逆ナンだと思って怪訝な顔したじゃん」

「……そうだったか？」

あ。とぼけた。

可愛い。可愛いよこの子。

何とも言えない顔が可愛いよこの子。

「何で嫌いなのかにや？」と顔を近づけたら「やめるよキモい」とチヨップを食らった。

「…………お前、彼氏は…？」

少しだけ黙ったあとに、ナタク君が口を開く。彼氏と言うワードで秀介の笑顔が頭に浮いたが無論「いない」と答えた。

「嘘つけ。今いるって顔をしたぞ」

「まさか！この殺人鬼にいるわけないでしょ。あたしに恋人がいると見える？まさかまさか！そんな交際をしつこく迫りくるような裏現実者いないよ！あたしだってモテないし、好きだって熱く告白されてるなんてないさ！」

「……………」

全面否定したのに何故だろう。凄い目で見られたんだけど。あれね。

「ぼくは、恋愛が幻だと思う」

「……………言うね、16才少年」

「この歳だからこそそう思うんだよ」

嫌々そうにナタク君は言い出した。言うのが嫌なら言わないだろうから言い出したならそれほど嫌ではないはずなので、耳を傾けることにする。

「ぼくは男ばかりの兄弟だから、交際に厳しいんだよ。超がつくほど。プライド高い一家だから嫁もそれ相応に鍛えるとかなんとか言

うんだよ」

那拓家の嫁、大変だあ。

「それを抜きにしても、だ。女ってうざくないか？顔がいいだけでキヤーキヤーベタベタ。知りもしないのに告白。うざくね？」

本当に。心底うざったそうにナタク君は言った。それは同性同士の会話じゃないだろうか。あたしを女と解っているのだろうか。つまりはモテてたわけだ。

「そうゆう子はね、恋に恋してるんだ。君が恋人になるっていう幻にね」

あたしは指で額縁をつくり、その中にナタク君を入れた。容易く学園アイドルさながら騒がれるナタク君が想像できる。

「や、め、ろ」とナタク君があたしの手をおろさせた。

「そんなうざがらずに告白してくる女の子を好きになってみたら？」

「何それ。年上の意見？お前は人を好きになったことあるのかよ？」

「ふむ…人ね。うん…まあ、あることはある」

「アバウトだな…嘘だろ」

「いや。嘘ではない。赤裸々に話したくないだけ」

「話せよ、聞いてきたのはお前だろ」

生意気だ。一理あるのでちょっと考える。

「あ、じゃあ名前を教えてよ。下の名前。本名の方」

「学校では奈乃宮なたく。本名は那拓蓮真。なたくれんま蓮にまことの真」

「蓮真君か。いい名前ね」

「そうか？兄貴達は壮大とか雄大とかそんな読みの名前ばつかなのにぼくは練磨。そのせいか厳しいんだよな、特訓」

「練磨か、なるほどふふ」と思わず笑う。「あたしと君は、同じ花の名前が入ってるね」

すると蓮真君は「花？なんの？」と首を傾げた。

「蓮だよ。蓮と椿」

「はすって？」

「睡蓮だよ、蓮の花！知らないの？京都に修学旅行いかなかったわけ？」

「家の事情でいかなかったよ！知らないもんは知らないの！」

やだなあ自分の名前についてるのに。とあたしは文句を洩らして周りを見回した。そんじゃそこらに睡蓮はないか。

「まあいいか。何話したっけ？」

「…お前が人を好きになったことを赤裸々に話すとこ」

「あー、そうそう。中学校の頃。好きな子がいたわけよ」

うん、と蓮真君は頷く。

「でもあたしには既に彼氏がいたの」

「…ちなみに何年？」

「一年」

「早っ」

「小学校から思い続けてた人だったのさ」

「二股」

「いや。ちゃんと別れたよ当時の恋人とは」

自然消滅だったけど、と付け足す。

「それからは好きな彼に一筋。告白しまくったがことごとくフラれました」

「告白しまくった？」

「三、四回」

「ストーリーかよ」

「うん。多分、いや確実に嫌われた。嫌われて避けられた分、傷付いたのに……それでも諦めきれなかった」

蓮真君から相槌はなかった。

「どうしてだか、なんだかわからないけど……好きだった。本当にどうしようもなく好きだったんだなって思う。それが多分……本物の恋だったと、思っているよ。今は殺人鬼で人を好きになる資格がないとか思ってるから……幻とも思えるけどね」

数秒、蓮真君は足元を見つめて黙った。あたしは反応を待つ。赤裸々に話したのに反応なしは嫌だぞ。

「……殺人鬼が恋愛しちゃいけないルールがあんの？」

「ないと思うけど……あたしは恋愛できないと思うんだ。殺人鬼になつた以上」

また秀介のことが頭にちらつく。無理だつてば、と掻き消す。

「……………お前にとって殺しって何だ？」

あたしに顔を向けて蓮真君は言った。

「何いきなり」

「紅色の黒猫であるお前に訊きたいこと」

それが？

殺しとは何かが訊きたいのか？

「ぼくは殺しをやったことないから。訊きたいんだ。どうなのかなって。椿と同じでぼくも表同様の生活を送ったからわからない。つうか殺しのやり方を教わりたいぐらいだよ、噂の紅色の黒猫にね」

片足の足首を握って体の向きまであたしに向けて真剣な眼差しでそう言った。

「殺しってどんな感じ？」

「そんなこと言われても…。どうして車内にいた人間を殺戮したかを訊かれた時より答えにくいよ」

「そんなこと訊いたバカがいるんだ」

「……うん。彼しかそんな質問してこなかったよ」

やっぱり秀介だけ違うのか。

殺しの理由はない。無差別だから理由はない。そう思うのだろうか
他者は。

「参考にならないと思うよ。師匠…てかあたしといたお兄ちゃんが言うに…あたしは殺しをしなきゃいけない人間、なの」

「殺人衝動があるってこと？」

「まあそんな感じ。2週間じつとしてただけで人が殺したくてうずうずするの」

こんなこと言っても伝わらないだろう。蓮真君は理解しがたい顔を

した。或いは想像しているのかもしれない。

「禁断衝動？ニコチン中毒が煙草吸いたくてたまらなくなる感じ？」
「うんまあ、例えはそんな感じだね。あたしの場合は殺戮中毒というか…なんというか」

「じゃあ殺したら快楽を得るんだ？」

「快楽……てほどでもないよ。まあ…一方向的な殺しで多少は優越感を感じているかもしれない」

快楽？いやいやそんなのない。なかったと思う。

優越感と同時に呆れも感じたはずだ。人間の儚さ。

「じゃあ何を感じるんだよ？」

「……何も感じない」

蓮真君は納得できないという表情で見つめてきた。あたしは秀介に言ったように感情のない声で答える。

「最初の殺し、つまり最初の血塗れ電車ではね、何にも感じなかった。罪悪感は何も。殺戮衝動にかられて皆殺しにした。二回目は…駅で知り合いの嫌いな不良を殺した……うん。そうだな…その時は……そう。部屋が散らかつてるとする、それを掃除したら綺麗になってスッキリするでしょ？それみたいな感じ」

「お前にとつて掃除みたいなもんなのか？」

「そうかもしれないしそうじゃないかもしれない。ある殺し屋は死体を作品と呼ぶし、ある殺し屋は頭を粉碎させるのが趣味。十人十色かな。人それぞれだと思うよ。少なくともお兄ちゃんとあたしは殺すことに罪悪感を感じない、殺し続けなきゃ生きてけないの。そのところ君とは違うから君が殺しをやったときどう思うかなんてあたしはわからないよ」

殺して感じることに ついてこうも語るなんて変なのとか思いつつし
っかりと言い聞かせるように告げた。

「殺し屋になるなら罪悪感なんて持たないだろうけど。裏現実者だ
から殺人は当然だからぼくは大丈夫、て言うなら殺しを教えるよ。
教えるって言っても駆け出しの殺し屋で64人を殺した殺戮者だか
ら教えるものなんてないだろうけど」

「十分じゃん」と蓮真君にツッコミを入れられた。

「教えて。紅色の黒猫の殺戮ってやつをさ」

「殺戮をやりたいの？」

「いや、向かってきた敵にトドメをさすときに殺るから」

ふうん。と少し考える。

「じゃあこうしよう。君はあたしに剣道を教えて。あたしは蓮真君
に殺しを教える」

「剣道習いたいわけ？」と刀に視線を送る蓮真君。あたしはすんな
り頷いた。

「あたしは今のところ短剣ばっかだからね。この前刀相手に苦戦し
たから剣道を教わりたいてって思ってたところなの」

「ふうん、そっか。いいよ、大金よりはずっといい。交渉成立だな」

ニツと口元をつり上げてまた蓮真君は立ち上がった、背伸びした。

その彼に「蓮真君。一つウザいこと言わせてもらおうよ」と言う。蓮
真君は小首を傾げて少しだけ身構えた。

「できるなら殺しはやめなさい」

一言だけ。あたしはそう告げた。

あたしの言葉が理解できないのか、何かを思考中なのか、蓮真君から反応はない。

「殺しをやったことない君が羨ましいと思ったから、言ったただけよ。殺しより大量殺戮は尚更やめてね」

あたしも腰をあげる。

「…殺戮衝動にかられなきゃね」と蓮真君は軽口を言った。あたしは調子を合わせて笑って返す。

「年上の忠告は聞いておくよ。アド交換しよう」

「あー…。ごめん。このケイタイあたしのじゃないんだ。アドレスだけ教えて、買ったら連絡する」

携帯電話を開いた蓮真君からアドレスをメモった紙を貰う。自分の携帯電話を買わなくては。幸樹さんや藍さんに頼めば購入を手伝ってくれるだろう。

少して会話してから別れた。迎えにきてくれたのは藍さん。藍さんの紺のワゴンで帰宅した。

藍さんはなんだかご機嫌だった。

そのわけは、蓮真君の素性がわかったからだ。差し出されたパソコンの画面には蓮真君の写真と名前生年月日がつらづらと載っていた。名前は、奈乃宮なたく。表の蓮真君の名前だ。

那拓じゃないと判り、藍さんは心底安心した笑顔で笑いかけた。ちよっと。罪悪感。

探偵の黒猫（前書き）

久々更新です。

蓮真君と椿ちゃんを仲良く遊ばせたかったのですが、ちょっと物足りなかつたかなあ。

探偵の黒猫

探偵ごっこ。追い駆けっこ。
足跡を追うのは趣味じゃない。

「ぐふふー！つーのお嬢のエプロン！」
「んひゃひゃあ可愛いー！」

二人の視線を受けつつあたしは料理を作った。幸樹さんは例の助っ人を迎えにいつていて今夜は帰ってこれないらしい。電話で今の状況を報告して、それからレシピを教えてもらい夕食作り。隠し事の罪悪感から、やむを得ず白瑠さんと藍さんに差し出されたこの前のメイド服基エプロンドレスを着て作った。

藍さんの分も作るのでちよつと緊張したが、なんとか上手くできて好評を受けた。

良かった。あたしはエプロンドレスのまま一緒に食事を摂る。なんか二度目だと慣れたぞエプロンドレス。違和感ないよ。

「んーふ、ツボだね！料理ができる椿お嬢！エプロンドレスたまんないぐふふっ」

「毒盛ればよかった…」

「エプロン、つーちゃん、かわいいー」

「お触りはだめですってば！ー！」

藍さんには失敗作を食べさせればよかったと呟いていれば隣に座る

白瑠さんがスカートを掴まんだので叩く。
油断も隙もあつたもんじゃない。

「明日からあたし一人で喫茶に入りますから。白瑠さん来なくて結構ですよ」

「え？今ので怒った？俺のこと嫌いになつた？」

「いや…セクハラとこれとは別です」

「女の子はみーんな俺を足に使うんだね！」

「そんなに女の子に足に使われた経験があるんですか…」

「いやないよ」

キツパリと首を振られた。冗談に付き合ってしまったじゃないか。いるわけないだろう頭蓋破壊屋を足に使うような女子。

そういえば学校の先輩を含む女子は足と金のある男がいれば交際するとか言っていたな。足とは車とかバイク。男は知らないが女は経済力と足がないと交際してやらないらしい。あたしの周りの女子の話。

あたしは別にあつてもなくても…。付き合いません。

「ラトアが来るから俺不要かぁー。ラトアは多分明日の夜に来るんじゃないかなあ」

「ラトア？」

「幸樹が迎えにいった鼻のいいやつ」

藍さんが答えてくれた。

白瑠さんより鼻のいい、幸樹さんが迎えにいった人物が、ラトア。外国人…かな。裏現実者は世界中にいるよね、まあ。

「多分夜だけどねえ」と白瑠さんは平らげた。

くすぐったくって目を覚ます。
しまった。

一夜を明かしてしまった。

夕食後に三人で容疑者絞りをしていたのだ。そのまま疲れて眠ってしまったらしい。あたしは藍さんの膝の上に頭を置いて、白溜さんはあたしの足の間に。ソファの下で座って寝てやがる。太ももの間に白溜さんの頭。

際どい。

頭に乗せられている藍さんの手をゆっくり退けて起き上がる。

「ひゃっ」

起き上がったら白溜さんが動き、思わず声が漏れた。
なんだ。ひゃっ、って。こらこらあたししっかり。

いくらミニスカで露出した肌に白溜さんがすりよってるからって。

感じた声を出すんじゃない。全身性感帯か。

どきどきどきどきと乱れた心臓を落ち着かせながらも白溜さんの頭を押さえる。

この人まさか寝ている間に触っていないだろうな。首をへし折ろうか。

そう思いつつ白溜さんから脱出。

しかし。本当になにもされていないだろうな、と身体中を探る。エプロンドレスは乱れていない。

昨日は警戒して入れなかつたのでお風呂へ。

着替え中に見ちゃった、的なアクシデントなんかで裸を見られたくはない。どこの同居ラブコメディだ。

服を脱いで浴室へ。

シャワーの水を出して髪身体を洗う。

昨日は多度倉さんが調べた容疑者を洗いかなりの数まで絞り出せた。それから蓮真君の言っていた凶器を調べてもらった。少なくとも力ツターではない刃物で殺されたらしい。刃渡り約10センチ以上。ナイフか包丁と推定されているそうだ。

カッターではなくナイフか包丁。包丁？と首を傾げてしまう。裏現実者が包丁。微妙だ。

当然と言えば当然か。

あたしがカッターで殺した事実を知るのは白瑠さん達ぐらいだ。

警察もナイフだと推定して発表したのだから、カッターで殺つてはいないだろう。

まずは犯行直後に来店した客を探しだし、その中から裏現実者を見つけ、ナイフを持っているかを知り、犯行する理由があるかを調べ、犯人と確定してからケジメをつけさせる。

シャアアアと水を被りつつ考えていたのだが、冷静になったのか、かなり、かなりかなり面倒くさい。

“ まずは犯行直後に来店した客を探しだす ” のがそもそも面倒なのだ。多度倉さんはその日の夜にいた客を覚えていて限り教えてくれるだけだ。そこから聞き込みをする。その聞き込みが嫌なのだ。刑事じゃあるまいし。そう。あれだよあれ。

藍さんと白瑠さんと同じで。飽きた。飽きたのだ。

篠塚さんを尊敬します。

あたしも探偵には向いていないかもしれない。かといって怪盗のように手の込んだ予告を作るような頭脳もない。あたしが向いているのは殺人鬼だ。

そうだ。そうそう。あたしは刑事でも探偵でもないのだ。殺人鬼が模倣犯を探している。それだけだ。

なら真似事はやめようか。

追ってきたのはあつちだ。

憧れからか人気や名前を奪いたくてやったかはわからないが。あたしがまた、本物の紅色の黒猫が大きなことを仕出かせばまたきつと

便乗してくるはずだ。

こつちが追い掛けてどうする。足跡を追っているのはあっち。こつちが追ってどうするんだ。

追わせて追わせて、あぶり出してやる。

その為には何が効果的か

「つーばちゃん？生きてるー？」

白瑠さんの声にビクリと震え上がり振り返る。素早くドアのノブを掴む。同時にノブが動いて開こうとしたのでそれを阻止する。

「な、なんですかっ！」

「いや、長いなあと思って。生きてる？」

「話してるじゃないですか生きてますよ！」

「お腹空いたあ」

「…朝飯作りますから出てってください」

苛立ちを押さえつつも白瑠さんが出ていくのを待った。溜め息を溢して浴室から出て着替える。

「……………いつちよ、やってみるか」

ぼそりと呟いた。

短パンにあのベルトを巻き、カルドを隠すようにシャツを着る。

ジャケットに腕を通せば完璧に隠れた。問題は抜きにくいという点だが、ジャケットの裏にナイフを四本入れたのでそこで補おう。腕にも短剣を入れた。

白と黒のニーソにブーツをナイフを仕込み、準備完了。

「椿お嬢…？なんか…なんか企んでるの？」

「え。何が？」

自分の部屋で準備していたらいつの間にかいた藍さんに言われた。
ギクリ。

「いや……今日はやけに気合い入ってると思って。最初から気合い入ってたけどー、なんか準備万端で」

「……ううん。一人でいくから万が一の為に入れてるだけですよ」
ベッドに散乱した短剣の一つを藍さんが手にする。あたしがそう答えると「あっそうか」と納得してくれた。

「コートでも大量のナイフ仕込んでたけどすごい数だね」

「白瑠さんからナイフをなるべく多く持った方がいいと教わったので。ナイフは投げつけることができますから。あたしは素手で相手をどうかできる力がないので」

武器でなんとかしなくちゃいけない。逆に言えば武器がなければ非力で何もできやしない。非力は怖いものだ。

「そうかな。椿お嬢はライフル相手に素手だったじゃん」

「いや、素手じゃありませんよ。ライフルを蹴っただけですよ。本当に丸腰ならじたばたぐらいしかできません」

ナイフを片付けていく。

素手だけでも何とかできるよに教わるうか。

肘を打ち込んだり蹴り飛ばしたりはあたしのできる素手の暴力だ。
合気道習いたいな。

白瑠さんのバイクで送ってもらい、喫茶に入った。入った直後に。

「あ、昨日のヒーローさん！」

キラキラした目で猫山さんが駆け寄った。ヒーロー？てかこの人は毎日働いているのか。

「昨日はありがとうございました！」

「え？いえ……別に」

「かなみさん来てますよ！こちらです！」

騒ぎを起こしたことを忘れてた。あのギャルは容疑者から外れてるから話したくないのになあ。

あたしに話しかけようとして停止している多度倉さんに待つよう合図する。すると多度倉さんは掌を向けてきた。なんだ？

掌……？五本？容疑者五人？

新たな容疑者五人がいるのか！

さっさと聞き込みをしなきゃいけないのに……。ギャルと話してる場合じゃねえし。

と思ったがギャルと一緒に蓮真君がいた。

「あっ」

「よおっ、ヒーロー」

手を上げて蓮真君が挨拶してきた。……よお。何やってんだ君。女の子嫌いじゃないのか。

「昨日はマジありがとう！てかちよーかつこよかった！マジ尊敬！」

「いえ……尊敬しなくていいです」

迷惑です。

深々と頭を下げられたが全然嬉しくない。

「尊敬にあたいしますって！あつドリンクこの私が奢らせていただきますのでささっ！寛ぎください！」

ギヤルに続いて猫山さんまで大きな声であたしの背中を押して椅子に座らせた。

この二人マナーを知らないのだろうか。他の客が迷惑そうに見ていることに気付かないのだろうか。

中には昨日のヒーローだ、とか言ってるけど知らない人が殆どだろう。

正当防衛しただけなのにな。

猫山さんが席を離れてギヤルがあたしの隣に座る。その反対側は蓮真君。

「それで、何か習ってるわけ？柔道とか」

ギヤルは声量を下げずに話し続けた。こうゆう客って本当に迷惑だな。

「いや、違うよ……」迷惑だと思いつつもあたしは便乗することにした。

「お兄ちゃんにある程度の護身術を教えてもらってるの。ほら、最近物騒でしょ？レッドトレイン」

反応は、感じ取れた。

多分、恐怖かな。通勤や通学の人間達はビクビクしているだろう。だが、近所が現場であつても電車を回避しない人間は少なくない。所詮は他人事なのだ。

「あれマジイカれてるよなあ」

悪かったなケバギャル。

「大量殺人とかマジありえねえって」

「確かに。日本じゃあかなり珍しい最悪な事件だよな」

ギャルに蓮真君が相槌を打った。視線はあたしだ。何を考えているのか読み取るうとしているみたいに見てくる。追うより。

追い掛けられる派。

なんだよねあたし。

「知ってる？最初のレッドトレインって、たった三センチのカッターで全員の首を切ったんだって」

変わらぬ声量であたしは告げた。

「えっ！？なにそれまじでえ？」とギャルが大袈裟なぐらいの反応をする。いやそれくらいが普通なのだろうか。

周りの反応に気を配りながら「うん、まじで」とあたしは頷く。

「殺人をすごいとか言うのもあれだけどカッターで56人も……すごいよねえ」

「てかこわっ！人間じゃねえよそいつ！」

目の前にいるわい。

「二回目は何故か知らないけど、ナイフでめったざしだって。どうしてだろっね」

「どっしってっ？」

ドリンクを持ってきた猫山さんが聞き返す。

「56人。満員電車の乗客に比べたら少ないけど、それでもあり得ない数だよな。そのあとに不良が駅で殺されて警察を挑発したみたいなのに……終電で十数人しか殺さなかったのはなんでかなって」

その発言こそ挑発。

あたしは続ける。

「もしかしたら犯人、そのうち自首するかもね」

「え、なんでそう思うんですか？」

「殺人するのに疲れたんじゃないかと思うんだあたしは。カッターからナイフに、50から10だよ？突発的に、してがしちゃった、犯人は、殺戮しながらも、ビビってきたのかもって」

そう思えない？

あたしは帽子を深く被ったまま笑いかける。感じ取れる耳をすます気配。五人の裏現実者の反応。

「あー、確かに。そう感じるな。まじで自首するかもな」

蓮真君が話に合わせて頷いた。あたしがしたいことに気付いたのかな。否、ただ合わせているだけだろう。

「普通の人間なら、突発的に殺ったんなら、罪悪感に押し潰されて自首してもおかしくない」

「でしょー？」

「じゃあ安心して電車乗れるじゃん」

「うん。そうだね。これもあくまであたしの意見だけど、もしも突発的じゃなくて殺りたくて殺った快樂犯なら、犯人は人間じゃない

ね。貴女の言った通り。人間以下のカスだよ」

冷たく、淡々と、躊躇なく吐き出した。これは一般論のはずなのに、空気は凍り付いたように感じた。

裏現実者が反応しているのは間違いないだろう。

沈黙。

人間以下のカスはあまりにも冷酷すぎただろうか。

まあ、この挑発に乗ってくれるのならばそれでいいのだが。どう出るか。

「ノー」

「おにゃわさっ！！？」

凄い悲鳴にギョツとあたし達三人は顔を向けた。悲鳴は猫山さん。

「なーにサボってやがんだ、猫山」

「て、て店長！いや…えっと、違うんですよ、ちゃんと店長に言われた通りにヒーロー様をおもてなししてるんですよ！」

肩を叩いた店長に、猫山はビクビクと震えて後退り。店長の男は多度倉さんと同じくらいの長身の細い目をしている。その目があたしに向けられた。

「あ、君が昨日のヒーロー？」

「いえ。そんな風に呼ばれるようなことしていませんよ」

「周りは大袈裟な反応してないさ、見たまま感じたままを述べてるからね。結局は周りが評価を決めるんだ」

細目店長はズイツと顔を近付けてそう言った。なんかムカつくな。人の評価は所詮、他人が決めるのか。

うわっ。迷惑に煙を上げる噂を思い出すぜ。畜生。

「それから、昨日のことは感謝しますが……店内はお静かに、ね？」
「……はい」

あたしは静かに頷く。

なんだ。この男。

わざと。否。なんだか威圧感をかけられている感じがする。

この男も、まさか…。

ならば白瑠さんが言っていたあれも理解できる。

この店自体、血の匂いがする。

店長が、裏現実者。

俯いて後悔する。白瑠さんに同行してもらうべきだった。

白瑠さんがいるとき、一度もこの店長を見掛けていない。

こいつは挑発に乗ったかもしれない。

呼ぶか？否、まだこいつが犯人と決まったわけではない。落ち着け。

「よし。漫画よもおと」なるべく自然にあたしはドリンクを片手に

本棚に向かった。その途中で多度倉さんに捕まり個室席に引っ張り

こまれる。

「お前なにやってんだ！」なるべく潜めた声で多度倉さんは問い詰める。

「なんのことですか」とあたしはとぼけた。

「紅色の黒猫に喧嘩を売ってるのか!？」

「…まさか。おこがましい」

この反応。多度倉さんは外れだな。本当にびびった様子だ。

たかが紅色の黒猫で青ざめることないだろう。

あ。紅色の黒猫はあたしか。

複雑だ。

てかその紅色ほんものの黒猫の頭を鷲掴みにするんじゃない。
あたしは多度倉さんの手を振り払った。不快だ。

「それより……あの店長はご存知ですか？」

「は……？ いや、知らんが」

多度倉さんは知らない。藍さんに調べてもらおう。
先ずは今ここにいる容疑者の聞き込みだ。待てよ。不審に思われたらまずい。

ここは多度倉さんに頼もう。接触してアリバイを。と言ったらあからさまに嫌な顔をされた。

「……頼みますよ」

「なんでオレがそこまでやらな」

多度倉さんの台詞は途切れた。途切れざえるおえなかったのだ。

あたしがナイフを心臓を狙い突き立てたのだから。

ナイフを突き立てた手に、多度倉さんの鼓動を感じる。多度倉さんは凍り付いて、息を止めた。

「頼みますよ……多度倉さん」

あたしは、小さく聴こえるように囁く。

最早頼んではない。

彼に選択肢を与えてはいない。

弱者は強者に喰われるのだ。

多度倉さんの鼓動が速くなる。あたしはにつこり、と笑いかけた。

白瑠さんに似た上っ面の笑み。裏現実に入る前から上辺の笑みは作り慣れている。

「じゃあ、頼みました」

もう一度笑いかけてその個室から出ようとした。

「ま、待て」

「…はい？」

「お前……何者だよ？」

呼び止められて、振り返る。

「……ここにいる紅色の黒猫を見付けたら…教えてあげますよ」

冷たく、ほぼ無感情にあたしは告げて、個室席を出た。

「なーたーく、くん」

漫画を探していたら蓮真君を見付けて、肩を叩く。

「行動するときは予め言ってくれよ」

「そつする。一度出ない？」

「え？」

蓮真君の了解を得ずにあたしは、彼の手を引いて出口に向かった。

「あれ？もうお帰りですか、ヒーローさん」

「あ、いえ。ちょっとデート。多分また来ます。ドリンクありがとうございました」

出る直前に店長に話し掛けられた。然り気無く、名札を見る。田村。偽名もあり得るか。

気さくに交わして軽い会釈のあとに店を出た。

「んだよ、デートつて。ぼく荷物が放置なんだけど」

「貴重品持つてるならいいじゃん」

「刀を放置なんだけど」

まあ平気っしょ、とあたしは手を引いていく。蓮真君は振り払わな
いままついてきてくれた。

「で。どこいくんだ？」

「駅。仲間にね、駅に向かう道に在る監視カメラを調べてくれって
頼まれたの」

「ふうん。で、なんでぼくまで？」

「え？だめ？」

「……………お前つて、気分屋？今日はやけに機嫌いいな」

怪訝に蓮真君は首を傾げた。機嫌がいい？そうかな。
普通だと思っけど。

「あ、いや。違う。お前、機嫌が悪い。わざと明るく笑ってる」

「ふうう。多分そうだな」

あたしは頷いてコンビニの前のゴミ箱に持っていたドリンクを放り
投げた。

「おい」と蓮真君。「人に貰ったものを捨てるのが趣味なのか？お
前」少し怒ったように聞いた。礼儀正しい子らしい。

「感謝するけど。あの店長、怪しいんだよ。多分裏だ。威圧感感じ
なかった？そんな人間から貰った物を飲めないわ。蓮真君も戻った
ら飲まない方がいいよ、いない間に盛られてるかもね」

それを聞いて蓮真君は苦い顔をした。

「それはお前が挑発発言をしたからだろうが」

「便乗したくせにい」

「乗り掛かった船だから……。何考えてんだよ？あんなこと言って」

「……追い掛けるのに、疲れちゃったんだよねえ」

独り言のように呟く。

聞き取れなかったのか、蓮真君はまた首を傾げた。

「あ。待てよ」

「ん？」

繋いでいた手を振りほどいて、蓮真君は通り過ぎたコンビニに引き返していった。

あたしは立ち尽くして待つ。暇潰しに監視カメラを探す。

コンビニにはチェック済みとか言ってたな藍さん。

「ほら」と言う声とともに、頬に冷たい物が触れて思わず悲鳴を上げて震えた。

「また猫語かよ、黒猫。疲れた時には、甘いもの」

あたしの反応を見て蓮真君は笑い、コーラとチョコをくれた。

「…せめてカロリー0のコーラにしてよね」

「うわぁ生意気。返せよ」

「買うよ。いくらだった？」

「0円でしたのでお構い無く」

「いや、真面目な話いくらだったの？」

チョコをポケットにしまいかわりに財布を取り出すが、蓮真君は茶化して自分用に買ったコーラを飲んだ。

「え、ちよつと。いくらですか」と蓮真君の袖を摘まむ。

「これくらい喜んで貰うだろ？女子は」と蓮真君はうつとうしそつに振り返った。

「いやいや、君学生じゃん。年下にこんなこと望みませんって」

「あーそーかい、殺し屋は金がたんまりあるってか」

「うん。アタツシユケース2つ分の万札の山があるぜ」

蓮真君が沈黙してしまった。

「万札なくても年下に…ううん、年下じゃなくてもね、奢られるの苦手なんだよ…」

蓮真君だけじゃない。白瑠さんや幸樹さん、秀介にも奢られたり買ってもらったりするとなんか悪い気がする。迷惑かけていて、気遣ってしまふ。

嫌なんだよな。

「じゃあ今回だけにする」

説明しても蓮真君は受け取ってはくれなかった。畜生。覚えてろよ。今度この二点を買って返してやるからな！

「で、何の話だっけ？」

「椿の赤裸々恋愛武勇伝」

「あーそうそう………て、違っただろ」

絶対違うだろ。あれ？違うよね？

「あ、この辺詳しい？蓮真君」

「まー…フラフラするから詳しいっちゃー詳しい」

「ここ真っ直ぐの右にいつてまた真っ直ぐの、でいく道での監視カメラは確認済みなんだ。他の道教えてくれる？」

それならと、信号の少ない裏道を知っていると蓮真君は右に折れて歩き出した。

人気のない一方通行の道を真っ直ぐいき、左に曲がってまた右に曲がっていく。

「監視カメラは期待できないな…この道を犯人も使ったなら見つからない」

監視カメラが全く持って見当たらない。早々あるものでもないか。希望は薄い。

「駅は？田舎はともかく駅ならあるだろう」

「だったら警察が発表してるよ。偽者も線路を歩いたんだろうね」

白瑠さんも線路から出ていったと言っていた。探すだけ無駄かもしれない。

暫くして「あれ、本当？」思い出したように蓮真君が問う。

「三センチのカッター」

「あ、まじまじ。デザインカッターっていつて100均に売ってるカッターとは違うやつ。表だったんだから刃渡り10センチのナイフを持つてるわけないっしょ」

「ナイフでも、56人はびっくりだろ。お前細身じゃん」

「止せよお細身とかお世辞は。あれだよ、火事場の馬鹿力。あ、いや…単にいきなり殺戮が始まったことに驚いて抵抗すらできなかったんだよきつと」

覚えてないから曖昧な言葉になって、蓮真君が首を傾げたが追及はしてこなかった。

「あれで挑発してあぶり出そうって魂胆か？」

にや、とあの笑みを浮かべて顔を近付ける。これは蓮真君の癖だろうか。女の子にこんなことをしているからウザいほどモテるのだぞいやあ、あたしは幸せだ。イケメンな知り合いばかりできる。裏なのはまあ、気にしない方向で。アイドンケア。

「見事乗ってくれたよ」

あたしは笑みを返して頷く。とある一つの気配、視線が、あたし達についてきてる。

安い挑発に乗って、殺しにきたのだろう。

「おい…ぼくが手ぶらなのに一人で決着つけるつもりか？」

「悪い？」

怪訝に眉間を寄せる蓮真君はあたしの手を取ってまた一緒に歩く。ちよつと緊張した様子。

「大丈夫だよ、あたしが相手する。君は案内してくればいい、相手が動くような人気ない道にね」

「ぼくはガイドかよ…」

さて。一体誰だ？

あの店長か。五人の裏現実者の誰かか。

振り返られないので誰かはわからないが、ついてきてるのは間違いない。

蓮真君の案内で人気のない道へといく。手を握ったまま、どんと人と人混みを離れて入り組んだ道へと入った。

そろそろ向かって来てもおかしくないと言つのに、何故後ろの気配は一定の距離を保ったままだ。

なんだ？

殺しに来たのではないのか？

耐えきれず振り返った。

見えたのは、一人の男。見たことがない。店長でも店にいたどの人間でもなかった。

誰だ？疑問が浮かんだと同時に前方に似たような気配を感じて、止まる。

蓮真君を引き留めた。

それを合図に、気配を、視線をぶつけてきた男達が、得物を取り出す。銃だ。サイレンサー付き。

「ちっ！」

逃げ道を探す。

蓮真君も状況を理解して逃げ道を探した。「こっちだ！」と蓮真君が手を引っ張り、道を走り出す。

男達は走って追い掛けてきた。

「なんだよあいつら！」

「刺客かな！知らん！本人に訊くよ！」

「ならなんで逃げんだよ！？三人じゃん」

「バカ！三人じゃないから厄介なんだよ！」

逃げていく前方から、また二人。

「それにあたし若い殺し屋だから？裏現実者相手に五人はなあ」

ザツと靴の底でブレーキをかけて止まり軽口を叩く。この展開は予想外だった。

「バカなのはお前じゃんか！どうしてくれんだよ怪我したら」

「あははっ乗りかかった船じゃない」

少しならず罪悪感。だが浸っている場合ではない。

笑えない状況だ。

挟まれた。畜生。

銃相手に挟まれないようこの入り組んだ道から脱出しようと思ったのだが先回りされた。

蓮真君がいる手前、捨て身で殺戮できない。バグ・ナウもないし、弾丸を避けるなんて芸当は無理だ。

蜂の巣にされないためには。

「樁！」

「屋上まで死ぬ気で走れ！」

横にあった建物の裏口のドアノブを切り落として蹴り破る。階段を駆け上るように指示。

同時に弾丸が飛び交ってきた。

建物に入り階段を見付けて駆け上がる。当然、殺すのが目的の刺客も追ってきた。

弾丸を避けるべく走る。駆け上がる。

「ぶはっ、疲れた！」

「殺されるって言うのに酷い台詞だな」

屋上に出てやっと休むことが出来て一時の休息。階段を駆け上がったもうへとへとだ。

地べたに座り込んだあたしに蓮真君が「で。どうすんだよ？」息を整えながら問う。

「君は隠れて。そうだなあ…殺戮を見せてあげるよ」

「息切れでよく言うよ」

深く深呼吸。乱れた息がだいたい整った。

「あたしの特技だからね」とあたしはカルドとナイフを構える。「君は引っ込んでなさい」促せば丸腰の蓮真君はなるべく離れた。

扉が蹴り破られる。

視界に入った銃口にナイフを投げつければ破壊成功。もう一丁も破壊。弾丸が腕を掠めてきた。

そう言えば明るいところで銃を相手にするのは初めてか。

銃はあと三丁。

どうやら刺客達は銃しか持っていなかったらしい。

素手で立ち向かってきた。

振り上げられる拳を右に身体を動かして避けて無防備な脇の下を切り裂く。そして晒した背中を叩き付けるように蹴る。

一人、と。

もう一人が怯まず向かってきた。カルドを構えて気付く。

銃口が向けられている。

屈んで避けた。

弾丸の嵐。面倒くさいな。

弾倉の傷は地味に痛いんだよ。当たらないように銃口を確認。銃を潰さなきゃ。

秀介の前で相手した裏現実者よりは腕がいいのは確かだ。

カルドを逆手に持ち変え、的が定まらないようにジグザグに移動しながら銃を持つ三人に向かう。三丁だけあつて際どい。

思えばあたしは障害物があるフィールドが得意のでは？屋上に変えず狭い道の方が有利だったかもしれない。

蓮真君を巻き込んだあたしの自業自得なのだな。

二丁の銃を切り裂く事に成功した。最後の銃があたしの頭に狙いをつける。

それを避けるため後退。

「そいつは任せた！蓮真君！」

「はあああ!？」

茅の外だった蓮真君にふればギョツとされた。銃を持った男が息を殺していた蓮真君に気付き、銃を向ける。あたしはつかさず腕から出した短剣を投げ付ける。銃は短剣とともに壁に突き刺さった。

「冗談だよ」

軽い調子で言えば焦っていた蓮真君にムツと睨まれたが今は構ってられない。

「丸腰でまだやります？」

立ち上がって逃げる素振りを見せない男四人を見る。

「まあ、逃がしませんか。：貴方方が紅色の黒猫でしょうか？」

確認で訊いたがその反応はバカにした様子だった。つまりは違う。つまりはそうではない。

「殺し屋、かな？依頼されて殺しに来た、そうですね？」
「答えるつもりは」

ない。と一人が言い飛び掛かる。下がってそれをあたしは避けた。
依頼されて、が妥当。

どちらにせよ、偽者ではないなら殺しても構わないだろう。一人だけを残してあとは殺戮。

そうしようとしたが。

横からもう一人がカルドを蹴り飛ばされ、武器が取られた。予想しなかった展開に隙だらけなあたしの腹に拳が打ち込まれる。

「ぐはっ！！」

鳩尾。なんとか最小限までダメージを減らそうと身構えたが、痛い。あたしは倒れた。

「椿！」とあたしを呼んだ蓮真君にも刺客の手が伸びる。

まずい。巻き込んで誰かが犠牲になるなんて御免だ。

ブーツからナイフを取り出し、振り下ろされた足を避けるために転がって起き上がる。

膝をついたまま、ナイフを左手に、構えた。

どちらから殺そう。刹那迷って鳩尾しやがった男に決めて踏み込む。人殺しの医者直伝の人間の急所を突き刺し、戦闘不能にする。あと三人。

今度は自分から向かっていく。

顔面に向かってくる拳を避け、その腕を切りつけ、頸動脈に突き立てる。

あと二人。

蓮真君は一人と揉み合っていた。流石は鍛えられているだけあって戦い合っている。

腹痛い。目の前のコイツを殺して、蓮真君が相手しているヤツに聞けばいいか。

右手に持ち変え、頸動脈を狙って振ったが、掴まれ止められた。またナイフを取られるのは勘弁だ。顔面目掛けて足をあげたが止められる。

右手と左足を掴まれた。相手を土台に右足で蹴り飛ばそうとしたが足が届く前に、ブンツと回転させられ床に叩き付けられる。

「ったあ」とすぐに手について起き上がるうとするフリして相手の足を蹴り飛ばす。

相手は手について床に叩きつけられるのを免れた。つかさずその足をあたしは背中に振り落としたが、呻いた男は直ぐ様、あたしの足を掴みへし折ろうと肘を上げる。冗談じゃない、折られてたまるかとその手から逃れて後ずさる。

相手は立ち上がり、飛びかかってきた。

ナイフを握る手を掴まれ押し倒される。もう片方の手で首を絞められた。

「うぐっ」

あれ。前にもこんな風に首を絞められなかったっけ。嗚呼、藍さんの敵の時だ。

あの時まじピンチだったよね。今もピンチじゃん。死ぬ気ないっつの。

右手にナイフを握っているがしっかり押さえ付けられて動かない。

首を握り潰されるように締め付ける手を何とか外そうとしたがここは男女の力の差。無理だ。

だから長い爪を立てた。

そうすれば、ガツンツ。

床に頭を叩き付けられた。

衝動でグラリと脳内が揺らぐ。

力が緩む。否、力が入らなくなった。

ずりりと首を掴んだまま引きずられる。視界に蓮真君が見えた。蓮真君も押し倒されて同じ状況だがまだ取っ組み合っている。

不意に風を感じた。不自然な風。下から吹いてきた。

ガクリと浮遊感。首を絞めて男があたしを突き落とそうとした。

そうはいくか。

あたしは首を締める手を握り締める。右手にも力を込めてナイフを突き刺そうとするが押さえ付けられて無理だ。

落とされないように踏ん張りつつ状態を起こす。まだ腰は建物の上だ。これからどう逆転すればいいんだ。

また白瑠さんがヒーローよろしく登場するわけない。あの人はヒー

ローかつ！

なんて現実逃避を刹那。

蓮真君も追い込まれててまずそつだ。嗚呼、なるようになれ。

ナイフを持ち変え握られる手を裂く。男は手を放した。右手が解放されあたしは、腕を振り上げて蓮真君を押さえ込む刺客に投げ飛ばす。

素早く左手で右腕の短剣を出して、首を押さえ付ける隙ができた男の首を裂いた。

血が顔面にかかる。

ぐらつ。

「わ、あつによわつ」

喉を裂かれた男は自分が落ちないように踏みとどまる力をなくして倒れようとした。なんとか押し退けようとする。

短剣を壁にさし、力のない重いだけの男を片手で押し退け、腹筋で起き上がる。

なんとか落下を免れた。

「何が殺戮だ！」

蓮真君の声のあと、上に乗っかる男が退かされた。不機嫌でいつぱいの蓮真君があたしに手を貸してくれる。

「ただの殺し合いじゃねえか！」

「ははっ、こいつらレベルで五人はきついだよ」

なんとか軽口で笑うが乾いた声しかでない。蓮真君の手を借りて起き上がったあたしはゆっくりと息のある倒れた男の元に歩む。

どっかりと腹の上に腰を下ろして蓮真君が拾ってくれたカルドを受け取り、心臓に突き付けた。左足を顎にそえてから、尋問開始。

「さて。どうやら頼まれて殺しに来たみたいですが、誰の差し金です？」

「ぐっ……」

「ぐっ……、じゃねえよ。吐けよ」

あたしの隣に立つ蓮真君が苛ついた口調で急かす。

「尋問の仕方は教わってないんですけどね……まあ、先ずは右手を切り落としましょうか」

カルドを男の右手に移す。

「わ、わかった！話す！話すからやめてくれっ！」

「はいはい、右手を切り落とすのはやめます。で。依頼人は誰です？あわよくばそいつについて情報をくださいよ、あたし達を狙いに来た」

と一旦止めて、男の腕に刺さるナイフを抜き、投げた。ゴミ箱の中にゴミを投げ込んだように、ナイフはまだ死んでいない男の心臓に落ちる。頸動脈を切っただけでは人間、簡単に死なないと誰かが言っただけ。

「理由を」と目の前の生存者に目を戻す。

「たっ、タヌキだ！タヌキに雇われてるんだ！」

……………タヌキ？

狸？狸？タヌキ？

「タヌキがアンタらを始末しろって！」

「タヌキって誰です？どこのどいつなんですか？」

今のところタヌキという名がつく人間は容疑者にいない。タヌキ…ね。タヌキが猫に、化けたあ？それは傑作だ。

「裏現実での名前しか知らない！本当だ！顔ならわかる！細目の男だ！」

それを聞いて浮かんできたのはあの店長。いや、しかし、あの喫茶に細目の男なんて他にもいただろう。

彼らはそのホシであるタヌキによく依頼を受けて仕事をしているそう。今回の依頼はあたしと蓮真君を始末すること。間違いなく裏現実者。

タヌキの特徴を聞くと、やはり細目の店長が連想された。とりあえずグサリと刺す。

「うがああっ！」

「嘘じゃないですよね？」

「嘘じゃないっ！」

「それではさようなら」

それを聞いて首を掻き切った。

やれやれ疲れた、と床に寝転がる。蓮真君に目を向ければ、怪訝な顔をしていた。

「…吐いたから、見逃さないのか」

「そんな約束してないもの。しなかつた彼が悪いのよ」

あたしはそう返す。藍さんみたいにそりゃあ約束すれば見逃さなくもないだろう。でも先程は『命を助けて』とも言われなかつた、だから殺した。

タヌキ。裏現実の名前がタヌキ。

表にもいる裏現実者。

表の仮面を被った裏現実者。

猫の皮を被った狸。

それが　偽者。

「いや、それはまだわからないだろう」

蓮真君がそう言う。

「まだタヌキが偽者だっという確証なんてない。紅色の黒猫のファンで貶されたから殺しの依頼をしてきただけじゃねえの？」

「ファンがいてたまるか。まあ…でも、タヌキ、ね。目星がついた、先ずはコイツを取っ捕まえることにする」

ファンかどうかはともかく、あれで怒りを買ったのは間違いない。

蓮真君もあたしの隣に寝転ぶ。お疲れのようで重い溜め息を溢した。

「で？どうするの？椿」

「ん？喫茶に戻ってタヌキの反応を見る」

「そうじゃなくて、このオッサン達の死体だよ」

屋上で並んで寝転がるのは二人だけじゃない。そうだ。死体を放置しちゃいけないだっけ。

この前は秀介がいたから始末せずに済んだけど、裏の手で始末しなくてはならない。

ポケットから携帯電話を取り出して、白瑠さんに電話をかけた。

「わーい！つばちゃん！なに？お迎え？バイク飛ばして迎えにいくよ！待っててね！」

「いえ、いいません」

「ひゃあ？じゃあなに？」

「実は襲われちゃいまして、それでその死体の処」

「え！？犯されたの！？そんな！つばちゃんのハジメテを一体誰が奪ったの！？」

ブツリと。あたしは電源を切った。

おっと。いけないいけない、死体の処理を頼むつもりだったのに。あたしはすぐに携帯電話の電源をつけた。

「……………今、聴こえたんだけど」

「幻聴だよ。もしもし？椿です。藍さん、裏現実者に殺されかけて逆に殺しました。だから処理を頼みたいんです」

今度は簡潔に伝える。「怪我はない！？」と心配されたのでありませんとちゃんと答えた。

「……いえ……。まだ偽者と断定していません」

偽者を殺したの？と問われたから違つと答える。そうすれば偽者関連かと訊かれた。

電話口の向こうから白瑠さんの騒ぎ声が聴こえるが藍さんは携帯電話を譲らないように格闘しているらしい。助かる。白瑠さんは確実に今現在遊びたい気分には違いない。

「さつき、お兄ちゃんに訊きそびれたんですが」

訊かなかったんだけど。

「タヌキっていう、裏現実者。ご存知ですか？」

「タヌキ？タヌキ……？さあ、僕は聞かない名前だけど。お兄ちゃんって、白瑠のこと？白瑠が知ってるとは思ってるのかい、お嬢」

……藍さんが知らないならきつと知らないだろう。正確に言えば、覚えてない。

「わかりました。では処理をお願いします」と場所と数を教えてから電話を切った。

ふう、と息を吐いてからうんと背伸びをする。それから起き上がった。休憩終わり。

「さて、戻ろうぜ、少年」

「タヌキの面を拝みにか？それとも無謀な挑戦しにか？」

そう言いつつも蓮真君はついてきてくれた。この子はいつかとんでもないことに巻き込まれてしまいそうだ。素直なのか、流されやすいのか、律儀なのか、お人好しなのか。

まあ、どれでもいいか。

「さっきの電話。仲間？」

「うん」

「へえ……最初の電話は前に一緒にいた“お兄ちゃん”？」

「……まあ、ね」

「へえ……」

「……」

「……」

「……言いたいことがあるなら言いたまえ」

階段を降りつつ振り返って蓮真君を睨み付ける。不機嫌丸出しの八つ当たり。

「いや、別に」と返す蓮真君。

「お互い嫌な兄貴を持ったなー、って思って」

「………かなり、嫌な兄貴だよ」

変態だし変人だし変態だし。

落胆しつつ階段を降りるが思い出して振り返る。

「そつだ、怪我はない？」

「ないよ」

「首絞められてたじゃん。あーあ…痕ついでる」

手を伸ばして首に触れればうっすら赤い手形が見えた。それにしても綺麗な首筋だ。あたしが吸血鬼なら噛み付きたくなる首。美首。

「それはお前の方だろ。叩き付けられてたし……」

真似をしてなのか蓮真君もあたしの首に手を伸ばす。チリーンと鈴

が鳴る。首につけているチョーカーの鈴。

「首輪みたい。なんでつけてんの？煩くない？」

「知らないの？首輪は飼われてる証だよ」

そう答えれば蓮真君は言葉の意味がわからなかったのか首を傾げた。

「チョーカーの下は傷があるんだ。それを隠す為につけてる。普段は鳴らさないように動くわ」

答えてあたしはまた階段を降りる。蓮真君の指から弾いて鈴がチリンと鳴った。それから鳴らさないように歩む。

「それで？タヌキを見付けたらどうするプランなんですか？黒猫さん」

「あたし達がひょっこり戻って来たことに驚愕するタヌキを笑顔で捕まえて裏に出る」

「表はまずいよな」

「んで、偽者がどうかを問いたです」

「椿、ぼくがプランを練ってもいい？」

いいプランなのになあ。

「まずはタヌキの確認。実態を確認をしてから、動きを決めるべきだ」

だけど、そうするべきだと冷静になる。ちょっと焦っているな。尻尾を出したのだから、つつい猫パンチしたくなるんだ。

冷静に。落ち着いて。

引っ込むぞ。

「りょーかい」

「その顔を洗ってからな」

血を被った顔を洗った後に、真っ直ぐに漫画喫茶へと戻った。

階段をのぼって自動ドアをくぐれば、一番に顔を合わせたのは、一番疑っている糸目店長。

彼は糸目を見開いて、あたし達を見た。手にしていた本を落とす。

それが目の前にいる猫山さんの足に直撃したらしく悲鳴が上がった。

「痛あつ!?!」

「あ、すみません、騒がしくて」

悲鳴を上げて抱えていた本の山を落とした店員なんて気にせず客であるあたし達に彼は頭を下げる。騒がしい漫画喫茶だ。なんとも裏で騒々しい。

「アイツがタヌキだ」

「間違いなくアイツだな」

あたしと蓮真君は確信した。

本棚に身を潜めて出口の受付にいるタヌキを見張る。逃げる素振りを見せるならば迷いなく捕まえるつもりだ。

先ずは蓮真君のプランに従おう。

あー、早くあの店長をなぶりたい。そう楽しみに待っていたその矢先だった。

自動ドアが開き、数人の男達が現れる。

先導するように先頭にいる二人には見覚えがあった。

一人は。

ジャケットを着てズボンのポケットに手をつ込んで、臭いもので

も嗅いだよような表情の

秀介。

それから。それから。

それから。

もう一人。

「埼玉県警の篠原です」

篠原さんが、そこにいた。

探偵の黒猫（後書き）

久々に篠原さん登場！

篠原さんも出したいけど全然面白い話を思い付けない…。

そろそろこの件を終わりにしたいと思います。

お暇ならご覧ください。

紅と黒の猫

懐かしい。

すごく、懐かしく感じた。

刹那だけ。

あたしは咄嗟に蓮真君を押し退けて物陰に隠れた。

息が上がる、脈が乱れる。

まずい。まずい。まずい。

「なに？知り合い？」

「知り合い、も、なにも……」

きよとんとする蓮真君。

悠長に説明している場合じゃない。そんな場合なんかじゃないのだ。逃げなくちゃ。

「ごめん。あたし、逃げる」

「はっ？ちよ、ま」

あたしは直ぐに窓に歩み寄って開いて、飛び降りた。路地裏だから人気はない。表は警察がいるだろう。

だからあたしは表にいかないように路地裏を駆け出す。携帯電話を耳に当てながら。

「白溜さん！」

悲鳴みたいな声であたしは呼ぶ。

「迎えに来てください！今すぐに！お願いします！！」

怖かった。

秀介から逃げたんじゃない、警察から逃げたんじゃない
さんから逃げたんだけだ。 篠原

逃げなきゃいけないと思った。
会いたくないと思った。

最後に会った、病室での会話だけでも胸が痛い。会ったら、会った
ら、凄く痛いだろうから。

だから。

逃げなきゃ、と思った。

真っ白な病室。紅色の椿の花が、ポツクリと落ちる。

「つーばあーきー、ちゃん」

目を覚ます。病室なんかじゃなかった。与えられたあたしの部屋だ。
帰ってきたあたしは真っ先にベッドに倒れ込んで眠ってしまった。
起こすのは真っ白な白瑠さん。

騒がしい声じゃなくて穏やかな声であたしを呼んで起こす。指先で
頬を撫でて、首を撫でる。チリンと鈴が鳴った。

「おーはーよう」

につこり、と笑いかける。

そんな笑顔に何も返さなかった。

起き上がったあたしの手を引いて白瑠さんはリビングに行く。

リビングには藍さんがいた。別に驚くことでもなんでもないけれど。

カーテンがしまっているならもう夜なのだろう。

「おはよう、お嬢。今日はお疲れだったね。タヌキはわかったかい？」

「ええ、恐らくあの漫画喫茶の店長です」

「うひゃー店長？なあんだ、どつりで店自体が血臭いわけだねえ」

あたしの異変を察して気遣っている二人は平然に振る舞う。変態でもそんな気遣いをしてくれるのか、なんてぼんやり冷たいことを思ったりする。

「お嬢？へーき？」

「……平気ですけど」

ソファから立ち尽くすあたしを見上げたから睨み付けければ「そっか」と笑った。

「それでタヌキをどうするんだい？お嬢」

「そりゃあ取っ捕まえて命を狙ったわけを問い詰めるつもりですよ。人がいないところで捕まえようとしたんですけど……」

そこに 篠原さんが現れた。

篠原さんとはもかく、秀介のことを話した方がいいだろうか。もしかしたら二人が一緒にいた訳がわかるかもしれない。

そう思考が行き着いたあとに、ふと、真っ暗になった。

不意に意識が途切れたのかと思ったが違う。単に部屋の明かりが消えただけだ。停電？

「血のにおいが骨まで染み付いた小娘だな。百に近い人数は殺している、人間殺しめ」

背後からそんな声が聞こえた。全く聞き覚えのない声。

瞬時にあたしはナイフを取り出して後ろに向かって振り上げた。首があるだろう場所を狙ったが、手首を掴まれて止められる。

正確に手首を掴んだ？ 視えてるのか？

あたしは全くも視えないというのに、そんなまさか。

直ぐにカルドを抜き取って腹を裂こうと振り上げたが「わわっ」と白溜さんの声がしてピタリと動きを止める。

そのあとに、部屋の電気がついた。

白溜さんを振り返っている大勢だったからすぐに手にしたカルドが白溜さんの服の腹部辺りが切れていることに気付く。

「あ、すみません、白溜さん」

「といつつ力を入れるな。とんでもない殺人鬼を育てているな、クラッチャー」

白溜さんに謝りつつもあたしはナイフに力を込めたがびくともしない。

目を向けると、あたしの手首を握っている男がいた。

冷めたような目付きであたしを見据えた眼は、硝子細工のような妖艶で魅惑的だ。もっと奥を見ればビー玉を見ていると錯覚しそうになる。

人形みたいな白い肌。服装全ては黒に纏められているが、モデルのように決まっている。

「紹介するよ、椿ちゃん。ラトアだ」

ナイフを握るあたしの右手を白溜さんは掴んで離させ紹介する。しかし、腰に手を回す必要は何処にあるのだろうか。左手にカルドを右手にナイフを持っていることを理解しているのだろうか。

「んで、ラトア、この子は」

「見ればわかる。巷で噂の紅色の黒猫なんだろ」

「そーう、んひゃ、椿ちゃんだよ」

あたしの髪を弄んで白瑠さんは紹介した。

ラトア。鼻の利く奴。

幸樹さんが迎えに行った人。

人？人と呼ぶには少し

なに

か 存在感が違う気がする。

「何をじろじろ見ている、小娘」

「……………」

「ほらほら、つばちゃん。みてみてー」

なんか不機嫌だこの人。

ラトアとか言うこの人とどう接するべきかを考えていれば横からナイフを白瑠さんに取られた。

みてー、と言われたので見たら、グサリ。ナイフはラトアの白い首筋に食い込んだ。

え？何してんだこの人？

助っ人で呼んだのでは？

と思っただが、直ぐにある存在を思い出した。

「 吸血鬼？」

「大正解！」

いくらタヌキを見付けたからって、助っ人で呼んだ彼を殺すなんて意味がわからない。意味がわからない人だけけどこんな意味不明なことはしないだろう。

つまりは、刺したが死なない。死なない存在。それは吸血鬼。

白瑠さんより鼻が利いて当然なのだ。裏現実に存在する秘密。吸血鬼。

白瑠さんはすぐにナイフを引き抜いた。頸動脈を貫いているはずなのに血は吹き出ず、寧ろ傷は塞がって血一滴も出ずに完治。

「いつもいつも 何しやがる」

「んひゃひゃひゃ！だって楽しいじゃーん」

「貴様は狂いすぎだ、クラッチャー。頭のネジを嵌め込む努力をし
る」

そしてラトアは平然と喋って白瑠さんを睨み付けた。

「つばちゃんもやってみて」なんて白瑠さんが言うので首を横に振って断る。

確か一緒に苛めて遊ぼうとか言ってたっけ。生憎あたしそんな趣味はない。

「えー楽しいのに」

「フン、どうやら弟子は多少はまともなようだな」

「やだなあ、ラトアくん。椿お嬢は純情な子だよ、白いニーソを履くような娘だ！」

「貴様は相変わらず少女好きなんだな、藍乃介」

「彼女はいたって見た目通りの娘だと、説明したでしょう？ラトア」

どんな娘だ。

とりあえず藍さんのおかげでラトアさんは変態じゃないことがわかった。

ラトアさんにコートを、と手を出す幸樹さん。

「おかえりなさい、幸樹さん」と言えば微笑が返ってきた。ただいま、と。

「おや？随分と疲れた顔をしていますよ。二人に手を焼いたようですね」

ラトアさんからコートを受け取った幸樹さんは顔を覗く。

「それとも進展がなかったのですか？」

「……………いえ、ありましたよ。今日は命を狙われましてね、尻尾が出てきたんです」

あたしは首をゆるりと振って報告した。今日はまだ報告していなかったので当然知らない。

「それはよかったですね。ラトアも来たところですし、現在状況を確認しましょうか」

そう言われたので全員座って、現在状況を話すことになった。何があったのか、誰がタヌキなのか、それからタヌキが仕留められなかった訳も話す。警察　それと秀介の登場を話した。

「タヌキですか。懐かしいですね」

そう幸樹さんはお茶を啜って洩らした。

「え？」ときよとんとした反応をしたのはあたしと白瑠さん、それから藍さん。

「糸目の男でしょう？少し前に仕事をした仲でしょね」

「まさか身近に接点が！お嬢！重要参考人を確保！」

「藍さん、テンションうざい」

さざりという幸樹さんを指差して興奮した藍さんを冷たくあしらう。

ラトアさんというと、優雅にお茶を啜っていた。

「仕事仲間だったなら多少はご存知ですよね？」

「ええ、私を知る限り彼は誰かの真似事をするような男ではありません」

「……ですか」

ならばやはりタヌキが偽者とは限らないだろう。では、何の為に命を狙った？

「話し合いが通じる人ですか？直接の接触が可能ならば幸樹さんに頼みたいんです」

「話を通じる人ですから、何気なく近付くことにしましょうか」

「ふん、俺の出番はないようだな」

「そんなことはありませんよ、ラトアさん」

ラトアさんに話す。

「明日はラトアさんも来てください。まだタヌキが黒と決まったわけではありませんので、客の中から裏現実者を貴方の鼻で見付けてもらいます」

言っと思い出す。篠原さんの存在。

明日は、いるのだろうか。

「ところで……警察と秀介くんがいたのですが、何故だかわかりますか？」

「あー、あの狩人の鬼？」

「ポセイドンか」

「秀介くんは大方、警察関係の裏現実者に依頼されて動いているの

でしょう」

警察関係の依頼。少し考えればわかることだろう。秀介はそれが仕事なのだ。

人殺しの狩人。警察と共にレッドトレインの犯人を追っている。

「ふふ、椿さん追われてますね」と何処か楽しげに幸樹さんは笑う。秀介の名前が出る度にそんな反応をされるのだろうか。

秀介が追っているのは多分、二回目の血塗れ電車を仕出かした偽者の方だ。警察の協力をしているなら死体を確認しただろう、あたしの仕業ではないと知っているはず。あたしがそんな茶番をしないことも、『紅色の黒猫』の名前を言い触らさないことも、理解しているだろう。

あたしを狩らないと言っていたんだ、偽者を狩るつもりだ。気が変わっていないければ。

「警察もあの喫茶に行き着いたってことでしょうか？」

「狩人の鬼だつてネットで言いふらしてるぐらい突き止めれるからね。ちよつと調べればわかるさ」

「んー、困った。警察が出入りすると行動範囲が狭くなる……」

「椿さんともかく、私達は平気ですよ。警察はより、厄介なのは秀介くんですね。白瑠を見るなり飛び掛かります」

「白瑠さんはお留守番ですね」

漫画喫茶で暴れだす秀介が安易に想像できた。

ふと、ラトアさんが首を傾げていることに気付く。

「お前達はその小娘に仕切られているのか？」

そう問う。

仕切っているっていうか、一応話し合いなのですが。

ラトアさんの目線の先はさつきから黙ってニコニコとあたしの髪を弄る白瑠さん。

「そーだよ。今回は椿ちゃん獲物だからね」

「でもさ、狩人の鬼が動いてるなら任せたらどうだい？」

「なんでですか！あたしが捕まえるんです！」

「ふん、ポセイドンと獲物の取り合いか。そんなとこまで似るとは傑作だな」

滑稽の間違いだろうと思う鼻笑いをされたが不快ではない。口調的にはム力つく奴なのだろうが、白瑠さんが苛める対象のせいだ。確かに白瑠さん同様、これじゃあ獲物の取り合いをするようなものだ。

まあ、白瑠さんと違って秀介を丸め込める自信はある。惚れた弱味と言うやつだ。

「ではあたしが秀介くんと話をします。幸樹さんはタヌキと。…そうですね、話が聞きたいです。盗聴機はありますか？」

「ぐふふ、勿論あるよ、お嬢」

「あつ！じゃあさじゃあさ！皆で藍くんのバンに乗っていこうよ！そこで盗聴！」

ねっねっ！と白瑠さんが騒ぎ出した。

もしもの為にも全員出陣することにする。全員が藍さんのバンでは逃走の際に不利だからと、幸樹さんの車と白瑠さんのバイクも動かす。

幸樹さんがタヌキと接触。話の内容は全て幸樹さん任せ。あたしが仲間かどうかを話すのも流れ次第だ。

警察が入りしないか見張って警戒する。あたしは秀介が現れたら話に行く。

それで決定した。

「ねー、つばちゃん」

眠る前にナイフの整理をしていけば部屋に白瑠さんが方もしてきた。上目遣いで伺っているから、なんか変な頼みでもしに来たのかと身構える。またコスプレ着れとか？それとも明日はミニスカ穿けか？

「しゅーくんがいたってことはあ、んー、えっと。あつ、しーのちゃん。しーのちゃんも居たでしょう？“レッドトレイン”だし」

思わず息を飲んだ。まさか。白瑠さんから彼の名前が出てきて焦りが走った。

「……ええ……。居ましたよ。それがどうかしたんですか？」

「ほら、しーのちゃんってつばちゃんの護衛もしたじゃん」

…そんなこと話した覚えはないぞ。

「その配慮はないの？」

「配慮？何故ですか、篠原刑事だって警察です。警察と違う警戒をしろというのですか？」

「んー、あのね、つばちゃん。しーのちゃんと話してるならわかるはずだよ。熱心でお優しいしーのちゃんが、帽子で顔を隠したぐらいで君だと気付かないわけないんだ。交番のお巡りさんと会っても“誘拐された椿ちゃん”だってバレないけど、しーのちゃんは違うわ」

熱心で優しい。だから顔を隠そうとしたってバレてしまう。あたしのことをちゃんと覚えてる。あたしを今も探しているんだろう。あ

たしの無事を願っているんだ。彼は優しい人だから。本当に優しい人なんだ。

白瑠さんもそれを知っているようだ。何かちよっかいを出したこともあるのか。篠原さんの方は多分知らないとは思うが。

「つまりは男の格好してもバレるから、何か対策を練ると、そういうことですか？」

明日着ようとした服を掴む。

「格好はこつちで用意するよん。とりあえずー、しゅーちゃんとしーのちゃんは行動を共にしてるだろうからあ、先ずは二人を離さなきゃ。俺がしーのちゃんを引き付けるよ」

「え？え？白瑠さんが…引き付ける？引き付けて頭を粉碎する気ですか？」

心底驚いてあたしは問う。まさかまさか。そんなことを許すか！ニコニコしても許さないからな！

「でもしーのちゃんと顔を合わせられないじゃん？身柄を保護されちゃうよ。そうしないと幸くんがキツネと接触できないじゃーん」

秀介が幸樹さんに飛び掛かる光景が安易に想像できてしまった。それは困る。

「それにしーのちゃんは面白いから殺さないよおん、ひゃひゃ」
「……………そうですね。じゃあ……………」

言うのを躊躇った。

白瑠さんが殺さないと言うなら殺さないだろうが、どうも心配でな

らない。

「篠原刑事が秀介くんといたなら、よろしくお願いします」

「んーひゃ、りょーかい」

いつもの貼り付けた笑みのまま白瑠さんはあたしの部屋から出ていった。

すぐ篠原さんが心配だ。

秀介と接触したときに守ってと頼もうか。それとも。

ベッド脇の棚の引き出しの奥に隠した篠原さんの名刺を取り出す。連絡してようか。

「……ん？」

首を傾げて気付く。あたし、肝心なことを聞いていなかった。

翌日。東京で例の漫画喫茶の近くにいた。

あたしの格好は ゴスロリだ。

やられた。

「男装より悪目立ちするじゃないですか!!」

「そんなことないさ!ぐふふ!東京でゴスロリは珍しくないさ!ぐふふーッポー」

「目を引くっつーんだよ!!!てめえらが楽しんでんじゃねえか!」

騒ぐあたしの格好はゴスロリ。真っ黒でフリルはこの前と違い紅色。勿論ニーソでブーツ。それだけならまだしも、腰のリボンの下には黒い尻尾が垂れてて頭には猫耳カチューシャ。

目立つ。どう考えたって目立つだろうが!アキバでも乙女ロードでもないこの場所に目立つに決まってるんだろ!

「猫ゴス、ツボ」

白瑠さんと藍さんはもう至極幸せそうな顔であたしを眺めていた。そのまま天国に逝けばいい。

ラトアさんを見れば、哀れみの目で見ていた。無理矢理着せられた一部始終を見ていたんだ、彼が証言してくればあたしは裁判に勝てる。この変態を二人死刑に出来ただろう。

「幸樹さんっ！！」

あたしはバンの外から見ている幸樹さんに泣きつく。

「く……可愛いですよ？…ふふ」

笑いを堪えきれない幸樹さんは別の意味でツボっていた。み、見捨てられた…！

「いえいえ、見捨ててません。名は体を表すと言いますが……体が名を表してますね、ふふふ」

……確かに。幸樹さんのツボはそこかよ。

紅色の黒猫。多分あの二人はわざとだ。

巻かれて飾られた黒髪にも紅色のメッシュを入れられたしカラコンまで渡された。なんであたしこんなに遊ばれてるんだろうか…。

「しかし些か猫耳は悪目立ちしますね。自分が『紅色の黒猫』だと言っているようなものです」

「えーいいじゃん。だってつばちゃんが本物だもん」

「そうですね、せっかく出た尻尾が怯えて引っ込んだらどうするん

ですか？」

バンの中に入って幸樹さんはカチューシャを取ってくれた。ぶー、と唇を尖らせつつも白瑠さん達はあたしをメイクした道具を片付ける。メイクもされた。あー落としたい。肩を落としてつつも武器をしまい込む。ちゃんと配慮してくれたらしくナイフをしまい込むポケットが多い。助かるがせめて服装をましな物にしていたきたかった。

「警察はない」

サングラスをかけたラトアさんがそう答える。一通り確認した幸樹さんも警察はいないと答えたので、行動を開始してもらった。

盗聴機をつけた幸樹さんが漫画喫茶に向かう。いつでも戦闘体勢に入れるように準備したあたし達は少し離れた駐車場で待機。

今日は蓮真君はいるだろうか？誰に会っても問題はないだろうし迂闊にあたしと接触しない　タヌキが行動を共にしてた、なんてチクッたらどうしよう。

そう不安がっていれば、

「お久しぶりですね」

「……笹野」

幸樹さんがタヌキと接触した。

バンから四人でその会話を盗み聞きをする。

田村ことタヌキは猫山さんに奥の部屋に通すように言って、幸樹さんは移動した。

バンの運転席と助手席にはサングラスを掛けた藍さんと白瑠さん。

太陽の光を避けて隅にサングラスを掛けたラトアさんが頂垂れている。黒いイカついサングラスをかけた男が三人。怪しい。

そこにゴスロリ少女がいるのもまた怪しかったり。

「本当に漫画喫茶の店長をしていたんですね」

「出鱈目言ったと思ったのか？ 笹野はどうなんだ。まだ医者をやっているのか？」

「ええ、勿論です。表の仕事はともかく、裏の仕事の方はどうですか？ 最近」

「何を訊くんだ。最近は疎かさ。君こそどうなんだい？」

「活発とは言えませんがそこそこ、ですね」

お茶でも出されたのかコトンと物が置かれる音が聞こえた。それなりに裏の話に持っていつてる。

「巷で噂の紅色の黒猫と違って、ね」

その名前を出した。

「そういえば、紅色の黒猫が二回目に殺戮した現場はこの近くですね」

「ああ そうだったね。全く、とんでもない新人が現れたもんだ」

含み笑いをしてタヌキは言う。

「本当ですね。噂では頭蓋破壊屋に並ぶ存在だとか…。私達は肩身狭い思いをしてしまいますね」

「別に頭蓋破壊屋のように有名になりたいわけではないだろう。会わないうちに野心でも芽生えたか？」

「まさか。本心ではありませんよ」

きつと幸樹さんは微笑んで肩を竦めただろう。

「雑談はいい。こんな世間話をする為に訪ねてきたわけではないんだろ」

「おやおや。私はたまたま来ただけなんですよ？それともお邪魔でしたか？」

「そんなことはない。世間話が出来て楽しいさ。だが、何の用もないのに漫画喫茶なんか来るとは到底思えない。オレに用があるんだろ？遠回しはやめてくれ」

「だろうな。昔の仕事仲間が突然来たのがたまたまなんて信じないだろう。」

「つーばーちゃん」

飽きてきたのだろう。シートに頂垂れた白瑠さんが手招きする。少しは辛抱しろ。

ヘッドホンから幸樹さんの息を吐く音が聴こえた。

「実は、私に妹が出来たんです」

「そう幸樹さんは切り出す。」

「タヌキは「妹？」と聞き返した。当然想像してるのは赤ん坊だろう。」

「とても可愛がってしまってるね。溺愛をしてるんです」

「……ふーん。そうか、妹、ね。その可愛い妹とオレとはどんな関係があるんだい？妹の自慢話か？」

「ふふ、まあそんなところですね」

クスクスと可笑しそうに笑う声は、あたしに向けられているのだろうか。

妹。ふうん。そう言うか。

「その可愛い妹が昨日命を狙われたんです」

「命だつて？裏にか？なんでまた」

「それはよくわからないんです。なんであの子が……」

わざとらしく溜め息をつく幸樹さん。

「妹は無事なのかい？」

「ええ、それなりに教えてるので振り返ちにして無事でしたよ」

「は？」とタヌキは間抜けな声を出した。やっぱり生まれたての赤ん坊だと思い込んでたに違いない。

「おいおい、妹の歳はいくつだよ？」

「ん？確か十八でしたね」

「十八の妹？」

「ええ、可愛い十八の妹です。タヌキも見かけたことあるかもしれませんが。数日前からここに出入りしていますから」

それだけで十分だった。十分すぎるくらい。昨日で十八の少女で殺されるはずが振り返ちにした人間が何人いるのだろう。何人いようがタヌキの心当たりはあたしだけだ。

沈黙が落ちる。緊迫の刹那。

耳を立てるあたし達も緊迫を味わう。

「可愛い妹が出来たんだな、笹野」

沈黙を破ったのは、タヌキだ。

「君とこんなところで殺しあいをしなきゃいけないのかな？」

「それは場合によりますね。今日はあくまで話に來ただけなんですよ、タヌキ。可愛い妹の命を狙ったわけを訊きに來たんです」

「わけ……ね。それを聞いたらどうするんだい？」

「妹は話し合いでの解決を求めています。命を狙わないと約束してくれるなら私は大人しく帰りますよ」

「勘違いしないでくれ、笹野。あの娘が君の妹だと知っていたなら手出ししなかったさ。些細なことなんだ。謝る。申し訳ない。少々店で騒いでたから」

嘘つけ。それだけの理由で毎回客を殺してるとか言うのか。しかし、容易く頭を下げたようだ。

「つーばぁーちゃん」

「なんですか！」

「しゅーちゃんとしーのちゃんがいたよ」

「え？…え！？」

いいとこなんだから黙ってると思ったが暇だと呼んだわけではなかった。フロントガラスを見れば並んで歩く二人を視認。漫画喫茶に向かっているところだ。

「行きましようー！白瑠さん！」

「ひゃーい！」

「藍さん、他の警察に警戒をしてください。ラトアさんは盗聴を聞いててください」

「了解、お嬢」

「承知」

「非常事態だけ連絡をください」

大まかにあたしは指示を残して白瑠さんと藍色のバンを降りた。

「ねーねー、つーちゃん」

「嫌です」

「まだ何も言っていないんだけど」

「どうせろくなこと言う気だったんでしょ」

「ろくなことじゃないよお、これが終わったらその格好でデートしようって言おうとしたんだよ」

「それがろくなことなんですよ」

そいついつもの調子で会話しながら二人のあとを歩く。

「それでどうやって二人を引き離すんです?」

「しゅーちゃんにっーちゃんを見付けさせるんだよ」

「どうやってです?」

「殺気をぶつけるとか」

「殺気ってどうやって出すんです?」

「え?殺してやるーで念じればいいんじゃない?」

「篠原刑事まで振り返ったらどうすんですか?」

「んー、じゃあこうしよう」

強引だが白瑠さんが提案したそれでいくことにした。

あたしは先回りして喫茶の出口に立つ。見つめた人混みから秀介達が来るのを待った。

そして二人の姿を確認する。

「盗聴機つけられてないわよね」とちよつと盗聴機がつけられている可能性が過つたが白瑠さんの合図を見て直ぐに行動した。

人混みの中、篠原さんを白瑠さんが無理矢理引つ張り注意を逸らす。そしてこちらを向いてる秀介にあたしが手を振って注意を向ける。

強引すぎたがなんとか上手く行った。篠原さんはそのまま人混みに

消え、秀介はあたしだと気付いて直ぐ様駆け寄る。
篠原さんは白瑠さんに任せるしかないのだが、心配だ。

「椿!……そんな妬くなよな」

駆け寄るなり何故か照れたような、否自惚れたような顔をした秀介。

「ゴスロリで対抗しなくても椿が一番可愛い!」
「別にリサさんと対抗してません」

あたしはさらりと否定する。どうしてそんな都合よく解釈できるのか、あたしには理解できない。妬いてもいない。

「話があるの。ちょっと歩かない?」

「いいけど。その前に」
「?」

にこにこ秀介は笑顔であたしを見る。なんだ?とあたしは首を傾げた。

そうすればきよとんとする秀介。

「まさか忘れたの?」

「なにが?」

「つけなかったらキスする約束したじゃん!」

……あ。完全に忘れてた。

そういえばそんな約束していたな。

「してくれねーの?俺すげー楽しみにしてたんだけど」
「するよ、します。約束は守る主義なの」

あたしは仕方なくキスをすることにした。機嫌よく目を閉じてキスを待つ美少年にキスをするというご褒美。あれ。思ったより恥ずかしいぞ、これ。

当初は唇にする予定だったがチキンハートの為に頬にしよとしたが「ほっぺにちゅーなんてオチはやめてくれよ」と釘を刺される。あたしは腹を決めて秀介の唇にフレンチキスをした。

離れた瞬間に気付く。
隣に立つ蓮真君の存在に。

……まずいものを見られてしまったぞ。

目を丸めて立ち尽くす蓮真君があたしを凝視する。言い逃れできない状況。寧ろ彼氏ですと紹介しておこうかな……。男で遊んでるなんて思われたくないし。

「知り合い？」

「え……ああ、うん……。ここでたまに会うんだ」

秀介が蓮真君を見て訊くから漫画喫茶を指差して答える。那拓だと言つよりはいいだろう。裏現実というのも勿論、だめだ。

「椿、ここに通ってんのか？まさか例のやつを……？」

「それについて話したいの、行きましよう」

「あ、うん。……」

「……。またね、椿」

「へ？あ……うん、またね」

「……………」

秀介は頷いたが何故か蓮真を睨み付けるように見た。睨み付けられたからか、蓮真君も対抗するように見る。

すぐに蓮真君は視線を外してあたしと秀介の間を通ってからあたし

に声をかけた。てつきり無言を突き通すかと思ったから吃驚だ。あとで話そう、という意味だろうか。蓮真君が行ってからあたしは歩き出した。遅れて早歩きで秀介は隣の位置につく。

「さっきの餓鬼とは親しいのか？」とむっすりした顔で訊いてきた。

「は？餓鬼って……彼は16よ」

「童顔だから餓鬼なんだ！」

「貴方だって小顔の童顔じゃない」

「椿！逸らさないで答えるよ！親しいのか!？」

「怒鳴らないですよ。知り合いよ？あの喫茶で会って漫画の話をする程度の仲だから親しいとは言い難いわ」

「怪しい！椿がそんな交流をするわけない！」

「煩いなあ……なに？妬いてんの？」

「妬いてるさ!！」

あまりにも煩くて軽口を叩いたつもりが、はつきりと言われて面食らった。

「好きな女に他の男と親しくしてんだ、気が気じゃない。すげえ妬くよ。親しげに「またね」なんて目の前で言い合ったのに妬かないわけないだろ」

真っ直ぐな眼で秀介はあたしに言う。その真剣すぎて真っ直ぐすぎる言葉に思わず失笑した。

「シユウ。あたしはただ、偽者の足取りを追って彼にそれとなく聞き込みをするだけよ。親しくなんかない」

「……そうだったの？」

「そうだよ。昨日も実はあの店に居ただけ……ほら、シユウは刑事

といたから…窓から逃走したの」

「あー……うん。篠原刑事と一緒にいた。あれ？さっきまで一緒にいたんだけどな……」

なんとか嫉妬から気を逸らせた。今の今まで完全に篠原さんのことを忘れていたらしい。後ろを振り返るが見えるわけない。

今頃どうしてるだろう…？大丈夫かな……。

「二回目の血塗れ電車はあたしじゃないってわかってくれてるよね？」

「もちろん！椿があのと直ぐにそんなことするわけないってわかってたさ。言い触らすのもつばきやらしくなかったから、偽者だと確信してたぜ。リサからの仕事が終わったから警察のコネ使って手伝いを始めたんだ。椿も裏表で暴れられちゃ困るだろうと思ってたな」

予想以上だった。あたしを狩るところか偽者をあたしの為に狩るつもりで自ら手伝いに身を乗り出しただけだ。ちゃんとあたしの仕事じゃないことまで理解してくれてる。

「ありがとう。でもいいの。あたしがなんとかケリつけるから」

「いや、手伝う。椿だってまだ偽者を見付けてないんだろ？……」

ああ、頭蓋破壊屋とドクターも動いてるから俺が邪魔なんだな」

鋭かった。厳密に言えば“俺達”だ。

秀介がいると白瑠さんと幸樹さんが自由に動けないし、警察と篠原さんがいるとあたしが自由に動けない。

正直言つて、ありがた迷惑なんだ。

困ったような仕草で一度黙り込んだ秀介は口を開く。

「警察にあの喫茶に出入りした人間が犯人だつていう情報を与えちまったんだ。悪いが今更撤収はできない。暫く聞き込みが続くし篠原刑事も何度も出入りするつもりだよ」

秀介は篠原さんの名前を出した。

「躍起になつてる。犯人を捕まえようと焦つてんだ、あの人。“拐われた椿”を見付ける為に」

あたしを、見付ける為に、躍起になつてる。

犯人であるあたしじゃなく、被害者であるあたしを見付ける為にだ。彼はあたしが血塗れの真犯人だと知らないのだから。

「……………篠原さんと」

「うん？」

「あたしの話をする？」

「……………よく、ね」

「心配、してるでしょ」

「……………ああ、すげえしてる」

「顔を合わせた時なんて言ったの？」

「椿と一緒に探すつて…言った。ごめん」

「…謝る必要はないわ。妥当なもの」

「……………あの人、自分を責めてた」

自然と落ちた視線を秀介に戻す。

「守るつて約束したのに自分は守りきれなかったつて」

「……………あの人、優しいから」

「ああ、優しい人だ」

また視線を足元に落とす。狭い路地で壁に背を凭れながら向き合う。優しい人。バカだ。その優しさを向ける相手を間違っている。優しさが無駄だ。

「んー、俺はどうすればいいんだ？ 邪魔しねーから手伝わせてくれよ、椿の力になりたい。いや、クラッチャーとドクターを辞退させる。俺が代わりに手伝うから！」

「残念ながら二人の方が秀介より必要なの」

「ガン！……いやいや！ 狂った殺人犯相手は俺の方が得意だ！ 俺に任せてよつばきちゃん！ それとも自分の手で葬りたいわけ？」

再び降りた沈黙を破ったのは秀介。なんとか手伝わせると食い下がりがあたしは首を振る。

「殺さないわ。ただ……利用するだけ」

あたしはそれだけを言う。

「……？ ふーん……。でもなー」

「あたしが片付けるから、手出ししないで。お願い」

渋る秀介にあたしは手を添えて上目遣いで頼んだ。

「……………それって下手に出て頼み込んでるんだよね？」

「え？ うん……そうだけど」

真顔でそんなことを訊かれた。なんか嫌な予感。

「今の上目遣いとツーショットを写メらせてくれたらお願いをきく」

「そのかつこいいケイタイを刺し壊すぞ」
「ツーショットで我慢する！」

嫌だ。だいたいあたしは今朝藍さんと白瑠さんのケイタイを蹴散らしたんだぞ。幸樹さんには問答無用に撮られたけど。

「振り返りゴスロリ」とか微笑む幸樹さんに削除してと頼んだが無理だったのだから白瑠さん達には送らないでくれと交渉した。

「なっ？なっ？いいだろ？」

るるんした眼で十字架のデコレーションがしてある黒いケイタイを構える秀介。かつこいいなあいいなあ。

「悪用しないでよ」と言つて致し方なく了承した。

「しないよ」

「俺の彼女だつて嘯くくせに」

「椿は俺のだもん」

「君の所持品になつた覚えはない」

「俺は椿の所持品だぜ」

「どあほ」

「愛してる」

ちゅ、と不意打ちに頬にキスをされた瞬間にカシャンと盗撮防止のシャッター音が響いた。

「お！つばきちゃん、綺麗に撮れたぜ！送るよ、アドレス頂戴」

「…あたし、ケイタイないの」

壁に手をついてケイタイの画面を見せる秀介。見事にあたしの頬にキスをする秀介が綺麗にぶれなく映っていた。傑作なショットだ。

欲しい気もするがケイタイがない。

「は？パシってるくせにケイタイも買ってくれないのかよ、あいつら」

「いや、パシられた覚えはないんだけど……。これからねだるつもり」

「じゃあ買ったら送ってよ、アドレス教えるから」

「今度会ったらでいいじゃん」

「えー。次はいつー？」

「知らないよ」

「じゃあデートの約束しよ」

「嫌だ、めんどくさい」

「つばきちゃん！」

項垂れて言えば秀介は声を上げる。なんだ、煩い。

「俺とキスをした仲なのに恋人だと認めてくれないしきー、椿いー、俺と付き合いたいんだろ？」

「いや全然」

あたしはきっぱり言っつて首を振った。秀介はこれ以上ないくらい驚愕の表情をする。リアクションがでかい。

「そんなツンデレなことを…！」

「ツンデレじゃねーし」

「ツンデレだよ。付き合っつてないとか言いつつキスをしたじゃん」

「あれは取引での単なる手段だもん」

「それがツンだ！」

「刺すぞ」

デレてなんかない。あたしにツンがあってもデレなんてない。断じ

て！

「椿、俺は愛してる」

「……………」

「すげえ愛してる」

「聞き慣れた」

「明日デートしよう」

「あたしと会話する気ある？」

「え？してるじゃん。明日デートしようぜ、遊園地行って買い物して俺が今泊まつてるホテルで一泊してけよ。一日一緒に過ごそう」

「秀介、君押し倒せばものにできると思ってるでしょ。寝れば付き合えると思うなよ」

「なっ……………！そんなやましいこと目論んでない！変態じゃねーんだから！つか、付き合ってるから寝るんだろ！いやいや、キスしたら付き合うだろ、普通」

「キスごときで心は動かないわよ」

もしかしたらあたしは変態二人のせいで男不信になっているかもしれない。まあ幸樹さんの件もあるけど。

やっぱりまだ秀介を受けきれなくて、付き合う気にはなれない。

白瑠さんの敵だし。あたしは殺人鬼で秀介は狩人。不釣り合い。あたしが誰かを愛せるわけがないんだ。

「そりゃあ変だな。キスを奪われるとか、そうゆう手に弱いはずじゃなかった？つばきちゃん」

「そうだったけ？」

「そう言ったじゃん」

「どーだったかなあ。じゃああたしは帰るね」

両手をついてあたしを閉じ込める秀介から逃げるようにしゃがんで

抜け出す。

そう言えばその手に弱いつて言ったようないなような。

「さっきの餓鬼と会うんだろ？」

「はあ？帰るのよ、あの子と会うのは喫茶。今日は行く気分じゃないの」

「喫茶に行く度に会うのかよ……俺はたまにだっていうのに……俺も出入りするからな！」

……。

蓮真君と接触する機会がなくなるじゃないか。

「約束したばかりでしょ、それじゃあクラッチャーとドクターが入りできなくなるわ」

「飛びかからないって誓う」

「君が頭蓋破壊屋と肩を並べて漫画を読む光景が浮かばないんだけど」

「誰があんな奴と肩を並べるかーっ！！」

約束守る気あるのか、お前。

幸樹さんに返し損ねた携帯電話が振動する。秀介に背を向けたまま開いて確認すると、藍さんからのメール。内容は「撤収」だった。何かあったのか？

「シユウ。急ぐから、またね？」

「あ、うん。またな」

振り返って笑いかければ、秀介はニカツと無邪気に笑い返してくれた。少し歩いて立ち止まる。

「秀介、もう一つ頼んでいい？」

「なに？」

「…篠原さんのこと頼むね」

「……うん。わかってる」

秀介は当然のように頷いた。あたしが篠原さんに対して悪びれてることをちゃんと知ってるから。

笑って話したあの病室を思い返しながらあたしはその場をあとにした。

「どうかしたんですか？」

バンは変わらず駐車場に在った。中に入れば何故か藍さんと白瑠さんがダラーンと頂垂れている。

幸樹さんはもう戻っていた。

「警戒されてこれ以上話を続けられませんでした。でも何か裏がありますね」

微笑んで幸樹さんは答える。だらうな。

「じゃあとりあえず撤退しますか」

「そうですね」

「………」

「藍さん？…どうかしたんですか、この二人」

「嫉妬だろっ」

「？」

ラトアさんは太陽の陽射しを嫌そうに避けて答えた。は？嫉妬？な

んか今日はやけに聞く言葉だな。

「お前さんも罪な女だな」

何故か軽蔑した眼差しを向けられるラトアさん。はい？罪？

首を傾げていれば、じとりと白瑠さんと藍さんがあたしを見ていた。

「なんです？」

「……………」

「……………」

「二人は置いて、私達は帰りましょう。ラトア、椿さん」

幸樹さんは車を取りに先にバンを降りて行った。

「……………まあ、放っておこう」

あたしはそう決めた。決めた矢先にがしりつと肩を掴まれる。

「冷たいよつばちゃん！」

「ドライだよお嬢！」

「あーもう、なんです。何頂垂れてるんです、五秒で話さなきゃ構いません」

詰め寄ってきた二人に溜め息をついて言えば、急に真っ暗になった。白瑠さんに抱き締められた。

「……………？……………なんです？白瑠さん」

意図が見えない。白瑠さんに意図があるとは思えないけど。

「むうー……………」

「五秒ですよ」

「秀介とキスしたの？」

「……………」

身体中の血が凍り付く。

最初は困惑の波が押し寄せて、波と一緒に血が引いていった。

「あつ……………の……………う……………べ……………弁解をさせてください」

「そんな余地はありませんよ」

やべー。なんかやべー。言葉に詰まりつつも言うのと、ぐいっと後ろに引つ張り込まれた。

につこり、笑いかける幸樹さんがあたしを見下ろす。思わず笑みを返すがひきつつている。

「さあ、帰りますよ？」

「っ、つつっ！！ちよつと！あたしっ……………待った！！あたし……………まだ聞き込みします！！」

幸樹さんに手首を握られバンから降ろされたがあたしは踏み留まった。腕が引き切られるぐらい痛い踏み留まる。家に帰ったらされるであろう拷問に比べたら全然ましに決まっているんだ。

撤収つて。その為か！

やっぱりあたしの服に盗聴を仕掛けて、聴いてやがったな！うわああ！やべー！

帰りたくない。すげえ帰りたくない。帰ったら死ぬ。ぜってえ死ぬ！

「ほーう？タヌキに警戒を強めた矢先に聞き込みですか。おやおや、こちらから尻尾を出して掴まえてもらうつもりなんですか？」

「あ、はははは！動揺してる今だからこそ相手の尻尾を掴まえられるんじゃないですか！？」

「おやおやそうですね、では私達も同行いたしましょう」

「いやいやあたし一人の方がいいですよ、皆さんいたら警戒をされるじゃないですかあ！？」

「ふふ、そう言つて、何でしたっけ？童顔の学生の心を盗みに行くんでしょう」

「あつはつは！そんなわけないでしょうお兄ちゃん！！」

「すげえやべー！！」

絶対怖い笑顔があるから視ない。視たら死ぬ！終わりだ！畜生！ご褒美の一つだけでこんな目に遭うのかよ！？

助けてラトアさん！

ラトアさんは知らんぷりを決めてクラウンに乗り込んだ。畜生…あとで刺し殺してやる！！

こうなったら ……！！

「！」

あたしは幸樹さんの顔を目掛けて踏み留まった右足を振り上げた。

幸樹さんは顔を引いて避けたが、そんなことをしなくても蹴りは決まらない。狙ったのはバンの扉だ。

バンの扉を蹴り閉めた。

腕を軸に蹴りをやったので捻った形になり握られた手首を外すことに成功。あとは迷わず逃走。

車やバイク相手に走って逃げ惑うつもりはない。あたしは漫画喫茶に駆け込んだ。

「……おやおや。また命でも狙われたんですか？笹野の妹さん」

「……………」

入るなり出会したのはタヌキ。皮肉を言われたので、にっこりとだけ笑顔を返しておいた。

息を整えながら店内を歩き回る。それから蓮真君の姿を見付けるなり腕を掴み、個室に引き込む。

「なんだよ」と不機嫌そうに洩らす前に口を押さえ込んで携帯電話の画面を見せる。

“盗聴機がついてるから話さないで。一緒に探してくれない?”

はあ?とわけわからないと言う顔をされたが、この可愛い童顔の学生くんは手伝ってくれた。

盗聴機の形は見たからわかっている。幸い盗聴機は直ぐに見つかった。

胸元のフリルの下だ。

くそう…あの少女趣味の変態め。

握り潰そうかと考えたがそれで突入でもしてきたらどうしよう。いやいや、いくらなんでも揃って突入して事態を悪化するようなことしないだろう。……しないよね?

どうすんのそれ?

と蓮真君は携帯電話の画面を見せる。ちょっと待てとジェスチャーした。

…あ。多度倉さんにあげよう。そうしよう。他人を苛めてストレス発散といこう。

あたしは個室を出た。そうすれば、猫山さんと鉢合わせした。

「……え?わっ!?!びっくりしました!ゴスロリだあ!お似合いですね!」

「あ、ああ…うん。ありがとう」

一瞬あたしかどうかわからなかったらしく凝視したがわかったようで驚いたまま褒める。あたしは愛想笑いを返した。

「わあ……. かつこいいドレスですね。私のバイト代じゃあ買えないくらい高そう……」

だろうな。あのロリコンはいくらでもつき込むから。嗚呼でも手作りだっけ？ オーダーメイドの方が高いか。

「欲しいな……」と猫山さんはあたしの着た服を物欲しそうに見つめた。

「仕事はいいんですか？」

「あつ、いけない。ではごゆっくり」

なんかめんどくさいと思い追い返した。振り向いた瞬間に盗聴機をエプロンにつける。猫山さんは微塵も気付かずに行ってしまう。

「お前って意地悪だな……」

「なんとでも言っつてよ」

「男たらし」

「……それは嫌だ」

「あの彼氏、昨日刑事といたじゃん。どうゆうこと？」

あたしは肩を竦めながら店の隅に向かった。

「初めにいうと、あたしは手段の為ならコスプレもするし異性にキスだってするの」

「へー。そのゴスロリも手段の一つ？」

「そう。お兄ちゃんが外出を許してくれないならコスプレをすると約束するし、ストーリーキングしなければ次会った時にキスすると訳する」

「…….。よくわかった。椿が苦勞してることが」

「……ありがとう。お姉さん嬉しすぎて涙出る」

本当に視界が霞んできたよ。

「愚痴なら聞くよ、椿」

年下に慰められるあたし。本当この子、癒される。すげえノーマル。

「さっきあたしがキスした子はね、あたしが好きなんだって」

「うん」

「でもあたしは付き合い合わないって言っただけど……諦めなくてあたしと付き合ってるって言い触らしてるの」

「……そっか」

「盗聴機ついてたじゃん。もう筒抜けでお兄ちゃん達がさあ……嗚呼、帰ったら死んじちゃう……」

「つまりは逃亡してきたの？」

「うん。無理矢理連れて帰ろうとしたから……逃げてきた」

「……どうすんだよ？」

「どっしょっしょ」

涙目で頂垂れる。帰れない。すげえ帰れないよ。

「嗚呼、時間巻き戻らないかな」

「戻らないな」

「宇宙人襲来しないかな」

「襲来しないな」

「ドラゴンが人類滅ぼさないかな」

「滅ぼさないな」

「地球が太陽に衝突しないかな」

「衝突しない。お前、現実逃避が膨大だな。なんだよ、宇宙人襲来」

つて」

「だって………怖いもん」

にここにここにここにこ、と笑顔の怖い威圧感で拷問を受けるんだぜ。怖いだろ。

そう言えば本当、同情されて頭を撫でられた。この子超優しい。

「とりあえず居場所はバレてるから……逃げれるとこまで逃げてやる」

「お前って徹底的に逃げそうだな」

「面倒くさくなるまで逃げるよ」

「根性ねーな」

ここに居続けるのは色々まずい。兄と称して幸樹さんが連れて帰ってくるに違いない。寧ろ、タヌキを味方につけようかな。おや現実逃避？

味方につけたら今後便利そうだが、あの人嫌いだしなあ。

これも全て秀介のせいだ。

「次会ったら可愛い顔を殴つ……いや、叩いてやる」

「アイツ、嫉妬深いだろ」

「ん？よくわかったね」

「ぼくに敵意剥き出しの目を向けてた」

「あー、あの睨み合い。うん、すごい敵意してたよ。ふう………君は、暫くここに来ない方がいい。尻尾を捕まえられそうだから」

「ぼくは用なしってこと？」と蓮真君。

「お兄ちゃん達も動くし、さっきの……狩人の鬼って呼ばれてるあの子ども出入りするの。それじゃあ君の正体がバレるでしょ」

もうこっちで尻尾を捕まえられるから用なしと言えは用なし。否、多度倉さんとは違うか。これからも連絡をとるつもりだ。

「アイツが狩人の鬼？」

蓮真君は目を見開いた。

知っているようだ。当然か。顔はともかく、名前くらい知っ
ても可笑しくないだろう。

「あんな奴がかよ……」と苦い顔をする。聞いていたイメージをぶち壊してしまった模様。いや、実力はそれ相応なんだから軽く見ちゃいけないよ。とかちよつとフォローしてみた。

「ぼくも正体がバレて騒がしくなるのは嫌だから、出入りしないようにする」

そう蓮真君は従ってくれた。

「終わったら連絡するわ」

「ああ、じゃあその時に剣道を教えてやるよ」

「うん、よろしく」

「うん」

最後に蓮真君は「その格好。似合っ
てて可愛い」と言った。

「名は体を表す。紅色の黒猫」

漆黒の身体に紅色をつけた。紅色の黒猫。紅色を浴びた黒猫。

また窓から逃走をして人混みを避けて一人で歩いた。何処に行こうかと迷ったが結局、帰り道を歩んだ。

何処にも行く場所がないと言う事実。

猫ならもっと、隠れ場所とか色々あるはずだろう。フラーと消えては帰ってくる。自由気ままな猫。

あたしはそれになりたかった。

でも不器用でうまくできなくて　なりきれなかったんだっけ。

目立つ帽子をとってくるつとして着飾った髪とメッシュを解いて捨てる。怒られたらお金を渡せばいい。

髪ゴムはないので代わりに首につけたチョーカーで髪を束ねる。そうすると首の傷が目立つがそれは襟で隠せた。

帰る手段は電車だからそれなりに顔を隠すように、駅に入り、電車に乗り込んだ。通勤ラッシュで込んでいる電車なら服はともかく誰もあたしの顔を見ないだろう。

それに、身動きもできない満員電車なら殺戮衝動に負けたりしない。だけど流石に満員電車はキツかった。本当に身動きができなくなるようにぎゅうぎゅうだ。通勤帰りのサラリーマンや学生ばかり。溜め息が落ちる。

ガタンと揺れる度に人とぶつかる。それが不快だが、箱に閉じ込められては為す術はない。

なんて空言だ。

殺戮をやれば解放感を味わえるだろう。モラルなんて、容易くて脆い。

どん、と誰かと背中をぶつけても知らないふりだ。こんなぎゅうぎゅうでも他人が他人、皆が知らないふりをしている。

他人だらけの箱の中。

もしかしたら、この場で殺戮をやっても、きっと、誰も抵抗しないんだと思う。

あの時と同じように。

あの電車と同じように。

殺戮は成功してしまうんだろう。

ぼんやり、と思った。

なんだったかな。嗚呼、そうだ。それが人間の心理だとか。

「……」

ぼんやりと見つめた真つ暗な窓ガラスを見て気付く。背中を合わす、後ろ姿。

癖のついた黒髪を束ねて、くたびれたコートを着た男の人。

凍り付いた。息が止まる。

動けなくなった。

ガタン、ゴトン。

揺れる音しか聴こえない。

ガタン、ゴトン。

ガタンゴトン。

ガタンゴトン、ガタンゴトン。

「……」

口を開こうとして、でも言葉は何も出なく、何も言えなかった。

篠原さんは革吊りを握ったままうたた寝をしている。垂れた首が揺れるのがわかった。

嗚呼、疲れてんだね、篠原さん。

ちゃんと睡眠をとらなきゃ。

目の前の窓ガラスに映る暗い顔が微かに笑った。夢げに弱々しく俯きながら。

ガダン。

電車が停まった。

目の前のドアが開き、数人が降りる。

あたしは。

振り返って。

その背中に。

抱き付いた。

締め付けるようにギュッ、と起きても構わない。ただ、今だけ。ほんの一瞬だけ。
泣きたくなつた。

「！」

目が覚めて反応をした篠原さん。あたしは腕を放して後ろに歩み、電車を降りた。

「待てっ！」

篠原さんがたつた一瞬だけあたしの手に触れたが、すり抜ける。

振り返つた時にはもう遅く。扉は閉まつた。

背を向けたままあたしは眼だけをそこに向ける。こちらを見る、篠原さん。

こちらと、あちらの、境界線。

電車が動き出す。

篠原さんが何か口にした。ちょっと振り返つた横顔だけで、もうあたしだつてわかつたらしい。

「椿！」

聴こえるはずもない声が、聴こえる。

ガダン、ゴトンと線路を走り風を起こす。髪が乱れたから掻き上げて直してから、駅を後にした。

歩いて帰るにはまだ距離があるが駅には警察に捕まる。駅から離れて、行かなくてはならない。

それぐらい、いいか。

あたしはそんなリスクを侵したんだから。

警察に遭うことなくあたしは幸樹さんの家に辿り着いた。あのあとだから、拷問も適当に流せそうだ。

あーあ。何てバカなことをしたんだろう。篠原さんには、あたしが死んだことにするのが最善策だった。なのにひよっこり顔を見せるなんて。

あーあ。バカなことをやつちゃった。

後悔しちゃったっても、もう手遅れだ。

一人歩いてたあたしを、一体どう解釈するのかが見物だ。自嘲の笑いを洩らして、扉を開く。

家は妙に静かだった。

嵐の前の静けさ。

ちよっと怖じ気付いたが、何処にも行く宛がない上に警察があたしを探しているだろうから引き返せない。

リビングに入れば、全員が揃っていた。

一体どんな拷問道具を用意してまっているのかと思ったら、皆が困っていたのは藍さんのパソコンだけ。

「お嬢……………盗聴機を一体何処に捨てたの？」

「え？」

最初に口を開いたのは藍さん。

妙に空気が重い中、コーヒーターブルに足を置いてニヤニヤ笑う白瑠さんだけは楽しげだ。

一体何事だと思っていればパソコンから、声が聴こえた。

「わかった。笹野も、笹野の妹も殺そう」

盗聴機が拾った音声。

間違いなく、タヌキの声だった。

嵐の前の静けさ。

紅と黒の猫（後書き）

裏現実紅殺戮を覗いていただきありがとうございます。

次で—先ず終わりです。

そして続編も気が向いたら載せますのでお気に召したらどうぞ。

あたしが紅色の黒猫

紅い。紅い。紅い。紅い。紅い。紅い。
血は、紅い。紅い。紅い。紅い。紅い。
掌は、紅い。紅い。紅い。紅い。紅い。
染まつてる。紅い。紅い。紅い。血で。
狂った殺戮者があたし。
紅色の殺戮者があたし。
狂う裏現実者があたし。

紅色に染まるコートを羽織る。仕込んだナイフの重さの分だけ感じた。身体に浴びた返り血の重さは、微塵も感じない。殺戮した人間の重さなんて、あたしの肩にはかかってない。あたしは初めから背負ってなんかいないんだ。ブーツにもナイフを、カルドを腰に、腕に短剣を仕込む。準備完了で部屋を出る。

「準備できました」

そう言つてソファの肘掛けに腰を下ろす。既に準備が出来た一同がいた。

「じゃあ行こうか」

真っ白な服を着た白瑠さんが立ち上がって笑いかける。

翌日の夜に動いた。

すぐに動くには準備が出来てない為、今夜動くことになったのだ。

タヌキが幸樹さんに話したあたしを殺そうとした理由は、店で騒いでいたからだつた。

あまりにも殺人鬼をバカにした口振りが頭にきたと。紅色の黒猫を貶したことに反応したことは間違いない。そして、たまたまあたしが捨てた盗聴機で確信した。

タヌキは黒だ。

「不機嫌ですね、椿さん」

藍さんのバンで移動中に幸樹さんがあたしに話し掛けた。

「まさか。不機嫌ではありません」

あたしは刺々しく返す。少なくともご機嫌ではないのは確かだ。白瑠さんと違ってニコニコする余裕はない。寧ろ一人関係ない人間を引き裂きたい気分だ。

「ずっと、落ち着かなかつたもんねえ？」

ひゃひゃ、と笑いかける白瑠さん。あたしはちらつとだけ見て足元に視線を戻す。

髪をいじったり足組みを変えたりする。落ち着けない。腕組をして息を吐けば幸樹さんにクスと笑われた。

「落ち着きのない小娘だな」

扉の隅に座っているラトアさんがそう独り言のように洩らす。

「いい加減、名前で呼んでくださいよ。ラトアさん」

「紅色の黒猫」

「それは二つ名です。お忘れですか？あたしの名前は椿です」

そう言えば名乗るなんて久しぶりだ、とぼんやり思った。

「椿、か。花の名前だな」

「はい」

「……。何故隣にくる？」

「なんとなく」

なんとなく、ラトアさんの隣に座ってみた。

「ちゃんと話してなかったの。ラトアさん、歳いくつですか？」

「何故話さなければならぬ」

「待つ間の暇潰しです。それにあたし、吸血鬼に興味があるので」

暇潰しだけど、吸血鬼に話を聞きたかったのは本当だ。

「吸血鬼に興味だと？」とラトアさんは鼻で笑い退けた。

「お前は入りたてだったな。ふん、吸血鬼になりたいでも思ってたのか？」

「ええ、まあ。映画で吸血鬼のアクションを観て超憧れてたんですよ。でも人間は吸血鬼になれないんでしょう？」

当然だ、と言う前に「どの映画だ？」とそっちの話題の方に食い付いたラトアさん。

何故か吸血鬼映画の話で盛り上がった。

「あのヒロインはかっこいいですよ」

「アクションヒロインの中でずば抜けてかっこいいな」

「吸血鬼だっていう点がまたかっこよくてあたし好きなんですよー」

「あの映画は吸血鬼をよく描いている。大抵はアダルトばかりだからな」

「ですよー。しかも日本じゃあヒットしないのもあたし気に食わない」

意見が合っちゃった。

運転中の藍さんまで会話に入って、これが済んだらDVD観賞会をやるつという話になった。

そここうしてるうちに、例の漫画喫茶に到着。

「じゃあ合図のきっかり十秒後に五分間電気を切るからねー」

「了解です」

「よし、じゃあお決まりのアレをやりますか！」

「いつからお決まりになったんです……？」

張り切って白瑠さんが右手を差し出す。これをやるのは二度目だ。

「今回はチーム紅色の黒猫ですね」

「これやる度に改名するんですか？」

「ふん、幼稚だな」

「えー、楽しいじゃん。ぐふふ」

「ひゃひゃ、チーム紅色の黒猫！無事生還を誓って、さあっ！」

それぞれの右手を重ねてバツと放す。これをやった時は危うくあたしは死にかけてが大丈夫だろうか。

大丈夫だろうな。今回は一人行動ではない。右に吸血鬼、左に頭蓋破壊屋がついているのだから。

タヌキがまた殺し屋を雇っている可能性があるが、恐らく数が多いだけで実力は恐るほどではないと推測している。

あたしの勝ちは、一目瞭然なのだ。

どんなに偽者が殺し屋を揃えたところで、あたしが味方につけている殺し屋には勝てない。

バンを降りたのはあたしと白瑠さん、ラトアさん、幸樹さんだ。幸樹さんは電気を切る係。

あたしと白瑠さんとラトアさんは突撃係。

万が一の為に死なないラトアさんが盾になってくれるとかならないとか。ラトアさんはこれ以上ないくらいに嫌な顔をしていた。

それはそうだ。いくら死ななくとも痛覚はあるのだから、蜂の巣にされたらたまったもんじゃない。

罨がないかと警戒をしながら階段を上がり、二階の漫画喫茶に入ろうとした。

先頭に立つのはラトアさん。

自動ドアが開いた瞬間に、ラトアさんじゃなくてもわかる。血のおいが鼻にきた。

「んーひゃあ……こりゃ駄作だねえ」

死体が転がるそこに白瑠さんは無警戒に迷いなく入っていく。

動かないあたしに「生きている人間はいない」とラトアさんは言った。

直ぐ様あたしは中に踏み込んで死体を確認した。

数は十数人。その中に、真田がいた。覚えてる顔見知りには彼女だけだ。

生気のない目は恐怖に見開いている。彼女だけが、乱暴な手口で殺されていた。

パツクリと開かれた首の切り傷は何度も何度も切りつけられて出来たものだ。剥き出しになった骨にも傷ついているのがわかる。そして何で切りつけたのか、わかった。デザインカッターの刃が、骨に食い込んで残されている。

この手口。これは。

「暴力」

駄作だねと言った白瑠さんがそうあたしが見下ろす死体のそばにしゃがんで言った。

「とんだまねっこだねえ。真似が下手すぎる。真似ようとしてるのかも謎だね。ひゃひゃ、ばっかみたあい」

白瑠さんは、笑いつつも細めた眼だけは笑っていなかった。貶している。

「ふん。誰も自分のことなんてどうでもいいんだ、と戯言を喚く子供の茶番だな」

一通り店内を見回したラトアさんも貶すように鼻で笑う。

「あーそうそう。この人ならわたしのことを理解してくれるに違いない！なんて戯言な幻想を抱く感じ？あー気持ち悪う、んひゃひゃひゃ。全く、勘違いもほどほどにしてほしいよねえ。会ってもいなくせに勝手に同じ人間だ！って決め付けて同じことが出来るって思い込んで……あーあ、だめだなあこねえはあ」

「華麗さも鮮やかさも美学の欠片もない」

「ちゅーとはんぱな破壊行為。人形でも切り裂いてるよ」

「全くだ」

「こんなんでつばちゃんに成りきってんだぜ？評判悪くなっちゃうよお、ねえ？つばちゃん」

二人の話はわかるようでわからない。いきなり話を振られても、あたしは別に評判を気にしているわけではない。

死体を見ただけで人間性がわかったことに驚きだ。なんだっけ？ド
ラマでみたな。ふるふあいいりんぐ？

「偽者は脆い。簡単に恐怖で支配できる。…少々厄介だな」

「厄介？そんなことないよ。相手はドが何百個もつく素人だもん」

「この現状をどう捉えます？逃走したんでしょうか？」

脆いや厄介や素人の云々の前に身柄を確保しなくてはならない。

「どうせ綺麗に処理するよう業者に頼んだっしょ」

「幸。聴こえたか？標的は逃走。そう遠くに行っていないだろう」

「ラトア、追えますか？」

「追える。行くぞ、椿」

白瑠さんが立ち上がったあと、ラトアさんが通信機で幸樹さんと連絡して初めて名前を呼び、先を歩いた。
喫茶を出て、バンに乗り込む。

「どう追うんです？」

「ラトアの鼻ですよ」

既に戻ってきた幸樹さんが答えた。気付けばラトアさんの姿は何処にもなく、通信機から声が聴こえてくる。ラトアさんが向かう方角にバンを走らせた。

ラトアさんは屋上から屋上に飛び回っているのだろうか。見てみたかった。

「ん…？この方角は…」

「んひゃ？なんかあんの？」

「いえ………ただ、駄だと思って」

昨日歩いた道だからすぐにわかった。

まさか電車で逃走したわけではないだろう。まだ時間がそんなに経っていないなら、終電はとうに過ぎているから電車ではないだろう、と思ったがラトアさんが停まったのは線路の上だった。

「この辺にいる」

フェンスにしゃがんで乗っかるラトアさんはそう答える。

「この辺？」

「この付近においがある。よくここをさ迷うのか、或いは隠れ家があるのか、あちこちにある。新しい血のおいもするから、この近くに間違いなく居る」

なんともアバウト。犬みたいに突き止めるにはにおいが多すぎるそうだ。

「じゃあ手分けして探そうか。つーちゃん、行こう」

「どうしてあたしが白瑠さんと一緒にフェンスを乗り越えなくてはいけないんでしょうか」

手を掴まれそのままフェンスにつれていかれそうになる。

「だってつーちゃん、一人になったらまた不意打ち喰らっちゃうでしょう？」

「毎回不意打ちを喰らってません」

そう言い張っても決定事項らしく、フェンスを登る羽目となった。

「じゃあお嬢。瀕死の怪我を負わないように」と藍さんが笑いかけ

る。

藍さんは非戦闘員なのでバンから降りないだろう。

「椿さん」

フェンス越しに幸樹さんに呼び止められた。

「死にかけたら許しませんからね？」

「…わかってますよ」

病院食チックはもうこりこり。

「お気をつけて」と優しく微笑みられた。

「そちらも」とあたしは返す。

幸樹さんは藍さんと一緒に駅前を探すらしい。

あたしと白瑠さん、それからラトアさんと一緒に閑散とした車庫を調べることになった。

駅、か。

なんともムカつく場所に逃げてくれたものだ。

でも。あたしの死に場所には。いい場所だろう。

そう一瞬だけ思った。

「白瑠さん」

「なあに？」

「あたしのまねっこと、白瑠さんのまねっこと刑事は違っんですか？」

「違っねえ」

真っ暗な電車を覗いて中を確認しながら、あたしは訊いてみた。白

瑠さんはあっさりと答える。

そう言えば、真っ暗な電車を見るのは初めてだ。

「まねっこ刑事は俺の手口を真似ようと必死だった。頭蓋骨粉碎っていう芸当がね。でも今回の偽者の猫は手口を真似ようとしてない。真似ようとしているのは手口じゃなくて『紅色の黒猫』っていう存在だ。その存在になりたくて殺しをやっただけ。君が銀行強盗したなら銀行強盗をしただろっね」

「……………そうゆうもんですか？」

「そうゆうもんだよ」と白瑠さんはいつもの調子で笑う。

「でもそれは白瑠さんでも同じじゃないんですか？貴方が銀行強盗をやれば銀行強盗をしたんじゃないか……」

「えー？それじゃあ俺、頭蓋破壊屋じゃないじゃん」

「……………ああ、わかった。手口ですね。頭蓋破壊が芸当すぎてまねっこ刑事は貴方を愛した。それであたしの偽者は、あたしが何をしてもそれを真似る。あたしというか、『紅色の黒猫』に似ていると思っ込んでいるから」

ちよつと遅れて理解する。憧れを抱いている部分が違う。

あたしが何をやらかしても偽者はあたしに憧れを抱いた。それがなんであれ、あたしの、つまり『紅色の黒猫』の存在に惹かれた時点で。

「似ていると言うより、鏡と思ってるだろっね。鏡の向こう側の自分」

「……………うん」

「気持ち悪いでしょう」

ひゃひゃひゃひゃ。肩を震わせて白瑠さんは笑う。

「でも偽者とっちゃんと同じじゃなきゃ似てない。微塵もね。だ

「つて偽者は人形相手に切り刻んでるのがお似合いだもーん」

愉快そうに、でも不愉快そうに、機嫌よく、でも不機嫌に、白瑠さんはニコニコと笑いかけた。

「偽者は馬鹿だね。喚き方を間違ってる不器用な人間。そんな人間を甘やかす人間も相当馬鹿だ。そう思うだろ？」

「……………喚いてるんですか」

「喚いてるんだよ。『誰かわたしをみてー！』つてね。愉快だったろうねえ、騒がれて、注目されて、優越に浸って幸せな気分浸ってただろう。一時だけ」

ニヤリと意地悪な笑みを洩らした。今度は可笑しそうに笑う。

「でも直ぐに藍が否定の情報を流した。ネット社会はこわいこわい、んっひゃひゃ。頭にきただろうねえ。つーちゃんの貶す口調はもっと効いた。だから殺し屋が襲ってきたんだ」

脆い。否定されればすぐに逆上するような、そんな人間。だから厄介。

追い込めた。そうゆうことか。

「何故殺し屋だったんでしょ？」

「さあー？ 駅で殺戮じゃなきゃ『紅色の黒猫じゃない』とでも思ったのか、或いは甘やかす人間のお節介じゃないのかなあ。どちらにせよ、もう制御できなくて破壊行為に及んだってことだね。あれは恨みがあつて切り刻んだんだよ」

あたしはもう口を閉じた。

全く至極不愉快だ。

逆上での破壊行為。逆恨みのなにものでもない。

そんな人間があたしの鏡？

そんなわけあるか。あたしは鏡に映る自分に見とれる趣味なんてない。

「つうーばあーちゃん」

一人不快になっていれば白瑠さんが顔を近付けてきた。

「俺達は、そんな偽者とは違うよ」

そう笑いかけてあたしの頭を撫でる白瑠さん。
違う。

狂った殺人者だけど同じじゃない。違う。

何が？何処が？

感情も理由も美学も動機も、まるごと無いも同然だ。
殺人は殺人なのだから。

「通信機。つけてること忘れてないか？」

電車の屋根からラトアさんが声をかけてきた。ちっ、ラトアさんが暗闇から着地するのを見逃したぜ。

そう言えば通信機はただ漏れだっけ。別に聞かれちゃまずい話ではないので聞かれてもいいのだが。

「二つ隣の車両の扉が開いている」

その言葉が意味しているのは、“そこにいる”と言っことだ。

「電車好きなんですか」

「さーあ？つーちゃんが好きだと思ってるんじゃない？」

地上に降りたラトアさんの案内で、その電車に向かう。

「タヌキを見つけてました」

通信機から報告が入る。

「殺しますか？」

「……任せます」

「そちらは殺さないように」

「わかってますよ」

昔のよしみで殺しにくいんじゃないかと思ったが、殺し屋なのだから殺せるだろう。それに殺さない手段もある。それは彼に任せよう。殺さないように、と注意されて肩を竦める。

怪我を負うな、殺すな、って丁度よくできないっつーの。あたしは極端なんだ。

ラトアさんの言う通り、二つ隣の電車の扉が開いていた。

ただあたしは白瑠さんに目を向ける。最初からわかっていたのかそのつもりだったのか。あたしをドアに押し込んでくれた。

連絡する、と言いかけたが通信機存在を思い出して言うのをやめる。

何も言わずに白瑠さんは笑顔で手を振った。

ラトアさんはただ突っ立てあたしを見送る。

あたしは何も言わずに、真っ暗な車内を歩いた。

街灯で僅かに視える中で、眼が慣れて真っ直ぐ先を見つめる。灯りのない電車とは珍しくていい。新鮮だなあ、と暢気なことを思う。揺れる音なんてなく、足音だけが沈黙の車両に響く。

広告は暗くてよく見えない。読む気なんてないから問題ない。

暗闇が、血と入れ替わって見える。思い出す。

血塗れの車内。

死体が転がり、血溜まりが広がる。

ガタンゴトン。揺れを思い出す。

息を吸っても、血のおいはいはしない。

ガタン、ゴトン。その音を揺れを思い出して、昨日のことを思い出した。

抱き締めた背中の感触は思い出せる？

それは無理だ。曖昧でなんだったかなんてどんなだったかなんてわからない。

たった一瞬だった。

もう一秒。ううん、もう三秒ぐらい、もう一分ぐらい、すぐり付いて抱き締めたかった。そうしていたかったんだ。

境界線のあつち側。

優しくいい人の篠原さん。

安堵に包まれたくて、あの手に撫でられたくて、でも所詮は裏と表。届かない。壁がある。あたしはそちら側の人間なんかじゃない。

優しさは要らない。安堵なんて要らない。暖かさは、天国から地獄に落とす材料でしかないんだ。

ただ、冷酷に何も求めず何も感じずに何にも靡かずにいればいい。期待なんて打ち碎かれるだけ。

希望なんて光を失うだけ。

何も、望んではいけない。

裏切られる。

「……………」

漸く、見つけた。

偽者の殺戮猫は、ど真ん中に横たわっていた。

丸まって、猫のように眠るように目を閉じている。

「みーつけた」

その声を掛ければ、偽者は目を開いてぬくくとゆっくりとした動作で起き上がった。

不機嫌に睨む目付きで、あたしを見上げる。

「…何の用ですか」

今にも噛みつきそうな口調で

猫山さんは吐き捨てた。

「自分を棚上げにしますが、おいたが過ぎましたね。猫山さん」

あたしは冷めた口調で言う。

「車内で殺戮後に自分のバイト先で自慢気に言い振り回して、楽しかったですかあ？」

感情を込めず淡々と、椅子に腰を降ろして続けて言う。

「あたしに貶されて、悔しかったですかあ？」

「……………」

「生きて戻ってきて、さぞ驚いたでしょう？あたしは貴女が殺しにくることを期待してたんですよ」

わざとらしく、溜め息をついた。

「貴女は自首をします」

それを口にした瞬間に、猫山さんは動いた。立ち上がるのと同時に

長包丁を振り上げて襲いかかる。
あたしは横に飛んで避けた。
長包丁は深々に突き刺さる。

「人間以下のカース」

「うあああつ！！」

面白いくらい逆上する。

椅子から長包丁を引き抜いてあたしを引き裂こうと向かってきた。
真っ直ぐ過ぎて避けるのが容易い。これは笑える。ふつとあたしは笑った。

「なんで電車で大量殺人をやったんですか？偽猫さん」

「うがああ！」

「なんで店の人間を殺したんですか？偽者さん」

「偽者じゃないっ！！！！」

「偽者じゃない？」

嘲笑いながら車内を飛び跳ねて長包丁を避ける。

「じゃあ、アンタ、誰よ？」

座席の上でポールを軸にぐるり回って、見下す。

「我は紅色の黒猫！！」

怒鳴るように名乗りをあげて彼女は長包丁を振った。跳ねてあたしはそれを避けてから腰からカルドを引き抜き、振り下ろす。

ガキーン。

刃物の刃がぶつかり合い弾く。

「違う。貴女は偽者。知ってる？貴女がやってるのは　猿真似」
「うっ、あああああああああああ！！！！！」

咆哮。

無邪気で無垢な顔なんて跡形もなく、歪んだ表情で彼女はあたしに切りつけようとしたり。その全ての攻撃をあたしは弾いて受け流す。全く。仮面と笑顔の見分けができないなんて、あたしも視力が落ちたものだ。

盗聴機が拾った音はきつちりと藍さんが録音していた。猫山さんにつけた、盗聴機。

「あの女を殺して」

そう猫山さんはタヌキに言った。接客をしている声とは似つかない声で、あたしを殺せと頼んだ。

「なんでまだ生きているの？殺して。殺してよ。あの服が欲しい。欲しい」

「……できないんだ。昔の誼の妹だから…敵にするには少し骨が折れる奴なんだ。だから、できない。彼女だけは許してあげて」

「貴方に殺せないならわたしが殺す。許さない。わたしを笑ったのよ。嘲笑ったの。貶したのよ。紅色の黒猫を。殺してやる。恐怖で震わせてやる」

全く、顔に似合わないことを言いやがる。

タヌキと猫山さんがどんな関係かはわからないが、どうやら白瑠さんの言う甘やかす人間がタヌキだ。

だからタヌキは、あたしと幸樹さんを殺すと言った。

甘やかすとろくな人間にならない。

「わたしが紅色の黒猫だ！わたしだ！紅色の黒猫がわたしだ！紅色の黒猫がわたしで私が紅色の黒猫なんだ！！！」

「……ちっ。うぜーよ」

あたしは苛ついて思わず舌打ちをした。切りつけては殺しかねないので蹴り飛ばす。

女の子の体は容易く吹き飛び転がる。

耳元では幸樹さんが銃撃でも受けているのか煩い。だから通信機を外してポケットにしまふ。それでもこちらの会話は聴こえるだろう。

「あの刑事もキモくてウザくてしかたなかったけど、アンタもウザイ。意味がわからない。どこに憧れを抱く？ただ殺してるだけだぜ？人間を一方的にね。それがかつこいいと言っの？アンタさあ、頭大丈夫？精神科に行けよ」

「うるさい………煩い、煩い煩い煩い煩い煩い！！てめえなんか理解できるか！！」

「したかねーよ。てめえみてえなキモいやつ」

冷たく吐き捨ててやれば、彼女はカツと赤面した。

「今までどんな人生を送ろうが、あたしはお前に同情も共感もしないよ。きつと。どんなに真似事をしたって、あたしってね、自分が大嫌いだから、胸糞悪い」

そんな彼女にっこりと笑顔で告げる。

猫山さんは飛び掛かりあたしの心臓目掛けて包丁を振り上げた。それを叩き落として挨拶伏せ、もう一度蹴り飛ばす。

「げほっ……う、ぐっ……！」

「本当なら殺してやりたいんだけどね。でもあたしの名前を勝手に広めた代償は受けてもらわなくちゃいけない」

「あ……!?!?」

「特別にプレゼントしましょう。表で好きなだけ、自分が電車を血塗れにしたって言えばいい」

「!?!」

まだ床に腹を抱えて丸まっている猫山さんにカルドを振り下ろせば、転がって避けた。

「くつくつくつ……。監獄の中で、ね」

体勢を直した彼女に踏み込んでバグ・ナウを振り上げる。間一髪猫山さんは避けて下がった。セミロングの髪の毛が束で斬れる。

「多分上手くすれば精神病棟に閉じ込められるだけで済むよ。まあ、保証はしてあげませんが」

クスクス笑って、走り出す猫山さんを追う。
振り回すバグ・ナウはポールをも切り裂く。カルドでつり革を斬って荒らす。

その音が、逃げる猫山さんの恐怖を増幅することを知っている。
猫山さんの逃げ足が遅すぎてあまり長くは走らずにすんだ。直ぐに追い付いて、あたしは彼女の膝を蹴り飛ばした。

「ちょっとくらい対抗したらどうなんです？猫からもう鼠に成り下がりました？」

仰向けに派手に倒れた猫山さんの腹に足を乗せて踏んづける。

「あああつ！」

あたしの足を振り払って猫山さんは立ち上がって長包丁を振り回した。がむしゃらに滅茶苦茶に、まるで蜘蛛の巣に引っかけた昆虫みたいに暴れる。

あー、つまんない。

バグ・ナウを長包丁に引っ掻けて取り上げて闇の方に放り投げる。凶器はそれしか持っていなかったらしい。終わりだな。

カルドの柄で溝を叩き、二段蹴りを喰らわせる。そのまま倒れることを許さずに、頭を掴みポールに叩き付けた。

呻き声を洩らして猫山さんは崩れ落ちる。

「不愉快。アンタさ、何様？ちゃんと自己分析しなさいよ。あの人はあたしに似てる！だからあたしはあの人になれる！　なんてバカな戯言を思ってる？気色悪い。似てるだの同じだの、勝手にほざくな」

「…あなた……何言ってるの！？」

「まだわかんないの？」

呆れて溜め息を溢す。

あー、もう疲れた。

もう二人を呼ぼうかと思った矢先に、パツリーン。

窓ガラスが割られた。

四人の男達が襲撃。裏現実者

タヌキが雇った殺し屋か。

「！」

あたしに出来た隙について猫山さんは左足にしがみついてバランスを崩そうとした。あたしは左足の膝で猫山さんを蹴って車内に侵入

した男三人女一人の殺し屋から一旦距離を取る。

「随分と、過保護な、狸なこと」

ギリリギリリ、とバグ・ナウで床を引つ掻く。

もしかしたらタヌキの元にも殺し屋がいて幸樹さんは苦戦しているかもしれない。通信機をつけ直したいがそんな暇はくれないようだ。

「ははっ！はははっ！死ね！死んじゃえ！！きゃははははははっ！！」

勝った気でいる猫山さんは高らかに笑う。味方がたつた四人駆け付けただけでどうして勝った気でのだろうか。

「何が可笑しいの？偽者さん。あたしはタヌキさんに仕向けられた殺し屋を五人返り討ちにしたんだけど」

「はっ！あいつらと比べるな。おれだってあいつらを一人で血祭りにできる」

猫山さんに言つたつもりが返事をしたのは一人の男。下品な笑みをにやにやと浮かべている。

「ふうん…？腕に自信あるの？お兄さん達」

しゃがんだ体勢であたしは見上げた。二十から三十代だろう。

「プロの殺し屋よ。チームレジェンドと言えばわかるでしょう、お嬢ちゃん」

女が見下しながら言った。名前負けしてそうだな。

「さあ？聞いたことありませんね。あたしは成り立てで、裏現実のルールさえイマイチ知らないんですよ。わかりやすいように、頭蓋破壊屋より強いかわいさを答えてくれると嬉しいですよ」

立ち上がって背伸びをする。そんな隙だらけのあたしに飛び掛からず、殺し屋達は失笑した。

「そんなこと訊いてどうする？」

「師匠より弱ければなんとかなると言うことで、殺戮します」

「はあ？師匠？頭蓋破壊屋の弟子とでもぬかすのかよ！そうだとしなくても！頭蓋破壊屋だって殺せるぜ！」

「へえ、そりゃすごい。是非殺ってるものなら殺ってくださいよ、その辺にいますので」

「下手な冗談を言うお嬢ちゃんね」

「冗談は嫌いです。でも頭蓋破壊屋を殺せるっていう冗談は面白かったから、貴方は殺さないでいてあげます」

あたしは、頭蓋破壊屋のように、笑みを浮かべた。

「その他三人は、殺戮してあげる」

屋内ならあたしの得意フィールド。車内ならなおさら。

だつてここは。

最初に殺戮した場所だ。

あたしはスタートダッシュで女殺し屋の懐に入り、首を跳ねた。その勢いを殺さず身体を捻ってバグ・ナウを女の斜め後ろにいた男の首を引き裂くため振り下ろす。座席に足をついて、飛び上がり、その足を下品な笑みを浮かべていた男の顔に叩き付けて蹴り飛ばし、着々と同時に最後の一人の喉元をバグ・ナウで引き裂いた。

血飛沫と返り血が酷く、べったりと顔から血をまたもや被ってしまったので、手で拭う。

「あ……あ……？」

「……な、なな……何者だよ!？」

生存している二人から余裕は消え失せて困惑と恐怖の色を隠しませずあたしを見上げる。

「
紅色の黒猫」

あたしは無感情にその名前で名乗る。

「別に覚えなくてもいいですよ?」

それから無邪気を装ってにっこりと笑ってみせた。

「べ……紅色の黒猫……!?あいつ!？」

倒れたままの男は起き上がるのを忘れて後退りをする。

「そ、その女ならアンタの好きにしろ!お、おれは命がほしい!見逃してくれ!」

そして無様にも猫山さんを、売った。

「別に貴方に言われなくても好きにしますよ。それに、あたしはもう貴方を見逃してあげました。命乞いをする相手を間違えてます」

カルドを振って血を振り払ってから鞆に収める。

がしり、と男の顔を闇から出てきた白瑠さんが驚掴みにした。

「んひゃひゃひゃあ。君が俺を殺せるってほんうとお？」にやにや、と白瑠さんは可笑しそうに笑う。

「ぶあーあ、頭蓋破壊屋でえす」

そう名乗って、男が命乞いを、悲鳴を上げるよりも先に、頭蓋を破壊した。

邪魔は排除。

「通信機を持つ意味あるのか。ちゃんと聴いておけ。幸の方はカタがついた」

音もなく座席に腰を降ろしたラトアさんが言う。幸樹さんはもう又キを負かした、か。

それではこちらは仕上げにはいるとするか。

「あ…あなたが………紅色の黒猫……」

「ん？嗚呼、初めまして。どうも、本物の紅色の黒猫です」

演技混じりにそう言って大袈裟な素振りで会釈をする。

クスクス、と左右で白瑠さんとラトアさんが笑った。今がそんなに可笑しかったのだろうか。まあ、いい。

「そんな…あなたが………嗚呼、何てことなの…紅色の黒猫が………わたしに会いに来てくれた！」

恐怖のあまり壊れてしまったのか、うつとりした顔で猫山さんはあたしを見上げた。歓喜の声を上げる彼女は鳥肌が立つほど気色が悪い。

猫山は眼を見開いたまま停止してあたしの罵声を聞く。ちゃんと脳味噌に届くようにあたしは見据えて吐き捨てる。

「お前が憧れてんのはあたしなんかじゃない！勝手に造り上げた幻想の『紅色の黒猫』だ！幻想に恋して勝手に踊ってんだよ！」

「ちがつ…！」

「違う！じゃあお前はあたしの何を知ってるんだ!？」

震えて首を横に振る猫山さんに責め立てるように問い詰めた。

「車内の殺戮を見た？被害者なんて見たことないでしょう。アンタは架空の人間に幻想を抱いて憧れて成りたがって猿真似してばかりつてるだけなんだよ」

「そん、…違うっ…！知ってる！わたしは知ってる！あなたはつあなたは！殺戮が楽しくてしょうがない！！わたしが裏現実に入ったのと同時で！頭蓋破壊屋に並ぶ神の域の存在！冷酷で、誰も信用してない！誰にも靡かないで周りを狂わせてそれが楽しくてしょうがない人なんだよね！？自分を理解しない人間も何もかもが嫌いで殺したい！そうでしょ!？」

震えながら今にも脚にすがりそうな彼女は悲鳴のように言った。それに対してあたしは冷たく見下して告げる。

「それがアンタの幻想だ」

見た目だけで中身を決め付けられるのに、会いもしないでそう決め付けられるなんてたまったもんじゃない。

「知ったかぶって、理解ぶってんじゃねーよ。イカれ女」

しゃがんで、視線を合わせて、淡々と云う。自分を柵にあげて。

「誰かを理解できる人間なんて存在しない、あたしはそう思ってる。アンタ、何一人になってるんの？自分に興味を惹かせる方法、間違っ
て、独りぼっちになってるわよ。理解者がほしいの？あたしはなら
ないわよ。なれないよ。あたし、貴女のこと大嫌い。頭にきてるの。
おわかり？」

返答なんてない。

「タヌキは？アンタの理解者なの？」

「……………」

「訊いてんだよ」

答える。絶望した顔の彼女の首を掴む。

「……………あんなの……………ただの手足……………ただの道具……………！理解者は貴
女だけ……！」

「ふうん。アンタのこと微塵も好きになれないわ。気色悪」

あたしはパツと放す。触りたくもない。

「もういいや。事情は勝手に推測しておくわ。すぐに忘却してく
けど」

あたしは立ち上がって背伸びをする。もう完全に飽きてきた。つま
らない。

面白い要素は何一つ見当たらない。存在しない。

「じゃあ、あとはラトアさんに任せますね」
「…何か言っているぞ」

座席に座ったままのラトアさんは猫山さんに目を向けていた。耳をすませば、確かに何か言っている。再びしゃがんで「何です？」と問う。

「殺して」

生気のない、何もかも諦めた声で、そう囁いた。

「貴女に殺されて死にたい」

とんだファンだ。

あたしは溜め息よりも先に、にっこりと笑った。

「いやだ」

頭蓋破壊屋のような、猫のように目を細めて、楽しそうなフリをして、笑う。

そして思いつきり、否定を込めて強く答えてやった。

「殺し、楽しくないもん」

立ち上がり、もう二度と彼女に目を向けない。

「じゃあお願いします、ラトアさん」

「……………もう、十分に恐怖を植え付けたようだがな」
「まさか」

あたしは肩を竦めて、ラトアさんの横を通り過ぎる。

身代わりとして警察につけ出す為に、恐怖で支配するんだ。マインドコントロール。恐怖で隙だらけの脳内に望み通り自分は紅色の黒猫だと植え付けてやる。全ては自分がやったと、言わせるのだ。裏の歴史を生きてきた、闇を生きてきた吸血鬼だからこそ、簡単に出来る。とか。

簡単に言えば、催眠術だ。

人間ではできない、吸血鬼だから出来る。芸当だと、幸樹さんは言っていた。

「幸樹さんとこに行きますね」

欠伸を洩らしてあたしは一人電車から降りる。

ラトアさんから居場所を訊いて向かう。白瑠さんは口を閉じたままだった。

幸樹さんの元に着けば、まだ、タヌキは生きていた。

隠れ家であろう部屋は弾丸の穴や斬り込みで滅茶苦茶。死体は一つだけ。

「頼む！！あの子を殺さないでくれ！！妹がいるならわかるだろ！！
？あの子は……妹みたいな存在なんだ！頼む！！見逃してくれ！」

立ち尽くす幸樹さんの脚に無様にもすがり付いてそう頼み込んでいた。

「……哀れですね、タヌキさん」

「……紅色の……黒猫……」

声を掛ければ、二人は振り返った。幸樹さんからもうあたしが本物だと聞いたのだろう。そもそも、名付け親は幸樹さんだ。

「そんな無様になってまで守る価値のない人間です」

「オレには大事な子なんだ！」

「ふっ……。彼女、貴方のこと、手足だと道具だと言ったんですよ？ 貴方が想ってても、彼女はなんとも思っていない。愛しても、愛されません。今後も、ずっと」

あたしはしゃがんで視線を合わせて、にっこりと微笑んだ。
そうしてもう一度云う。

「アンタ、哀れだ」

尽くしても、想いが届かない。尽くす相手を間違えてる。大事にする相手を間違えてる。愛する相手を間違えてる。
気付く。それは破滅の元凶だ。

「彼女は貴方の何もかもをダメにしています。想いも愛も。なんで甘やかしちゃったんです？」

別に、答えは必要としていない。

「さて。妹を失ったところですし…選択肢を選ばせてあげましょう。殺されないか殺されるか。あたしに関わらず生きることを約束するなら見逃しましょう。どうします？」

生か死か、本人に問う。

本人　タヌキは、俯いたまま囁くように答えた。

「殺してくれ」

だから、と付け加える。

「あの子は見逃してくれ」

全く、と溜め息を溢した。

「それはできません。全く、哀れな人だ。無駄にしてんじゃないよ、優しさを愛を命を。もうちょっと、まともで、自分の存在を有り難く思っている人を大事にしないでよ」

ばからしくて笑えない。

あたしはカルドを掴んでもう一度問う。

「死にますか？生きてますか？」

「殺してくれ」

答えは、変えなかった。

ぐしゅっ、と見覚えがあるナイフがタヌキの喉元に突き刺さる。

幸樹さんが、殺した。

一思いに？要望に？どうだかわからないが、幸樹さんはタヌキを殺した。

「あちらも終わったことですし……帰りましょうか、椿さん」

しゃがんだままのあたしを抱き締めるようにして立たせて、幸樹さんは穏やかに言った。どうやら催眠術も済んだらしい。

幸樹さんがタヌキから聞いた事情。

あたしが電車を血塗れにする少し前に、猫山さんは家族を皆殺しに

したそう。皆殺しにして、そのあと、助けを求めたのが通っていた漫画喫茶の店長であるタヌキ。タヌキは助けることにして、死体を処理した。

それを機にタヌキは彼女を裏現実に誘い、面倒をみることになったと言っ。

裏現実を知り、そのあと直ぐにあたしのニュースを見た猫山さんは強く惹かれた様子だったそう。

紅色の黒猫という名を知り、火がついたように騒いでいた、と。最初はかっこいいのだの、凄いだの、を言うだけだった。しかし、ある日。血塗れになって帰ってきた彼女はこう言った。

「我は紅色の黒猫なり」と。

タヌキが処理を頼むより早くに彼女がやらかした血塗れ電車は発見されて、ニュースに大々的に放送されることになった。

もしも処理が間に合っていたならば、あたしは動かなかっただろう。ネットで言い触らしているだけなら、あたしは眼中にもいれなかった。

この胸糞悪い気分で終わりを迎えることもなかったはずだ。

あたしと彼女は似てる？

そんなわけない。

あたしは家族を殺してないし、殺戮後に誰かに助けを求めなかった。白瑠さんが現れても、あたしは助けは乞うことはしなかった。

彼から手を差し伸べたのだ。

だから。

違う。

この件は終りだ。

気分悪いまま幕を閉じる。

すつきりも、しないまま終わり。胸糞悪い。

そんな気分は長続きしなかった。

猫山さんを警察署に置き去りにして帰ってきた翌日に、あたしは拷問を受けていたからだ。

「さて。先ずはどうしてキスをしたかの理由をお訊きしましょう」

にっこり、目の前にいる幸樹さんが優しく威圧感を突き付けて言う。顔が俯いてしまうのは当然。

あたしはリビングのテーブルに座らされて、幸樹さんと藍さんに囲まれていた。

ラトアさんは朝なので熟睡中。畜生。せっかく仲良くなってまともな味方が出来たと思ったのに。

白瑠さんは、テレビの前のコーヒーターブルにすがり付いている。むっすりした顔。

「ぶー……………」と口を尖らせていた。

「えーと……………」ほら。秀介さんと裏現実者を殺した日。あの時にストーキングしないという約束を……………守ったら……………してやると……………」

「あー、なるほど。なんですか？椿さん、貴女は手段のためなら身を削るのも構わない。そうなんですか？」

「……………あの場合……………それが最善だと思っただんですよ……………。ほらっ！幸樹さんだっけ秀介くんが家に突撃するのは困るでしょ？」

「あつれー、確かお嬢。シユウ、って親しげに呼んでなかったあ？」

「藍さんは黙ってください！今幸樹さんと話してるんです！！」

二人から尋問。

拘束され無理矢理聞き出されるよりでしたが、しんどい。

何故か秀介との会話は録音されていてそれを何回も再生して言葉の意味を一つ一つ聞いてきた。勘弁してくれ。

あたしは年頃の女の子なんだ！

でも交際するつもりはない！

だからといって遊んでるわけじゃない！

数時間にもわたる拷問の末、幸樹さんからある約束を交わされた。

「手段のために自分の身体を売るのはもう二度としないでください。コスプレも、キスも、当然寝るのもいけませんよ」

誓ってください、と幸樹さんは小指を立てて差し出す。

指切り？子供扱いしてるのかな…。

指切りをすればこの拷問から解放されるなら、とあたしは右手の小指を絡ませた。

そうすれば微笑んだ幸樹さんはあたしの頭を撫でる。

大きくて包容力がある優しい手がくしゃりと撫でた。

そう言えば、あたしって。

今、あたたかい場所にいたんだった。

あまりにも当たり前で忘れていた。

当然だ。当たり前が消えた時の喪失感は、酷いくらい大きい。

当たり前前の、あたたかい場所。

あたしはこれでも この家に帰ってきて安堵してる。

きつと ここで生活して、幸せを感じているはずだ。

でもいつかは、ここも、無くなる。

だからあたしは。

だから。

覚悟してる。

最初から、失くすと覚悟している。

してる、フリをしているだけ。

それは知らないフリ。

きつと酷いくらい強烈な痛みなんだと思う。

でも。

失う時はきつと。

きつと。

あたしが死ぬ時だ。

ガタン、ゴトン。

目を閉じて、揺れを感じて、音を聴く。

ガダンガダン、ゴトン。

静かで穏やかな一時だけ、眠る。

テレビは今、『“レッドトレイン”犯人逮捕』のニュースばかりが流れている。思惑通り、偽者に罪を擦り付けることに成功した。犯人は自分がやったと供述をしている。そう言うようにラトアさんが細工したから当然だ。誘拐されたと思われるあたしのは、殺したと言わせている。

篠原さんが 何も言わないなら、きつと死んだことになるだろう。あたしを目撃した彼は、何をしてるのか。戻ってあたしを捜したのかな。誰かに見たと言ったのかな。あたしは生きている、と言い張るだろうか。

あたしは、それを知ることはないだろう。

知ろうともしないだろう。

もう。あたしは。

表では存在しない人間だ。

裏だけの人間。

あの人と同じ。

世界に似ている人間は、きつといるはずだ。人間は似たり寄ったり。分類すれば少ない。

でも、同類はあの人だけだと思う。同類の中で限りなく近いのは、

あの人だけ。

あの人と偽者は、全然似てない。

似てるところがまるきりない。何一つない。そう思う。

だからあたしは。

あの人の、手を取ったんだろう。

ただ黙って。

何を考えることもなく。

見つめた。

あの人が。

あの時と同じように。

あの笑い声を。

あの笑みを。

このあたしに向けるまで。

「うひゃあ、ひゃひゃっ」

無邪気で楽しげな笑い声が、沈黙をぶち壊した。

あたしが紅色の黒猫（後書き）

殺戮して血塗れになって笑ってセクハラ受けて兄妹ごっこしてコスプレして探偵ごっこしてやっぱり殺戮して血塗れになる、というこの物語を読んでくださりありがとうございますとございました！

誤字誤植が多くてすみません文才も足りなくて見苦しかったでしょう。すみませんでした。

続編は『裏現実紅殺戮・愛情は狂言』です。後程載せますので、こちらもどうか、よろしく願います。

殺戮して血塗れになる予定です。

それでは、失礼しますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3859/>

裏現実紅殺戮

2011年9月9日00時22分発行